

● 「ほつまつたゑ」の全文



・天(あ)の巻 目 次 (一紋～十六紋)

◆序

(序-01) 二神(伊弉諾尊と伊弉冉尊)、三種(ミクサ)の御宝(オンタカラ)

(序-03) ヲヲタタネコ、ミワ(三輪)の臣

(序-05) ヤスクニ宮

(序-06) アスカの宮、ニハリの宮、ハラミの宮

(序-08) アマキミ(天君=天照大神)

(序-11) みかさ文(フミ)=三笠文

◆ほつまつたゑ御織の初(ハツ) 東西(キツ)の名と穂虫(ホムシ)去る紋(アヤ)

(01-01) 拾われたワカヒメ(和歌姫)

(01-02) 人生儀礼、正月、三月、五月の祝い

- (01-03) アワ(天地)の歌と歌の神力
- (01-04) 東西中南北(キツオサネ)の語源
- (01-10) 稲虫祓いの神事
- (01-12) 和歌姫の恋愛、回り歌
- (01-16) 扇の神力
- (01-17) 五七調と神歌
- (01-18) 初宮参り・しきしま(敷島)

◆ほつまつたゑ御織の二(フ) 天七代、床御酒(トコミキ)の紋

- (02-01) タカキ(高木命)の質問
- (02-02) 天地開闢
- (02-03) クニトコタチ(国常立尊)の常世国
- (02-04) 婚礼の制定と雛祭の起源
- (02-05) オモタル(面足尊)の日本全土の統治
- (02-06) 伊弉諾尊と伊弉冉尊の国家再建
- (02-07) クニトコタチ(国常立尊)の御子
- (02-08) 伊弉諾尊と伊弉冉尊の婚礼と床神酒、ササケ(笹気)

◆ほつまつたゑ御織の三(ミ) 一姫三男(ヒヒメミオ)生む殿の紋

- (03-01) ツハモノヌシ(兵主命)の質問
- (03-02) 筑波宮での昼子姫の誕生、ミトノマグバヒ
- (03-03) 近江八尋殿での御柱巡り
- (03-04) 日本全土の復興、大和秋津州、淡路島、伊予、阿波、隠岐、筑紫、吉備、佐渡
- (03-05) ハラミ山での天照神の誕生
- (03-06) 月読尊の誕生
- (03-07) ソサノヲ(素戔鳴尊)の誕生

◆ほつまつたゑ御織の四(ヨ) 日の神の瑞御名(ミズミナ)の紋

(04-01) オオモノヌシ(大物主命)の『イミナ』の質問

(04-02) ホツマ、ヒタカミ、ハラミ山

(04-03) 地上タカマ(高天原)

(04-04) 道の衰えた国民

(04-05) トヨケ(豊受神)の世継祈祷

(04-06) ハラミでの千日祈祷

(04-07) 飛び降(クダ)る日の御魂

(04-08) 床神酒

(04-09) 天照神の誕生

(04-10) 胞衣に包まれた御子と笏(サケ)

(04-11) 御子出現

(04-12) 天照神の即位の儀

(04-13) 幼名ウヒルギ

(04-14) 天照神の初嘗会(ウイナメエ)

(04-15) 豊受神の訪問

(04-16) 天照神のヒタカミ(日高見)行幸

(04-17) 天の道を学ぶ天照神

(04-18) イミナと称え名

◆ほつまつたゑ御織の五(ヰ) 和歌の枕言葉の紋

(05-01) モノヌシ(大物主命)の『枕詞』の質問

(05-02) アワ歌の起源

(05-03) 月読尊(モチキネ)の誕生

(05-04) 素戔鳴尊(ハナキネ)の誕生

- (05-05) 伊奘冉尊の神上り
- (05-06) 伊奘諾尊の黄泉(ヨモツ)訪問
- (05-07) 八醜女(シコメ)
- (05-08) 二神の事断つ
- (05-09) 禊(ミソギ)と神々の勸請
- (05-10) 黄泉坂の教訓
- (05-11) イヤマト(弥真瓊)の道
- (05-12) 枕詞の語源
- (05-13) 歌の道、禊の道

◆ほつまつたゑ御織の六(ム) 日の神十二後の紋

- (06-01) 天照神のハラミ山(原見山)遷都
- (06-02) 十二后制定、月と日の位
- (06-03) セオリツ姫(瀬織津姫)のウチミヤ(内宮)昇格
- (06-04) ウリフ姫(瓜生姫)と閏月(ウリフツキ)の起源
- (06-05) コクミ(胡久美)の怠慢
- (06-06) 天照神のマナイ(真名井)行幸とミチノク(道奥)
- (06-07) トヨケカミ(豊受神)の崩御とアサヒ宮(朝日宮)
- (06-08) 天照神の巡狩、ヤスクニの宮に帰還
- (06-09) イサワ(伊雑宮)への遷宮
- (06-10) オシホミ(忍穂耳尊=オシヒト(忍仁尊))の誕生
- (06-11) 天照神の御子達、タケコ(沖津島姫)、タキコ(江之島姫)、タナコ(市杵島姫)
- (06-12) カグの宮(香久宮)とウオチミヤ(大内宮)
- (06-13) 熊野のハナキネ(素戔鳴尊)
- (06-14) 伊奘諾尊の崩御
- (06-15) オシヒト(忍穂耳尊)を養育する昼子姫

◆ほつまつた糸御織の七(ナ) 遺し文サガお絶つ紋

- (07-01) シラビト(白人)・コクミ(胡久美)の悪業
- (07-02) コクミの審議
- (07-03) コクミの刑罰
- (07-04) シラビトの審議
- (07-05) シラビトの刑罰
- (07-06) ヤソキネ(八十杵尊)のネ(根国)の国神に補さる
- (07-07) 持子に助けられた白人・胡久美
- (07-08) ソサノヲ(素戔鳴尊)とハヤスウヒメ(早吸姫)
- (07-09) 素戔鳴尊と持子・早子の陰謀
- (07-10) 持子・早子の筑紫蟄居
- (07-11) 大蛇に変ずる持子・早子
- (07-12) 素戔鳴尊の乱行、諭しの御歌
- (07-13) 天照神の岩室隠れ
- (07-14) 高天原での神議り
- (07-15) ウスメ(鈿女)らの神懸り
- (07-16) 常世の踊り
- (07-17) 天照神の出現
- (07-18) 素戔鳴尊の刑罰と瀬織津姫の助命、瀬織津姫の御歌
- (07-19) ミチスケ(道清気)の歌と神楽の起源、道清気の歌
- (07-20) 素戔鳴尊のヤスカハ(野洲川宮)の訪問
- (07-21) 素戔鳴尊の誓い
- (07-22) 三女神の誕生と陰のミヤビ
- (07-23) 二神(伊奘諾尊、伊奘冉尊)の良き子を産む法(ノリ)

◆ほつまつた糸御織の八(ヤ) 魂返し悪魔撃つ紋

- (08-02) アメ(天)のフシ(節)
- (08-03) 白人・胡久美の悪業
- (08-04) ハタレ魔軍
- (08-05) 高天原での神議り
- (08-05) ハタレの正体
- (08-06) ハタレ討伐の奥義
- (08-07) 神軍出陣
- (08-08) 天照神の禊
- (08-09) シム道討伐
- (08-10) イソラ討伐
- (08-11) ハタレの好物オコゼ、フキ(蔞)
- (08-12) キヅナ道討伐
- (08-13) 蕨縄に絞められ死ぬハタレ
- (08-14) イヅナの正体
- (08-15) 魂返しの神法とススト(心清瓊)の道、猿沢
- (08-16) キク道討伐
- (08-17) 狐、揚げ鼠
- (08-18) キクツネの改心
- (08-19) 天照神の行幸
- (08-20) ハルナ討伐、サツサツ歌
- (08-21) ハタレ魔軍の蜂起の原因
- (08-22) ハルナの正体
- (08-23) ハタレの祓い
- (08-24) 稻荷信仰と狐
- (08-25) ハタレの祓い、タカノ(高野山)とハタレ

(08-26) アエの道討伐、橘の実、法螺貝、葉扇、天狗

(08-27) マフツの鏡、フタミ(二見の岩)

(08-28) 論功行賞

(08-29) カスガ殿とココストの文

◆ほつまつた糸御織の九(コ) ヤクモ撃ち琴つくる紋

(09-01) 下民に落ちた素戔鳴尊

(09-02) ヤマタのオロチ(八岐大蛇)

(09-03) 稲田姫

(09-04) 袖の脇あけ

(09-05) オロチ(大蛇)退治

(09-06) 素戔鳴尊のヤス川宮訪問

(09-07) イフキドヌシ(伊吹戸主命)の益人討伐

(09-08) 素戔鳴尊と伊吹戸主命との再会、素戔鳴尊の御歌

(09-09) 琴の起源、三弦琴、五弦琴

(09-10) 許された素戔鳴尊

(09-11) 素戔鳴尊の宮造り、八雲立つの御歌

(09-12) クシキネ(奇杵命=事代主、大物主)の誕生

(09-13) オホナムチ(大己貴命)とスクナヒコナ(少彦名命)

(09-14) 大己貴命と肉食

(09-15) 大己貴命とアタタラ

(09-16) 琴の奥義と和歌の奥義

◆ほつまつた糸御織の十(ト) カシマ(鹿島)立ち釣鯛の紋

(10-01) 出雲の大宮、サアエ、シチリ、オホナムチ(大己貴命)

(10-02) 多賀の守での神議り

- (10-03) 出雲平定
- (10-04) アメワカヒコ(天稚彦)の派遣、タカテル姫
- (10-05) 返し矢とワカヒコ(天稚彦)の死
- (10-06) 天稚彦の葬儀
- (10-07) タカヒコネ(高彦根命)の弔問
- (10-08) シタテルオグラ(下照小倉姫)の和歌、ミヂカウタ(短歌)、タカヒコ(高彦根命)
- (10-09) フツヌシ(経津主命)とミカツチ(武甕槌命)
- (10-10) 釣人となったコトシロヌシ(事代主命)の助言
- (10-11) タケミナカタ(建御名方命)と諏訪(信濃海)
- (10-12) クサナギ(草薙)の矛
- (10-13) 論功行賞
- (10-14) 大己貴命の津軽左遷、アソベ(阿曾部)のウモトミヤ(大本宮)
- (10-15) クシヒコ(奇彦命)とヨロギ(万木)の森
- (10-16) コモリカミ(子守神)の御子たち
- (10-17) イクタマヨリメ(活玉依姫)の御子、三代モノヌシミコ(大物主命御子)の歌
- (10-18) シラタマメ(白玉姫)の御子
- (10-19) カツテカミ(勝手神)世嗣ぎ得る歌

◆ほつまつた糸御織の十一(ソヒ) 三種神器譲り、御受けの紋

- (11-01) ヒタカミの多賀の守への遷宮、多賀のコフ(国府)
- (11-02) 多賀若宮、オシホミミ(忍穂耳尊)
- (11-03) ヤスカワ宮(野洲川宮)
- (11-04) 近江多賀よりの遷都
- (11-05) 祝いのヲシカド(雄鹿人)
- (11-06) フツヌシの境迎え
- (11-07) ナコソ(勿来)の語源、スグサの歌

(11-08) 天照神の勅と三種神宝

(11-09) 金華山、コガネ(黄金)の花

◆ほつまつたゑ御織の十二(ソフ) アキツ姫、天が児の紋

(12-01) 先越のアマガツ(天児)、シホガマ(塩竈の神)

(12-02) 三つの稚児、ハタレ、テグルマ

(12-03) サツサツヅ歌

(12-04) カミアマガツ(神天児)

(12-05) 天児の語源

(12-06) 天児の神歌

(12-07) 心味

◆ほつまつたゑ御織の十三(ソミ) ワカ彦、イセ(伊勢)、スズカ(鈴鹿)の紋

(13-01) 多賀の守での神集い

(13-02) ソサノヲ、ヒカワ(氷川)の禊

(13-03) 日月と火水

(13-04) 夫は日、妻は月

(13-05) 世嗣ぎ

(13-06) 夫の親は産みの親

(13-07) 夫のオナカ(御中)

(13-08) オキツヒコ(奥津彦命)の再婚とツクマナベ(筑摩鍋)

(13-09) スズカ(鈴明)の語源

(13-10) 欲望と子孫繁栄、カスガマロ(春日磨命)

(13-11) トヨケ(豊受神)の往来の道

(13-12) 獣への転生

(13-13) 夢の苦しみ

- (13-14) アメ(天)の祭り
- (13-15) メカケ(妾)と妻
- (13-16) 女の姿、ミヤビ
- (13-17) アマ(天)の浮橋
- (13-18) 人の施し
- (13-19) 捨てず集めず
- (13-20) 羨む者の怨念
- (13-21) 子なき者の魂返し
- (13-22) 夫婦和合、イセ(伊勢)の道
- (13-23) カンカゼ(神風)、イセ(伊勢)の国

◆ほつまつた糸御織の十四(ソヨ) 世継ぎ告る祝詞の紋

- (14-01) 伊雑宮での教え
- (14-02) カガン、ノンテン
- (14-03) 世嗣ぎのアヤ(紋)
- (14-04) 天地開闢
- (14-05) 高天原への帰還、トホカミエヒタメ、アイフヘモヲスシ
- (14-06) 四十九人の神と人の誕生
- (14-07) 日月のウルナミ
- (14-08) 受精
- (14-09) 卵子の回転
- (14-10) 臍の緒
- (14-11) 妊娠の十二個月
- (14-12) 男子を得る法
- (14-13) 女子を得る法
- (14-14) 日の輪の天照神

- (14-15) 子を授く道
- (14-16) 豊受神のヤチタビ(八千度)の祈祷
- (14-17) 朝日を受けよ
- (14-18) 天照神の歌
- (14-19) 天兒屋根命の歌
- (14-20) コモリ(子守神)の歌
- (14-21) カツテ(勝手神)の歌
- (14-22) カスガ(春日)、コモリ、カツテ(勝手神)

◆ほつまつたゑ御織の十五(ソイ) 御食、万、生成の紋

- (15-01) クスヒ(楠日尊)の質問
- (15-02) 禊の理由
- (15-03) シシ(肉食)の害悪とキヨナ(青菜)
- (15-04) クヒモノ(食物)の教え
- (15-05) 天地開闢
- (15-06) 鉱物
- (15-07) 植物
- (15-08) 物質と元素
- (15-09) 水の生成
- (15-10) シホスガ(塩漬)
- (15-11) 魚貝
- (15-12) ウケモチの神(保食神)とゾロ
- (15-13) 穂っ実の神饌
- (15-14) 月読尊の派遣
- (15-15) カダ(荷田命)
- (15-16) 穀物、魚、鳥、獣

(15-17) スズシロ、シラヒゲ、ハシカミ(生姜)

(15-18) スワ(諏訪神)と鳥肉

(15-19) 食物と魂のヲ(緒)

(15-20) 食物と日月

(15-21) 千見草

(15-22) 西王母と山の道奥

(15-23) 肉食をやめぬ西国の人々

(15-24) 早枯れと天寿

(15-25) 日月と御種の菊

◆ほつまつたゑ御織の十六(ソム) 胎み慎しむ帯の紋

(16-01) アマノコヤネ(天兒屋根命)の縁談

(16-02) コモリ(子守神)のミタネフミ(御種文)

(16-03) 天地開闢

(16-04) 受精

(16-05) 卵子の回転

(16-06) 呼吸数

(16-07) 卵子の回転数と月の名の語源

(16-08) 姫君の心配

(16-09) 男子を得る法

(16-10) 女子を得る法

(16-11) 女子の受精卵の回転数

(16-12) 男子は十二個月、女子は十個月

(16-13) 民はコサワ(子沢)

(16-14) 女の恨みと桜

(16-15) 女の妬みと子種の滅亡

- (16-16) 女の怨念とオロチ(大蛇)
- (16-17) 妬む妬まるみなトガ(咎)
- (16-18) よその女を恨むな
- (16-19) 大蛇となって子種を嘔む
- (16-20) トヨケの腹帯
- (16-21) カツラギ(葛城山)のニイトリ(丹鳳)
- (16-22) 四十八備わる腹帯
- (16-23) 腹帯の神力
- (16-24) 腹帯の原理
- (16-25) 天照神の羽二重
- (16-26) ミカツチ(武甕槌命)の羽二重
- (16-27) カツテ(勝手神)
- (16-28) カシマ宮での御饗
- (16-29) イキス宮
- (16-30) 日高見の腹帯
- (16-31) イキス宮の姫
- (16-32) キハタオビ(磐田帯)
- (16-33) 天兒屋根命と奥義伝授

・地（わ）の巻目次（十七紋～二十八紋）

◆ほつまつたゑ御織の十七（ソナ） 神鏡八咫の名の紋

(17-01) 天児屋根命の質問

(17-02) 八咫の語義と量

(17-03) 八咫鏡

(17-04) タミメ(掌相)

(17-05) タラチネ

(17-06) 民は我が子

(17-07) 臣民の子孫

(17-08) 犯し隠すも天が知る

(17-09) 四十九の神の役割と守護

(17-10) 屑を捨てなで

(17-11) 天の告げ

(17-12) アラダケ(荒猛)の松はネジ(拗)ける

(17-13) 子は長の根

(17-14) 利き過ぎ拗け

(17-15) 褒め過ぎ拗け

(17-16) 長く培う

(17-17) 荒猛の松

(17-18) 細かに教える

(17-19) ユルノリ(暖教)

(17-20) 天地人

(17-21) ハタレハルナの質問

(17-22) ニヤビの情け

- (17-23) 賄賂
- (17-24) ミヤビの告げ
- (17-25) ミヤビなければ身も枯れる
- (17-26) キクラムワタ(五腑六臓)
- (17-27) 中心の形は鏡
- (17-28) 天地人の告げ
- (17-29) ヤタの音義
- (17-30) ハルナの誓い
- (17-31) 悪業と病
- (17-32) 民となせ臣
- (17-33) 素直なる業

◆ほつまつた糸御織の十八(ソヤ) オノコロとまじなふの紋

- (18-01) 天御孫(ニニキネ)の質問、オノコロ
- (18-02) 二神とオノコロ
- (18-03) 天地開闢と天御祖神のタミメ(掌相)
- (18-04) 地球生成
- (18-05) 天御中主神の誕生と国常立尊
- (18-06) トホカミエヒタメ八神と子孫
- (18-07) 二神の国家再建
- (18-08) フノコロの音義
- (18-09) フノコロの呪い

◆ほつまつた糸御織の十九(ソコ) (一) 馭典(ノリノリ)一抜(ヒトヌキ)き間の紋

- (19-01) 天照神の側近、近江の多賀、若仁(ワカヒト)、左の臣(オミ)=思兼命(オモイカネ)、
右の臣=金折命(カナサキ)

- (19-02) 豊受神(トヨケノカミ)の乗馬の教え
- (19-03) 天地開闢と乗り法
- (19-04) 一貫きの手綱
- (19-05) 雄走命の練習
- (19-06) 乗馬とハタレ討伐
- (19-07) ヲバシリ(雄走命)の系譜、鹿島神(武甕槌命=タケミカツチ)

◆ほつまつたゑ御織の十九(ソコ) (二) 乗りの文照る妙の紋

- (19-08) ヒヅメアオコマ(蹄青駒)
- (19-09) 七草
- (19-10) 黒駒
- (19-11) 高彦根命のノリノリ(乗馬)の教え
- (19-12) 馬の性質
- (19-13) 明る妙え
- (19-14) 一貫間(ヒトヌキマ)
- (19-15) アカタエ(明妙)
- (19-16) 八つ五五の割合、八咫、五咫
- (19-17) 二荒神(フタアレカミ)

◆ほつまつたゑ御織の二十(フソ) 皇御孫十種神宝得る紋

- (20-01) 火之明尊(照彦)の葦原国派遣
- (20-02) 十種の神宝
- (20-03) 随神たち
- (20-04) 海路の勅命
- (20-05) 火之明尊の船旅
- (20-06) 空見つ大和国

- (20-07) 斑鳩宮への遷宮
- (20-08) 飛鳥宮への遷都
- (20-09) 大物主奇彦命の官禄返上

◆ほつまつた糸御織の二十一（フソヒ） 宮造り法の制定

- (21-02) 用材の伐採と中墨柱
- (21-03) 棟上祭、匠の祝詞
- (21-04) オゴロ(土公神)
- (21-05) 土公神への勅命
- (21-06) 九門(ユカド)
- (21-07) 八将軍(ヤマサカミ)と桜門
- (21-08) カラフシマ(羅生門)
- (21-09) 鶏と鳥の鳴声
- (21-10) 鳥居、教えの御歌
- (21-11) 柱
- (21-12) 屋造りのもと
- (21-13) 屋根
- (21-14) 鴨居(シギイ)と鴨居(カモイ)
- (21-15) 山入り
- (21-16) 大国柱
- (21-17) ニハリ(新治宮)への伝と遷都
- (21-18) ウツロキ神の妨害
- (21-19) ウツロキ神への勅命
- (21-20) 駆(カ)り遷し
- (21-21) ウツロキ神への勅命

◆ほつまつたゑ御織の二十二(フソフ) オキツヒコ火水の祓

- (22-01) ニハリ宮遷都祝い
- (22-02) エトモリカミ(兄弟守神)
- (22-03) ヤマサカミ(八將軍)
- (22-04) 土公(オゴロ)
- (22-05) 奥津彦命の祝詞、ウツロキ神、カグツチの神
- (22-06) 神々の誓い

◆ほつまつたゑ御織の二十三(フソミ) 御衣定め劔名の紋

- (23-01) 奇彦命の質問
- (23-02) 心雪透く神世
- (23-03) 斧
- (23-04) 矛
- (23-05) 伊奘諾尊への勅命
- (23-06) ト(瓊)と矛
- (23-07) 瓊の天神との一体化
- (23-08) 逆矛の語源
- (23-09) 逆矛も宝
- (23-10) 千五百の頭
- (23-11) 物部の派遣
- (23-12) 政事の乱れ
- (23-13) 身分と衣
- (23-14) 夏冬の衣
- (23-15) 身を飾れば田が荒れる
- (23-16) 天の憎み
- (23-17) 木綿

- (23-18) 羽二重
- (23-19) 綾錦織、タカハタノリ(高機法)
- (23-20) 行政組織
- (23-21) 刑の種類
- (23-22) 民は子
- (23-23) 罪科の度合、ハタ(機)の道
- (23-24) 奇彦命の質問
- (23-25) 剣の制作
- (23-26) 左の目右の目と生き枯れ
- (23-27) 天目一個神
- (23-28) 枯れと生き
- (23-29) 剣の音義
- (23-30) 八重垣剣
- (23-31) 八咫の名、アワヤ
- (23-32) 八重の意味
- (23-33) 奇彦命の誓い
- (23-34) ヤマトオオクニ(日本大国)御魂神
- (23-35) ハネ(翼)の臣
- (23-36) 三諸山の洞と杉

◆ほつまつたゑ御織の二十四(フソミ) 肥え国ハラミ山の紋

- (24-01) ニニキネ(瓊々杵尊)の高田開拓
- (24-03) 伊勢山田の開拓
- (24-04) 瓊々杵尊の門出
- (24-06) 三種の神宝
- (24-07) 鏡臣劍臣

- (24-08) 神宝の分与
- (24-10) 神幸
- (24-10) 神崎の大井、真名井
- (24-11) 西王母の峯輿と越の国
- (24-13) ミチミ(三千実)の桃
- (24-13) 御饗の梅
- (24-14) 桜
- (24-14) 猿田彦命の出会いと卯の花
- (24-17) 三上山と三雄尾の神
- (24-18) 瑞穂宮から諏訪へ
- (24-20) ハラミ山八湖と八峰
- (24-21) 中峰
- (24-22) 葦津姫との契り
- (24-23) 瓊々杵尊の大嘗エ
- (24-24) 子守神と祖父大己貴命(モノヌシ)
- (24-26) 葦津姫の妊娠と磐長姫
- (24-29) 磐長姫たちの陰謀と桜
- (24-31) 龍に救われた姫と御子
- (24-33) 瓊々杵尊の歌
- (24-34) 葦津姫との再会
- (24-35) 三御子の名
- (24-37) 酢芹草(スセリグサ)
- (24-38) トリダスキ(鳥糞)
- (24-39) 千代見草とヤマハト(山葉留)の御衣
- (24-40) ハ菜・ラ菜
- (24-41) ココリヒメ(菊桐姫)とトリタスキ(鳥糞)

- (24-42) 多賀と蚕飼・裁縫の道
- (24-43) ハラミ草
- (24-44) 中柱、カタタケの宮、方壺の文
- (24-45) 磯輪上(シワカミ)秀真国
- (24-47) 忍穂耳尊の遺言、アスカオキミ(飛鳥治君)
- (24-49) はらから、箱根神
- (24-50) ヒエ(一枝)の山
- (24-52) ワケイカズチ(別雷)のアマキミ(天君)
- (24-53) 数魚の肥料、津軽、阿曾部
- (24-54) 三笠山
- (24-54) スガタヒメ(清田姫)の諫言
- (24-57) 原朝間宮(アサハラマミヤ)、酒折(サカオリ)、占形(ウラカタ)、亀ト(キボク)

◆ほつまつたゑ御織の二十五(フソイ) ヒコ命鉤を得るの紋

- (25-01) 瑞穂宮造宮
- (25-02) 瓊々杵尊の箱根伊勢行幸
- (25-03) 三御子の宮
- (25-05) 瓊々杵尊の安芸国巡狩
- (25-07) ヤマカゲ(山陰)巡狩
- (25-07) 筑紫行幸の準備
- (25-09) 瓊々杵尊の筑紫行幸
- (25-11) 釣り針をなくしたヤマサチヒコ(山幸彦=火々出見尊)
- (25-13) シホツツ(塩土翁)の助言
- (25-14) ハデカミ(波提神)の宮
- (25-16) ハデカミの和歌
- (25-17) タイ(鯛)とクチ

- (25-18) ハデカミの夢の告げ
- (25-19) 火々出見尊の帰還
- (25-22) 満ち干の玉と酢芹宮の服従
- (25-23) 后トヨタマメ(豊玉姫)と六局の選定
- (25-25) 火々出見尊の婚礼
- (25-26) 火々出見尊の筑紫巡狩
- (25-27) サツキ(五月)の春祝い
- (25-28) アソクニ(阿蘇国)行幸
- (25-29) ツクシ(筑紫)の宮への遷宮
- (25-31) ウド(鵜戸宮)への遷宮

◆ほつまつた糸御織の二十六(フソム) ウガヤ葵桂の紋

- (26-02) 別雷(ワケイカズチ)の天君(アマキミ)
- (26-03) 火々出見尊の帰還
- (26-05) 豊玉姫の出産
- (26-06) 産湯と出産
- (26-07) 七十五日の産湯の〈ひき目〉
- (26-08) 御子の名
- (26-10) 産屋を覗いた火々出見尊
- (26-12) 帰らない豊玉姫
- (26-14) 火々出見尊の大嘗エ
- (26-15) 葵柱と瓊々杵尊の説得
- (26-17) 竜君(タツキミ)
- (26-19) 心を許す豊玉姫
- (26-21) 瓊々杵尊の遺言
- (26-22) 高千穂の神と浅間神

- (26-23) 四十八日の喪祭
- (26-24) 和歌の神力
- (26-27) 火々出見尊の涙と小葵の御衣

◆ほつまつた糸御織の二十七(フソナ) 御祖神船魂の紋

- (27-01) 瑞穂の宮
- (27-02) 諸国の統治
- (27-02) 筑波の統治
- (27-03) 建祇命の妻
- (27-05) クニテルミヤ(国照宮)とタケテル(武照宮)
- (27-05) サイワイビシ(幸菱)
- (27-06) アスカの宮(飛鳥宮)崩御
- (27-08) カグヤマヲキミ(香具山治君)の養子
- (27-09) 鵜葺草尊への三種神宝授与
- (27-11) 火々出見尊の崩御とケイ(筍飯)の神
- (27-12) キフネ(貴船)の神
- (27-13) ムツフナタマ(六つ船魂神)
- (27-15) 多賀城改築と即位の大礼
- (27-16) 御祖の道の教え、香具(カグ)の文(フミ)
- (27-19) 鵜葺草尊の大嘗祭
- (27-21) 世継文と世継社
- (27-23) ヤセヒメ(八瀬姫)とイツセキミ(五瀬君)
- (27-24) カアイ(河合)の神
- (27-25) タマヨリ(玉依姫)とウツロキ神
- (27-27) 玉依姫と神の御子
- (27-28) 乳を恵む玉依姫

- (27-29) 神武天皇を産む后玉依姫
- (27-32) タケヒト(武仁)のイミナ()、ツヅ歌
- (27-33) ツミハ(積葉命)の結婚
- (27-35) オオモノヌシ(大物主=露根命)
- (27-37) サキミタマ(幸御魂)クシミタマ(奇御魂)の助言、アオガキヤマ(青垣山)
- (27-39) フキネ(露根命)の神上り
- (27-40) ツクシ(筑紫)のオシカ(雄鹿)
- (27-40) 鵜葺草尊の筑紫行幸
- (27-42) 筑紫へ急ぐタケヒト(武仁君)
- (27-43) 鵜葺草尊の遺言
- (27-45) 三種神宝伝授、シラヤのオシデ(璽)
- (27-46) モモのフミ(百の文)
- (27-47) 鵜葺草尊の崩御、ツクシスベラギ(筑紫天皇)ヒウガ(日向)の神

◆ほつまつたゑ御織の二十八(フソヤ) 君臣遺し法の紋

- (28-01) 櫛甕玉命の質問
- (28-02) 天(アメ)の真栄木(マサカキ)
- (28-04) 国常立命の真栄木と天神七代
- (28-05) 天照神の誕生
- (28-06) 胞衣岳
- (28-07) 天照神の政事
- (28-09) 忍穂耳尊の政事
- (28-10) 神風の伊勢の国
- (28-11) ハタレ魔軍の蜂起
- (28-12) 飛鳥宮
- (28-12) 瓊々杵尊の政事

- (28-14) 瓊々杵尊の三御子の
- (28-15) 火々出見尊の政事
- (28-16) 鵜葺草尊の政事
- (28-16) 宇治の宮への遷都
- (28-17) 自生した五十鈴と真名井の洞
- (28-18) 天照神の遺言
- (28-19) 清雄鹿の八咫の冠
- (28-21) 返し祝い詩歌
- (28-22) 猿田彦命への遺言
- (28-22) 天児屋根命への遺言
- (28-24) 神璽と冠(カムリ)と御衣(ミハ)
- (28-25) マナキ(真名井)
- (28-27) 魂返し文
- (28-26) 天照神の内っ宮
- (28-25) サクスズ(折鈴)
- (28-28) 鈴木の苗、天の真栄木(アマのマサカキ)
- (28-30) タナコヒメ(田奈子姫)の助言
- (28-32) アスズコヨミ(天鈴暦)の上梓
- (28-34) 田奈子姫、イフキトミヤ(伊吹戸宮)
- イヨツヒコ(伊予津彦命)、トサツヒコ(土佐津彦命)、ウサツヒコ(宇佐津彦命)
- (28-35) 外が浜の九頭(コガシラ)の大蛇(オロチ)
- (28-36) モチコ(持子)ハヤコ(早子)の大蛇
- (28-39) トカクシ(戸隠神)
- (28-40) タケコヒメ(竹子姫)
- (28-41) タキコヒメ(子姫)
- (28-41) 天児屋根命の遺言と神上り

- (28-44) 天兒屋根命の喪祭り
- (28-45) 猿田彦命と魂返し文(フミ)
- (28-48) ミモスソ(御裳裾)の民
- (28-50) 溺れる漁師
- (28-51) 世継文(ユツギフミ)を盗み写したナガスネ(長髓彦)
- (28-52) タタラ・イスズヒメ(五十鈴姫)
- (28-53) 長髓彦の反乱
- (28-55) 櫛甕玉命の秀真伝上梓

・人（や）の巻目次（二十九紋～四十紋）

◆ほつまつたゑ御織の二十九(フソコ) タケヒト、ヤマト討ちの紋

(29-01) カンヤマト イワレヒコ(神武天皇)四の皇子、タマヨリ(玉依姫)

(29-01) ナガスネ(長髓彦)の反乱

(29-03) 天成の道、乗り下だせ 秀真路

(29-06) 塩土(シオツチ)の翁の助言、神武天皇東征

(29-08) ウサ(宇佐)(大分県宇佐郡宇佐町和気)

(29-09) アキ(安芸)の国(広島県安芸郡府中町)、チノ宮

(29-08) 浪速

(29-10) 五瀬尊の神上り

(29-12) 稲飯尊(イナイ)と御毛入尊(ミケイリ)の入水

(29-13) タカクラシタ(高倉下命)の夢の告げ

(29-15) 八咫鳥の導き

(29-16) 兄猾の陰謀

(29-17) 兄磯城軍の攻撃

(29-18) 神武天皇の夢の告げ

(29-20) 丹生川の祭祀

(29-22) 神武天皇の御製

(29-23) 退却する饒速日命

(29-23) 兄磯城との戦い

(29-26) 長髓彦と神璽

(29-29) 饒速日命の忠節

(29-30) 土蜘蛛

(29-31) 橿原宮造営と後の制定

(29-33) 大三輪の神々の祭祀

(29-34) 年サナト(辛酉)カシハラ宮

◆ほつまつたゑ御織の三十(ミソ) 天君、都鳥の紋

(30-02) 別雷天君

(30-03) 神璽

(30-04) 長髓彦

(30-05) 天押雲命(オシクモ)の神上り

(30-06) 日、月、星の使いの制定

(30-08) 神武天皇即位の大礼(スズ・サナト(辛酉) サヤエ(庚辰)初日)

(30-09) 都鳥の歌

(30-12) 三種神宝の授受

(30-14) 神武天皇の大嘗祭

(30-15) 論功行賞

(30-17) 直え中臣・直り大物主

(30-19) 加茂の社

◆ほつまつたゑ御織の三十一(ミソヒ) ナオリ神ミワ神の紋

(31-02) タカクラシタの復命

(31-03) 高倉下命とヤヒコ(弥彦神)

(31-04) 百合姫(ユリヒメ)と神武天皇の御子

(31-06) 高倉下命に嫁ぐ小百合姫

(31-07) 小百合(サユリ)の花見

(31-08) 手研耳御子(タギシニコ)の恋情と操ツツ歌

(31-10) 神武天皇の国見

(31-11) カヌナガワミミ(神淳名川耳)尊の立太子(第2代天皇)

- (31-12) 神武天皇の遺言
- (31-13) 喪祭り
- (31-15) タシキミコ(手研耳尊)の陰謀
- (31-18) 手研耳尊討伐
- (31-21) 綏靖天皇(第2代)の即位の大礼
- (31-22) 神武天皇の埋葬
- (31-23) 綏靖天皇の後たち
- (31-25) 櫛甕玉命と三輪の神
- (31-27) 筑紫行幸
- (31-29) シキヒト(磯城仁尊)立太子
- (31-30) 天種子命(アメタネコ)の神上り
- (31-31) 綏靖天皇崩御と喪祭り
- (31-32) 吉野の菊の花見
- (31-33) コモリ(子守宮)・カツテ(勝手宮)の起源
- (31-34) 安寧天皇(第3代)即位と御子たち
- (31-37) 安寧天皇崩御
- (31-38) 懿徳天皇(第4代)即位
- (31-40) 懿徳天皇の後と御子たち
- (31-42) 懿徳天皇崩御
- (31-43) 孝昭天皇(第5代)即位
- (31-45) 孝安天皇の後と御子たち
- (31-47) 孝昭天皇崩御
- (31-49) 孝安天皇(第6代)即位
- (31-49) 孝安天皇の後
- (31-50) 風ふの祭り
- (31-51) 孝昭天皇の埋葬

(31-52) 根子彦尊立太子

(31-53) 孝安天皇崩御

◆ほつまつたゑ御織の三十二(ミソフ) 富士と淡海瑞の紋

(32-01) 孝霊天皇(第7代)即位

(32-02) 孝霊天皇の后と御子たち

(32-05) 三つ子と恩賞

(32-07) 原見山と近江の絵

(32-09) 元杵尊の立太子

(32-10) 孝霊天皇の原見山行幸

(32-12) 藤の山(富士の山)

(32-14) 玉川の神宝文(カンタカラフミ)

(32-15) 西国平定

(32-16) 孝霊天皇崩御

(32-17) 孝元天皇(第八代)の即位と十二后

(32-18) 孝元天皇の御子たち

(32-19) 風ふの祭り

(32-21) イカシコメ(伊香色謎)

(32-23) 太日日尊(フトヒヒ)立太子

(32-24) 孝元天皇崩御

(32-25) 開化天皇(第九)即位

(32-26) イキシコメ(伊木色謎)とミケヌシ(大御氣主命)の諫言

(32-28) 大御氣主命の蟄居

(32-29) 開化天皇の御子たち

(32-31) 五十 殖尊立太子

(32-31) 開化天皇崩御

◆ほつまつたゑ御織の三十三(ミソミ) 神崇め疫病治す紋

- (33-01) 崇神天皇(第十代)即位
- (33-02) 崇神天皇の后と御子たち
- (33-04) 三種神宝(ミクサノタカラ)の遷座
- (33-07) 疫病流行
- (33-08) イロのつづ歌
- (33-09) 大物主命(オオモノヌシ)の神託、サツサツツ歌
- (33-10) 崇神天皇の夢の告げ
- (33-11) 臣下たちの夢合せ
- (33-13) オオタタネコ(大直根子命)の出現
- (33-14) 三輪神の祭祀
- (33-15) 三輪の神とうま酒
- (33-18) 大直根子命の魂返し
- (33-19) 四方の教え人の派遣
- (33-20) 少女の歌

◆ほつまつたゑ御織の三十四(ミソヨ) ミマキの御世任那の紋

- (34-01) 少女の歌
- (34-02) タケハニヤス(武埴安)の反乱
- (34-03) 破れる武埴安
- (34-04) 四方の教え人
- (34-05) 百襲姫(モモソヒメ)と大物主命
- (34-06) 百襲姫の死、箸塚
- (34-07) 初国治らす御間城の世、緒解く祭り
- (34-08) 崇神天皇の御子たち

- (34-09) 夢占いと皇位継承
- (34-10) ツノガアラシトの来日
- (34-11) 来日の経路
- (34-12) アラシトと白石の少女
- (34-13) 新羅と任那の戦い
- (34-14) 出雲の玉川の神宝文、武日照宮(タケヒテル)
- (34-15) 振根の陰謀
- (34-16) 振根討伐
- (34-17) 溜池の開発
- (34-18) 任那国の貢物
- (34-19) 崇神天皇崩御

◆ほつまつたゑ御織の三十五(ミソイ) ヒボコ来る角力の紋

- (35-01) 垂仁天皇(第十一代)即位
- (35-02) ミマナ(任那国)の貢物
- (35-03) ヒボコ(天日槍)と八種の宝
- (35-04) 天日槍の来日
- (35-05) 天日槍の巡視
- (35-06) 狭穂彦(サホヒコ)の陰謀
- (35-07) 垂仁天皇の夢の告げ
- (35-08) 狭穂彦討伐と狭穂姫の死
- (35-09) タナバタ(棚機)祭り
- (35-10) 蹶速と野見の宿弥
- (35-11) 角力(スマイ)の起源

◆ほつまつたゑ御織の三十六(ミソム) ヤマト姫、神鎮む紋

- (36-01) 倭姫の誕生
- (36-02) 竹野姫の死
- (36-03) 垂仁天皇の御子たち
- (36-04) 口をきいた誉津別尊(ホンズワケ)
- (36-05) 御杖代の倭姫
- (36-06) 御杖代の豊入姫(トヨスキ)
- (36-07) 伊勢の高宮
- (36-08) 豊稻入姫(トヨスキ)に仕える倭姫
- (36-09) 飯野(イキノ)より磯部(イソベ)への遷都
- (36-10) 五十鈴川の猿田彦命(サルタヒコ)
- (36-11) 神風の伊勢の宮
- (36-12) 伊勢神宮の再建
- (36-13) 神宮参拝
- (36-14) 御霊遷座とミタケバシラ(御丈柱)
- (36-15) トヨケの神(豊受神)の御霊勧請
- (36-16) チギ(千木)とカツオ(鰹木)

◆ほつまつたゑ御織の三十七(ミソナ) 鶏合せ、橘(タチバナ)の紋

- (37-01) 兵器の幣帛
- (37-02) 倭彦尊の神上り
- (37-03) イソキネ(五十杵尊)とタリヒコ(足彦尊)の希望
- (37-04) ヒハズ(日葉酢姫)の神上り
- (37-05) ハニデコ(埴輪)の起源
- (37-06) 御祖(ミオヤ)の神の神託、神が告げの御歌
- (37-07) キフネ(貴船社)
- (37-08) 賀茂別雷宮の再建

- (37-09) 宇治橋の造営
- (37-10) 垂仁天皇の行幸
- (37-11) カマハダ(綺姫)
- (37-12) 宇治の亀石
- (37-13) 垂仁天皇の御子
- (37-14) 溜池の造営
- (37-15) 立太子とチツルギ(千劍)、イソノカミ(石上社)
- (37-16) 風ふの祭りと穂積祭(ホズミ)
- (37-17) 石上社神宝守護
- (37-18) 天日槍の宝物
- (37-19) 消えた小刀(コガタナ)
- (37-20) タジマモリ(田道間守)とトコヨ(常世国)
- (37-21) 田道間守みら殉死
- (37-22) 田道間守の妻子

◆ほつまつたゑ御織の三十八(ミソヤ) ヒシロの世、クマソ撃つ紋

- (38-01) 景行天皇(第十二代)の即位の大礼
- (38-02) 大碓御子と小碓御子
- (38-03) 武内宿禰
- (38-04) ヤサカタカヨリ(八坂高依姫)
- (38-05) 景行天皇の后と御子たち
- (38-06) クニアガタ(国県)
- (38-07) 大碓御子の密通
- (38-08) 景行天皇の熊襲討伐
- (38-09) カンカシヒメ(神夏磯姫)の遺言
- (38-10) キツチクモ(五土蜘蛛)討伐

- (38-11) ウチサル(打猿)討伐
- (38-12) カシハオ(柏峡)の石
- (38-13) 熊襲のエアツカヤ(兄厚鹿文)オトセカヤ(弟 鹿文)
フカヤ(乾鹿文)へカヤ(辺鹿文)
- (38-14) 父を殺す乾鹿文
- (38-15) 加茂(カモ)の語源
- (38-16) 景行天皇の御歌
- (38-17) 兄弟熊津彦
- (38-18) ミヅシマ(水島)
- (38-19) シラヌヒ(不知火)の国
- (38-20) 阿蘇の国神
- (38-21) タカダミヤ(高田宮)の大木
- (38-22) イクハムラ(的村)の御食(ミケ)
- (38-23) ミツエシロ(御杖代)のクスコ(楠子)
- (38-24) 武内宿禰と神宣げ粥
- (38-25) 蝦夷の反逆
- (38-26) 小碓御子の熊襲討伐
- (38-27) 女装した小碓御子
- (38-28) ヤマトタケ(日本武尊)
- (38-29) 日本武尊の復命

◆ほつまつたゑ御織の三十九(ミソコ) ホツマ撃ち、つず歌の紋

- (39-01) エミシ(蝦夷)の反乱
- (39-02) 日本武尊の雄叫び
- (39-03) 蝦夷の実態
- (39-05) 神の日本武尊

- (39-06) 日本武尊の言葉
- (39-07) 倭姫と叢雲劍(ムラクモノツルギ)
- (39-09) 田道間守(タヂモチ)の遺言
- (39-11) 相模の小野城
- (39-12) 蝦夷の陰謀
- (39-13) 火水土の祓いと草薙劍
- (39-14) 火攻め
- (39-16) 弟橘姫との再開
- (39-17) 弟橘姫の入水
- (39-19) 上総上陸
- (39-20) 津島道彦の服従
- (39-21) 道奥(ミチノク)の言分
- (39-24) 武日尊(カケヒ)の説得
- (39-26) 伊勢暦
- (39-28) 服従する道奥
- (39-30) 蝦夷熊襲の貢物
- (39-31) ツズ歌
- (39-33) 火灯し(ヒトボシ)への恩賞
- (39-34) 小百合姫のツズ歌
- (39-35) ツズ歌の歌論
- (39-37) 連歌
- (39-40) 乗り下せ秀真路
- (39-42) 多摩川鐙(アブミ)と武蔵国
- (39-44) 連り綱引き(ツガリアビキ)の祭
- (39-45) 氷川神
- (39-46) 弟橘姫を想う歌

(39-47) 武日命(タケヒ)の復命

(39-48) 白鹿(シラカ)と蒜(ヒル)

◆ほつまつたゑ御織の四十(ヨソ) アツタ神、世おいなむ紋

(40-01) 宮簀姫(ミヤヅヒメ)との再会

(40-02) 原宮／酒折宮(サカオリ)

(40-03) 息吹神(イフキカミ)

(40-05) 尾津(オヅ)の一松(ヒトツマツ)

(40-07) 能褒野(ノボノ)

(40-08) 日本武尊(ヤマトタケノミコト)の父

(40-10) 熱田宣(アツタノ)り

(40-12) 景行天皇の嘆き

(40-13) 白鳳と化した日本武尊

(40-15) 日本武尊の誕生

(40-16) 熊襲討伐

(40-18) 日本武尊の后と御子たち

(40-20) 宮簀姫の御歌

(40-22) 伊勢路での御歌

(40-24) 能褒野での御歌

(40-25) 熱田神宮の起源

(40-25) 日本武尊の御霊の渡御

(40-27) 神幸の鹵簿

(40-28) チリ昼飯の御歌

(40-31) 日本武尊の神託

(40-33) 伊勢の蝦夷(エゾ)

(40-34) 歌の御饗(ミアエ)

- (40-35) 稚足彦尊立太子
- (40-36) 熱田法の葬儀
- (40-38) 景行天皇の巡狩
- (40-40) 日本武尊の神託
- (40-42) 折敷え歌、素戔鳴尊の転生
- (40-43) 人は神なり
- (40-43) 熱田神
- (40-44) 榊御姿
- (40-45) 上総の海蛤(ウムギ)
- (40-46) 鹿島の獅子舞
- (40-47) 景行天皇の帰還
- (40-48) 秀真伝上梓



ほつまつたゑ 全文

● 序文

序一	アメツチノ	ヒラケシトキニ	天地の	開けし時に
	フタカミノ	トホコニヲサム	二神の	と・ほこに治む
	タミマシテ	アマテルカミノ	民増して	天照る神の
	ミカガミオ	タシテミクサノ	御鏡お	たして三種の
	ミタカラオ	サヅクミマゴノ	御宝お	授く天孫の
	トミタミモ	ミヤスケレバヤ	臣民も	身安ければや

	トミガヲヤ	シイルイサメノ	臣が祖	強いる諫言の
序二	オソレミニ	カクレスミユク	恐懼に	隠くれ棲みゆく
	スエツミノ	イマメサルレバ	末裔の	今召さるれば
	ソノメグミ	アメニカエリノ	その恵み	天に帰参の
	モフデモノ	ホツマツタエノ	献上品	秀真伝の
	ヨソアヤオ	アマタテマツリ	四十紋お	編み奉つり
	キミガヨノ	スエノタメシト	君が代の	末代のためしと
	ナカラント	オソレミナガラ	ならんかと	畏れみ乍ら
	ツボメオク	コレミンヒトハ	つぼめ置く	これ見ん人は
序三	シハカミノ	ココロホツマト	『しはかみの	心 秀真と
	ナルトキハ	ハナサクミヨノ	成る時は	花咲く御代の
	ハルヤキヌラン		春や来ぬらん』	
	イツノワノ	マサゴハヨミテ	『磯の輪の	真砂はよみて

	ツクルトモ ホツマノミチハ	尽くるとも	秀真の道は
	イクヨツキセジ	幾代尽きせじ』	
	ミワノトミ ヲヲタタネコガ	ミワの臣	大田田根子が
	ササゲント フモミソヨトシ	捧げんと	二百三十四歳
	ツツシミテラス	謹しみてをす	
序四	ヲリツケノ ウハノシルシト	織つけの	上表の証と
	ハナヲシオ ソエテササグル	花押お	添ゑて捧ぐる
	コトノベノウタ	事述の長歌	
	ヒサカタノ アメガシタシル	ひさかたの	天が下知る
	ワガキミノ ヨヨニツタハル	わが君の	代々に伝はる
	カンムリハ アマレルカミノ	冠は	アマテル神の
	ツクラセテ サオシカヤツノ	作らせて	さおしかやつの
序五	ヲンミニニ キコシメサルル	御耳に	聴し召さるる

	アサマツリ	アマネクトホリ	朝政	遍く徹り
	アマテラス	ヲヲンタカラノ	天照らす	国民の
	イモヤスク	ヤスクニミヤト	居も安すく	ヤスクニ宮と
	タタエマス	ヤヨロトシヘテ	称ゑます	八万年経て
	コヘウチノ	イサワノミヤニ	コヘウチの	イサワの宮に
	ヲワシマス	ミコオシホミハ	をわします	御子オシホミは
	ヒタカミノ	タカノコウニテ	ヒタカミの	多賀の国府にて
序六	クニヲサム	マゴホノアカリ	国治む	孫ホノアカリ
	カグヤマノ	アスカノミヤニ	カグヤマの	アスカの宮に
	ヲワシマス	オトニニキネハ	を在します	弟ニニキネは
	ニイタナス	ニハリノミヤノ	新田成す	ニハリの宮の
	ソヤヨロニ	ニイタミフエテ	十八万年に	新増ゑて
	ナモタカキ	ハラミノミヤニ	名も高き	ハラミの宮に

	タミオタシ	ツイニシワガミ	民お治し	ついにしわかみ
	ホツマナル	ムソヨロトシノ	秀真なる	六十万年の
序七	ヨオシリテ	ワカツチワクル	世お治りて	イカツチ別くる
	イノツカミ	トキニランカミ	稷威の神	時に大神
	ノタマフハ	イマニニキネノ	宣たまふは	今ニニキネの
	サキミタマ	クニトコタチノ	幸御魂	クニトコタチの
	ワザミタマ	アラハルイツト	術御魂	現はる稷威と
	カガナエテ	ワケイカズチノ	考えて	ワケイカヅチの
	アマキミト	ナツケタマハル	天君と	名つけ賜はる
	ヨノハシメ	イマスヘラギノ	世の始め	今すへらぎの
序八	アマキミハ	ミナニニキネノ	天君は	皆ニニキネの
	イツニヨル	ミコマコヒコノ	稷威による	王子・孫・曾孫の
	スヘマデモ	アマテラシマス	末までも	天照らします

	ヲヲンカミ	モモナソヨロノ	大御神	百七十万の
	トシオヘテ	モトノヒノワニ	年お経て	もとの日輪に
	カヘマシテ	アオヒトクサオ	帰まして	蒼人草お
	テラシマス	コノユヘキミモ	照します	この故君も
	トミタミモ	イオヤスクヌル	臣・民も	居お易く寝る
序九	ヲンメグミ	ヨにアラワセル	御恵み	世にあらわせる
	ソノフミハ	ホツマツタエニ	その文は	秀真伝に
	スグルナシ	イマヨニノコル	勝る無し	今世に残る
	イエイエノ	フミモソレゾレ	家家の	文もそれぞれ
	カワリアル	タレオマコトト	変りある	誰お真実と
	ナシカタシ	カレニヒトツオ	為し難し	故に一つお
	アゲシルス	フソムノアヤニ	挙げ記す	二十六の紋に
	『カモワレテ	トヨタマヒメモ	『かも破れて	トヨタマ姫も

序十	ナギサニテ	タケキココロニ	渚にて	たけき心に
	オヨガセバ	タツヤミツチノ	泳がせば	タツやミツチの
	チカラエテ	ツツガモナミノ	力得て	恙も波の
	イソニツク	コレオヨソニテ	磯に着く』	これおよそにて
	フネワレテ	タツトミツチノ	舟破れて	タツとミツチの
	チカラエテ	コレアヤマレル	力得て	これ誤れる
	テニオハゾ	スベテナナヤノ	テニオハぞ	総て七家の
	シルシフミ	コトナリガチハ	録し文	異なり勝ちは
序十一	コレニシレ	ワガカミノヲス	これに知れ	わが神の押す
	キカサフミ	ホツマツタエト	みかさ文	秀真伝と
	ワリウルリ	アワスゴトクノ	割瓜り	合わす如くの
	ココロナリ	ヨヨノヲキテト	心なり	代々の掟と
	ナルフミハ	ホツマツタエト	なる文は	秀真伝と

オモフユヘ フカキココロオ 思ふ故 深き心お

ソエキレテ アゲタテマツル 添ゑ入れて あげ奉る

スヘニヲシテゾ 末に押してぞ

序十二 ハナノソエウタ はなの添ゑ歌

カカンナス ハルノヒトシク 『かかんす 春のひとしく

メグリキテ イソノマサゴハ 運り来て 磯の真砂は

イワトナル ヨヨノンテンノ 岩と成る 代々のんてんの

ホツマフミカナ 秀真書かな』

マキムキノ ヒシロノミヨニ マキムキの ヒシロの御代に

ミカサトミ イセノカンヲミ ミカサ臣 イセの神臣

ヲヲカシマ フモヨソナトシ ヲヲカシマ 二百四十七歳

ササグハナヲシ 捧ぐ花璽

● 東西(キツ)の名と穂虫(ホムシ)去る紋(アヤ)

1- 1	ソレワカハ	ワカヒメノカミ	それワカは	ワカ姫の神
	ステラレテ	ヒロタトソダツ	捨てられて	拾たと育つ
	カナサキノ	ツマノチオエテ	カナサキの	妻の乳お得て
	アウウワヤ	テフチシホノメ	アウウワや	手ふちシホの目
	ウマレヒハ	カシミケソナエ	生まれ日は	炊し御饌供え
1- 2	タチマヒヤ	ミフユカミオキ	立ち舞ひや	三冬髪置き
	ハツヒモチ	アウノウヤマヒ	初日十五日	天地の敬ひ
	モモニヒナ	アヤメニチマキ	桃に雛	菖蒲に粽
	タナハタヤ	キククリイワイ	タナハタや	菊・栗祝ひ
	キトシフユ	ヲハハカマキル	五歳冬	男は袴 着る
	メハカヅキ	コトバヲナオス	女は被衣	言葉を直す

	アワウタヲ	ツネニオシエテ	天地歌を	常に教ゑて
	『アカハナマ	イキヒニミウク	『アカハナマ	イキヒニミウク
1- 3	フヌムエケ	ヘネメオコホノ	フヌムエケ	ヘネメオコホノ
	モトロソヨ	ヲテレセエツル	モトロソヨ	ヲテレセエツル
	スユンチリ	シキタラサヤワ』	スユンチリ	シキタラサヤワ』
	アワノウタ	カダガキウチテ	天地の歌	カダガキ打ちて
	ヒキウタフ	オノヅトコエモ	弾き唱ふ	自づと声も
	アキラカニ	イクラムワタオ	明らかに	五臓六腑緒
	ネコエワケ	フソヨニカヨヒ	音声分け	二十四に通ひ
	ヨソヤコエ	コレミノウチノ	四十八声	これ身の内の
1- 4	メグリヨク	ヤマヒアラネバ	巡りよく	病あらねば
	ナガラエリ	スミエノヲキナ	永らえり	スミエの翁
	コレヲシル	ワカヒメサトク	これを知る	ワカ姫聴く

	カナサキニ	キツサネノナノ	カナサキに	東西南北の名の
	ユエヲコフ	ヲキナノイワク	故を請ふ	翁の日く
	ヒノイツル	カシラハヒガシ	日の出づる	頭は東
	ケタノボル	ミナミルミナミ	元気昇る	皆見る南
	ヒノヲツル	ニシハニシツム	日の落つる	西端に沈む
1- 5	ヨネトミヅ	カマニカシグハ	米と水	釜に炊ぐは
	ヒカシラヤ	ニエバナミナミ	火頭や	丹色花南
	ニエシツム	エカヒトタビノ	煮ゑ沈む	枝日一度の
	ミケハコレ	フルトシフヨリ	御食はこれ	古年経より
	ツキミケノ	ヒトハモヨロニ	月三食の	人は百万に
	ツキムケノ	ヒトハフソヨロ	月六食の	人は二十万
	イマノヨハ	タダフヨロトシ	今の世は	ただ二万年
	イキナルル	ミケカサナレバ	生き慣るる	御食重なれば

1- 6	ヨワヒナシ	ユエニヲンカミ	齡なし	故に御神
	ツキニミケ	ニガキアホナヤ	月に三食	苦き青菜や
	ミナミムキ	アサキオウケテ	南 向き	朝氣お受けて
	ナガイキノ	ミヤノウシロオ	長生きの	宮の後お
	キタトイウ	ヨルハネルユエ	北と云う	夜は寝る故
	キタハナヅ	モシヒトキタリ	北はネぞ	もし人来たり
	コトワケン	アワネハキタヨ	事別けん	天地根は北よ
	アフハヒテ	ミナミニコトオ	アフは日出	皆身に事お
1- 7	ワキマエテ	オチツクハニシ	弁えて	落ちつくは西
	カエルキタ	ネヨリキタリテ	帰る北	ネより来たりて
	ネニカエル	キハハルワカバ	根に帰る	木は春若葉
	ナツアオバ	アキニエモミヂ	夏青葉	秋熟紅葉
	フユオチバ	コレモオナジク	冬落葉	これも同じく

	ネハキタニ	キザスヒガシヤ	根は北に	兆す東や
	サニサカエ	ツハニシツクル	南に榮ゑ	西は西尽る
	ヲハキミコ	クニヲサムレバ	中は君子	国治むれば
1- 8	キツヲサネ	ヨモトナカナリ	東西中南北	四方と中心なり
	キハヒガシ	ハナハモミナミ	木は東	花・葉も南
	コミニニシ	ミオワケオフル	木の実西	実お分け生ふる
	キノミュエ	キミハラメカミ	木の実故	キミは男女神
	シカルノチ	イサワノミヤニ	しかる後	イサワの宮に
	ハベルトキ	イシキノイナダ	侍る時	キシキの稲田
	ホオムシニ	イタムオナゲキ	穂お虫に	傷むお歎き
	アルカタチ	ツグルイサワノ	有様	告ぐるイサワの
1- 9	ヲヲンカミ	アメノマナイニ	大御神	天のマナキに
	ミュキアト	タミノナゲキニ	御行後	民の歎きに

	ムカツヒメ	イソギキシキニ	ムカツ姫	急ぎキシキに
	ユキヒラク	タノキニタチテ	行き啓らく	田の東に立ちて
	オシクサニ	アオグワカヒメ	教草に	あおぐワカ姫
	ウタヨミテ	ハラヒタマエバ	歌詠みて	祓ひ給えば
	ムシサルオ	ムカツヒメヨリ	ムシ去るお	ムカツ姫より
	コノウタオ	ミソメオマテニ	この歌お	三十女お左右に
1-10	タタヅマセ	オノオノトモニ	佇ませ	各々共に
	ウタハシム	イナムシハラフ	歌はしむ	稲虫祓ふ
	ワカノマジナキ		和歌のまじなみ	
	タネハタネ	ウムスキサカメ	『種は田根	産むす木咲かめ
	マメスメラノゾロハモハメソ		忠実スメラの稲虫もはめそ	
	ムシモミナム		虫も皆死む』	
	クリカエシ	ミモムソウタヒ	繰返し	三百六十唱ひ

	トヨマセバ	ムシトビサリテ	響ませば	虫飛び去りて
1-11	ニシノウミ	ザラリムシサリ	西の海	ざらり虫去り
	エオハラヒ	ヤハリワカヤギ	穢お祓ひ	やはり若やぎ
	ヨミカエル	ソロニミノリテ	甦える	そろに実りて
	ヌバタマノ	ヨノカテオウル	ヌバタマの	世の糧お得る
	オンタカラ	ヨロコビカエス	御宝(国民)	喜びかえす
	キシイクニ	アヒノマエミヤ	キシイ国	アヒの前宮
	タマツミヤ	ツクレバヤスム	タマツ宮	造れば休む
	アヒミヤオ	クニカケトナス	アヒ宮お	国掛となす
1-12	ワカヒメノ	ココロオトトム	ワカ姫の	心お留む
	タマツミヤ	カレタルイネノ	タマツ宮	枯れたる稲の
	ワカガエル	ワカノウタヨリ	若返える	わか歌より
	ワカノクニ	タマツノヲシカ	ワカの国	タマツの勅使

	アチヒコオ	ミレバコカルル	アチヒコお	見れば焦るゝ
	ワカヒメノ	ワカノウタヨミ	ワカ姫の	和歌の歌詠み
	ウタミソメ	オモヒカネテゾ	歌見染め	思ひかねてぞ
	ススムルオ	ツイトリミレバ	勧むるお	つい取りみれば
1-13	キシキコソ	ツマオミキワニ	『キシキこそ	妻お身きわに
	コトノネノ	トコニワキミオ	琴の音の	床に吾君お
	マツゾコイシキ		待つぞ恋しき』	
	オモエラク	ハシカケナクテ	思えらく	はしかけなくて
	ムスブヤハ	コレカエサント	結ぶやわ	これ返さんと
	カエラネバ	コトノハナクテ	返らねば	言の葉なくて
	マチタマエ	ノチカエサント	「待ちたまえ	後返さん」と
	モチカエリ	タカマニイタリ	持ち帰り	タカマに至り
1-14	モロニトフ	カナサキイワク	諸神に問ふ	カナサキ日く

コノウタハ カエコトナラス この歌は 返事ならぬ

マワリウタ ワレモミユキノ 回り歌 我も御行の

フネニアリ カゼハゲシクテ 船にあり 風激しくて

ナミタツオ ウチカエサジト 波立つお 打ち返えさじと

マワリウタヨム 回り歌よむ

ナガキヨノ トオノネムリノ 『長き夜の 遠の眠りの

ミナメサメ ナミノリフネノ 皆目覚め 波乗り船の

1-15 オトノヨキカナ 音の良きかな』

トウタエバ カゼヤミフネハ と歌えば 風止み船は

ココロヨク アワニツクナリ 快く アワに着くなり

ワカヒメノ ウタモミヤビオ ワカ姫の 歌もみやびお

カエサジト モフセバキミノ 返さじと 申せば君の

ミコトノリ カナサキガフネ 勅 カナサキが船

	ノリウケテ	メオトナルナリ	のり受けて	夫婦なるなり
	ヤスカワノ	シタテルヒメト	ヤスカワの	シタテル姫と
1-16	アメハレテ	ソノオシクサハ	天晴れて	そのおしくさは
	ヌバタマノ	ハナハホノボノ	ぬはたまの	花はほのほの
	カラスバノ	アカキハヒノテ	カラスバの	紅きは日の出
	ヒアウギノ	イタモテツクル	ヒアウギの	板もて作る
	アフギシテ	クニモリオサム	扇して	国守り治む
	ヲシエクサ	カラスアフギハ	教葱草	カラスアフギは
	ソフハナリ	ヒアフキノハハ	十二葉なり	桧扇の葉は
	ミナハラフ	アワノヨソヤヅ	皆祓ふ	天地の四十八ぞ
1-17	マタミソフ	ミチナワスレソ	また三十二	道な忘れそ
	ハナキネハ	キナニツツルオ	ハナキネは	五・七に綴るお
	アネニトフ	アネノコタエハ	姉に問ふ	姉の答えは

	アワノフシ	マタトフハライ	天地の節	また問ふ祓い
	ミソフナリ	イマミソヒトハ	三十二なり	今三十一とは
	コノヲシエ	アメノメグリノ	この教ふ	天の運行の
	ミムソキエ	ヨツミツワケテ	三十六五枝	四つ・三つ分けて
	ミソヒナリ	ツキハオクレテ	三十一なり	月は遅れて
1-18	ミソタラズ	マコトミソヒゾ	三十たらず	まこと三十一日ぞ
	シカレドモ	アトサキカカリ	しかれども	後前かかり
	ミソフカモ	アルマウカガフ	三十二かも	ある間窺ふ
	オエモノオ	ハラフハウタノ	汚穢ものお	祓ふは歌の
	コエアマル	シキシマノエニ	声あまる	しきしま(敷島)の上に
	ヒトウマレ	ミソヒカニカス	人生まれ	三十一日にかす
	メハミソフ	ウタノカズモテ	陰は三十二	歌の数もて
	ハニコタフ	コレシキシマノ	はに応ふ	これしきしまは

● 天七代(アメナナヨ)、床御酒(トコミキ)の紋(アヤ)

2- 1	コノトキハ	ミ コオシヒトノ	この時は	皇子オシヒトの
	トツキマエ	タカギガミキノ	嫁き前	高木がミキの
	アヤコエバ	カミノオシエハ	アヤ請えば	神の教ゑは
	イニシエノ	アメツチウビノ	昔の	アメツチ初生の
	キハナキニ	キザシワカルル	極なきに	兆 分かる
	アウノメラ	ヲハアメトナリ	天ウの陰陽	陽は天となり
2- 2	ヒノワナル	メハクニトナリ	日の輪なる	陰は地となり
	ツキトナル	カミソノナカニ	月と成る	神その中に
	アレマシテ	クニトコタチノ	生まれまして	クニトコタチの

	トコヨクニ	ヤモヤクダリノ	トコヨ国	八方八降りの
	ミコウミテ	ミナソノクニオ	御子生みて	皆その国お
	ヲサメシム	コレクニキミノ	治めしむ	これ国君の
	ハヂメナリ	ヨツギノカミハ	始めなり	世継ぎの神は
	クニサツチ	サキリノミチオ	クニサツチ	サキリの道お
2- 3	ウケザレバ	サツチニヲサム	受けざれば	サツチに治む
	ヤミコカミ	オノオノミコオ	八御子神	各々御子お
	イタリウム	ヤモノヨツギハ	五人生む	八方の世継ぎは
	トヨクンヌ	アメヨリミツノ	トヨクンヌ	天より三ッの
	ワザオワケ	キミトミタミノ	業おわけ	君・臣・民の
	ミクタリノ	カミハモフソノ	三降りの	神は百二十の
	ミコアリテ	アメナリミチハ	御子ありて	天成道は
	メモアラズ	ミツヨヲサマル	女もあらず	三世治まる

2- 4	マサカキノ	ウエツギキモノ	真榊の	植ゑ継ぎ五百に
	ミツルコロ	ヨツギノヲカミ	満つる頃	世継ぎの男神
	ウビチニノ	スビチオイルル	ウビチニの	スビチお納るる
	サイアイノ	ソノモトヲリハ	幸の	そのモトヲリは
	コシクニノ	ヒナルノタケノ	コシ国の	日成るの岳の
	カンミヤニ	キノミオモチテ	神宮に	木の実お持ちて
	アレマセバ	ニワニウエオク	生まれませば	庭に植ゑおく
	ミトセノチ	ヤヨキノミカニ	三年のち	弥生の三日に
2- 5	ハナモミモ	モモナルユエニ	花も実も	百なる故に
	モモノハナ	フタカミノナモ	桃の花	両神の名も
	モモヒナギ	モモヒナミナリ	桃雛木	桃雛実なり
	ヒナハマダ	ヒトナルマエヨ	雛はまだ	人なる前よ
	キミハソノ	キノミニヨリテ	君はその	木の実によりて

	ヲカミハキ	メカミハミトゾ	男神はキ	女神はミとぞ
	ナツキマス	ヒトナルノチニ	名つきます	成人なる後に
	ヤヨイミカ	ミキツクリソメ	弥生三日	御酒造り初め
2- 6	タテマツル	モモトニクメル	奉る	桃下に酌める
	ミキニツキ	ウツリススムル	御酒に月	映り勧むる
	メカミマズ	ノミテススムル	女神まず	飲みて勧むる
	ノチヲカミ	ノミテマチワル	後男神	飲みて交わる
	トコミキノ	ミアツケレバヤ	床御酒の	身暑ければや
	アスミアサ	サムカワアビル	翌三朝	サムカワ浴びる
	ソデヒチテ	ウスノニココロ	袖濡ちて	多小の和心
	マタキトテ	ナモウビチニト	マタキとて	名もウビチニと
2- 7	スビチカミ	コレモウビニル	スビチ神	これも初生似る
	フルコトヤ	オオキスクナキ	故事や	多き少なき

	ウスノナモ	コノヒナガタノ	ウスの名も	この雛形の
	ヲハカムリ	ウホソデハカマ	男は冠	大袖・袴
	メハコソテ	ウハカツキナリ	女は小袖	上被衣なり
	コノトキニ	ミナツマイレテ	この時に	皆妻入れて
	ヤソツツキ	モロタミモミナ	八十続き	諸民も皆
	ツマサタム	アマナリミチノ	妻定む	天成道の
2- 8	ソナワリテ	タグイナルヨリ	備わりて	たぐいなるより
	トシカソエ	キヲツギアマノ	年数え	五百継ぎ天の
	マサカキヤ	キツヨノカミハ	マサカキヤ	五世の神は
	オオトノチ	オオトマエナリ	オオトノチ	オオトマエなり
	ツノグキハ	オオトノニイテ	ツノグキは	オオトノにいて
	イククイオ	トマエニアイテ	イククイお	トマエにあひて
	ツマトナス	カレヲハトノゾ	妻となす	かれ男は殿ぞ

	メハマエト	ヤモツツキマデ	女は前と	八百続きまで
2-9	ムヨノツギ	オモタルノカミ	六世の継ぎ	オモタルの神
	カシコネト	ヤモオメクリテ	カシコネと	八方お巡りて
	タミオタス	ヲウミアツミノ	民お治す	近江・渥美の
	ナカハシラ	ヒカシハヤマト	中柱	東は大和
	ヒタカミモ	ニシハツキスミ	ヒタカミも	西はツキスミ
	アシハラモ	ミナミアワソサ	アシハラも	南 阿波・素佐
	キタハネノ	ヤマトホソホコ	北は根の	ヤマト細ホコ
	チタルマデ	オヨベドモヤホ	チタルまで	及べど百万穂(歳)
2-10	ツギコナク	ミチオトロヒテ	継子なく	道衰ひて
	ワイタメナ	トキニアメヨリ	秩序無	時に天より
	フタカミニ	ツボハアシハラ	二神に	ツボは葦原
	チイモアキ	イマシモチヒテ	千五百あき	汝 用ひて

	サトセトテ	トトホコタマウ	治せとて	トとホコ賜う
	フタカミハ	ウキハシノエニ	二神は	浮橋の上に
	サクリウル	ホコノシツクノ	探りうる	ホコの滴の
	オノコロニ	ミヤノトツクリ	オノコロに	宮殿造くり
2-11	オオヤマト	ヨロモノウミテ	オオヤマト	万物生みて
	ヒトクサノ	ミケモコカヒモ	人草の	御食も養蚕も
	ミチナシテ	ワイタメサダム	道なして	分別さだむ
	イサオシヤ	アメノカミヨノ	功績や	天の神代の
	ナナヨメオ	ツグイトグチハ	七世目お	継ぐ糸口は
	トコヨカミ	キノミヒガシニ	常世神	木の実東に
	ウエテウム	ハゴクニノカミ	植ゑて産む	ハゴクニの神
	ヒタカミヤ	タカマニマツル	日高見国や	高天原に祭る
2-12	ミナカヌシ	タチバナウエテ	ミナカヌシ	橘 植ゑて

	ウムミコノ	タカミムスビオ	産む御子の	タカミムスビお
	モロタタユ	キノトコタチヤ	諸人讃ゆ	キノトコタチや
	ソノミコハ	アメカガミカミ	その御子は	天鏡神
	チクシタス	ウヒチニモウク	筑紫治す	ウヒチニもうく
	コノミコハ	アメヨロツカミ	この御子は	天万 神
	ソアサタシ	アワサクウメバ	ソアサたし	アワ・サク生めば
	アワナギハ	ネノシラヤマト	アワナギは	根のシラヤマと
2-13	チタルマデ	ノリモトホレバ	チタルまで	法も通れば
	ウムミコノ	イミナタカヒト	産む御子の	イミ名タカヒト
	カミロギヤ	タカミムスビノ	カミロギや	タカミムスビの
	キツヨカミ	イミナタマキネ	五世神	イミ名タマキネ
	トヨウケノ	ヒメノアサコト	豊受神の	姫のイサコと
	ウキハシオ	ハヤタマノオガ	浮橋お	ハヤタマノオガ

	ワタシテモ	トケヌオモムキ	渡しても	解けぬ趣き
	ト	ム		
	解き結ぶ	コトサカノオぞ
2-14	ケタツボノ	ツサノツクバノ	ケタツボの	西南のツクバの
	イサミヤニ	ウナヅキアミテ	イサ宮に	額き相見て
	イサナキト	イサナミトナル	イサナキと	イサナミと成る
	フタカミノ	マヂワルトキニ	二神の	交わる時に
	トコミキヤ	トコハトホコニ	床御酒や	トコはトホコに
	コオモトム	ササケハトヨケ	子お求む	笹気はトコヨ
	イノクチノ	スクナミカミノ	イノクチの	スクナ御神の
	タケカフニ	ススメガモミオ	竹株に	雀が扱お
2-15	イルオミテ	ミキツクリソメ	入るお見て	御酒造りそめ
	ススメケリ	モモヒナキヨリ	勧めけり	モモヒナキより

ササナミト	ナオタマフヨリ	ササナミと	名お賜ふより
ナモササケ	ソノカミイマス	名もササケ	その神います
ササケヤマ	ココノクミトハ	ササケ山	九の酌人とは
ヤヨイミカ	サカツキウメル	三月三日	サカツキ生める
カミノナモ	ヒナガタケトゾ	神の名も	ヒナガタケとぞ
タタユナリケリ		讃ゆなりけり	

● 一姫三男(ヒヒメミヲ)生む殿(トノ)の紋(アヤ)

3- 2	モロカミノ	タカマニマツリ	諸神の	タカマに祀り
	ハカルノチ	ツハモノヌシガ	議るのち	ツハモノヌシが
	フタカミノ	ヒヒメミヲウム	二神の	一姫三男生む
	トノキツツ	トヘバカナサキ	殿五つつ	問へばカナサキ

	コタフルニ	ムカシフタカミ	答ふるに	「昔二神
	ツクバニテ	ミメグリトネバ	筑波にて	御月経問へば
	メカミニハ	ナリナリタラヌ	女神には	成りなり足らぬ
3- 3	メモトアリ	ヲカミノナリテ	陰元あり	男神の成りて
	アマルモノ	アワセテミコオ	余るもの	合わせて御子お
	ウマントテ	ミトのマグバヒ	生まんとて	御処のマグバヒ
	ナシテコオ	ハラミテウメル	なして子お	妊みて生める
	ナハヒルコ	シカレドチチハ	名はヒルコ	然れど父は
	ススヨソホ	ハハハミソヒホ	スス四十歳	母は三十一歳
	アメノフシ	ヤトレバアタル	天の節	宿ればあたる
	チチノオエ	ヲノコハハハノ	父の汚穢	男の子は母の
3- 4	クマトナル	ミトセイツクニ	隅となる	三年慈に
	タラザレド	イワクスフネニ	足らざれど	齊奇清船に

	ノセスツル	オキナヒロタト	乗せ捨つる	翁「拾た」と
	ニシトノニ	ヒタセバノチニ	西殿に	養せば後に
	フタハシラ	ウキハシニエル	二柱	ウキハシに得る
	オノコロノ	ヤヒロノトノニ	オノコロの	八尋の殿に
	タツハシラ	メクリウマント	立つ柱	巡り生まんと
	コトアゲニ	メハヒダリヨリ	言あげに	女は左より
3- 5	ヲハミギニ	ワカレメグリテ	男は右に	別れ廻りて
	アフトキニ	メハアナニエヤ	会ふ時に	女は「あなにえや
	エヲトコト	ヲハワナウレシ	善男」と	男は「わな嬉し
	エオトメト	ウタヒハラメド	愛乙女」と	唱ひ妊めど
	ツキミテズ	エナヤブレウム	月満てず	胞衣破れ生む
	ヒヨルコノ	アワトナガルル	ヒヨルコの	泡と流るる
	コレモマタ	コノカズナラズ	これもまた	子の数ならず

	アシフネニ	ナガスアハチヤ	葦舟に	流す淡路や
3- 6	アリカタチ	アメニツグレバ	有様	天に告ぐれば
	フトマニオ	アヂハエイハク	フトマニお	味得日く
	キヨノウタ	コトオムスバズ	五・四の歌	事お結ばず
	コトアゲモ	メハサキタテズ	言挙げも	女は先き立てず
	トツギトハ	メノニハナブリ	嫁ぎとは	女の鶺鴒
	オユレナク	ヲトリナキサル	尾揺れ鳴く	雄鳥鳴き去る
	マタアルヒ	ヲトリヨソオフ	またある日	雄鳥装ふ
	メガシリテ	アヒマシハレバ	雌が知りて	相交はれば
3- 7	アメヨリゾ	トリニツゲシム	天よりぞ	鳥に告げしむ
	トツギノリ	サラニカエリテ	婚 法	更に帰りて
	フタカミハ	アラタニメグリ	二神は	新たに巡り
	ヲハヒダリ	メハミギメグリ	男は左	女は右巡り

	アヒウタウ	アメノアワウタ	相唱う	天の天地歌
	アナニエヤ	ウマシオトメニ	「あなにえや	愛まし乙女に
	アヒヌトキ	メカミコタヘテ	会ひぬ時」	女神答へて
	ワナニヤシ	ウマシヲトコニ	「わなにやし	愛まし男に
3- 8	アヒキトゾ	ヤワシテアワオ	会ひき」とぞ	和して天地お
	エナトシテ	ヤマトアキツス	胞衣として	ヤマト秋津洲
	アハチシマ	イヨアワフタナ	淡路島	伊予・阿波・二名
	オキミツコ	ツクシキヒノコ	隠岐三子	筑紫・吉備の児島
	サトウシマ	ウミテウミカハ	佐渡・大島	生みて海河
	ヤマノサチ	キヲヤククノチ	山の幸	木祖ククノチ
	カヤノヒメ	ノツチモナリテ	カヤの姫	野霊も成りて
	アワウタニ	ヲサムハラミノ	天地歌に	治むハラミの
3- 9	ミヤニキテ	ステニヤシマノ	宮に居て	既に八州の

	クニウミテ	イカンゾキミオ	国生みて	「いかんぞ君お
	ウマントテ	ヒノカミオウム	生まん」とて	日の神お生む
	ソノミナオ	ウホヒルギトゾ	その御名お	ウホヒルギとぞ
	タタヘマス	クニウルハシク	称へます	国麗はしく
	テリトホル	クシヒルノコハ	照り徹る	奇日霊の子は
	トドメズト	アメニオクリテ	留めずと	天に送りて
	アメノギト	ミハシラミチチ	天のギと	御柱の道
3-10	タテマツル	カレニハラミオ	奉る	故にハラミお
	オオヒヤマ	トヨケカガヘテ	オオヒ山	トヨケ考へて
	ワカヒトト	イミナオササグ	ワカヒトと	イミ名お捧ぐ
	フタカミハ	ツクシニユキテ	二神は	筑紫に行きて
	ウムミコオ	ツキヨミノカミ	生む御子お	ツキヨミの神
	ヒニツゲト	アメニアゲマス	日に次げと	天にあげます

	コレノサキ	オエクマニスツ	これの先	汚穢隅に捨つ
	ヒルコヒメ	イマイツクシニ	ヒルコ姫	いま慈しに
3-11	タリイタル	アメノイロトト	足り至る	天の姉と
	ワカヒルメ	ソサクニニウム	ワカヒル姫	ソサ国に生む
	ソサノヲハ	ツネニオタケビ	ソサノヲは	常に雄叫び
	ナキイザチ	クニタミキジク	泣き哭ち	国民くじく
	イサナミハ	ヨノクマナスモ	イサナミは	世の隅なすも
	ワガオエト	タミノオエクマ	わが汚穢と	民の汚穢曲
	ミニウケテ	マモランタメニ	身にうけて	護らんための
	クマノミヤ	カクミココロオ	熊野宮	かく御心お
3-12	ツクシウム	ヒヒメミヲカミ	尽し生む	一姫三男神
	ウミテヨノ	トミタミノミチ	産みて世の	君臣の道
	トノヲシエ	サカリモトラバ	トの教ゑ	離り悖らば

ホコロバス	コノフタハシラ	滅ぼす	この二柱
ウムトノハ	アマノハラミト	生む殿は	天のハラミと
ツクハヤマ	アハチツキスミ	ツクハ山	淡路・月隅
クマノナリケリ		クマノなりけり	

● 日の神の瑞御名の紋(アヤ)

4-2	モロカミノ	カミハカリナス	諸神の	神謀りなす
	タカマニテ	オオモノヌシガ	タカマにて	オオモノヌシが
	ヒノカミノ	キミナノアヤオ	日の神の	みみ名の紋お
	モロニトフ	オオヤマスミノ	諸に問ふ	オオヤマスミの
	コタエニハ	ミヲヤノシルス	答えには	御祖の録す
	ウタニアリ	モロカミコエバ	歌にあり	諸神乞えば

	ヤマスミガ	ツツシミイワク	ヤマスミガ	謹み日く
	ムカシコノ	クニトコタチノ	「昔この	クニトコタチの
4- 3	ヤクタリコ	キクサオツトノ	八下り子	木草お苞の
	ホツマクニ	ヒカシハルカニ	ホツマ国	東 遙かに
	ナミタカク	タチノホルヒノ	波高く	たち昇る日の
	ヒタカミヤ	タカミムスビト	ヒタカミヤ	タカミムスビと
	クニスベテ	トコヨノハナオ	国統べて	トコヨの花お
	ハラミヤマ	カクヤマトナス	ハラミ山	カクヤマとなす
	キモツギノ	マサカキモウエ	五百継ぎの	マサカキも植ゑ
	ヨヨウケテ	ヲサムキツヨノ	代々うけて	治む五代の
4- 4	ミムスビノ	キミナタマキネ	御ムスビの	キミ名タマキネ
	モトアケオ	ウツスタカマニ	元明けお	移すタカマに
	アメミヲヤ	モトモトアナミ	天御祖	元々・天並

	ミソフカミ	マツレバタミノ	三十二神	祭れば民の
	トヨケカミ	ヒガシノキミト	トヨケ神	東の君と
	ミチウケテ	オオナメコトモ	道うけて	大ナメコトも
	マサカキノ	ムヨロニツキテ	マサカキノ	六万に尽きて
	ウエツギノ	フソヒノススノ	植ゑ継ぎは	二十一のススの
4- 5	トシスデニ	モフソヨロナチ	年既に	百二十万七千
	キモソフニ	カンカミレドモ	五百二十に	鑑みれども
	カンマコノ	チキモウシアル	「神孫の	千五百氏ある
	ソノナカニ	アメノミチエテ	その中に	天の道得て
	ヒトクサノ	ナゲキオヤワス	人草の	嘆きお和す
	カミアラズ	アラネバミチモ	神あらず	あらねば道も
	ツキンカト	ナゲクトヨケノ	尽きんか」と	嘆くトヨケの
	ハラミヤマ	ノホリテミレド	ハラミ山	登りてみれど

4- 6	ヤシマナル	ヨロマスタミモ	「八島なる	万ます民も
	ウグメキテ	ミチナラエヌモ	うぐめきて	道習えぬも
	コトワリト	ヤハリナケキテ	道理」と	やはり嘆きて
	ヒタカミノ	ミヤニカエレバ	「ヒタカミの	宮に帰れば
	イザナミノ	チチニモフシテ	イザナミの	父に申して
	ヨツギコモ	ガナトオボセバ	世嗣子も	がな」とおぼせば
	ウラナヒテ	ツキカツラギノ	占ひて	ツキカツラギの
	イトリヤマ	ヨツギヤシロノ	イトリ山	世嗣社の
4- 7	イロシテハ	アメノミヲヤニ	色シテは	天の御祖に
	イノランカ	トヨケミツカラ	祈らんと	トヨケ親ら
	ミソギシテ	ヤチクラチキリ	禊して	八千座契り
	ヌキンツル	イツチカミノリ	抜きんつる	イツチ神祈り
	トホリテゾ	アメノミヲヤノ	通りてぞ	天の御祖の

	マナコヨリ	モルルヒツキト	眼より	漏るる日月と
	アモトカミ	ミソフノカミノ	天元神	三十二の神の
	マモルユエ	コタネナルコト	守る故	子種なること
4- 8	オボエマス	コノコロキミハ	覚ゑます	この頃君は
	ハラミヤマ	ノホリテイワク	ハラミ山	登りて日く
	モロトモニ	クニクニメクリ	「諸共に	国々巡り
	タミオタシ	ヒメミコウメド	民お治し	姫御子生めど
	ツギコナク	タノシナキトテ	嗣ぎ子なく	楽しなき」とて
	イケミツニ	タノメオアラヒ	池水に	左の目お洗ひ
	ヒルニノリ	カノメオアラヒ	日霊に祈り	右の目お洗ひ
	ツキニノリ	イシゴリドメガ	月に祈り	イシゴリドメが
4- 9	マスカガミ	イツクリススム	真澄鏡	铸造り進む
	イサナギハ	アメオシラスル	イサナギは	天お治らする

	ウツノコオ	ウマンオモヒノ	珍の子お	生まん思ひの
	マスカガミ	マテニヒルツキ	真澄鏡	両手に日月
	ナツラエテ	カミナリイデン	擬らえて	神なり出でん
	コトオコヒ	クビメグルマニ	事お請ひ	首巡る間に
	アグリコフ	カクヒオツミテ	アグリ乞ふ	かく日お積みて
	ミタマイル	カトハチリケノ	御魂入る	門は身柱の
4-10	アヤトコロ	オコナヒチカニ	綾ところ	行ひ千日に
	ナルコロハ	シラハギソミテ	なる頃は	白脛染みて
	サクライロ	アルヒヲカミガ	桜色	ある日男神が
	オケトエバ	ヒメノコタエハ	月経問えば	女神の答えは
	ツキノオケ	ナガレトトマリ	「月の汚穢	流れ留まり
	ミカノノチ	ミモキヨケレバ	三日の後	身も清ければ
	ヒマチスト	ヲカミモエミテ	日待ちす」と	男神も笑みて

	モロトモニ	オガムヒノワノ	諸共に	拝む日の輪の
4-11	トビクタリ	フタカミノマエ	飛び下り	二神の前
	オチトトム	オモハズイダク	落ち留む	思はず抱く
	ユメココチ	サメテウルホヒ	夢心地	覚めて潤ほひ
	ココロヨク	ミヤニカエレバ	快く	宮に帰れば
	ヤマスマガ	ササミキススム	ヤマスマガ	ささ御酒進む
	カレヲカミ	トコミキシルヤ	故男神	床御酒知るや
	メノコタエ	コトサカノヲガ	女の答え	コトサカノヲが
	ミチキケバ	トコミキハマヅ	道聴けば	床御酒はまづ
4-12	メガノミテ	ノチヲニススム	女が飲みて	後男に勧む
	トコイリノ	メハコトアゲズ	床入りの	女は事挙げず
	ヲノヨソイ	メガシリトツグ	男のよそい	女が知りとつぐ
	シタツユオ	スエバタガイニ	舌露お	吸えば互いに

	ウチトケテ	タマシマカワノ	打ち解けて	タマシマカワの
	ウチミヤニ	ヤドルコタネノ	内宮に	宿る子種の
	トツギノリ	コオトトノオル	トツギ法	「子お整おる
	トコミキハ	クニウムミチノ	床御酒は	国生む道の
4-13	ヲシエゾト	カクマシワリテ	教ふぞ」と	かく交わりて
	ハラメドモ	トツキニウマズ	妊めども	十月に生まず
	トシツキオ	フレドモヤハリ	年月お	経れどもやはり
	ヤメルカト	ココロイタメテ	病めるかと	心 傷めて
	コソムツキ	ヤヤソナワリテ	九十六月	やや備わりて
	アレマセル	アマテルカミゾ	生まれませる	天照る神ぞ
	フソヒスス	モモフソキエダ	二十ースス	百二十五枝
	トシキシエ	ハツヒホノホノ	年キシエ	初日ほのほの
4-14	イヅルトキ	トモニアレマス	出づる時	共に生れます

	ミカタチノ	マドカノタマコ	御形の	円の玉子
	イブカシヤ	ウヲヤヲキナノ	訝かしや	大祖翁の
	ヤマスミガ	コトホギウタフ	ヤマスミガ	言祝ぎ歌ふ
	ムベナルヤ	ユキノヨロシモ	「むべなるや	ゆきのよろしも
	ミヨツギモ	ヨヨノサイワヒ	御世嗣も	世々の幸ひ
	ヒラケリト	オホヨスガラニ	開けり」と	終夜すがらに
	コトブクモ	ミタビニオヨブ	言祝も	三度に及ぶ
4-15	ユキヨロシ	ヒトノトワシノ	ユキよろし	人の問わしの
	コタエニモ	トヨケノカミノ	答ゑにも	トヨケの神の
	ヲシエアリ	サワルイソラノ	教ゑあり	「障るイソラの
	ミソギニテ	エナノカコミハ	禊にて	胞衣の囲みは
	オノコロノ	タマコトナラバ	オノコロの	玉子とならば
	ユキヨロシ	タマノイワトオ	ユキよろし	タマの岩戸お

	ヒラケトテ	イチキノハナノ	開らけ」とて	イチキの花の
	サクモチテ	イマコソヒラク	笏もちて	いまこそ開く
4-16	アマノトヤ	イズルワカヒノ	天の戸や	出づる若日の
	カカヤキテ	シラヤマヒメハ	輝きて	シラヤマ姫は
	ウブユナス	アカヒコクワニ	産湯なす	アカヒコ桑に
	ヒクイトオ	ナツメガオリテ	引く糸お	ナツメが織りて
	ウブキヌノ	ミハタテマツル	産絹の	御衣たてまつる
	タラチメノ	ツカレニチシル	タラチメの	疲れに乳汁
	ホソケレバ	ホイキノカミノ	細ければ	ホイキの神の
	ミチツヒメ	チチタテマツリ	御乳姫	乳たてまつり
4-17	ヒタスレド	ヒトミオトヂテ	育すれど	瞳お閉ぢて
	ツキヒナク	ヤヤハツアキノ	月日なく	やや初秋の
	モチノヒニ	ヒラクヒトミノ	十五日の日に	開く瞳の

	シホノメハ	タミノテウチノ	シホノメは	民の手打ちの
	ヨロコビニ	ツカレモキユル	喜びに	疲れも消ゆる
	ミメクミヤ	アメニタナビク	御恵みや	天にたなびく
	シラクモノ	カカルヤミネノ	白雲の	かかる八峰の
	フルアラレ	ヒスミニコタマ	ふる霰	日スミに反響
4-18	コノミヅオ	ヌノモテツクル	この瑞お	布もて作る
	ヤトヨハタ	ヤスミニタテテ	八豊旗	八隅に立てて
	キミトナル	クラキノヤマノ	君となる	位の山の
	イチヒサク	ヨニナカラエテ	イチヒ咲く	世に永らゑて
	サクモツハ	カミノホズエゾ	笏もつは	神の穂末ぞ
	オバヒメガ	コエネノクニニ	叔母姫が	コエネの国に
	ミハオリテ	タテマツルトキ	御衣織りて	奉る時
	ナクミコノ	コエキキトレバ	泣く御子の	声ききとれば

4-19	アナウレシ	コレヨリモロガ	あなうれし	これより諸神が
	ナオコヒテ	オバヨリトエバ	名お乞ひて	叔母より問えば
	ウヒルギト	ミヅカラコタフ	「ウヒルギ」と	親ら答ふ
	ミコノコエ	キキキルトキハ	御子の声	きききる時は
	オサナナノ	ウハオオヒナリ	幼な名の	ウは大ひなり
	ヒハヒノワ	ルハヒノチタマ	ヒは日の輪	ルは日の靈魂
	ギハキネゾ	カレウヒルギノ	ギはキネぞ	故ウヒルギの
	ミコトナリ	キネハメヲトノ	命なり	キネは夫婦の
4-20	ヲノキミゾ	フタカミオバオ	男の君ぞ	二神叔母お
	タタエマス	キクキリヒメモ	讃ゑます	キクキリ姫も
	アナカシコアヤ		あなかしこあや	
	アカタマノ	ワカヒルノルハ	赤玉の	若日靈の靈は
	アオキタマ	クレヒノミタマ	青き玉	暮れ日の御魂

	ヌバタマナリキ		ぬば玉なりき	
	ヒサカタノ	ヒカリアレマス	久方の	光り生れます
	ウヒナメエ	アユキワスキニ	初なめゑ	天ユキ・地スキに
4-21	ツゲマツリ	ミコヒタサント	告げまつり	御子育さんと
	フタカミノ	ミココロツクス	二神の	御心 尽す
	アマノハラ	ソムホキマスモ	天の原	十六年居ますも
	ヒトヒトゾ	オボスハメグミ	一日とぞ	おぼすは恵み
	アツキナリ	ムカシタマキネ	篤きなり	昔タマキネ
	チカヒシテ	カツラキヤマノ	誓して	カツラキ山の
	ヤチミソギ	スミテイトリノ	八千ミソギ	すみてイトリの
	テクルマオ	ツクリカツラノ	手車お	作りカツラの
4-22	ムカヒトテ	ハラミニツタフ	迎ひとて	ハラミに伝ふ
	アルカタチ	フタカミユメノ	ある形	二神夢の

	ココチニテ	アヒテタマエバ	心地にて	会ひみ給えば
	トヨケニテ	アメミコヒタス	トヨケにて	天御子育す
	モノカタリ	メステクルマオ	もの語り	召す手車お
	ヒタカミエ	ミユキノキミハ	ヒタカミえ	御幸の君は
	ヤフサコシ	オチツモハベリ	八房輿	お乳姫侍り
	ケタコシモ	ミナケタツボノ	ケタ輿も	みなケタツボの
4-23	ヤマテミヤ	ミコノヒカリノ	ヤマテ宮	御子の光りの
	テリトホリ	ヤモニコカネノ	照り通り	八方に黄金の
	ハナサケバ	ヒノワカミヤノ	花咲けば	日の若宮の
	ワカヒトト	トヨケキミナオ	ワカヒトと	トヨケ・キミ名お
	タテマツル	フタカミオソレ	奉る	二神畏れ
	ワガミヤニ	ムベソダテジト	「わが宮に	むべ育てじ」と
	アメニアゲ	オキツノミヤニ	天にあげ	オキツの宮に

	カエリマス	アメミコマナブ	帰ります	天御子学ぶ
4-24	アメノミチ	ヒトリハンベル	天の道	一人はんべる
	フリマロハ	ムヨヤソキネノ	フリマロは	六代ヤソキネの
	ヨツギコゾ	タカミムスビノ	世嗣ぎ子ぞ	タカミムスビの
	キツヨキミ	ヒゴトニノボル	五つ世君	日毎にのぼる
	アマツミヤ	ワカヒトフカク	天つ宮	ワカヒト深く
	ミチオホス	アルヒノトヒニ	道お欲す	ある日の問ひに
	マコトナオ	キミナトタタエ	「マコト名お	斎名と讃ゑ
	アネニミツ	ワレハヨツナリ	姉に三つ	我は四つなり
4-25	コレイカン	タマキネイワク	これいかん」	タマキネ日く
	キミナニハ	タラニヨツギニ	「キミ名には	タラに世嗣ぎに
	ナトノリト	アワセヨツナリ	名とノリと	合せ四つなり
	アマツキミ	ヒヨリトマデオ	天つ君	一より十までお

	ツクスユエ	ヒトニノリマス	尽す故	人にのります
	キネトヒコ	ウシモノリナリ	キネとヒコ	ウシものりなり
	メハノラズ	フタヲヤフタツ	女はのらず	二親二つ
	ヲニウケテ	コオウムユエニ	男に受けて	子お生む故に
4-26	ナニコヒメ	マタコナニヒメ	何子姫	又子何姫
	ナニオトモ	オナニトモツク	何オとも	オ何とも付く
	メノナミツ	ヲノナノリヨツ	女の名三つ	男の名告り四つ
	タタエナハ	イクラモツケヨ	讃名は	幾らも付けよ
	キミナトハ	シムニトホレバ	キミ名とは	シムに通れば
	マコトナルカナ		真実なるかな	

● 和歌(ワカ)の枕言葉(マクラコトバ)の紋(アヤ)

5- 1	モロカミノ	カミハカリシテ	諸神の	神謀りして
5- 2	モノヌシガ	マクラコトバノ	モノヌシが	枕言葉の
	ユエオトフ	モロコタエネバ	故お問ふ	諸答ゑねば
	アチヒコガ	コレハミソギノ	アチヒコが	これはミソギの
	フミアアリ	モロコフトキニ	文にあり	諸乞ふ時に
	オモイカネ	コレトキイワク	オモヒカネ	これ積み日く
	フタカミノ	オキツボニキテ	二神の	オキツボに居て
	クニウメド	タミノコトバノ	国生めど	民の言葉の
	フツクモリ	コレナオサント	悉曇り	これ直さんと
5- 3	カンガエテ	キネナナミチノ	考ゑて	五音七道の
	アワウタオ	カミフソヨコエ	アワ歌お	上二十四声
	イサナギノ	シモフソヨコエ	イサナギと	下二十四声
	イサナミト	ウタヒツラネテ	イサナミと	唱ひ連ねて

	ヲシユレバ	ウタニネコエノ	教ゆれば	歌に音声の
	ミチヒラケ	タミノコトバノ	道ひらけ	民の言葉の
	トトノエバ	ナカクニノナモ	整ゑば	ナカ国の名も
	アワクニヤ	ツクシニミユキ	アワ国や	ツクシに御幸
5- 4	タチバナオ	ウエテトコヨノ	橘お	植ゑてトコヨの
	ミチナレバ	モロカミウケテ	道なれば	諸神受けて
	タミオタス	タマノヲトトム	民お治す	魂の緒留む
	ミヤノナモ	オトタチバナノ	宮の名も	オトタチバナの
	アワキミヤ	ミコアレマセバ	アワキ宮	御子生まれませば
	モチキネト	ナヅケテイタル	モチキネと	名づけて至る
	ソアサクニ	サクナギノコノ	ソアサ国	サクナギの子の
	イヨツヒコ	ウタニコトバオ	イヨツヒコ	歌に言葉お
5- 5	ナラワセテ	フタナオモトム	習わせて	フタナお求む

	アワツヒコ	ソサニイタリテ	アワツヒコ	ソサに至りて
	ミヤツクリ	シツカニイマス	宮造り	静かに居ます
	キシイクニ	タチバナウエテ	キシイ国	タチバナ植ゑて
	トコヨサト	サキニステタル	トコヨ里	先に捨てたる
	ヒルコヒメ	フタタビメサレ	ヒルコ姫	再び召され
	ハナノシタ	ウタオヲシエテ	花の下	歌お教ゑて
	コオウメバ	ナモハナキネノ	子お生めば	名もハナキネの
5- 6	ヒトナリハ	イサチオタケビ	人なりは	いさち雄叫び
	シキママヤ	ヨノクマナセバ	重播や	世の隈なせば
	ハハノミニ	ステトコロナキ	母の身に	捨て処なき
	ヨノクマオ	ワガミニウケテ	世の隈お	我が身に受けて
	モロタミノ	カケオツグナフ	諸民の	欠けお償ふ
	ミクマノノ	ミヤマギヤクオ	ミクマノの	深山木焼くお

	ノゾカント	ウムヒノカミノ	除かんと	生む火の神の
	カグツチニ	ヤカレテマサニ	カグツチに	焼かれて当に
5- 7	オワルマニ	ウムツチノカミ	終る間に	生む土の神
	ハニヤスト	ミヅミツハメゾ	ハニヤスト	水ミツハメゾ
	カグツチト	ハニヤスガウム	カグツチと	ハニヤスが生む
	ワカムスビ	クビハコクワニ	ワカムスビ	首は蚕桑に
	ホゾハズロ	コレウケミタマ	臍は稲	これ大食御霊
	イサナミハ	アリマニオサム	イサナミは	アリマに葬む
	ハナトホノ	トキニマツリテ	花とホの	時に祭りて
	ココリヒメ	ヤカラニツグル	ココリ姫	族に告ぐる
5- 8	イサナギハ	オヒユキミマク	イサナギは	追ひ行き見まく
	ココリヒメ	キミコレナミソ	ココリ姫	君これな見そ
	ナオキカズ	カナシムユエニ	なお聞かず	悲しむ故に

	キタルトキ	ユツノツケクシ	来たるとて	ユツの黄楊櫛
	オトリハオ	タビトシミレバ	端齒お	手火とし見れば
	ウヂタカル	イナヤシコメキ	蛆たかる	いなや醜めき
	キタナキト	アシヒキカエル	汚なきと	足引き帰る
	ソノヨマタ	カミユキミレバ	その夜また	神行き見れば
5- 9	カナマコト	イレズハヂミス	かなまこと	入れず恥見す
	ワガウラミ	シコメヤタリニ	わが恨み	醜女八人に
	オワシムル	ツルギフリニゲ	追わしむる	劍 振り逃げ
	エビナゲル	シコメトリハミ	葡萄投げる	醜女取り食み
	サラニオフ	タケクシナグル	更に追ふ	竹櫛投ぐる
	ケレモカミ	マタオヒクレバ	これも噛み	また追ひ来れば
	モモキキニ	カクレテモモノ	桃の木に	隠れて桃の
	ミオナグル	デレバシリゾク	実お投ぐる	出れば退ぞく

5-10	エビユルク	クシハツゲヨシ	葡萄ゆるく	櫛は黄楊よし
	モモノナオ	オフカンヅミヤ	桃の名お	負ふ神づ実や
	イサナミト	ヨモツヒラサカ	イサナミと	ヨモツヒラ坂
	コトダチス	イサナミイワク	言絶ちす	イサナミ日く
	ウルワシヤ	カクナサザラバ	「麗わしや	かく為さざらば
	チカフベオ	ヒビニクビラン	千頭お	日々に縊らん」
	イサナキモ	ウルワシヤワレ	イサナキも	「麗わしや我れ
	ソノチキモ	ウミテアヤマチ	その千五百	生みて誤ち
5-11	ナキコトオ	マモルヨモツノ	無き事お	守る黄泉の
	ヒラサカハ	イキタユルマノ	平坂は	息絶ゆる間の
	カキリイワ	コレチカエシノ	限り岩	これ道返しの
	カミナリト	ウラミテカエル	神なり」と	悔みて帰る
	モトツミヤ	イナシコメオキ	元つ宮	いな醜めきお

	ソソガント	オトナシカワニ	滌がんと	オトナシ川に
	ミソギシテ	ヤソマガツヒノ	ミソギして	八十マガツヒの
	カミウミテ	マガリナオサン	神生みて	曲り直さん
5-12	カンナオヒ	オオナオヒカミ	カンナオヒ	大ナオヒ神
	ウミテミオ	イサギヨクシテ	生みて身お	潔くして
	ノチイタル	ツクシアワキノ	後至る	ツクシアワキノ
	ミソギニハ	ナカカワニウム	ミソギには	ナカ川に生む
	ソコツツヲ	ツギナカツツヲ	ソコツツヲ	次ナカツツヲ
	ウハツツヲ	コレカナサキニ	上ツツヲ	これカナサキに
	マツラシム	マタアツカワニ	祭らしむ	又アツ川に
	ソコトナカ	カミワタツミノ	底と中	上ワタツミの
5-13	ミカミウム	コレムナカタニ	三神生む	これムナカタに
	マツラシム	マタシガウミニ	祭らしむ	又シガ海に

	シマツヒコ	ツギオキツヒコ	シマツヒコ	次オキツヒコ
	シガノカミ	コレハアヅミニ	シガノ神	これはアヅミに
	マツラシム	ノチアワミヤニ	祭らしむ	後アワ宮に
	ミコトノリ	ミチビキノウタ	勅	導きの歌
	アワギミヨ	ワカレオシクト	アワ君よ	別れ惜しくと
	ツマオクル	ヲウトハユカズ	妻送る	夫は行かず
5-14	ユケバハジ	シコメニオハス	行けば恥	醜女に迫はす
	ヨシアシオ	シレバアシヒク	善し悪しお	知れば足引く
	ヨモツサカ	コトタチサクル	ヨモツ坂	言絶ち避くる
	ウツハアリ	ミソギニタミノ	ウツハあり	みそぎに民の
	トトノヒテ	キヤマトトホル	調ひて	キヤマト徹る
	アシヒキノ	チキヲノオタノ	足引きの	千五百の小田の
	ミツホナル	マトノヲシエニ	瑞穂なる	マトの教えに

	カカンシテ	ノンアワクニハ	かかんして	のんアワ国は
5-15	タンヤマト	ヒキテアカルキ	てんやまと	引きて明るき
	アシハラノ	ウタモサトレヨ	アシハラノ	歌も悟れよ
	マトミチノ	トホラヌマエノ	まと道の	徹らぬ前の
	アシヒキノ	マクラコトバハ	足引きの	枕 言葉は
	ウタノタネ	アシヒキハヤマ	歌の種	足引きは山
	ホノボノハ	アケヌバタマハ	ほのほのは	明けヌバタマは
	ヨルノタネ	ツシマトリノウ	夜の種	シマツ鳥の鶺鴒
	オキツトリ	カモトフネナリ	沖ツ鳥	鴨と船なり
5-16	コノアチオ	ヌバタマノヨノ	このアチお	ヌバタマの夜の
	ウタマクラ	サメテアカルキ	歌マクラ	醒めて明るき
	マエコトバ	ココロオアカス	前コトバ	心お明かす
	ウタノミチ	ミソギノミチハ	歌の道	ミソギの道は

ミオアカス ヤマトノミチノ 身お明かす ヤマトの道の

オオイナルカナ 大いなるかな

● 日(ヒ)の神(カミ)十二后(ソフキサキ)の紋(アヤ)

6- 2 フソスヅヒ モモフソムエタ 二十ースズ 百二十六枝

トシサナト ヤヨイツイタチ 歳サナト 三月朔日

ヒノヤマト ニイミヤツクリ 日のヤマト 新宮づくり

アメミコハ ヒタカミヨリゾ 天御子は ヒタカミよりぞ

ウツリマス フタカミミメオ 移ります 二神御妃お

ミコトノリ カンミムスビノ 勅 「カンミムスビの

ヤソキネガ モロトハカリテ ヤソキネが 諸と謀りて

6- 3 クラキネガ マスヒメモチコ クラキネが マスヒメモチコ

	ネノスケト	ソノトメハヤコ	北の典侍と	その妹女ハヤコ
	コマスヒメ	ネノウチキサキ	コマス姫	北のウチ后
	ヤソキネノ	オオミヤミチコ	ヤソキネの	オオミヤミチコ
	キノスケニ	タナハタコタヘ	東のスケに	タナハタコタヘ
	キノウチメ	サクラウチガメ	東のウチメ	サクラウチが姫
	サクナタリ	セオリツホノコ	サクナタリ	セオリツホノコ
	サノスケニ	ワカヒメハナコ	南のスケに	ワカ姫ハナコ
6- 4	サノウチメ	カナサキガメノ	南のウチ后	カナサキが姫の
	ハヤアキツ	アキコハシホノ	ハヤアキツ	アキコは潮の
	ヤモアヒコ	ツノスケウチハ	八百会ひコ	西のスケウチは
	ムナカタガ	オリハタオサコ	ムナカタが	オリハタオサコ
	オシモメハ	トヨヒメアヤコ	オシモメは	トヨ姫アヤコ
	カスヤガメ	イロノエアサコ	カスヤが姫	イロノエアサコ

	サノオシモ	カダガアヂコハ	南のオシモ	カダガアヂコは
	ネノオシモ	ツクバハヤマガ	北のオシモ	ツクバハヤマが
6- 5	ソガヒメハ	キノオシモゾト	ソガ姫は	東のオシモぞ」と
	ツキニヨセ	ミコハアマヒノ	月に寄せ	御子は天日の
	クライノル	ヒノヤマノナモ	位宣る	日の山の名も
	オオヤマゾ	カレオオヤマト	オオヤマぞ	故オオヤマト
	ヒタカミノ	ヤスクニノミヤ	ヒタカミの	ヤス国の宮
	キツサネノ	ツボネハカワリ	東西南北の	ツボネは替り
	ミヤツカエ	ソノナカヒトリ	宮仕ゑ	その中一人
	スナオナル	セオリツヒメノ	素直なる	セオリツ姫の
6- 6	ミヤビニハ	キミモキサハシ	ミヤビには	君も階段
	フミオリテ	アマサガルヒニ	ふみ降りて	天下る日に
	ムカツヒメ	ツヒニイレマス	向つ姫	遂に入れます

	ウチミヤニ	カナヤマヒコガ	内宮に	カナヤマヒコが
	ウリフヒメ	ナカコオスケニ	ウリフ姫	ナカコおスケに
	ソナエシム	ミナハタオリテ	備ゑしむ	皆機織りて
	ミサホタツ	コレオコヨミノ	ミサホ立つ	これおコヨミの
	ウリフツキ	オトツキヨミハ	ウリフ月	弟ツキヨミは
6- 7	ヒニツギテ	タミノマツリオ	日に次ぎて	民の政治お
	タスケシム	イヨノフタナノ	助けしむ	イヨのフタナの
	ヲサマラデ	ツキヨミヤレバ	治まらで	ツキヨミやれば
	イフキアゲ	トノミヤニタス	イフキあげ	トの宮に治す
	チタルクニ	マスビトコクミ	チタル国	マスビト・コクミ
	オコタレバ	タマキネツケテ	怠れば	タマキネ付けて
	ヒタカミハ	ヤソキネニタス	ヒタカミは	ヤソキネに治す
	タカキネオ	キミノタスケト	タカキネお	君の助けと

6- 8	タマキネハ	ユキテサホコノ	タマキネは	行きてサホコの
	クニオタス	ミヤツノミヤゾ	国お治す	宮津の宮ぞ
	ツキシミハ	シマツヒコヨリ	ツキシミは	シマツヒコより
	ナナヨ ス	イマカナサキノ	七代住む	今カナサキノ
	エタカバネ	ムナカタアツミ	支姓	ムナカタアツミ
	タスケシム	ミヨモユタカニ	助けしむ	御代も豊かに
	ヲサマリテ	ヤモロトシヘテ	治まりて	八万年経て
	フソフスズ	キヲキエハツニ	二十二スズ	五百五枝初に
6- 9	ミヤツヨリ	ハヤキシトベバ	宮津より	早雉飛べば
	アマヒカミ	イツギマナキニ	天日神	急ぎマナキに
	ミユキナル	トキニタマキネ	御幸なる	時にタマキネ
	アイカタリ	ムカシミチノク	相語り	「昔 道の奥
	ツクサネバ	ココニマツトテ	尽くさねば	ここに待つ」とて

	サツケマシ	モロカンタチモ	授けまし	「諸神達も
	シカトキケ	キミハイクヨノ	確と聴け	君は幾代の
	ミヲヤナリ	コレトコタチノ	御祖なり	これトコタチの
6-10	コトノリト	ホラオトザシテ	コトノリ」と	洞お閉して
	カクレマス	ソノウエニタツ	隠れます	その上に建つ
	アサヒミヤ	キミネンコロニ	アサヒ宮	君懇に
	マツリシテ	ノチカエマサン	祭りして	後還まさん
	ミテグルマ	トトムルタミオ	御手車	止むる民お
	アワレミテ	ミツカラマツリ	憐みて	みづから政治り
	キコシメス	オモムキツゲル	聞しめす	趣 告げる
	キギスニテ	ムカツヒメヨリ	キギスにて	ムカツ姫より
6-11	コトノリシ	タカミニマツル	コトノリシ	タカミに祭る
	トヨケカミ	モチコノスケト	トヨケ神	モチコの典侍と

	ヒヤコウチ	アヂコトミタリ	ハヤコ内后	アヂコと三人
	ハヤユキテ	マナイノハラノ	はや行きて	マナイの原の
	ミヤツカエ	コトノリアレバ	宮仕ゑ	ことのりあれば
	カドデシテ	ミヤズノミヤニ	門出して	ミヤズの宮に
	アルトキニ	キミノミカリニ	ある時に	君の御狩りに
	チタルクニ	ミチオサダメテ	チタル国	道お定めて
6-12	ヲサムノチ	ヤソキネノオト	治む後	ヤソキネの弟
	カンサヒオ	マスヒトトナシ	カンサヒお	マスヒトとなし
	マタオトゴ	ツハモノヌシト	また乙子	ツハモノヌシと
	コクミソエ	ツボネトトメテ	コクミ副ゑ	ツボネ留めて
	カエラント	コゾヨリツカフ	帰らんと	去年より仕ふ
	ソサノヲト	アマノミチネト	ソサノヲと	アマノミチネと
	カドデナス	ネナトヤヨヒノ	門出なす	ネナト三月の

	モチヨリゾ	ウツキノモチニ	望よりぞ	四月の望に
6-13	カエリマス	ヒノハヤヒコニ	帰ります	ヒノハヤヒコに
	ミコトノリ	ナンジクニエオ	勅	「汝 国絵お
	ウツスベシ	ヤマトメグリテ	写すべし」	ヤマト巡りて
	ミナエカク	キミハマヤコオ	皆描く	君は都お
	ウツサント	オモヒガネシテ	移さんと	オモヒガネして
	ツクラシム	ナリテイサワニ	造らしむ	なりてイサワに
	ミヤウツシ	ココニイマセバ	宮移し	此処に居ませば
	ムカツヒメ	フヂオカアナノ	ムカツ姫	藤岡穴の
6-14	オシホキニ	ウブヤノミミニ	オシホキに	産屋のミミに
	アレマセル	オシホミノミコ	生まれませる	オシホミの御子
	オシヒトト	イミナオフレテ	オシヒトと	イミ名お布れて
	カミアリノ	モチキタマエバ	神ありの	餅飯賜えば

	タミウタフ	サキニモチコガ	民唱ふ	先にモチコが
	ウムミコハ	ホヒノミコトノ	生む御子は	ホヒノミコトの
	タナヒトゾ	ハヤコガミツゴ	タナヒトぞ	ハヤコが三つ子
	ヒハタケコ	ヲキツシマヒメ	一はタケコ	沖津島姫
6-15	フハタキコ	エツノシマヒメ	二はタキコ	エツノシマ姫
	ミハタナコ	イチキシマヒメ	三はタナコ	イチキシマ姫
	シカルノチ	アキコガウメル	然る後	アキコが生める
	タダキネハ	アマツヒコネゾ	タダキネは	アマツヒコネぞ
	シカルノチ	ミチコガウメル	然る後	ミチコが生める
	ハラキネハ	イキツヒコネゾ	ハラキネは	イキツヒコネぞ
	トヨヒメハ	ネノウチメニテ	トヨヒメは	ネの内后姫にて
	ヌカタダノ	クマノクスヒゾ	ヌカタダの	クマノクスヒぞ
6-16	ミコスベテ	キヲトミメナリ	御子すべて	五男と三女なり

	サノトノニ	タチバナウエテ	南の殿に	タチバナ植ゑて
	カグノミヤ	キニサクラウエ	カグの宮	東に桜植ゑ
	ウオチミヤ	ミヅカラマツリ	ウオチ宮	みづから政治
	キコシメス	アマネクタミモ	きこしめす	遍く民も
	ユタカナリ	ツキヨミノツマ	豊かなり	ツキヨミの妻
	イツヨヒメ	ウムモチタカハ	イヨツ姫	生むモチタカは
	イフキヌシ	サキニタラチヲ	イフキヌシ	先にタラチヲ
6-17	ハナキネハ	ネノクニサホコ	ハナキネは	ネの国サホコ
	シラスベシ	イマダヒルコト	治らすべし	いまだヒルコト
	ミクマノノ	トミガタスケテ	ミクマノの	臣が助けて
	ノチノキミ	ナチノワカミコ	後の君	ナチの若御子
	ヌカタダヨ	イサナミマツル	ヌカタダよ	イサナミ祭る
	クマノカミ	シコメガシキオ	クマノ神	醜女がシキお

	カラスカミ	マツレバクロキ	枯らす神	祭れば黒き
	トリムレテ	カラストナヅク	鳥群れて	カラスと名づく
6-18	イサナギハ	アツシレタマフ	イサナギは	熟痴れ給ふ
	ココオモテ	アワチノミヤニ	ここお以て	アワチの宮に
	カクレマス	コトハオワレド	隠れます	事は終われど
	イキオヒハ	アメニノボリテ	勢ひは	天に登りて
	ヲオカエス	アヒワカミヤニ	緒お返す	天日若宮に
	トトマリテ	ヤミオタシマス	留まりて	闇お治します
	タガノカミ	ヤマトヤスミヤ	タガの神	ヤマトヤス宮
	ヒキウツシ	アメヤスカワノ	引き移し	アメヤスカワの
6-19	ヒルコヒメ	ミコオシヒトオ	ヒルコ姫	御子オシヒトお
	ヒタシマス	ネトサホコクニ	養します	ネとサホコ国
	カネヲサム	シタテルヒメト	兼ね治む	シタテル姫と

アチヒコト	イセオムスビテ	アチヒコと	イセお結びて
モロトモニ	ココニヲサメテ	諸共に	此処に治めて
ウムミコハ	イムナシツヒコ	生む御子は	イム名シツヒコ
タチカラヲカナ		タチカラヲかな	

● 遺(ノコ)し文(フミ)サガお裁(タ)つ紋(アヤ)

7- 2	モロカミノ	サガオタツトキ	諸神の	サガお裁つ時
	サホコヨリ	ツハモノヌシガ	サホコより	ツハモノヌシが
	カグミヤニ	キギストバセテ	カグ宮に	キギス飛ばせて
	マスヒトガ	タミノサシミメ	マスヒトが	民のサシミメ
	ツマトマス	クラヒメウメバ	妻となす	クラ姫生めば
	キツクシミ	アニノコクミオ	慈み	兄のコクミお

	コノコトク	サホコチタルノ	子の如く	サホコチタルの
7- 3	マスヒトヤ	イマハソエナリ	マスヒトや	今は副えなり
	クラキネガ	マカレルトキニ	クラキネが	罷れる時に
	シラビトオ	ネノマスビトニ	シラビトお	ネのマスビトに
	クラコヒメ	ミオタテヤマニ	クラコ姫	遺体お立山に
	オサムノチ	ハハコオステテ	納む後	母子お捨てて
	ツニオクル	コクミハハコオ	西におくる	コクミ母子お
	オカスツミ	カンサヒコレオ	犯す罪	カンサヒこれお
	タタサネバ	トミコレオコフ	糺さねば	臣これお乞ふ
7- 4	ミハタヨリ	サオシカニメス	御幡より	勅使に召す
	カンヒサト	コクミハハコト	カンヒサと	コクミ母子と
	タカマニテ	カナサキトワク	タカマにて	カナサキ間わく
	コクミイフ	サシメハマコト	コクミいふ	「サシメは真実

	ワガツマヨ	キミサリマスノ	我が妻よ	君去りますの
	ヲシデアリ	マタトフナンジ	ヲシデあり」	又問ふ「汝
	ナニヒトゾ	タミトイフニゾ	何人ぞ」	「民」といふにぞ
	オタケビテ	ケモノニオトル	雄叫びて	「獣に劣る
7- 5	ツミビトゾ	サシメササグル	罪人ぞ	サシメ捧ぐる
	ユカリニテ	マスヒトトナル	縁りにて	マスヒトとなる
	ミメグミノ	キミナリハハヨ	御恵みの	君なり母よ
	サガミレバ	キミオワスルル	サガ見れば	君お忘るる
	モモクラト	ハハモフソクラ	百座と	母も二十座
	オカスルモ	ヲシデノハジモ	犯するも	ヲシテの辱も
	モモトモモ	ヒメナイガシロ	百と百	姫ないがしろ
	キソクラト	スベテミヲナソ	五十座と	すべて三百七十
7- 6	アマメグリ	ミヲムソタビオ	天巡り	三百六十度お

	トホコノリ	トコロオサルト	トホコ法	処お去ると
	サスラフト	マジハリサルト	流離ふと	交り去ると
	イノチサル	ヨツワリスギテ	命 去る	四つ割り過ぎて
	ホコロビト	ツツガニイレテ	ほころびと	牢屋に入れて
	ネノクニノ	シラビトオメス	ネの国の	シラビトお召す
	タカマニテ	カナサキトワク	タカマにて	カナサキ問わく
	ハハオステ	ツマサルイカン	「母お捨て	妻去るいかん」
7-7	コタエイフ	オノレハサラズ	答えいふ	「己れは去らず
	ハハヨリモ	キエステキヅル	母よりぞ	家捨て出づる
	ヒメモママ	マタモトオトフ	姫もママ」	又原因お問ふ
	コタエイフ	ヨヨノトミユエ	答えいふ	「世々の臣故
	コトナセバ	ハハハタミノメ	事なせり	母は民の女
	ススメテゾ	キミノツマナリ	進めてぞ	君の妻なり

	ヲンメグミ	ナニワスレント	御恵み	何忘れん」と
	キキナガス	カンミムスビノ	言み流す	カンミムスビの
7- 8	シカリテゾ	ナンジカザリテ	叱りてぞ	「汝 飾りて
	マドワスヤ	ワレヨクシレリ	惑わすや	我れよく知れり
	トモオコエ	チカラオカシテ	友お越え	力お貸して
	ハハガアゲ	マツリサツケテ	母があげ	政治授けて
	コトナスオ	ハハニシタエバ	事なすお	母に慕えば
	ヒメガウム	カクサンタメニ	姫が倦む	隠さんために
	ナガシヤリ	タミノメウバヒ	流しやり	民の目奪ひ
	チカラカス	メグミワスルル	力 貸す	恵み忘るゝ
7- 9	フモモクラ	サルモモモクラ	二百座	去るも百座
	フムガキソ	ツカムノムソデ	フムが五十	搦むの六十で
	ヨヲソクラ	コレノガルルヤ	四百十座	これ脱るるや」

	コタエネバ	ツツガニイレテ	答えねば	牢屋に入れて
	ヲランカミ	モロトハカリテ	大御神	諸と議りて
	ヤソギネオ	ネノクニカミト	「ヤソギネお	ネの国神と
	イサナギノ	ウブヤニヲヂト	イサナギの	産屋に叔父と
	オバナレバ	マツリタエズト	叔母なれば	祭り絶えず」と
7-10	ミコトノリ	モチテタミタス	勅	もちて民治す
	ヲチトオバ	シラヤマカミゾ	叔父と叔母	シラヤマ神ぞ
	イサナギハ	マツレドオトノ	イサナギは	政治れど弟の
	クラキネハ	マツラズモチガ	クラキネは	政治らずモチが
	クラヒメオ	カンサヒノコノ	クラ姫お	カンサヒの子の
	アメオシヒ	メアワセスケガ	アメオシヒ	娶わせスケが
	アニトナシ	チチマスヒトノ	兄となし	父マスヒトの
	マツリツグ	シラビトコクミ	政治継ぐ	シラビトコクミ

7-11	コノイワヒ	ナカハサオエテ	この祝ひ	半は清お得て
	サスラヒノ	ヒカハニヤルカ	流離の	ヒカハにやるお
	マスヒトノ	ワガトミトナス	マスヒトの	わがトミとなす
	ソサノヲハ	コレトトノヒテ	ソサノヲは	これ整ひて
	マナキナル	カミニモフデル	マナキなる	神に詣でる
	ソノナカニ	タオヤメアレバ	その中に	手弱女あれば
	コレオトフ	マカタチコタフ	これお問ふ	従女答ふ
	アカツチガ	ハヤスフヒメト	「アカツチが	ハヤスフ姫」と
7-12	キコシメシ	キジオトバセテ	聞き召し	雉お飛ばせて
	チチニコフ	アカツチミヤニ	父に乞ふ	アカツチ宮に
	トツガント	イエドミヤナク	嫁がんと	云えど宮なく
	ヲヲウチノ	オリオリヤドル	大内の	折々宿る
	ネノツボネ	エトヤスメトテ	北の局	姉妹休めとて

	ウチミヤノ	トヨヒメメセバ	内宮の	トヨ姫召せば
	ネノツボネ	サガリナゲケバ	北の局	退り嘆けば
	ソサノヲガ	タタエカネテゾ	ソサノヲが	堪ゑかねてぞ
7-13	ツルギモチ	ユクオハヤコガ	劍 持ち	行くおハヤコが
	オシトトメ	イサオシナラバ	押し留め	「功績ならば
	アメガシタ	ハナコキタレバ	天が下」	ハナコ来たれば
	ホオカクス	ミスカホスレド	頬隠す	見ぬ顔すれど
	ウチニツゲ	アルヒタカマノ	内に告げ	ある日タカマの
	ミユキアト	モチコハヤコオ	御幸あと	モチコ・ハヤコお
	ウチニメス	ヒニムカツヒメ	内に召す	日に向つ姫
	ノタマフハ	ナンヂラエトガ	宣ふは	「汝 等姉妹が
7-14	ミケヒエテ	ツクシニヤレバ	御氣冷えて	ツクシにやれば
	ツグミオレ	タナキネハトル	嚙み居れ	タナキネはとる

	ヲハチチニ	メハハハニツク	男は父に	女は母につく
	ミヒメコモ	トモニクダリテ	三姫子も	共に降りて
	ヒタシマセ	カナラズマテヨ	養しませ	必ず待てよ
	トキアリト	ノベネンゴロニ	時あり」と	宣べ懇に
	サトサレテ	ツクシアカツチ	諭されて	ツクシアカツチ
	コレオウケ	ウサノミヤキオ	これお受け	ウサの宮居お
7-15	アラタメテ	モチコハヤコハ	改めて	モチコ・ハヤコは
	アラツボネ	オケバイカリテ	新局	置けば怒りて
	ヒタシセズ	ウチニツグレバ	養しせず	内に告ぐれば
	トヨヒメニ	ヒタシマツラシ	「トヨ姫に	養しまつらし」
	サスラナス	フタサスラヒメ	流離なす	二流離姫
	イキドホリ	ヒカワニイカリ	憤り	ヒカハに怒り
	ナルオロチ	ヨニワダカマリ	なる大蛇	世に蟠り

	コクミラモ	ツカエテシムオ	コクミらも	仕えてシムお
7-16	ウバヒハム	ソサノヲシワザ	奪ひ食む	ソサノヲ仕業
	アヂキナク	ナシロシキマキ	あぢきなく	苗代重播き
	アオハナチ	ミノラズミゾノ	畔お毀ち	実らず御稲の
	ニイナメノ	カンミハヲレバ	新嘗の	神御衣織れば
	トノケガス	コレタダサレテ	殿汚す	これ訂されて
	ソサノヲガ	ヒトリカフムル	ソサノヲが	一人 被る
	キンハトノ	トヅレバイカル	忌服殿	閉づれば怒る
	ブチコマオ	キラカウガチテ	班駒お	薨 穿ちて
7-17	ナゲイルル	ハナコオドロキ	投げ入るる	ハナコ驚き
	ヒニヤブレ	カミサリマスト	梭に傷れ	神去りますと
	ナクコエニ	キミイカリマシ	泣く声に	君怒りまし
	ソサノヲニ	ナンヂキタナク	ソサノヲに	「汝 汚なく

	クニノゾム	ミチナスウタニ	国望む	道なす歌に
	アメガシタ	ヤワシテメグル	『天が下	和して巡る
	ヒツキコソ	ハレテアカルキ	日月こそ	晴れて明るき
	タミノタラナリ		民の親なり』」	
7-18	ソサノヲハ	イワオケチラシ	ソサノヲは	岩お蹴散らし
	ナオイカル	キミオソレマシ	なお怒る	君恐れまし
	イワムロニ	イリテトザサバ	岩室に	入りて閉ざせば
	アメガシタ	カガモアヤナシ	天が下	陽陰も綾なし
	ヤスカハノ	ヤミニオドロク	ヤスカハの	闇に驚く
	オモヒカネ	タビマツニハセ	オモヒカネ	手火松に馳せ
	コニトイテ	タカマニハカリ	子に問いて	タカマに謀り
	キノランヤ	ツハモノヌシガ	祈らんや	ツハモノヌシが
7-19	マサカキノ	カンエハニタマ	真榊の	上枝は瓊玉

	ナカツエニ	マフツノカガミ	中つ枝に	マフツの鏡
	シタニギテ	カケキノラント	下和幣	掛け祈らんと
	ウスメラニ	ヒカゲオタスキ	ウスメラに	ヒカゲお襷
	チ マキホコ	ヲケラオニハヒ	茅卷矛	ヲケラお庭火
	ササユハナ	カンフルノトノ	笹齊花	神座 祝詞の
	カンカガリ	フカクハカリテ	神篝火	深く謀りて
	オモヒカネ	トコヨノオドリ	オモヒカネ	常世の踊り
7-20	ナガサキヤ	ワサオキウタフ	永幸きや	俳優歌ふ
	カグノキ	カレテモニホユ	『香ぐの木	枯れても匂ゆ
	シホレテモヨヤ	アガツマ	萎れてもよや	あが妻
	アワ	アガツマアワヤ シヲ	あわ	あが妻あわや しを
	シホレテモヨヤ	アガツマ アワ	萎れてもよや	あが妻 あわ』
	モロカミハ	イワトノマエニ	諸神は	岩戸の前に

	カシマトリ	コレゾトコヨノ	かしまとり	これぞ常世の
	ナガサキヤ	キミエミモソク	永幸きや	きみ笑み細く
7-21	ウカガエバ	イワトオナグル	窺えば	岩戸お投ぐる
	タチカラヲ	ミテトリイダシ	タチカラヲ	御手とり出し
	タテマツル	ツハモノヌシガ	奉る	ツハモノヌシが
	シメナワニ	ナカエリマシソ	しめ縄に	な還りましそ
	シカルノチ	タカマニハカリ	然る後	タカマに謀り
	ソサノヲノ	トガハチクラノ	ソサノヲの	科は千座の
	ミキダカレ	カミヌキヒトツ	三段、故	髪抜きひとつ
	ツメモヌキ	マダトトカネバ	爪も抜き	まだ届かねば
7-22	コロストキ	ムカツヒメヨリ	殺す時	ムカツ姫より
	サオシカニ	ウケモノイノリ	勅使に	請物祈り
	ヨミカエス	ハナコノヨヲサ	蘇生す	「ハナコの四百さ

	ツクノエバ	サガオアカセヨ	償のゑば	サガお明せよ
	ソサノヲガ	シワザハシムノ	ソサノヲが	仕業はシムの
	ムシナレド	サガノクツツガ	ムシなれど	サガ除く獄舎
	ナカランヤワヤ		なからんやわや」	
	コトノリオ	モロガハカリテ	ことのりお	諸が謀りて
7-23	アメモトル	オモキモシムノ	天悖る	重きもシムの
	ナカバヘリ	マシワリサルト	半ば減り	交わり去ると
	スガサアラ	ヤエハヒモトム	すがさあを	八重這ひ求む
	シタタミノ	サスラヤヒラキ	下民の	流離やらひき
	ヲヲンカミ	シロシメサレバ	大ん神	しろしめされば
	アマテラス	ヒトノオモテモ	天照らす	人の面も
	タノシムニ	ミチスケノウタ	楽しむに	道すけの歌
	アハレ	アナオモシロ	『あはれ	あなおもしろ

7-24	アナタノシ	アナサヤケ	あなたのし	あなさやけ
	オケ	サヤケオケ	おけ	さやけおけ
	アワレ	オモシロ	あわれ	おもしろ
	サヤケオケ	アナタノシ	さやけおけ	あなたのし』
	アイトモニ	テオウチノベテ	相共に	手お打ち伸べて
	ウタヒマフ	チワヤフルトゾ	歌ひ舞ふ	千早振るとぞ
	タノシメバ	コレカンクラニ	楽しめば	これ神座に
	アマテラス	ヲランカミナリ	天照らす	大ん神なり
7-25	サスラヲハ	ミコトオウケテ	流離雄は	勅命お受けて
	ネニユカン	アネニマミユル	ネ(国)に行かん	姉にまみゆる
	シバシトテ	ユルセバノボル	暫しとて	許せば登る
	ヤスカハベ	フミトドロキテ	ヤスカハ辺	踏み響きて
	ナリウゴク	アネハモトヨリ	鳴り動く	姉は元より

	サスラヲガ	アルルオシレバ	流離雄が	荒るるお知れば
	オドロキテ	オトトノクルハ	驚きて	「弟の来るは
	シハアラジ	クニウバフラン	然はあらし	国奪ふらん
7-26	カゾイロノ	ヨサシノクニオ	父母の	任務の国お
	ステオケバ	アエウカガフト	捨て置けば	敢窺ふ」と
	アゲマキシ	モスソオツカネ	総角し	裳裾お束ね
	ハカマトシ	キモニミスマル	袴とし	五百瓊御統
	カラマキテ	チノリキヲノリ	体纏きて	千箭入五百箭入
	ヒジニツケ	ユハズオフリテ	肱につけ	弓弭お振りて
	ツルギモチ	カタニワフンデ	劔 持ち	堅庭踏んで
	ケチラシテ	イツノオタケニ	蹴散らして	稜威の雄健に
7-27	ナジリトフ	ソサノヲイハク	詰 問ふ	ソサノヲ日く
	ナオソレソ	ムカシネノクニ	「な怖れそ	昔ネの国

	ユケトアリ	アネトマニエテ	行けとあり	姉とまみゑて
	ノチュカン	ハルカニクレバ	後行かん	遙かに来れば
	ウタガハデ	イツカエシマセ	疑はで	稜威返しませ」
	アネトワク	サココロハナニ	姉問わく	「清心は何」
	ソノコタエ	ネニイタルノチ	その答え	「ネに至る後
	コオウマン	メナカハケガレ	子お生まん	女ならば汚れ
7-28	ヲハキヨク	コレチカヒナリ	男は清く	これ誓ひなり
	ムカシキミ	マナキニアリテ	昔 君	マナ井にありて
	ミスマルノ	タマオソソギテ	御統の	珠お注ぎて
	タナキネお	モチニウマサテ	タナキネお	モチに生ませて
	トコミキニ	ハヤコオメセバ	床御酒に	ハヤコお召せば
	ソノユメニ	トツカノツルギ	その夢に	十握の劔
	オレミキタ	サカミニカンデ	折れ三段	さ嚙みに嚙んで

	ミタトナル	ミタリヒメウム	ミタとなる	三人姫生む
7-29	タノイミナ	ワレケガレナバ	タのイミ名	我れ汚れなば
	ヒメオエテ	トモハヂミント	姫お得て	共恥みん」と
	チカイサル	ヒメヒトナリテ	誓い去る	姫人なりて
	オキツシマ	サカムエノシマ	オキツ島	サカム・エノ島
	イツクシマ	ミカラサスラフ	イツク島	身から流離ふ
	サスラヲノ	カゲノミヤビノ	流離男の	カゲのみやびの
	アヤマチオ	ハラシテノチニ	誤ちお	晴らして後に
	カエリマス	ムカシフタカミ	帰ります	昔 二神
7-30	ノコシフミ	アメノメグリノ	遺し文	天の運りの
	ムシハミオ	ミルマサカニノ	蝕みお	みるマサカニの
	ナカコリテ	ウムソサノヲハ	中凝りて	生むソサノヲは
	タマミダレ	クニノクマナス	魂乱れ	国の隅なす

	アヤマチゾ	ヲハチチニエテ	誤ちぞ	男は父に得て
	ハオイダケ	メハハハニエテ	地お抱け	女は母に得て
	アトキネヨ	ウキハシオエテ	天と寝よ	ウキハシお得て
	トツグベシ	メハツキシホノ	嫁つぐべし	女は月経の
7-31	ノチミカニ	キヨクアサヒオ	後三日に	清く朝日お
	オガミウケ	ヨキコウムナリ	拝み受け	良き子生むなり
	アヤマリテ	ケガルルトキニ	誤りて	汚るる時に
	ハラムコハ	カナラズアルル	孕む子は	必ず荒るる
	マエウシロ	ミダレテナガル	前 後	乱れて流る
	ワガハチオ	ノチノオキテノ	わが恥お	後の掟の
	ウラカタゾ	カナラズコレオ	ト占形ぞ	必ずこれお
	ナワスレソコレ		な忘れそこれ	

● 魂返(タマガエ)し悪魔(ハタレ)撃つ紋(アヤ)

8- 2	ヲヲンカミ	アメガシタテル	大御神	天が下照る
	クシヒルニ	タミモユタカニ	奇しひるに	民も豊かに
	フソミヨロ	フチミモヤソノ	二十三万	二千三百八十の
	フタトシオ	ヘテモヤスラカ	二年お	経ても安らや
	ミカタチモ	ナオワカタギテ	御形も	なお若やぎて
	ヲワシマス	コトシフソヨノ	をわします	今年二十四の
	サクズオ	フソキノズニ	裂くズお	二十五のズに
8- 3	ウエカエテ	フシニアタレバ	植ゑ替えて	節に当れば
	ネノクニト	サホコノクニノ	ネの国と	サホコの国の
	マスヒトガ	ウチノシラビト	マスヒトが	ウチのシラビト
	コクミラガ	ヲヤモオカシテ	コクミらが	親も犯して

	コモオカス	トガアヤマチモ	子も犯す	とが・過ちも
	フタメトノ	カシコトコロノ	二女殿	賢所の
	ヒキツリニ	ユルセバカカエ	ヒキツリに	許せばカカエ
	クニオタス	マイナイツカミ	国お治す	賄賂つかみ
8- 4	マメナラズ	ツイニオロチニ	まめならず	遂に大蛇に
	ナメラレテ	ノリノクツルル	舐められて	法の崩るる
	フシブシニ	ハタレノモノノ	節々に	ハタレの者の
	ウグメキテ	サワイノコエノ	うぐめきて	多いの声の
	オソロシク	ココサワヤマノ	怖ろしく	ココサワヤマの
	ハヤキギス	ヒナグルツゲノ	早雉	梭投ぐる告げの
	タカマニハ	カミハカリシテ	タカマには	神議りして
	ススミデル	タケミカツチガ	進み出る	タケミカツチが
8- 5	ムソタケノ	ヨロニスグルル	十六丈の	万に勝るる

	チカラニモ	シラヌハタレノ	力にも	知らぬハタレの
	イブカサオ	ウツヤヒタリノ	訝さお	討つや左大臣の
	カナサキノ	コタエオシラデ	カナサキも	答ふお知らせ
	ウカカエバ	アマテラシマス	伺ふば	天照らします
	ミコトノリ	ヤヤシルマコト	勅	「やや知る真実
	ハタレトハ	アメニモオラズ	ハタレとは	天にもおらず
	カミナラズ	ヒトノネジケノ	神ならず	人のねじけの
8- 6	トキスグレ	コリエテムツノ	時勝れ	凝り得て六つの
	ハタレナル	ニシキオロチノ	ハタレなる	ニシキ大蛇の
	シムミチヤ	ハルナハハミチ	シムミチや	ハルナハハミチ
	キソラミチ	ミタルキクミチ	キソラミチ	乱るキクミチ
	キツナミチ	ナルカミモトム	キツナミチ	鳴神求む
	アエノミチ	ミナソノシムオ	アエノミチ	皆そのシムお

	ヌキトリテ	ワザニモエツク	抜きとりて	術に燃えつく
	オゴリヒノ	ヒビニミタビノ	奢り火の	日々に三度の
8- 7	ナヤミアリ	イカデオソレン	悩みあり	いかで恐れん
	カンチカラ	ハライノゾカバ	神力	祓い除かば
	オノズカラ	ハハモイソラモ	自ら	蛇もイソラも
	ヨリカエシ	キルヤモウケズ	寄り返し	射る矢も受けず
	カミノヤハ	カナラズアタル	神の矢は	必ず当る
	ハタレミノ	ワザヤアラハス	ハタレ身の	術や現はす」
	フツヌシガ	テダテオトエバ	フツヌシが	手立お問えば
	カナサキノ	オキナコタエテ	カナサキノ	翁 答えて
8- 8	アレモナシ	キツクシオモテ	「我れもなし	キツクシおもて
	カンカタチ	ナカコスナオニ	神形	ナカコ素直に
	カンチカラ	ヨクモノシルハ	神力	よくもの知るは

	カントホリ	コトナフタモツ	神通り	事なふ保つ
	クシヒルゾ	タダヤワラギオ	奇しひるぞ	ただ和らぎお
	テタテナリ	カミノミココロ	手立てなり」	神の御心
	ウルワシク	ミソギツカサオ	麗わしく	ミソギ司お
	カナサキニ	フツヌシソエテ	カナサキに	フツヌシ添ゑて
8- 9	ミカツチモ	イサオサアワセ	ミカツチも	功さあわせ
	ウタシムル	アマノカゴユミ	討たしむる	天のカゴ弓
	ハハヤソエ	ハタレヤブレト	蛇矢添ゑ	「ハタレ破れ」と
	タマヒケリ	ムツノハタレハ	賜ひけり	六つのハタレは
	ヤマタアリ	ココチツカサニ	八頭あり	ココチ司に
	ナナハカリ	ムレアツマリテ	七議り	群れ集りて
	カキヤブリ	ムラクモオコシ	垣破り	叢雲起し
	ホノホフキ	ツブテイカヅチ	焰 吹き	粒手 雷

8-10	クニユスリ	タミオユスリテ	国揺り	民お揺りて
	セメヨスル	アマテルカミハ	攻め寄する	アマテル神は
	サクナタリ	ハヤカハノセニ	さくなたり	ハヤカハの瀬に
	ミソギシテ	ハタレヤブルノ	ミソギして	ハタレ破るの
	マジナイノ	タネオモトメテ	呪いの	種お求めて
	サヅケマス	モロカミウケテ	授けます	諸神受けて
	コレオウツ	ハタレシムミチ	これお討つ	ハタレ・シムミチ
	ナスワザニ	ヤマカワアブレ	なす術に	山川溢れ
8-11	ウオロチガ	ホノホオハキテ	大蛇が	焰お吐きて
	オドロカス	カナサキシバシ	驚かす	カナサキシばし
	タチカエリ	アメニツグレバ	たち帰り	天に告ぐれば
	ヲランカミ	タマフカタスス	大御神	賜ふカタスス
	ワラビナワ	カナサキウケテ	蕨 縄	カナサキ受けて

	セメクチノ	モロニウヅケテ	攻め口の	諸に授けて
	マジナエバ	ハタレノモノノ	呪なえば	ハタレの者の
	ワザナラズ	ニゲントスレド	術ならず	逃げんとすれど
8-12	カンイクサ	カチテイケドル	神戦	勝ちて生捕る
	ハタレマオ	カワクヒテリニ	ハタレマお	乾く日照りに
	ツナギオキ	ツイニイケドル	繋ぎ置き	遂に生捕る
	ハタレカミ	ツツガニオキテ	ハタレ神	獄舎に置きて
	ミチモノマ	シムニアツケテ	三千物マ	シムに預けて
	モロカエリケリ		諸帰りけり	
	シカルノチ	マタハヤキジハ	然る後	又早雉は
	オオハタレ	ネノタテヤマニ	大ハタレ	ネのタテヤマに
8-13	アラハレテ	アノニイタリテ	現はれて	アノに至りば
	カミハカリ	フツヌシヤリテ	神謀り	フツヌシやりて

	コレオウツ	トキニハタレノ	これお討つ	時にハタレの
	イソラカミ	ノヤマオカエテ	イソラ神	野山お変えて
	ムラクモヤ	イクヒカガヤキ	叢雲や	幾日輝やき
	オドロカシ	トゲヤハナセバ	驚かし	刺矢放せば
	フツヌシガ	テニトルトキニ	フツヌシが	手にとる時に
	ユビヤブレ	マヅハセカエリ	指破れ	先づ馳せ帰り
8-14	アメニツグ	キミカンガエテ	天に告ぐ	君考ゑて
	イソラミチ	ヲコジトフキト	イソラミチ	虎魚と露と
	タマハレバ	フツヌシモロト	賜はれば	フツヌシ諸と
	ユガケシテ	サラニムカイテ	弓掛けして	更に向いて
	ヤオモトム	ハタレオモエリ	矢お求む	ハタレ思えり
	ヤニアタリ	ヨミガエルカヤ	「矢に当り	蘇えるかや
	イタマヌカ	フツヌシイワク	痛まぬか」	フツヌシ日く

	ユガケアリ	ナニゾイタマン	「弓掛けあり	何ぞ痛まん
8-15	ウケヨトテ	ハハヤハナセバ	受けよ」とて	大蛇矢放せば
	ハタレトル	トモニワラヒテ	ハタレ取る	共に笑ひて
	ミヤゲアリ	カミヨリヲコゼ	「土産あり」	神よりヲコゼ
	タマハレバ	ハタレヨロコビ	賜はれば	ハタレ喜び
	カミイカン	ワガスキシルヤ	「神いかん	わが好き知るや」
	マタイワク	ナンジモシルヤ	又日く	「汝も知るや」
	コタエネバ	ワラツテイワク	答ゑねば	笑つて日く
	コロスナリ	ハタレイカツテ	「殺すなり」	ハタレ怒つて
8-16	ナニユエゾ	ナンジホコリテ	「何故ぞ」	「汝誇りて
	バクルユエ	イソラウツナリ	化くる故	イソラ討つなり」
	ナホイカリ	イワオケアゲテ	なほ怒り	岩お蹴上げて
	ノノシレバ	フツヌシヲコゼ	罵しれば	フツヌシ・ヲコゼ

	ナゲイルル	ハタレマウバイ	投げ入るる	ハタレマ奪い
	アラソエリ	ミカタハフキオ	争えり	味方はフキお
	タキイブス	ハタレムセンデ	焚き薫す	ハタレ咽んで
	シリゾクオ	オイツメシバル	退くお	追い詰め縛る
8-17	チハタレマ	コレモヒルネト	千ハタレマ	これもヒルネと
	ナホイサミ	ヨモヨリカコミ	なほ勇み	四方より囲み
	イソラカミ	ツイニシバリテ	イソラ神	遂に縛りて
	ツツガナス	チヲノモノマモ	入牢なす	千百の者マモ
	ソノクニノ	シムニアズケテ	その国の	シムに預けて
	モロカエリケリ		諸帰りけり	
	マタハタレ	イヨノヤマヨリ	又ハタレ	イヨの山より
	キシキクニ	ワタリセムルオ	キシキ国	渡り攻むるお
8-18	トツミヤノ	ツゲニモロアヒ	トツミヤの	告げに諸会ひ

カミハカリ	カネテカナテノ	神議り	かねてカナテの
ミコトノリ	タケミカツチニ	勅	「タケミカツチに
フトマカリ	タマエバイソギ	フトマカリ	賜えば急ぎ
カナデント	タカノニイタル	カナデン」と	タカノに至る
キツナミチ	ヨロノケモノニ	キツナミチ	万の毛物に
バケカカル	ミカツチユケバ	化けかかる	ミカツチ行けば
ハタレカミ	ススミテイワク	ハタレ神	進みて日く
サキフタリ	ワレニカエセヨ	「先二人	我に返せよ
カエサズバ	カミモトランゾ	返さずば	神も取らんぞ」
ミカツチガ	ワラヒテイワク	ミカツチが	笑ひて日く
ワガチカラ	ヨロニスグレテ	「わが力	万に勝れて
イカツチモ	ナンヂモヒサグ	雷も	汝も拉ぐ
ナワウケヨ	ハタレイカリテ	縄受けよ」	ハタレ怒りて

	タタカエバ	ミカタノナグル	戦えば	味方の投ぐる
	フトマカリ	ムレムサボリテ	フトマカリ	群れ貧りて
8-20	ハタレマオ	ウチオイツメテ	ハタレマお	討ち追いつめて
	ミナククリ	ツイニイツナモ	皆括り	遂にイツナも
	ワラビナワ	モモヒトツレニ	蕨 縄	百一連れに
	ムスビヘテ	ココチコモモオ	結び総て	九千九百お
	ツギシバリ	ヒヨトリグサノ	次ぎ縛り	ヒヨトリグサの
	ゴトクナリ	ミツカラヤマニ	如くなり	自ら山に
	ヒキノホル	ミナクビシマリ	曳き登る	皆首締り
	マカルモノ	ヤマニウズミテ	罷るもの	山に埋みて
8-21	イキノコル	モモササヤマニ	生き残る	モモササ山に
	ツツガナス	カテナカラセル	入牢なす	カナテ死せる
	アヤママチ	モニツツシムオ	誤ちと	喪に慎しむお

	キコシメシ	ミコのクスコニ	聞こし召し	御子のクスヒに
	トワシムル	トミアヤマチテ	問わしむる	「臣誤ちて
	ヨロモノマ	ヒキカラシケリ	万物マ	曳き死しけり」
	マタクスヒ	ソレハヒトカヤ	又クスヒ	「それは人かや」
	ゴトクナリ	カエコトアレバ	「如くなり」	復命あれば
8-22	ヲランカミ	ツツヤニイタリ	大御神	牢屋に至り
	ミタマレバ	カタチハマサル	見給えば	形は魔猿
	カオハイヌ	ソノモトキケバ	顔は犬	その元聞けば
	ムカシハハ	マサルニトツギ	昔ハハ	真猿に嫁ぎ
	ヨヨオヘテ	ミナサルゴトク	世々お経て	皆猿如く
	ミコトノリ	タマカエシセバ	勅	「魂返しせば
	ヒトナラン	サキニマカルモ	人ならん	先きに罷るも
	ヲオトキテ	ヒトニウマルゾ	緒お解きて	人に生まるぞ」

8-23	トキニモモ	ネガワクハカミ	時に百々	「願わくは神
	ヒトナシニ	タマワレトミナ	人になし	賜われ」と皆
	マカレケリ	ココストノミチ	罷れけり	ココストの道
	ヲヲンカミ	ツハモノヌシト	大御神	ツハモノヌシと
	フツヌシト	タケミカツチニ	フツヌシと	タケミカツチに
	タマカエシ	サルサルサハニ	魂返し	サルサルサハに
	オコルミチカナ		興る道かな	
	マタハタレ	ツクシノミタリ	又ハタレ	ツクシのミタリ
8-24	ナカクニノ	ハナヤマノノニ	ナカ国の	ハナヤマの野に
	トモアツム	トキニアマテル	友集む	時にアマテル
	ミコトノリ	ウケモチノマゴ	勅	ウケモチの孫
	カタマロに	クニミテカエレ	カタマロに	「国みて帰れ」
	カタマロガ	イタレバハタレ	カタマロが	至ればハタレ

	イロカエテ	サキミタレタル	色変えて	咲き乱れたる
	キクミチノ	ココサハユクヤ	キクミチの	ココサハ行くや
	ヒメオドリ	ムラクモタビヤ	姫踊り	叢雲手火や
8-25	ホタルビノ	ワラヒアザケリ	螢火の	笑ひ嘲けり
	イカリヒノ	アオタマハケバ	忿り火の	青玉吐けば
	ススミエズ	カタマロカエリ	進み得ず	カタマロ帰り
	モフストキ	シバシカンガエ	申す時	しばし考ふ
	ミコトノリ	コレキクナラン	勅	「これキクならん
	キツネトハ	キハネヨリナル	キツネとは	東は北よりなる
	ツサオヘテ	ネニキテスメル	ツサお経て	ネにきて住める
	ネツミオバ	アブラニアゲテ	ネツミおば	油にあげて
8-26	イトフベシ	クハチトタガフ	厭ふべし	クはチと違ふ
	クハキウノ	オノヒオイトフ	クはキウの	尾の火お厭ふ

	ハシカミノ	ヲガメガフスベ	ハシカミの	ヲガ・メガ・フスベ
	ヒシガント	ミコトオウケテ	拉がん」と	勅命お受けて
	カタマロガ	モロニヲシエテ	カタマロが	諸に教へて
	ノニイタル	ハタレミタリガ	野に至る	ハタレ三人が
	サキミタレ	イクエカワリテ	咲き乱れ	幾重変りて
	オドロカス	カタマロナゲル	驚かす	カタマロ投げる
8-27	アゲネズミ	キクタミウバヒ	揚鼠	キクタミ奪ひ
	ムサボルオ	モロカミツヨク	貧るお	諸神強く
	タタカエバ	ユズリニグルヲ	戦えば	譲り逃ぐるを
	オヒツメテ	チタリトラエテ	追ひつめて	千人捕へて
	キラントス	フツクナゲキテ	斬らんとす	悉く嘆きて
	ヤツカレラ	カエリモフデン	僕ら	帰り詣でん
	アメタミト	イノチオコエバ	天民と	命お乞えば

	カタマロガ	ミナトキユルシ	カタマロガ	皆解き許し
8-28	ワラナワオ	サワニナワセテ	蕨縄お	多に縋せて
	ハシカミト	メガオイフセバ	ハシカミと	メガお薫せば
	ミタルルオ	サラニタタカヒ	乱るるお	更に戦ひ
	オヒツメテ	フツクトラエテ	追ひつめて	悉く捕ゑて
	サキタメシ	ツイニオヒツメ	サキタメシ	遂に追ひつめ
	ミハタレオ	シバルワラビニ	三ハタレお	縛る蕨縄に
	キクツネオ	ミサトノアミオ	キクツネお	ミサトの網お
	ノニハリテ	ミナオヒイレテ	野に張りて	皆追ひ入れて
8-29	タマツナキ	キクツネスベテ	玉繋ぎ	キクツネ総て
	ミソミヨロ	ミタリハツツガ	三十三万	三人は牢屋
	モロカエリケリ		諸帰りけり	
	マタハタレ	ヒスミヒタカミ	又ハタレ	ヒスミヒタカミ

	カグヤマト	フタイワウラニ	カグヤマト	フタイワウラに
	ツグツゲノ	クシノハヒケバ	次ぐ告げの	櫛の齒引けば
	モロカミハ	タカマニハカリ	諸神は	タカマに謀り
	ミユキトゾ	ネガエバカミノ	御幸とぞ	願ふば神の
8-30	ミユキナル	テグルマノウチ	御幸なる	風輦の内
	セオリツメ	アメノミカゲニ	セオリツ女	天の御蔭に
	アキツメハ	ヒノミカゲサス	アキツ女は	日の御蔭射す
	イフキヌシ	クマノクスヒト	イフキヌシ	クマノクスヒと
	マテニアリ	シロクロコマニ	左右にあり	白黒駒に
	モロソヒテ	ヤマタニイタリ	諸添ひて	ヤマタに至り
	キヂトベバ	ハルナハハミチ	雉とべば	ハルナハハミチ
	ノモヤマモ	カエテムラクモ	野も山も	変えて叢雲
8-31	ホノホフク	トゲヤノカスミ	焰吹く	刺矢の霰

	ナルカミニ	ミカタカエレバ	雷神に	味方帰れば
	ヲヲンカミ	カネテサツサニ	大御神	かねてサツサに
	ウタミツケ	ナグレバタシム	歌見付け	投ぐればたしむ
	ハタレマオ	サツサツヅウタ	ハタレマお	サツサツヅ歌
	サスラデモ	ハタレモハナゲ	『漂らでも	ハタレもハナゲ
	ミツタラズ	カカンナスガモ	ミツ足らず	かかんすがも
	テダテツキ	カレノンテンノ	手立尽き	故ノンデンも
8-32	アニキカズ	ヒツキトワレハ	天に効かず	日月と我れは
	アワモテラスサ		天地も照らすさ』	
	モロウタウ	ハタレイカリテ	諸歌う	ハタレ怒りて
	ヤノアラレ	カミノタミメニ	矢の霰	神のタミメに
	ヤモタタズ	イヤタケイカリ	矢も立たず	いや猛け怒り
	ホバナフク	カミミツハメオ	火花吹く	神ミツハメお

	マネクトキ	ホノホキユレバ	招く時	焔 消ゆれば
	ムナサワギ	ニゲントスルオ	胸騒ぎ	逃げんとするお
8-33	タチカラヲ	ハタレハルナニ	タチカラヲ	ハタレハルナに
	トビカカリ	チカラアラソヒ	飛びかかり	力 争ひ
	オシシバル	ハタレマモミナ	おし縛る	ハタレマも皆
	トリシバリ	マエニヒキスエ	とり縛り	前に曳き据ゑ
	タレアグル	キミヤサカニノ	垂れあぐる	君ヤサカニの
	マカルタマ	セオリはマフツ	マカル玉	セオリはマフツ
	ヤタカガミ	アキツクサナギ	ヤタ鏡	アキツ草薙
	ヤエツルギ	トキニイフキド	八重垣剣	時にイフキド
8-34	ユエオトウ	ハルナコタエテ	故お問ふ	ハルナ答えて
	ヤツカレニ	ネノマスヒトガ	「僕に	ネのマスヒトが
	ヲシエケリ	イサオシナラバ	教えけり	功績ならば

	クニツカミ	コレツサノヲノ	国つ神	これツサノヲの
	ミコトナリ	トキニイフキド	命なり」	時にイフキド
	マフツナラ	カンガミントテ	「マフツなら	鏡みん」とて
	ミカガミニ	ウツセバフツク	御鏡に	写せば悉く
	ツバサアリ	イフキドイワク	翼あり	イフキド日く
8-35	コノハタレ	ヌエアシモチゾ	「このハタレ	ヌエアシモチぞ
	バケワザニ	タブラカスモノ	化け術に	誑らかす者
	ミナキラン	トキニクスヒガ	皆斬らん」	時にクスヒが
	クマノカミ	マネケバカラス	クマノ神	招けば鳥
	ヤツキタル	ココニハタレノ	八つ来たる	ここにハタレの
	チオシボリ	チカヒトドメテ	血お絞り	誓ひ留めて
	ウシオアビ	カゲウツストキ	潮浴び	影写す時
	ムマスタリ	ヒトナルハミナ	六マ癡り	人なるは皆

8-36	タミトナル	サキノツツガノ	民となる	先の牢屋の
	ムハタレモ	ハルナガモノマ	六ハタレも	ハルナが者マ
	キチタリト	クニアズケヨチ	五千人と	国預け四千
	ミナメシテ	チオソソグトキ	皆召して	チお注ぐ時
	キクミタリ	スグニキツネノ	キクミタリ	すぐに狐の
	カゲアレバ	ナモミツキツネ	影あれば	名も三つ狐
	ミソミヨロ	タマタチセンオ	三十三万	魂絶ちせんお
	カタガコフ	モロユルサネバ	カタが乞ふ	諸許さねば
8-37	カタノカミ	ナナタビチカフ	カタの神	七度誓ふ
	ノリコチニ	ヤヤユルサルル	令ちに	やや許さるる
	ミコトノリ	ミツヒコガコト	勅	「三ツヒコが子と
	モロキツネ	ウケノミタマノ	諸狐	大食の御魂の
	マモラセヨ	モシモタガハバ	守らせよ	もしも違はば

	スミヤカニ	タマダチナセヨ	速かに	魂断ちなせよ
	コノユエニ	ナガクナンヂニ	この故に	長く汝に
	ツケルナリ	アマツミコトノ	付けるなり」	天つ御勅の
8-38	オモムキニ	ツゲテアニヒコ	趣きお	告げて兄ヒコ
	ココニトメ	ナカハヤマシロ	ここに留め	中はヤマシロ
	ハナヤマノ	オトハヒガシノ	ハナヤマの	弟は東の
	アスカノヘ	キツネモミツニ	アスカの辺	狐も三つに
	ワケユキテ	タハタノトリオ	分け行きて	田畠の鳥お
	オハシムル	ウケノミタマト	追はしむる	大食の御魂と
	ウケモチモ	カタノカミナリ	大食モチも	カタノ神なり
	シムミチモ	キソラキヅナモ	シムミチも	キソラキヅナも
8-39	チオヌキテ	オシデニチカヒ	血お抜きて	勅語に誓ひ
	シホアビテ	ウツスカガミニ	潮浴びて	写す鏡に

	ナホサルト	オロチトミヅチ	なほ猿と	大蛇と水霊
	カゲアレバ	ソソイデハゲヌ	影あれば	注いで剥げぬ
	モモミソハ	スデニコロスオ	百三十は	既に殺すお
	ミコトノリ	キラバミノホニ	勅	「斬らばミの焔に
	ナヤマンゾ	ヒトナルマデハ	悩まんぞ	人となる迄は
	タスケオキ	ヒトサガシレバ	助け置き	人サガ知れば
8-40	カミノタネ	ミネニアヅケテ	神の種」	峯に預けて
	ソノヲシデ	ハタレマコチト	その勅語	ハタレマ九千と
	タミコヨロ	ウツムタカノノ	民九万	埋むタカノの
	タマガハヅコレ		タマガハぞこれ	
	チワヤヨリ	アメエノミチガ	チワヤより	アメエノミチが
	ヲンカミニ	コトカタラント	御神に	事語らんと
	ヨバラシム	キミイフキドニ	呼ばらしむ	君イフキドに

	シツメシム	イフキドヌシハ	鎮めしむ	イフキドヌシは
8-41	ミユキコシ	ハタレガトワク	御幸輿	ハタレが問わく
	カンカミカ	コタエテカミノ	「神神か」	答えて「神の
	ヤツコナリ	マタトフヤツコ	奴なり」	又問ふ「奴
	コシハナニ	イワクナンヂオ	輿はなに」	日く「汝お
	ヤコトセン	ユエニノルナリ	奴とせん	故に乗るなり」
	マタハタレ	ナンヂワカバエ	又ハタレ	「汝 若生ゑ
	ハヂミスル	ヤツコトセント	恥みする	奴とせん」と
	ナリメグル	ハタタカミナリ	鳴り巡る	ハタタ神なり
8-42	イフキドハ	ウツロキマネキ	イフキドは	ウツロキ招き
	コレオケス	ムラクモオオヒ	これお消す	叢雲覆ひ
	クラマセバ	シナトオマネキ	くらませば	シナトお招き
	フキハラフ	ホノホオハキテ	吹き払ふ	焰お吐きて

	ムロヤケバ	タツタメマネキ	室焼けば	タツタ女招き
	コレオケス	ハタレムセンデ	これお消す	ハタレ咽んで
	コノハシテ	ツブテアラレニ	木の葉して	礫 霰に
	タミセメル	ミカタヒレキテ	民攻める	味方ヒレ着て
8-43	カグイレテ	ウチコボサセバ	香具入れて	うちこぼさせば
	ハタレマノ	ウバヒハムマニ	ハタレマの	奪ひ食む間に
	トリシバル	ハタレモヒレシ	捕り縛る	ハタレもヒレシ
	マハスバキ	ミテオドロケバ	マハスバキ	見て驚けば
	カンガエテ	ホラカキフカセ	考ゑて	ホラ貝吹かせ
	マヒレケシ	カグムサボラセ	マヒレケシ	香具貧らせ
	コレオウツ	ハタレツチモテ	これお討つ	ハタレ槌もて
	カミオウツ	カミハニギテニ	神お打つ	神は和幣に
8-44	ウツツチノ	ヤレテトヘラノ	打つ槌の	破れてトヘラの

	ハウチワヤ	ココニハタレガ	葉団扇や	ここにハタレが
	ムナサワギ	ニグルオツカム	胸騒ぎ	逃ぐるお掴む
	タチカラヲ	ツイニワラビノ	タチカラヲ	遂に蕨の
	ナワシバリ	ナンヂヤツコト	縄縛り	「汝 奴と
	ナスベキヤ	ナルヤトイエド	なすべきや	なるや」と云えど
	モノイワズ	キラントスレバ	物云わず	斬らんとすれば
	イフキヌシ	トトメテコレモ	イフキヌシ	留めてこれも
8-45	チカヒナス	ヒマスノモノマ	誓いなす	ヒマスの物マ
	アキヌカゲ	ホノホモノガレ	アキヌカゲ	焰も逃れ
	チワヤフル	カミノメグミト	「チワヤフル	神の恵み」と
	チチヲガム	スヘテナナマス	千々拜む	総て七増す
	ココチミナ	ヒトナルノリノ	心持皆	人成る法の
	ミカガミオ	セオリツヒメノ	御鏡お	セオリツ姫の

	モチイデテ	ノチノハタレノ	持ち出でて	後のハタレの
	ヒトトナル	マフツノカガミ	人となる	マフツの鏡
8-46	ミルタメニ	フタミノイワト	見るために	二見の岩と
	ナツケマス	ヨヨアラシホノ	名つけます	世々荒潮の
	ヤヲアヒニ	ヒタセドサビヌ	八百会ひに	浸せど錆ぬ
	カンカガミ	イマナガラエリ	神鏡	今永らえり
	タカノニハ	バケモノイデテ	タカノには	化け物出でて
	イフキヌシ	ミヤオタツレバ	イフキヌシ	宮お建つれば
	シヅマルニ	ヲシデタマワル	鎮まるに	勅語賜わる
	タカノカミ	マタカナサキハ	タカノ神	又カナサキは
8-47	スミヨロシ	カミノヲシデト	住みよろし	神の勅語と
	ミハノソヲ	タマフツクシノ	御衣の麻を	賜ふ「ツクシの
	タミスベテ	ユヒヲサムベシ	民総て	結ひ治むべし

	ワガカハリ	マタフツヌシハ	わが代理」	又フツヌシは
	カグヤマオ	ツカサトレトテ	「カグヤマお	司とれ」とて
	カトリカミ	タケミカツチハ	カトリ神	タケミカツチは
	ナルカミニ	タケモノヌシノ	鳴神に	タケモノヌシの
	カフツチト	サキノクニエニ	頭椎と	先のクニエに
8-48	ユリシヅム	カナイシツチモ	揺り鎮む	金石槌剣も
	タマフナリ	ツハモノヌシガ	賜ふなり	ツハモノヌシが
	タマカエシ	キヨキマコトノ	魂返し	清き真事の
	ハナフリテ	ミチニアモナシ	成果りて	道に天もなし
	シキアガタ	アナシウヲカミ	シキ県	天無し大神
	ヲシテソエ	スエテウツシヒ	勅語添え	据ゑて移し日
	カンヲチゾ	キチチガエラム	神祖ぞ	キチチが選ぶ
	タマカエシ	ココストノネヲ	魂返し	ココストの根緒

8-49	ムスブフミ	ココトムスビノ	結ぶ文	ココトムスビの
	ナニスエテ	カスガトノトゾ	名に据ゑて	カスガ殿とぞ
	タフトマセ	キミカナサキニ	尊ませ	君カナサキに
	ノタマフハ	ヨロモノキレド	宣ふは	万物斬れど
	タマカエシ	ミタレヲトケバ	魂返し	乱れ緒解けば
	カミトナル	ココチカスガト	神となる	ココチカスガと
	サトノナモ	ヲキナガモリモ	里の名も	翁が森も
	タマワレバ	カトリガイモト	賜われば	カトリが妹
8-50	アサカヒメ	ココトムスビノ	アサカ姫	ココトムスビの
	ツマトシテ	ウムカスガマロ	妻として	生むカスガマロ
	ワカヒコゾコレ		ワカヒコぞこれ	

● ヤクモ撃(ウ)ち琴(コト)つくる紋(アヤ)

9- 1	アラガネノ	ツチニオチタル	粗金の	土に墮たる
	サスラヲノ	アメノオソレノ	流離男の	天の畏れの
	ミノカサモ	ヌガデヤスマン	蓑笠も	脱がで憩まん
	ヤドモナク	ミチニマヨイテ	宿もなく	道にさ迷いて
	トガメヤル	スリヤガモトニ	トガメヤル	スリヤが許に
	タトリキテ	ツイニネノクニ	辿りきて	遂にネの国
	サホコナル	ユゲノソシモリ	サホコなる	ユゲノソシモリ
9- 2	ツルメソガ	ヤドニツグムヤ	ツルメソガ	宿に噤むや
	シムノムシ	サタノアレオサ	シムの虫	サタの村長
	アシナツチ	ソヲノテニツキ	アシナツチ	ソヲのテニツキ
	ヤメウメド	オイタチカヌル	八女生めど	生い立ち難ぬる
	カナシサハ	ヒカハノカミノ	悲しさは	ヒカハの上の

	ヤエタニハ	ツネニムラクモ	八重谷は	常に叢雲
	タチノボリ	ソビラニシゲル	立ち昇り	背平に繁る
	マツカヤノ	ナカニヤマタノ	マツ・カヤの	中に八岐の
9- 3	オロチキテ	ハハヤカガチノ	大蛇居て	大蛇やカガチの
	ヒトミケト	ツツガセラルル	人身御供と	牢屋せらるる
	ナナムスメ	ノコルヒトリノ	七娘	残る一人の
	イナタヒメ	コレモハマント	イナタ姫	これも食まんと
	タラチネハ	テナデアシナデ	タラチネは	手撫で足撫で
	イタムトキ	ソサノミコトノ	悼む時	ソサノ命の
	カミトヒニ	アカラサマニゾ	神問ひに	明らさまにぞ
	コタエケル	ヒメオエンヤト	答ゑける	「姫お得んや」と
9- 4	イヤトイニ	ミナハタレゾト	いや問いに	「御名は誰ぞ」と
	ウラトエバ	アメノオトトト	ト問ゑば	「天の弟」と

	アラハレテ	チギリオムスブ	現はれて	契りお結ぶ
	イナタヒメ	ヤメルホノホノ	イナタ姫	悩める心火の
	クルシサオ	ソデワキサキテ	苦しさお	袖腋裂きて
	カゼイレバ	ホノホモサメテ	風入れば	心火も冷めて
	ココロヨク	ワラベノソデノ	快く	童の袖の
	ワキアケゾ	ヒメハユゲヤニ	腋開けぞ	姫は弓削屋に
9- 5	カクシイレ	スサハヤスミノ	隠し入れ	スサは寝みの
	ヒメスガタ	ユヅノツゲクシ	姫姿	齋ヅのつけ櫛
	ツラニサシ	ヤマノサスキニ	額に挿し	山の栈敷に
	ヤシホリノ	サケオカモシテ	八搾りの	酒お醸して
	マチタマフ	ヤマタカシラノ	待ちたまふ	八岐頭の
	オロチキテ	ヤフネノサケオ	オロチ来て	八艘の酒お
	ノミエイテ	ネムルオロチオ	飲み酔いて	眠る大蛇お

	ヅダニキル	ハハガオサキニ	ヅダに斬る	大蛇が尾先に
9- 6	ツルギアリ	ハハムラクモノ	劍 有り	大蛇叢雲の
	ナニシアフ	イナタヒメシテ	名にしあふ	イナタ姫して
	オオヤヒコ	ウメバソサノヲ	オオヤヒコ	生めばソサノヲ
	ヤスカハニ	ユキテチカヒノ	ヤスカハに	行きて誓ひの
	ヲノコウム	アカツトイエバ	男の子生む	吾勝つと云えば
	アネガメニ	ナホキタナシヤ	姉が目に	「なほ汚なしや
	ソノココロ	ハチオモシラヌ	その心	恥おも知らぬ
	ヨノミタレ	コレミナソレノ	世の乱れ	これ皆そのの
9- 7	アヤマチト	オモエバムセブ	誤ちと	思えば咽ぶ
	ハヤカエレ	ソサノヲハヂテ	はや帰れ」	ソサノヲ恥ぢて
	ネニカエル	ノチオオヤヒメ	ネに帰る	後オオヤ姫
	ツマツヒメ	コトヤソウミテ	ツマツ姫	コトヤソ生みて

	カクレスム	タカマハムツノ	隠れ住む	タカマは六つの
	ハタレカミ	ハチノゴトクニ	ハタレ神	蜂の如くに
	ミタルレバ	カミハカリシテ	乱るれば	神謀りして
	ハタレウツ	キミハミソギノ	ハタレ討つ	君はミソギの
9- 8	サクナタリ	ハタレキトフノ	さくなたり	ハタレ厭ふの
	タネオエテ	ミヨヲサマレド	種お得て	御世治まれど
	ミナモトハ	ネノマスヒトニ	源は	ネのマスヒトに
	ヨルナレバ	イフキドヌシニ	寄るなれば	イフキドヌシに
	ウタシムル	ウナツキムカフ	討たしむる	諾き向ふ
	ヤソツツキ	サホコノミヤノ	八十続き	サホコの宮の
	アサヒカミ	ヲガミテイタル	アサヒ神	拝みて至る
	イツモヂノ	ミチニタタズム	イツモ路の	路に佇む
9- 9	シタタミヤ	カサミノツルギ	下民や	笠・蓑・剣

	ナゲステテ	ナニノリコチノ	投げ捨てて	何宣りこちの
	オオマナコ	ナンダハタキノ	大眼	涙は滝の
	オチクダル	トキノスガタヤ	落ち下る	時の姿や
	ヤトセブリ	オモヒオモエバ	八年ぶり	思ひ思えば
	ハタレトハ	オゴルココロノ	ハタレとは	驕る心の
	ワレカラト	ヤヤシルイマノ	我れからと	やや知る今の
	ソサノヲガ	クヤミノナンダ	ソサノヲが	悔みの涙
9-10	オヂオキオ	シムノアヤマチ	叔父・甥お	シムの誤ち
	ツグナエト	ナゲキウタフヤ	償なえと	嘆き歌ふや
	アモニフル	アガミノカサユ	アモニフル	吾が箏笠ゆ
	シムノミキ	ミチヒハサマデ	シムのミキ	ミチヒハサマデ
	アラフルオソレ		荒ふる恐れ	
	カクミタビ	キモニコタエテ	かく三度	肝に应えて

	ナサケヨリ	サスガニヌルル	情けより	さすがに濡るる
	イフキカミ	シムノツクバエ	イフキ神	シムのツクバエ
9-11	トモナミダ	コマヨリオリテ	とも涙	駒より降りて
	ソサノヲノ	テオヒキオコス	ソサノヲの	手お引き起す
	シムノヨリ	アイエルコトハ	シムの寄り	天癒ゑることは
	ノチノマメ	イサオシナセバ	後の忠誠	功績なせば
	ハレヤラン	アレヲタスケテ	晴れやらん	吾れを助けて
	ヒトミチニ	マスビトウタバ	一途に	マスビト討たば
	マメナリト	ウチツレヤドル	忠誠なりと	うち連れ宿る
	サタノミヤ	ノリオサダメテ	サタの宮	法お定めて
9-12	ハタレネモ	シラヒトコクミ	ハタレねも	白人 胡久美
	オロチラモ	ウチヲサメタル	大蛇らも	討ち治めたる
	オモムキオ	アメニツグレバ	趣お	天に告ぐれば

	タカマニハ	ユツウチナラシ	タカマには	弓弦打ち鳴し
	ウスメミノ	カナデルオミテ	ウスメミの	奏でるお見て
	ヲヲンカミ	クワモテツクル	大御神	桑もて作る
	ム ツユコト	タマフワカヒメ	六齋琴	賜ふワカ姫
	ムツニヒク	カダフキカナデ	ムツに弾く	カダフキ奏で
9-13	メガハヒレ	ソノコトノネハ	姫が衣肩巾	その琴の音は
	イサナギノ	カキノカダウツ	イサナギの	奏きのカダうつ
	イトススキ	コレオミスヂノ	イトススキ	これお三筋の
	コトノネゾ	カタチハハナト	琴の音ぞ	形は花と
	クズノハオ	カダカキトウツ	葛の葉お	カダカキとうつ
	キスコトハ	キクラニヒビク	キス琴は	五座に響く
	ネオワケテ	ワノアワウタオ	音お分けて	地の天地歌お
	ヲシフレバ	コトノネトホル	教ふれば	琴の音通る

9-14	イスキウチ	ムスヂノコトハ	イスキウチ	六筋の琴は
	エヒネムル	オロチニムツノ	酔ひ眠る	大蛇に六つの
	ユツカケテ	ヤクモウチトゾ	弓弦かけて	八雲討ちとぞ
	ナツクナリ	カタフキカナデ	名つくなり	かたフキ奏で
	ヒメガヒレ	コレモテタテノ	姫が衣肩巾	これも手段の
	ナニシアフ	ヤマダアガタオ	名にしあふ	ヤマダ県お
	モチタカニ	タマエバアワノ	モチタカに	賜えば天地湖の
	イフキカミ	モロカミハカリ	イフキ神	諸神謀り
9-15	ソサノヲガ	ココロオヨスル	ソサノヲが	心お寄する
	シムノウタ	ミノチリヒレバ	シムの歌	身の塵放れば
	ガハキエテ	タマフヲシテハ	ガは消えて	賜ふ勅語は
	ヒカハカミ	ハタレネオウツ	ヒカハ神	ハタレ根お討つ
	イサオシヤ	ソコニモトキオ	功績や	そこに基お

	ヒラクベシ	ヤエガキハタモ	開くべし	八重垣幡も
	タマハレバ	フタタビノボル	賜はれば	再び登る
	アメハレテ	ウヤマイモフス	天晴れて	敬い申す
9-16	クシヒヨリ	スガハニキツク	奇日より	清地に築く
	ミヤノナモ	クシイナダナリ	宮の名も	奇しイナダなり
	サホコクニ	カエテイツモノ	サホコ国	変えてイツモノ
	クニハコレ	アメノミチモテ	国はこれ	天の道もて
	タミヤスク	ミヤナラヌマニ	民安く	宮ならぬ間に
	イナタヒメ	ハラメバウタニ	イナタ姫	妊めば歌に
	ヤクモタツ	イツモヤエカキ	『八雲立つ	イツモ八重垣
	ツマコメニ	ヤエカキツクル	妻籠めに	八重垣作る
9-17	ソノヤエカキワ		その八重垣わ』	
	コノウタオ	アネニササゲテ	この歌お	姉に捧げて

	ヤクモウチ	コトノカナデル	八雲打ち	琴の奏でお
	サツカリテ	ウタニアワセル	授りて	歌に合せる
	イナタヒメ	ツイニクシタエ	イナタ姫	遂に奇し妙え
	アラハレテ	ヤエカキウチノ	現はれて	八重垣打ちの
	コトウタゾ	ウムコノイミナ	琴歌ぞ	生む子のイミナ
	クシキネハ	コトニヤサシク	クシキネは	殊に優しく
9-18	ヲサムレバ	ナカレオクメル	治むれば	流れお汲める
	モロガナモ	ヤシマシノミノ	諸が名も	ヤシマシノミの
	オホナムチ	ツギハオオトシ	オホナムチ	次はオオトシ
	クラムスビ	ツギハカツラギ	クラムスビ	次はカツラギ
	ヒコトヌシ	ツギスセリヒメ	ヒコトヌシ	次はスセリ姫
	エヲミメゾ	キミクシキネオ	五男三姫ぞ	君クシキネお
	モノヌシニ	タケコオツマト	モノヌシに	タケコお妻と

	ナシテウム	アニハクシヒコ	なして生む	兄はクシヒコ
9-19	メハタカコ	オトハステシノ	女はタカコ	弟はステシノ
	タカヒコネ	クシキネアワノ	タカヒコネ	クシキネ天地の
	ササザキニ	カガミノフネニ	ササザキに	カガミの船に
	ノリクルオ	トエドコタエズ	乗りくるお	問えど答えず
	クエヒコガ	カンミムスビノ	クエヒコガ	カンミムスビの
	チキモコノ	ヲシエノユビオ	千五百子の	教ふの指お
	モレオツル	スクナヒコナハ	漏れ落つる	スクナヒコナは
	コレトイフ	クシキネアツク	これといふ	クシキネ篤く
9-20	メクムノチ	トモニツトメテ	恵むのち	共に務めて
	ウツシクニ	ヤメルオイヤシ	現し国	病めるお癒し
	トリケモノ	ホオムシハラヒ	鳥獣	穂お虫払ひ
	フユオナス	スクナヒコナハ	恩頼おなす	スクナヒコナは

	アワシマノ	カダカキナライ	アワシマの	カダカキ習い
	ヒナまつり	ヲシエテイタル	ヒナ祭り	教ゑて至る
	カタノウラ	アワシマカミゾ	カタノウラ	アワシマ神ぞ
	オホナムチ	ヒトリメグリテ	オホナムチ	一人巡りて
9-21	タミノカテ	ケシシユルセバ	民の糧	獣肉許せば
	コエツノリ	ミナハヤカレス	肥ゑ募り	みな早枯れす
	ソハホミシ	クシキネハセテ	ソは穂虫	クシキネ馳せて
	コレオトフ	シタテルヒメノ	これお問ふ	シタテル姫の
	ヲシエクサ	ナライカヘリテ	教え草	習い帰りて
	ヲソクサニ	アフゲバホオノ	教草に	仰げばホオの
	ムシサリテ	ヤハリワカヤギ	虫去りて	やはり若やぎ
	ミノルユエ	ムスメタカコオ	実る故	娘タカコお
9-22	タテマツル	アマクニタマノ	奉る	天国魂の

	オクラヒメ	コレモササゲテ	オクラ姫	これも捧げて
	ツカエシム	シタテルヒメハ	仕えしむ	シタテル姫は
	フタアオメ	メシテタノシム	二青女	召して楽しむ
	ヤクモウチ	オホナムチニハ	ヤクモ打ち	オホナムチには
	クシヒコオ	オオモノヌシノ	クシヒコお	オオモノヌシの
	カワリトテ	コトシロヌシト	代りとて	コトシロヌシと
	ツカエシメ	オノハイヅモニ	仕ゑしめ	己はイヅモに
9-23	ヲシユルニ	ヒフミムモヤソ	教ゆるに	ヒフミ六百八十
	フタワラノ	ヒモロゲカゾエ	フタワラの	ヒモロゲ数え
	タネフクロ	ツチハツチカフ	種袋	土は培ふ
	ヲンタカラ	ウエタスカテノ	御宝	飢餓たす糧も
	クラニミツ	アメカセヒテリ	倉に満つ	雨・風・日照り
	ミノラネド	アタタラクバリ	実らねど	アタタラ配り

	コエサセズ	ノチニワカヒメ	飢ゑさせず	後にワカ姫
	ヒタルトキ	ヤクモイススキ	日垂る時	八雲イススキ
9-24	カタガキオ	ユツルコトノネ	カタガキお	弓弦琴の音
	タカヒメオ	タカテルトナシ	タカ姫お	タカテルとなし
	ワカウタノ	クモクシフミハ	ワカ歌の	クモクシ文は
	オクラヒメ	サツケテナオモ	オクラ姫	授けてなおも
	シタテルト	ナシテワカクニ	シタテルと	なしてワカ国
	タマツシマ	トシノリカミト	玉津島	トシノリ神と
	タタエマス	イツモヤエガキ	讃ゑます	出雲八重垣
	オホナムチ	ヤエガキウチテ	オホナムチ	八重垣打ちて
9-25	タノシムル	モモヤソヒタリ	楽しむる	百八十一人
	コニミツルカナ		子に満つるかな	

● カシマ立ち釣鯛(ツリダイ)の紋(アヤ)

10- 1	フソキスス	コソミエトシノ	二十五鈴	九十三枝歳の
	サアエナツ	カグエしボミテ	サアエ夏	カグ枝しぼみて
	フトマニノ	シチリハヤモリ	フトマニの	「シチリ」はヤモリ
	ハケシクテ	ツネスミノクニ	激しくて	西北隅の国
	ミセシムル	ヨコヘカエリテ	見せしむる	ヨコへ帰りて
10- 2	モフサクハ	イツモヤエガキ	申さくは	「出雲八重垣
	オホナムチ	ミツレバカクル	オホナムチ	満つれば欠くる
	コトワリカ	ヌカオタマガキ	道理か	床お玉垣
	ウチミヤト	コレココノエニ	内宮と	これ九重に
	クラブナリ	サキニミコモリ	較ぶなり」	さきに御子守り
	オモイカネ	シナノイナホラ	オモイカネ	信濃イナホラ

	アチノカミ	ヨリテナナヨノ	アチの神	集りて七代の
	ウナメコト	タカギネヤスノ	大嘗め事	タカギネヤスの
10- 3	イマミヤニ	タガワカミヤノ	イマミヤに	タガ若宮の
	カフノトノ	タカミムスビノ	カフの殿	タカミムスビの
	カミハカリ	イツモタタスハ	神議り	「イツモ糺すは
	タレヨケン	ホヒノミコトト	誰よけん」	「ホヒノミコト」と
	ミナイエバ	ホヒノミコトニ	皆いえば	ホヒノミコトに
	ムケシムル	シカレドホヒハ	平けしむる	然れどホヒは
	クニカミニ	ヘツライコビテ	国神に	へつらい媚びて
	ミトセマデ	カエコトアラデ	三年まで	復命あらで
10- 4	オオセイイ	ミクマノヤレド	オオセイイ	ミクマノやれど
	チチガママ	カエラネバマタ	父が俣	帰らねば又
	カミハカリ	ツカハスヒトハ	神議り	遣はす人は

	アマクニノ	アメワカヒコト	アマクニの	アメワカヒコト
	キハマリテ	タカミムスビガ	極まりて	タカミムスビが
	カゴユミト	ハハヤタマヒテ	カゴ弓と	ハハ矢賜ひて
	ムケシムル	コノカミモマタ	平けしむる	この神も又
	マメナラズ	タカテルヒメオ	忠誠ならず	タカテル姫お
10- 5	メトリツツ	アシハラクニオ	娶りつつ	アシハラ国お
	ノラントテ	ヤトセフルマテ	のらんとて	八年経る迄
	カエラネバ	ナナシノキギス	復命らねば	名なしのキギス
	トイクタス	アメワカヒコガ	問い下す	アメワカヒコが
	カドノマエ	カツラノスエニ	門の前	カツラの末に
	シワザミテ	ホロロホロロト	仕業みて	ホロロホロロと
	ナクオキキ	サグメガツゲニ	鳴くお聞き	探女が告げに
	ナモナクテ	アメオナクヤト	「名も無くて	天お鳴くや」と

10- 6	ワカヒコガ	ハハヤオイレバ	ワカヒコが	ハハ矢お射れば
	ムネトホリ	トビテタカミノ	胸通り	飛びてタカミの
	マエニオチ	ケンケンモナク	前に落ち	ケンケンも鳴く
	チノハハヤ	タカミムスビハ	血のハハ矢	タカミムスビは
	コレオミテ	トガムカエシヤ	これおみて	咎む返し矢
	ワカヒコガ	ムネニアタリテ	ワカヒコが	胸に当りて
	ウセニシオ	カエシヤオソル	失せにしお	返し矢恐る
	モトオリヤ	タカテルヒメノ	本縁や	タカテル姫の
10- 7	ナクコエノ	アメニキコエテ	泣く声の	天に聞えて
	タラチネノ	ハヤチニカバネ	両親の	突風に骸
	ヒキトリテ	モヤオツクリテ	引きとりて	喪屋お造りて
	カリモカリ	オクルカワカリ	仮もかり	送る川雁
	キサリモチ	ニワトリハキシ	キサリ餅	庭鳥ハキシ

	スズメイキ	ハトハモノマサ	スズメ飯	ハトはモノマサ
	ササキミソ	トビユフマツリ	鶺鴒ミソ	トビユフ祭り
	カラスツカ	ヤヒヤヨイタミ	烏塚	八日八夜悼み
10- 8	モオツトム	タカテルノアニ	喪お勤む	タカテルの兄
	タカヒコネ	アメニノボリテ	タカヒコネ	天に上りて
	モオトエバ	コノカミスガタ	喪おとえば	この神姿
	ワカヒコニ	ウルリワケエズ	ワカヒコに	ウルリ別け得ず
	シムノモノ	キミハイケルト	シムの者	「君は生ける」と
	ヨヂカカリ	ヤホタマユラト	よぢかかり	「ヤホたまゆら」と
	マドフトキ	イカルアチスキ	惑ふ時	怒るアチスキ
	タカヒコネ	トモナレバコソ	タカヒコネ	「友なればこそ
10- 9	オチニトフ	ワレオナキミニ	オチに問ふ	我お亡き身に
	アヤマツハ	アラケガラシヤ	誤つは	あら穢しや

	ハラタチト	モヤキリフセル	腹立ち」と	喪屋斬り伏せる
	アオハカリ	サゲテカントオ	アオハカリ	下げて神戸お
	サラントス	ムカシナカヤマ	去らんとす	昔ナカヤマ
	ミチヒラク	カナヤマヒコノ	道拓く	カナヤマヒコの
	マコムスメ	シタテルオクラ	孫娘	シタテルオクラ
	タカヒコノ	イカリトカント	タカヒコの	怒り解かんと
10-10	ミチカウタ	ヨミテサトセリ	短か歌	詠みて諭せり
	アメナルヤ	オトタチバナノ	『天なるや	オトタチバナの
	ウマガセル	タマノミスマル	うながせる	玉の御統
	ミスマルノ	アナタマハヤミ	御統の	あなたまはやみ
	タニフタハ	タラズアチスキ	たにふたは	たらずアチスキ
	タカヒコネゾヤ		タカヒコネぞや』	
	コノウタニ	ツツキモシレリ	この歌に	ツツキも知れり

	タカヒコモ	イカリユルメテ	タカヒコモ	怒り緩めて
10-11	タチオサメ	ミトノミヤビオ	太刀収め	ミトのミヤビお
	サトサント	コタエノウタニ	諭さんと	答えの歌に
	アマサカル	ヒナツメノイハ	『天離かる	鄙女のイハ
	タタセトヒ	シカハカタフチ	タタセトヒ	シカはカタフチ
	カタフネニ	アミハリワタシ	カタフネに	網張り渡し
	メロヨシニ	ヨシヨリコネイ	メロヨシに	ヨシヨリコネイ
	シカハカタフチ		シカはカタフチ』	
	コノウタハ	ノチノエニシノ	この歌は	後の縁の
10-12	アフウスノ	カモイトムスブ	アフウスの	カモイと結ぶ
	ヒナフリハコレ		夷曲はこれ	
	コノタビハ	タカミムスビノ	この度は	タカミムスビの
	トミカレオ	ノゾクカドデノ	トミカレお	除く門出の

	カシマタチ	ハニスキマツル	カシマ立ち	ハニスキ祀る
	カミハカリ	フツヌシヨシト	神議り	フツヌシよしと
	ミナイエバ	タケミカツチガ	皆云えば	タケミカツチが
	ススミイデ	アニタタヒトリ	進み出で	「あに唯一人
10-13	フツヌシガ	マサリテワレハ	フツヌシが	勝りて我は
	マサランヤ	タカキイサミノ	勝らんや」	高き勇みの
	ミカツチヤ	フツヌシソエテ	ミカツチや	フツヌシ添えて
	カシマダチ	イズモキツキニ	カシマ立ち	イズモキツキに
	カフツチノ	ツルキオウエテ	頭椎の	劔お植えて
	ウヅクマリ	ナチリトフナリ	うづくまり	詰り問ふなり
	ミホコリテ	アサムクミチオ	「身誇りて	欺く道お
	ナラサント	ワレラツカフゾ	均さんと	我ら仕ふぞ
	ソノココロ	ママヤイナヤヤ	その心	ままや否やや」

	オホナムチ	コタエトハント	オホナムチ	答え問はんと
	ミホサキノ	ツリエキキスノ	ミホサキノ	釣りえキキスの
	イナセハギ	アメノコタエオ	イナセハギ	天の答えお
	トフトキニ	コトシロヌシガ	問ふ時に	コトシロヌシが
	エミスガオ	ワレスズカニテ	笑みす顔	「我れスズカにて
	タラチネニ	ホロロナケドモ	両親に	ホロロ泣けども
	チノタキゾ	サカナトルトキ	鉤の鯛ぞ	魚トキルモ
10-15	オロカナリ	タカマハタミノ	愚かなり	タカマは民の
	エミスタイ	イトカケマクゾ	笑みす鯛	いとかけまくぞ」
	ミコトノリ	ワガチチサラバ	勅	「我が父去らば
	モロトモノ	カエコトナセバ	諸共」の	復命なせば
	マダヒトリ	アリトイフマニ	「まだ一人	あり」と云ふ間に
	アラハルル	タケミナカタゾ	現はるる	タケミナカタぞ

	チビキイワ	ササゲテタレカ	千引き岩	提げて「誰か
	ワガクニオ	シノビシノビニ	わが国を	忍び忍びに
10-16	オドサンヤ	イデワガチカラ	威さんや	いで我が力
	クラネント	トルテモイワノ	競べん」と	とる手も岩の
	ミカツチガ	トラヘテナグル	ミカツチが	捕へて投ぐる
	アシガイノ	オソレテニグル	アシガイの	恐れて逃ぐる
	シナノウミ	スワトイフトキ	シナノ海	「すわ」と云ふ時
	カシコミテ	ワレオタスケヨ	畏みて	「我お助けよ
	コノトコロ	ホカエハユカジ	この所	外えは行かじ
	ソムカジト	イエバタスケテ	背かじ」と	云えば助けて
10-17	タチカエリ	トエバコトフル	たち帰り	問えばコトフル
	オホナムチ	ソノコノママオ	オホナムチ	「その子の俣お
	フタカミエ	ワガコサリニキ	二神え	「我が子去りにき

	ワレモサル	イマワレサラバ	我れも去る	今我れ去らば
	タレカマタ	アエテナレナン	誰か又	敢えて平れなん
	モノアラジ	ワガクサナギノ	者あらし	我が草薙の
	コノホコニ	ナラシタマエト	この矛に	平らし給え」と
	イヒテサル	サカフハキリツ	云ひて去る	逆ふは斬りつ
10-18	マツラフハ	ホメテモロカミ	服ふは	褒めて諸神
	ヒキイツツ	アメニカエレバ	率いつつ	天に帰れば
	コフノトノ	マツリオトリテ	コフの殿	政りお取りて
	ミコトノリ	ナンヂフツヌシ	勅	「汝フツヌシ
	アウウワノ	トホルミチヒキ	アウウワの	通る導き
	サカンナリ	マタミカツチハ	盛んなり	又ミカツチは
	カシマタチ	イツオアラハス	カシマ立ち	稜威お現はす
	モノノベノ	ナンダヤワラニ	物部の	涙 柔らに

10-19	モトスヨリ	タマフカンベハ	もとすより	賜ふ神戸は
	カシマカミ	トキニマツラフ	カシマ神」	時に服ふ
	オホナムチ	モモヤソカミオ	オホナムチ	百八十神お
	ヒキヰキテ	マメモヒカゲノ	率ゐきて	忠誠も日陰の
	ナンダアリ	タカミムスビノ	涙あり	タカミムスビの
	タタシエタ	コトハリアレバ	質しエタ	道理あれば
	ミコトノリ	タマフアソベノ	勅	賜ふアソベの
	アカルミヤ	アフユオウクル	アカル宮	天恩頼お受くる
10-20	オホナムチ	アカルアソヘノ	オホナムチ	天離るアソへの
	ウモトミヤ	ツクルチヒロノ	麓 宮	造る千尋の
	カケハシヤ	モモヤソヌヰノ	階段や	百八十縫ゐの
	シラタテニ	ウツシクニタマ	シラタテに	ウツシクニタマ
	オホナムチ	ツカルウモトノ	オホナムチ	ツカル大本の

	カミトナル	ホヒノミコトオ	神となる	ホヒのミコトお
	モトマツリ	タカミムスビノ	元祀り	タカミムスビの
	オヲンコト	ナンヂモノヌシ	大ん言	「汝モノヌシ
10-21	クシヒコヨ	クニツメトラバ	クシヒコよ	国つ娶らば
	ウトカラン	ワガミホツヒメ	疎からん	我がミホツ姫
	ツマトシテ	ヤソヨロカミオ	妻として	八十万神お
	ツカサトリ	ミマゴオマモリ	司とり	皇孫お守り
	タテマツレ	タマフヨロギハ	奉れ」	賜ふヨロギは
	ナメコトノ	チクサヨロキノ	嘗事の	千草万木の
	ナオタダス	コノミヤシレバ	名お質す	コノミヤ知れば
	ヨヨノタメ	ヤメルオイヤス	世々の為	病めるお癒やす
10-22	ミチオワケ	ヨツギハヒトリ	道お別け	世継ぎは一人
	ヨロキマロ	ミホヒコノツマ	ヨロキマロ	ミホヒコの妻

	スエツミガ	イクタマヨリメ	スエツミが	イクタマヨリメ
	ソヤコウム	コシアチハセノ	十八子生む	コシアチハセの
	シラタマメ	ソヤノヒメウム	シラタマメ	十八の姫生む
	ミソムタリ	ユタネヒタセバ	三十六人	委ね育せば
	ミコトノリ	タマフヲシデハ	勅	賜ふヲシテは
	コモリカミ	セミノオカワニ	コモリ神	「セミの小川に
10-23	ミソギシテ	チノワニタタス	みそぎして	茅の輪に質す
	ミナツキヤ	タミナガラフル	六月や	民永らふる
	ハライナリケリ		祓いなりけり」	
	ミヨモノヌシミコノナウタ		三代モノヌシ御子の名歌	
	コモリコノ	アニハカンタチ	『コモリ子の	兄はカンタチ
	ツギツミハ	ヨシノミコモリ	次ツミハ	ヨシノミコモリ
	ヨツハヨテ	ツギハチハヤヒ	四つはヨテ	次はチハヤヒ

	コセツヒコ	ナナハナラヒコ	コセツヒコ	七はナラヒコ
10-24	ヤサカヒコ	ココハタケフツ	ヤサカヒコ	九はタケフツ
	ソハチシロ	ソヒハミノシマ	十はチシロ	十一はミノシマ
	ソフオオタ	ツキハイハクラ	十二オオタ	次はイハクラ
	ウタミワケ	ツキノミコモリ	ウタミワケ	次のミコモリ
	ソムサギス	ツキハクハウチ	十六サギス	次はクハウチ
	オトマロゾ	ヒヒメハモトメ	オトマロゾ	一姫はモトメ
	タマネヒメ	イソヨリヒメニ	タマネ姫	イソヨリ姫に
	ムレノヒメ	ミハラルヒメヤ	ムレノ姫	ミハラル姫や
10-25	スセリヒメ	ミタラシヒメニ	スセリ姫	ミタラシ姫に
	ヤヘコヒメ	コユルギヒメニ	ヤヘコ姫	コユルギ姫に
	シモトヒメ	ミチツルヒメヤ	シモト姫	ミチツル姫や
	ハモミヒメ	ムメチルヒメニ	ハモミ姫	ムメチル姫に

アサヒメヤ ハザクラヒメト アサ姫や ハザクラ姫と

ワカネヒメ アハナリヒメト ワカネ姫 アハナリ姫と

トヨリヒメ スヘミソムカミ トヨリ姫 総三十六神

コタカラゾコレ 子宝ぞこれ』

10-26 カツテカミヨツギエルウタ カツテ神世継ぎ得る歌

カツラキノ ヒトコトヌシガ 『カツラキノ ヒトコトヌシガ

スエツミガ ヤスタマトウム スエツミガ ヤスタマと生む

カツキマロ イミナヤスヒコ カツキマロ いみなヤスヒコ

ミホヒコト ココトムスビノ ミホヒコト ココトムスビの

ツタエウケ ミウチニオレバ 伝ふ受け 御内におれば

ヲランカミ ヲシテタマワル 大神 ヲシテ賜わる

カツテカミ コレモヨツギノ カツテ神 これも世継ぎの

10-27 ウタノミチカナ 歌の道かな』

● 三種神器(ミクサ)讓(ユツ)り御受(ミウ)けの紋(アヤ)

11- 1	フソキスズ	モモエソヒホニ	二十五スズ	百枝十一年に
	ヒタカミノ	ミクラノアトニ	ヒタカミの	御座の跡に
	マタミヤコ	ウツシテナヅク	また都	移して名づく
	タガノコフ	ツボワカミヤノ	多賀の国府	ツボ若宮の
	トノシマモ	タカヤイラカモ	殿シマも	高屋薨も
11- 2	フツクナリ	ウラノヨキヒニ	悉く成り	占の吉き日に
	ワタマシノ	キミハアマテル	渡ましの	君はアマテル
	ヨツギミコ	ハハハヒノマエ	世嗣ぎ御子	母は日の前
	ムカツヒメ	イムナホノゴノ	ムカツ姫	イム名ホノゴの
	ウブミヤハ	フジヲカミミノ	産宮は	フジヲカミミの

	オシホキニ	アレマスミコノ	オシホキに	生れます御子の
	チニムセブ	ムツキシメシテ	乳に咽ぶ	ムツキシメシテ
	オシヒトノ	ヲシホミミトゾ	オシヒトの	ヲシホミミとぞ
11- 3	キコシメシ	タガヤカミヤニ	聞き召し	タガ若宮に
	ヒタシマス	ヒタルノトキニ	育します	日垂るの時に
	オモイカネ	ワカヒメトモニ	オモイカネ	ワカ姫ともに
	モリソタツ	ヨロマロヒトリ	守り育つ	ヨロマロー人
	ソバニアリ	キミハヨワクテ	傍にあり	君は弱くて
	ミソギマレ	オバサリマセバ	ミソギ稀れ	叔母去りませば
	カウノトノ	マツリトルユエ	カウの殿	政りとる故
	ヨロマロオ	ヒタカミノカミ	ヨロマロお	ヒタカミの守
11- 4	キミハコゾ	ツボオシタヒテ	君は去年	ツボお慕ひて
	ミュキナル	タガノミヤコオ	行幸なる	タガの都お

	ヒキウツシ	カウノタクハタ	引き移し	カウのタクハタ
	チチヒメト	ソフノツボネモ	チチ姫と	十二の局も
	ソナワレバ	ミウチノイワヒ	備われば	御内の祝ひ
	トトノヒテ	カミニミツゲノ	整ひて	神に御告げの
	カンツカイ	カルキミノコノ	神使い	カル君の子の
	シマツウシ	ノボルホツマノ	シマツウシ	上るホツマの
11- 5	ヲハシリノ	サカニユキアフ	ヲハシリの	坂に行き逢ふ
	ヲシカドハ	ミウチニハベル	勅使は	御内に侍る
	カスガマロ	カタマオスエテ	カスガマロ	籠お据えて
	マツノカゲ	シマツハコマオ	松の蔭	シマツは駒お
	ノリハナチ	コトホギヲエテ	乗り放ち	言祝ぎ終ゑて
	ニシヒガシ	ユキカヒザカノ	西東	行き交ひ坂の
	ナニノコル	アキカエルトキ	名に残る	秋帰る時

	マタアエバ	ユキキノヲカノ	また会えば	行き来の岡の
11- 6	ナコロエル	カネテホツマト	名こそ得る	かねてホツマト
	ヒタカミノ	サカキニデマツ	ヒタカミの	境に出待つ
	フツヌシガ	サカムカヒシテ	フツヌシが	境迎ひして
	ウキマミエ	ヲヂトヲキトノ	初ゝ目見ゑ	叔父と甥との
	サカツキノ	サケノナカメハ	盃の	酒の眺めは
	イワノウエ	フリハヨロシキ	岩の上	フリはよろしき
	ハマヒサシ	ナミウチカギリ	浜ひさし	波打ち限り
	イワアラウ	ミルメアフカキ	岩洗う	みるめ・アフ貝
11- 7	ユルハマオ	トエバナモナシ	緩る浜お	問えば名もなし
	フツヌシモ	ナコソモナガニ	フツヌシも	名こそもながに
	カスガマロ	スグサノウタニ	カスガマロ	すぐさの歌に
	ナコソシル	フツノミタマノ	『名こそしる	フツの御魂の

ササムカヒ カイノハマグリ 酒迎ひ 貝のハマグリ

アフミヲヂ ヲキノミルメモ あふ御叔父 甥のミルメモ

トシナミノ ナコソシルベシ 年波の 名こそしるべゆ

チナミアフハマ ちなみ会ふ浜』

11- 8 ナコソナル サケノミアキニ ナコソなる 酒呑み間ゐに

サクラノミ アキカエルヒモ サクラの実 秋帰る日も

サケオクル カダシオトリテ 酒贈る 堅塩とりて

サカナノリ オナジミチシテ 境名告り 同じ道して

ミヤニイル ウホキミカドニ 宮に入る 大君門に

イデムカフ ヲシカムシロニ 出で迎ふ 勅使薙に

タチナガラ キミココノエノ 立ちながら 君九重の

シトネオリ ムエニキキマス 褥 降り 六重に聴きます

11- 9 ミコトノリ ナンヂオシヒト 勅 「汝オシヒト

	ワガカワリ	ツネノヨサシモ	わが代り	常の任しも
	ミタタシヅ	チチノハルアキ	御正しぞ	千々の春秋
	タミオナデ	コノヤサカニノ	民お撫で	このヤサカニの
	マガリタマ	アガクシヒルト	曲玉	天がクシヒルト
	モチユレバ	ナカゴマスグニ	用ゆれば	ナカゴ真直ぐに
	タモツマリ	ヤタノカガミハ	保つなり	ヤタの鏡は
	タテニフレ	モロトノサガオ	左手に振れ	諸人のサガお
11-10	カンガミヨ	マタヤエガキオ	鑑みよ	また八重垣は
	ツニアツケ	アラカミアラバ	伴に預け	荒神あらば
	ヨクムケテ	メグミヤワセヨ	よく平けて	恵み和せ」と
	ミテヅカラ	タマフミクサオ	み手づから	賜ふ三種お
	ウケタマエ	ナオモオモエヨ	受けたまゑ	「なおも思ゑよ
	タカラモノ	ミルコトワレオ	宝物	見ること我お

	ミルコトク	メトルチチヒメ	見る如く	娶るチチ姫
	アヒトモニ	ツネムツマジク	相共に	常睦まじく
11-11	ミヤビナセ	ワレフタカミノ	みやびなせ	われ二神の
	ミチオナス	ワガコツラツラ	道おなす	我が子つらつら
	ミチユカバ	ヒツギノサカエ	道ゆかば	日嗣ぎの栄ゑ
	アメツチト	マサニキワナシ	天地と	まさに窮なし
	フツヌシト	ミカツチツネニ	フツヌシと	ミカツチ常に
	ハンベリテ	マツリゴトモレ	侍りて	政りごと守れ
	マユミノ	ヤトヨノハタト	檀布	八豊の幡と
	ハクワユミ	ハハヤオソエテ	葉桑弓	ハハ矢お添えて
11-12	タマウノミ	ヲシカムシロオ	賜うのみ」	勅使薙お
	オリニケリ	アルヒワカヒコ	降りにけり	ある日ワカヒコ
	カウトノニ	ノホリコカネノ	カウ殿に	上り黄金の

	ハナオトフ	タカギコタエテ	花お問ふ	タカギ答えて
	ヒノキミノ	ミヤモルカラス	「日の君の	宮守る鳥
	コガネハク	ツイニキカヤモ	黄金吐く	遂に木カヤも
	コカネサク	イサコウミコモ	黄金咲く	イサコウミコモ
	シカシカト	ナガメタガワズ	然々と	眺め違わず
11-13	コガネサク	ヒサミルヤマト	黄金咲く	久見る山と
	タタエタマキキ		讃ゑ給みき」	

● アキツ姫(ヒメ)、天(アマ)が児(ツ)の紋(アヤ)

12- 1	サツサツノ	コエトイモセノ	サツサツの	声と妹背の
	ササイハフ	ソノモトオリハ	酒祝ふ	その本縁は
	アマガツオ	ハヤアキツヒメ	アマガツお	ハヤアキツ姫の

	ツクリソメ	アマテルミコノ	作り初め	天照る御子の
12- 2	ヲシホミミ	アマツヒツギハ	ヲシホミミ	天つ日嗣は
	タガノコウ	タクハタヒメノ	多賀の国府	タクハタ姫の
	ミウチイリ	ソノサキコシノ	宮内入り	その先輿の
	アマガツオ	シホカマノカミ	アマガツお	シホカマの神
	マダシラデ	カスガノカミニ	まだ知らで	カスガの神に
	ユエオトフ	カスガコタエテ	故お問ふ	カスガ答えて
	コレムカシ	アメノマスヒト	「これ昔	天のマスヒト
	ソムクユエ	ムハタレヨモニ	背く故	六ハタレ四方に
12- 3	ワキミチテ	タミクルシムル	湧き満ちて	民苦しむる
	ソノトキニ	アマテルカミノ	その時に	天照る神の
	ノリオエテ	モロカミノウツ	法お得て	諸神の撃つ
	ハタレナカ	カンツハルナガ	ハタレ内	上ツハルナガ

	ハカ r ト	カンイキヨメバ	謀らん」と	神息読めば
	ヲヲンカミ	コレシロシメシ	大御神	これ知るしめし
	ミツノチコ	テグルノマウチ	瑞のチコ	輦の内
	タモトシタ	オキテタツイキ	袂 下	置きて立つ息
12- 4	マザルユエ	ハタレウタカヒ	混る故	ハタレ疑ひ
	カゾエセズ	ワザモミタレバ	数えせず	術も乱れば
	ヲヲンカミ	アメツチシロス	大御神	天地知ろす
	クシヒルニ	サトクハタレガ	奇しひるに	聡くハタレが
	イキハカリ	ミウタツクレバ	息謀り	御歌作れば
	ソメフダオ	サツサモチキニ	染め札お	サツサ餅飯に
	ツケナグル	サツサツツウタ	付け投ぐる	サツサツツ歌
	サスラデモ	ハタレモハナケ	『サスラでも	ハタレもハナケ
12- 5	ミツタラス	カカンナスガモ	ミツタラス	カカンナスガモ

	テタテツキ	カレノンテント	手段つき	故ノンテンも
	アニキカズ	ヒツキトワレハ	天に効かず	日月と我れは
	アワモテラスサ		天地も照らすさ』	
	サツサツト	モロガウタエバ	サツサツと	諸が唱えば
	キクハタレ	ワザモミダレテ	キクハタレ	術も乱れて
	シバラルル	カレコノウタオ	縛らるる	故この歌お
	サツサツノ	コエトタノシム	サツサツの	声と楽しむ
12- 6	カノチゴオ	アメニオクレバ	かのチゴお	天に送れば
	カミノマエ	エダソロハネバ	神の前	エダソロハネバ
	サラントス	アメノミオヤハ	去らんとす	天の御親は
	コレオホメ	ナンヂハフコノ	これお賞め	「汝 這ふ子の
	イサオシハ	モロニスギタリ	功績は	諸に過ぎたり
	キミマモレ	カミアマガツト	君護れ」	神アマガツと

	ナオタマフ	コノモトオリヒ	名お賜ふ	この本縁に
	アキツヒメ	ヌノモテツクル	アキツ姫	布もて作る
12- 6	アマガツハ	カミウタコメテ	アマガツは	神歌籠めて
	チチヒメニ	タマエバコレオ	チチ姫に	賜えばこれお
	サキカケノ	サワリオノゾク	先駈けの	障りお除く
	アマガツゾ	モシモネタミノ	アマガツぞ	もしも妬みの
	カムトキモ	アマガツハベリ	嘯む時も	アマガツ侍り
	マヌカルル	モシモウラミノ	免かるる	もしも怨みの
	ナヤマスモ	アマガツハベリ	悩ますも	アマガツ侍り
	シリゾクル	マカルウラミハ	斥くる	マカル怨みは
12- 8	アマガツガ	ミニセメウケテ	アマガツが	身に責め受けて
	カハルナリ	アレオニモノオ	代るなり	荒れ鬼物お
	ヤフルナラ	ソラハフコニテ	破るなら	空這ふ子にて

	マネキイレ	シメヒキワタシ	招き入れ	ゞめ縄引き渡し
	ミソギナセ	オニカミシバル	ミソギなせ	鬼神しばる
	ウツワモノ	ソラホオコトハ	器もの	空ホオコとは
	ヒツジハエ	ワラモテツクル	ヒツジハエ	藁もて作る
	カンガツハ	ヌノモテツクリ	カンガツは	布もて作り
12- 8	カミマネク	アキツメノウタ	神招く	アキツ姫の歌
	アマガツニ	カミタマワレバ	『アマガツに	神賜れば
	モロハタレ	サハリナストモ	諸ハタレ	障りなすとも
	キミガミニ	ヒトタビカハリ	君が身に	一度代り
	タチマチニ	タチハタラキテ	忽ちに	立ち働きて
	キミガオエ	ミナマヌカルル	君が汚穢	皆免かるる
	アマガツノカミ		アマガツの神』	
	コノウタオ	ミハラニコメテ	この歌お	御腹に込めて

12-10	ツクルベシ	トキニシホカミ	作るべし	時にシホ神
	マタトハク	イヅレモミギノ	又問はく	「いづれも右の
	ゴトクカヤ	カスガコタエテ	如くかや」	カスガ答えて
	サニアラズ	ダダニツクレバ	「さにあらず	ダダに作れば
	カレキナリ	ミタマアレバゾ	枯木なり	御魂あればぞ
	タトフレバ	シホノアヂアリ	例ふれば	塩の味あり
	ハカラネバ	アチナシヤケド	計らねば	味なし焼けど
	シホナラズ	コノアマガツモ	塩ならず	このアマガツも
12-11	ココロアヂ	イレテナスナリ	心 味	入れてなすなり」
	ソノトキニ	シホカマハジメ	その時に	シホカマ始め
	モロホメテ	ハヤアキツメノ	諸賞めて	ハヤアキツ姫の
	イサオシオ	ヨヨニノコシテ	功績お	世世に遺して
	サツサツノ	コエトタノシム	サツサツの	コエと楽しむ

ヨメイリノ ソノサキノリノ 嫁入りの その先駈の

アマガツゾコレ アマガツぞこれ

● ワカ彦、伊勢(イセ)、鈴鹿(スズカ)の紋(アヤ)

13- 2 タガノコフ ツボワカミヤノ 多賀の国府 つぼ若宮の

アツキヒノ エラミウカカフ 暑き日の 選み伺ふ

ワカヒコニ ミキタマワリテ ワカヒコに 御酒賜わりて

ミコトノリ カミハイモセノ 勅 「神は妹背の

ミチヒラク ワレハカスガニ 道開く 我れはカスガに

コレウケン カスガハオナシ これ受けん」 カスガ正装おなし

ヒタニマス ミギハヒタカミ 左にます 右はヒタカミ

13- 3 ウオキミト カルキミヲキナ 大君と カル君翁

	ツギカトリ	カンキミオヨビ	次ぎカトリ	カン君及び
	カシマキミ	ツクバシホカマ	カシマ君	ツクバ・シホカマ
	モロモマス	トキニミトヒハ	諸もます	時に御問ひは
	サキニミツ	アビセンツルオ	「さきに水	浴びせん」つるお
	ウホキミガ	トメテマネナス	大君が	止めて真似なす
	コレイカン	カスガコタエテ	これ如何	カスガ答ゑて
	ノコルノリ	ムカシウビチニ	「残る法	昔ウビチニ
13- 4	ヒナガタケ	モモニトツギテ	ヒナが岳	桃に嫁つぎて
	ハツミカニ	サムカワアビル	初三日に	サムカハ浴びる
	ソサノヲハ	ヒカハニアビル	ソサノヲは	ヒカハに浴びる
	コレツヨシ	キミハヤサシク	これ強し	君は優しく
	ヤワラカニ	マセバカガエテ	柔らかかに	ませば考えて
	トトムモノカナ		留むものかな」	

	イセオコフ	カスガトクナリ	イセお乞ふ	カスガ説くなり
	イモオセハ	ヤモヨロウヂノ	妹背は	八百万氏の
13- 5	ワカチナク	ミナアメツチノ	別ちなく	みな天地の
	ノリソナフ	キミハアマテル	法具ふ	君は天照る
	ツキヒナリ	クニカミハソノ	月日なり	国神はその
	クニノテリ	タミモツキヒゾ	国の照り	民も月日ぞ
	メニホアリ	ヒスリヒウチハ	陰に火あり	火擦り燧は
	ツキノヒゾ	ヲニミツアリテ	月の火ぞ	陽に水ありて
	モユルオノ	ナカノクラキハ	燃ゆるオの	中の暗きは
	ホノミツヨ	メヲトタガエド	ホの水よ	陰陽と違えど
13- 6	カミヒトツ	ヨヲトハヒナリ	神ひとつ	良夫は日なり
	ヨメハツキ	ツキハモトヨリ	良妻は月	月はもとより
	ヒカリナシ	ヒカゲオウケテ	光りなし	日光お受けて

	ツキノカゲ	メヲもコレナリ	月光の影	女男もこれなり
	ムツマジク	コオウミソダテ	睦じく	子お生み育て
	マタユヅル	メハヨニスメル	また譲る	女は世に住める
	トコロエズ	ウマシミヤビノ	所 得ず	うましミヤビの
	エイニオレ	タエノコトバニ	エイに居れ	妙の言葉に
13- 7	モトムベシ	ヲセノタラチハ	求むべし	夫のタラチは
	ウミノオヤ	アケクレムベニ	生みの親	明け暮れむべに
	ウマシモテ	ヲイニツカヘヨ	ウマシもて	老いに仕へよ
	ヨヲトニハ	ミサホオタテヨ	世男には	操お立てよ
	ヰモノミハ	ヲセノオナカニ	妹の身は	夫のオナカに
	オルゴトク	ナセバミサホゾ	おる如く	なせば操ぞ
	メハナナシ	イエニトツゲバ	女は名無し	家に嫁げば
	ヲセノナニ	タガウチムロト	夫の名に	誰が内室と

13- 8	カルキミモ	ミタレユルセバ	カル君も	乱れ許せば
	タレウチゾ	ミヤニノボレバ	垂れ内ぞ	宮に上れば
	ウチツミヤ	キミハメグミオ	内つ宮	君は恵みお
	クニニノブ	キヤハオナカゾ	国に展ぶ	宮はオナカぞ
	アガタモリ	サトモルヒコモ	県 守り	里守るヒコモ
	ソレタケノ	ムロモアラカモ	それ丈の	室も御殿も
	オナカナリ	タミハタハタオ	オナカなり	民は田畠お
	ヲサムレバ	ヤハヲセノミゾ	治むれば	家は夫の身ぞ
13- 9	ヒハアメニ	ツキハツチモル	日は天に	月は土守る
	ヨメノミハ	ヨヲトヒトリニ	善女の身は	善夫一人に
	ムカフヒゾ	ヨロクニツトモ	向ふヒぞ	万クニツトも
	ウムウマヌ	アレバメヲトモ	生む生まぬ	あれば女夫も
	クニツトゾ	ウマズバヨソノ	クニツトぞ	生まずば他の

	メオメトレ	ヲメノオナカニ	女お嫁れ	夫のオナカに
	キモアリト	ハラアシコトバ	妹ありと	腹悪し言葉
	ナカルベシ	ハラヤネヌマニ	なかるべし	腹病めぬ間に
13-10	ヤエニサトセヨ		妙に論せよ	
	オキツヒコ	ハラアシコトニ	オキツヒコ	腹悪し事に
	ツマアレテ	ミサホタタヌト	妻荒れて	操 立たぬと
	チキリサル	チチウホトシガ	契り去る	父ウホトシが
	アセミヤニ	ナゲケバミウチ	イセ宮に	嘆けば御内
	モロメシテ	マフツノカガミ	諸召して	マフツの鏡
	ウツサルル	ヲメハケガルル	写さるる	夫は穢るる
	ニステカマ	メハカクサルル	ニステ釜	女は隠さるる
13-11	ツクマナベ	ワガカンバセモ	ツクマ鍋	わが顔容も
	アエミエズ	ハヂハヅカシク	アエ見えず	恥ぢ辱かしく

	アメニコフ	ヲメユルサネバ	天に請ふ	夫許さねば
	イヤハヂテ	マカラントキニ	いや恥て	罷らん時に
	クラムスビ	トドメテシカル	クラムスビ	止めて叱る
	ワガコノミ	ニステノツラオ	わが子の身	ニステの面お
	ミガカセト	ヲヤノヲシエニ	磨かせと	親の教えに
	オキツヒコ	フタタビトツギ	オキツヒコ	再び嫁ぎ
13-12	ムツマジク	キモセノミチオ	睦じく	妹背の道お
	マモリツツ	モロクニメグリ	守りつつ	諸国巡り
	ヨオヲブル	ハチメオワリノ	世おヲブル	始め終りの
	ツツマヤカ	ミチヲシユレバ	慎まやか	道教ゆれば
	ヲランカミ	ホメテタマハル	大御神	賞めて賜はる
	カマドカミ	テナベオサグル	竈 神	手鍋お下ぐる
	キタナキモ	ミカケバヒカル	汚きも	磨けば光る

	カミトナル	クニモリタミノ	神となる	国守り民の
13-13	サトシニモ	ツクマナサセル	諭しにも	ツクマなさせる
	アセノミチ	コスエオモフニ	イセの道	子未思ふに
	イマシネノ	ナケレバミタル	戒めの	なければ乱る
	ハタレマノ	タカラアツメテ	ハタレマの	宝 集めて
	スエキユル	コレススクラゾ	末消ゆる	これススクラぞ
	イキノウチ	ホシオハナルル	生きの内	欲しお離るる
	コレハスズカゾ		これはスズカぞ	
	チチヒメハ	タレヨリイデテ	チチ姫は	垂れより出でて
13-14	ワカヒコニ	イマキクスズカ	ワカヒコに	「今聴くスズカ
	ワガキミナ	キミタマワレド	我がキミ名	君賜われど
	ワケシラズ	マタトキタマエ	訳知らず	又説き給え」
	コタエトク	スズハマサカキ	答え積く	「スズはマサカキ

	ホスエノビ	トシナキナカニ	穂末のび	年にきナカの
	ムヨロホキ	ホシキオサレバ	六万寿き	ホシキお去されば
	スズカナリ	タカラホシキハ	スズカなり	宝 欲しきは
	スエキユル	トキニカルキミ	末消ゆる」	時にカル君
13-15	ススミイフ	ナンヂトガムヤ	進みいふ	「汝 答むや
	ワガタカラ	ヒトタタユルゾ	わが宝	人讃ゆるぞ
	コノコタエ	ヒトノサイワヒ	この答ゑ	人の幸ひ
	ワガマヨヒ	マガリクルシム	わが迷ひ	曲り苦しむ」
	マタイワク	タノシクオラバ	又日く	「楽しく居らば」
	カスガマタ	ウイオシレルヤ	カスガ又	「ウイお知れるや
	アメニウケ	アメニカエルゾ	天に受け	天に帰るぞ」
	カスガマタ	キミニテモホシ	カスガ又	「君にても欲し
13-16	タミハナホ	スズカノフミオ	民は尚	スズカの文お

	ミザルカヤ	ヲキナウナヅキ	見ざるかや」	翁うなづき
	クシヒコガ	イサメノスズカ	「クシヒコが	諫めのスズカ
	イマトケリ	クルシミハナニ	今解けり	苦しみは何」
	カスガトク	ムカシトヨケノ	カスガ説く	「昔トヨケの
	ミコトノリ	ワレミヨオシル	勅	われ御代お知る
	ハツノヨハ	クニトコタチゾ	初の代は	クニトコタチぞ
	アメニユキ	ミルモトアケノ	天にゆき	見るモトアケの
13-17	モリサダメ	フタヨムスビノ	守定め	二代ムスビの
	モヨロホキ	ユキテタマノヲ	百万穂木	行きて魂の緒
	ナスオキク	イマタマギネモ	なすおきく	今タマギネも
	ヤヨロトシ	ホシニムサボル	八万歳	欲しに貧る
	ココロナク	ユキキノミチモ	心なく	行き来の道も
	オホエシル	メヲオムスビテ	覚ゑ知る	メヲお結びて

	ヒトココロ	ヨニカエルトキ	人ころ	世に帰る時
	スグナレバ	マタヨクウマレ	直ぐなれば	またよく生まれ
13-18	ヨコホシハ	アエカエラヌゾ	邪欲は	敢ふ帰らぬぞ
	マタトワク	ヒハヲニカエリ	又問わく	「火は陽に帰り
	ミツハメニ	ヒトハヒトミニ	水は陰に	人は・と・に
	カエランカ	イワクハグサヤ	帰らんか	日く「ハグサや
	オノコグサ	キネアワナラズ	オノコグサ	稲・栗ならず
	アヤカリテ	ヒトモウマルル	あやかりて	人も生まるる
	ミチワスル	タトエバタシム	道忘る	例えばタシム
	カラシムシ	ウオトリケモノ	カラシムシ	魚・鳥・獣
13-19	アイモトム	テレハタカラハ	相求む	テレハ宝は
	ナンノタメ	ホメハウマキニ	何の為	美服 美食に
	フケルユエ	マレニウマルモ	耽る故	稀に生まるも

	マツシクテ	ヤツコトナリテ	貧しくて	奴となりて
	ミオシノギ	ヒトタノシマス	身お凌ぎ	人樂します
	カノホシオ	ウラヤムヒトガ	かの欲しお	羨やむ人が
	ハムユエニ	タマノヲミタレ	嘯む故に	魂の緒乱れ
	ツヂカゼノ	チマタニシキノ	旋風の	岐にシキの
13-20	クルシミガ	ケモノトナルゾ	苦しみが	獣となるぞ
	カミウタズ	タトエバユメノ	神打たず	例えば夢の
	オソワレノ	シノビカタクテ	怖われの	忍び難くて
	ワキマエズ	マカルノツミモ	弁えず	死るの罪も
	オソワレゾ	ヒトオマトワス	怖われぞ	人お惑わす
	ワガホシモ	ヒトハウタネド	我が欲しも	他人は打たねど
	タマノヲニ	オボエセメラレ	魂の緒に	覚忽責められ
	ナガキユメ	アメノマツリオ	長き夢	天の祭りお

13-21	タテオケヨ	カバネノミヤニ	立て置けよ	カバネの宮に
	カンクラオ	モフセバヲトケ	神座お	申せば緒とけ
	ヒトナルゾ	マツリナケレバ	人なるぞ	祭政なければ
	アマメグミ	モレテオツルゾ	天恵み	漏れて墜つるぞ
	コオモツテ	モシツマウマズ	子お持て	もし妻生まず
	タネタエバ	メカケメオキテ	種絶えば	妾女置きて
	タネナセヨ	メカケトナレル	種なせよ	妾となれる
	メノツトメ	ツマオウヤマエ	女の務め	妻お敬え
13-22	メカケメハ	ホシニナヅラフ	妾女は	星に準らふ
	ホシヒカリ	ツキニオヨバズ	星光り	月に及ばず
	ウツクシモ	キヤニナイレソ	美しも	宮にな入れそ
	アマノハラ	ツキナラブレバ	天の原	月並ぶれば
	クニミタル	ツマトメカケト	国乱る	妻と妾と

	ヤニイレバ	イエオミタルゾ	家に居れば	家お乱るぞ
	ツキハヨル	ツマナウトミソ	月は夜	妻な疎みそ
	ウチヲサム	メカケノコトバ	家内治む	妾の言葉
13-23	ナマツリソ	コオウムモリハ	なまつりそ	子お生む守りは
	ウマヌトキ	スツルムラボシ	生まぬ時	棄つる群星
	ノリミタル	イニシアマカミ	法乱る	昔 天神
	ホシトナル	コレハノリナス	星となる	これは法なす
	メノスガタ	ヨクテアルルモ	女の姿	良くて荒るるも
	ミニクキニ	ヨキミヤビアリ	醜きに	よきミヤビあり
	ヨソオヒニ	ナフミマヨヒゾ	装ひに	な踏み迷ひそ
	イセノミチ	アマノウキハシ	イセの道	天の浮橋
13-24	ヨクワタス	カミノヲシエノ	よく渡す	神の教ゑの
	イモヲセノ	ミチノオオムネ	妹背の	道の大旨

	トホルコレナリ		通る是れなり	
	ツクバウシ	ホシオサルニハ	ツクバウシ	「欲お去るには
	ミナステテ	タノシミマツヤ	皆すてて	楽しみ待つや」
	カスガマロ	シカラズトメテ	カスガマロ	「然らず止めて
	タラザラバ	ウエバホトコシ	足らざらば	飢えば施し
	ウケンカヤ	イワクキタナシ	受けんかや」	日く「穢し
13-25	ホトコシオ	ウケバホヒトゾ	施しお	受けば乞食ぞ
	キカザルヤ	ナオカラザレバ	聞かざるや	直からざれば
	ヒトナラズ	ヨニアリナガラ	人ならず	世にありながら
	ソノワザニ	ウメルタカラオ	その業に	生める宝お
	タダコヒテ	クラフイヌコソ	ただ乞ひて	食ふ犬こそ
	アノツミヨ	マタトフタカラ	天の罪よ」	又問ふ「宝
	サルコトハ	カスガマタトク	去ることは」	カスガ又説く

	ホシサルハ	ステズアツメズ	「欲し去るは	棄てず集めず
13-26	ワザオシレ	タカラアツメテ	術お知れ	宝 集めて
	クラニミツ	チリヤアクタノ	倉に満つ	塵や埃の
	ゴトクナリ	ココロスナオノ	如くなり	心 素直の
	ヒトアラバ	ワガコノコトク	人あらば	わが子の如く
	トリタテテ	ミナタストキハ	取り立てて	皆育す時は
	ホシモナシ	チリトアツメテ	欲しもなし	塵と集めて
	ヨニセマリ	ウラヤムモノガ	世に迫り	羨む悪念が
	カムユエニ	タマノヲミダレ	嘯む故に	魂の緒乱れ
13-27	ミヤナクテ	スエマモラヌオ	宮なくて	末守らぬお
	タマカエシ	ナセバヲトケト	魂返し	為せば緒とけと
	ミヤニイル	ナサネバナガク	宮に入る	為さねば長く
	クルシムゾ	トキニシホカマ	苦しむぞ」	時にシホカマ

	コナキトテ	トエバカスガノ	子なきとて	問えばカスガの
	ヲシエニハ	アユキワスキノ	教ふには	「アユキ・ワスキの
	マツリヌシ	タノミテモツテ	祭り主	頼みてもつて
	タマカエシ	ナサバクルシム	魂返し	なさば苦しむ
13-28	タマノヲモ	トケテムネカミ	魂の緒も	融けて宗神
	ミナモトエ	タマシキワケテ	源え	魂別けて
	カミトナル	トフトキヒトノ	神となる	尊とき人の
	コトウマル	ナレドユキスキ	子と生まる	なれどユキ・スキ
	タマユラゾ	スエオヲモヒテ	タマユラゾ	末お思ひて
	ムツマジク	ワサオツトムル	睦まじく	業お勤むる
	イセノミチカナ		イセの道かな」	
	コノミチオ	マナブトコロハ	この道お	学ぶ処は
13-29	カンカゼノ	イセノクニナリ	神風の	伊勢の国なり

チチヒメモ	ノチニハイセノ	チチ姫も	後にはイセの
ヲヲカミニ	ツカエスズカノ	大神に	仕ゑ鈴鹿の
ミチオエテ	イセトアワジノ	道お得て	伊勢と淡路の
ナカノホラ	スズカノカミト	中の洞	スズカの神と
ハコネカミ	ムカフイモヲセ	箱根神	向ふ妹背
ホシオサル	スズカノヲシエ	欲しお去る	スズカの教ゑ
ヲヲイナルカナ		大いなるかな	

● 世継(ヨツギ)ぎ告(ノ)る祝詞(ノトコト)の紋(アヤ)

14- 1	アメツチモ	ウチトモスガニ	天地も	内外も清に
	トホルトキ	ヤモヨロミチノ	通る時	八百万三千の
	ミコトヒコ	ミウチニハベリ	ミコト・ヒコ	御内に侍り

	ミチオキク	モモヨロタミモ	ミチお聞く	百万民も
	オシラスニ	ムレキクトキニ	お白州に	群れ聞く時に
	クシマトハ	ヒノシマオモル	クシマトは	日のシマお守る
	イワマトハ	ツキノシマモル	イワマトは	月のシマ守る
14- 2	イクシマト	タルシマヨモノ	イクシマト	タルシマ四方の
	ミカキモリ	イカスリウチノ	御垣守り	イカスリ内の
	ヲニヤラヒ	カカンノンテン	鬼遣らひ	カカンノンテン
	ソロフトキ	ヒタリハタニノ	揃ふ時	左はタニの
	サクラウチ	ミヨノサクラノ	サクラウチ	御世の桜の
	ナラシウタ	ミギハオホヤマ	ならし歌	右はオホヤマ
	カグツミノ	トキシクカグノ	カグツミの	トキシク橘の
	イワヒウタ	ココトムスビガ	祝ひ歌	ココトムスビが
14- 3	カカンナス	カスガワカヒコ	カカンなす	カスガ・ワカヒコ

	ミハシラオ	ヨツギミクラニ	御柱お	世継ぎ御座に
	ミテムスビ	アメノミヲヤオ	ミテ結び	アメノミヲヤお
	マネキコフ	ヲヲモノヌシガ	招き乞ふ	ヲヲモノヌシが
	ノンナシテ	ヨロギミホヒコ	ノンなして	ヨロギミホヒコ
	ユフハナニ	ヤイロニギテノ	木綿花に	八色幣の
	カススムム	ヒトコトヌシガ	神すすむ	ヒトコトヌシが
	デンナシテ	カダキヤスヒコ	デンなして	カダキ・ヤスヒコ
14- 4	ヌサグシデ	ヨソコノハナニ	ヌサグシデ	四十九の花に
	コノミナル	アグリオエント	木の実なる	アグリお得んと
	モロヲガム	トキニアマテル	諸拝む	時にアマテル
	オホンカミ	ヨツギノアヤオ	オホンカミ	世継ぎのアヤお
	ヲラントス	ヨロノヨワイノ	織らんとす	「万の齡の
	ミコトヒコ	ヤヤチヨタモツ	ミコト・ヒコ	やや千齡保つ

	タミモミナ	クニトコタチノ	民も皆	クニトコタチの
	コスエナリ	ソノスエフツク	子孫なり	その末悉く
14- 5	アメミヲヤ	アメツチヒトモ	アメミヲヤ	天地人も
	ワカザルニ	ウイノヒトイキ	分かざるに	初の一息
	ウゴクトキ	ホガシノボリテ	動く時	東 昇りて
	ニシクダリ	ウツホニメグリ	西降り	ウツホにめぐり
	アワウビノ	メグレルナカノ	天地初発の	廻れる中の
	ミハシラニ	サケテヲヲナル	御柱に	裂けて陰陽なる
	ヲハキヨク	カルクメグリテ	陽は清く	軽く廻りて
	アマトナリ	メハナカニコリ	天となり	陰は内に凝り
14- 6	クニトナル	ミヅハニワカレ	地となる	水・土分かれ
	ヲノウツホ	カゼウムカゼモ	陽のウツホ	風生む、風も
	ホオウミテ	ヲハミツトナリ	火お生みて	陽は三つとなり

	メハフタツ	ヲセノムナモト	陰は二つ	男のムナモト
	ヒトマロメ	キモノミナモト	日と丸るめ	女のミナモト
	ツキトコリ	ウツホカゼホト	月と凝り	ウツホ・風・火と
	ミヅハニノ	キツマシワリテ	水・土の	五つ混わりて
	ヒトトナル	アmenaカヌシノ	人となる	アmenaカヌシの
14- 7	カミハコレ	ヤモヨロクニニ	カミはこれ	八面諸地に
	ヨロコウミ	ミナクハリオク	万子生み	皆配りおく
	ヒトノハツ	アメニカエリテ	人の初	天に帰りて
	アメミオヤ	アメノカタチハ	アメミオヤ	天の形は
	イワヲヤマ	ヒツキモクニモ	巖 山	日月も地も
	ハラコモリ	トハヤエニギテ	ハラこもり	トは八重幣
	モトアケノ	ヨソコノタネノ	元明けの	四十九の種の
	マカミクラ	ミヲヤツゲタス	中御座	ミヲヤ告げ治す

14- 8	ケタスミニ	ヤキミトホカミ	ケタスミに	八君トホカミ
	エヒタメゾ	ツギアイフヘモ	エヒタメぞ	次ぎアイフヘモ
	ヲスシカミ	スエハミソフノ	ヲスシ神	未は三十二の
	タミメヒコ	モトナカスエノ	タミメヒコ	元・中・末の
	ミクラアリ	ソムヨロヤチノ	三座あり	十六万八千の
	モノソヒテ	ヒトウマルトキ	もの副ひて	人生まる時
	モトツカミ	ソノタエモリガ	モトツ神	そのタエモリが
	タネクダシ	モノトタマシヒ	種降し	物とタマシヒ
14- 9	ヌヒヤワス	アナレクラワタ	結ひやわす	アナレ・クラ・ワタ
	シムネコエ	ナリワミメカミ	シム・ネコエ	ナリワ・ミメカミ
	ワガカミハ	ヒツキノウルオ	わが神は	日月のウルお
	クダスユエ	ヨツギウマント	降すゆゑ	世継ぎ生まんと
	オモフトキ	メノアカソソギ	思ふ時	目の垢濯ぎ

	アサヒノリ	メヨリツキヒノ	朝日祈り	目より月日の
	ウルオエテ	トツゲバヲセノ	ウルお得て	交接げば男の
	ウルナミガ	タマシマカワノ	ウルナミが	タマシマカワの
14-10	イモガチト	ハラムシラホネ	女がチと	孕むシラホネ
	チチノナミ	ハハノアカチト	父のナミ	母のアカチと
	チナミアヒ	ヒルハチノボリ	チナミ会ひ	昼はチ昇り
	ヨハナミノ	ノボルヒツキト	夜はナミの	昇る日月と
	ヒトメグリ	アスフタメグリ	ひと廻り	翌日ふた廻り
	ミメグリト	ツキニミソワノ	三廻りと	月に三十輪の
	メグリマシ	ヤヤムソヨカニ	廻り増し	やや六十四日に
	メグリミツ	スベテチヤソニ	廻り満つ	全て千八十に
14-11	メグリトゲ	ヤヤミトリコノ	廻り遂げ	やや嬰兒の
	ナリソナフ	チナミノアカハ	なり備ふ	チナミのアカは

	オノコロノ	エナノカタチハ	オノコロの	胞衣の形は
	カワクルマ	ホソノヲトナル	カワクルマ	臍の緒となる
	ミハシラノ	ホトヨクオモリ	御柱の	ホトヨクお守り
	メグリカケ	ヒニヒトメグリ	廻り欠け	日にひと廻り
	オクレヘリ	ヤヨキハミソコ	遅れ減り	三月は三十九
	ハナオソフ	ウツキミツレバ	ハナお副ふ	四月満つれば
14-12	ミトリツス	サツキサノコロ	ミトリツス	五月さの頃
	ヒトメグリ	サツサハラヲビ	一めぐり	サツサ腹帯
	イワタナス	ナカクタトホル	イワタなす	ナカ菅通る
	アメノホト	タラチネノホト	天のホト	両親のホト
	メオマネキ	ムツノチナミノ	陰お招き	睦のチナミの
	ツユアフレ	ミナツキカワキ	露溢れ	六月乾き
	ホソノヲエ	チシルトホレバ	臍の緒え	血汁通れば

	ミオヒタス	チシルニラレテ	身お養す	血汁煮られて
14-13	キツイロノ	ハニモテツクル	五つ色の	埴もてつくる
	モリノカミ	フヅキクラムラ	守りの神	七月クラムラ
	ハツキワタ	ナカツキハミメ	八月ワタ	九月は眉目
	シムソヨベ	コエノヨソヤヂ	血脈十四べ	声の四十八路
	アワノカミ	スベコソムアヤ	アワの神	全九十六アヤ
	ソナワリテ	ソフニエナヌギ	備わりて	十二月に胞衣脱ぎ
	ウマルナリ	タトエメアレド	生まるなり	たとえ女あれど
	ヨツギナク	エントオモハバ	世継ぎなく	得んと思はば
14-14	アグリシレ	アサヒノウルオ	アグリ知れ	朝日のウルお
	ミニウケテ	コミヤニアレド	身に受けて	コミヤにあれば
	ヨルンミト	トモニメグレド	夜ナミと	共に廻れど
	ヲハサキニ	メオツツムユエ	陽は先に	陰お包む故

	セバメラレ	ツイニホツエノ	狭められ	遂にホツエの
	ハセイデテ	ハナクキトナル	はせいでて	花茎と成る
	ヲノハジメ	コレヲノコウム	陽の初め	これ男の子生む
	アグリナリ	メノコハサキニ	アグリなり	女の子は先に
14-15	ツキヤドリ	ノチヒオマネク	月宿り	後日お招く
	メハハヤク	ヲハツツマレテ	陰は早く	陽は包まれて
	ハナノコロ	タマシマカドニ	ハナの頃	タマシマカドに
	イエリナス	コレメノハジメ	イエリなす	これ女の初め
	メノコウム	ヲノコホシクバ	女の子生む	男の子欲しくば
	アグリナセ	ワガミオシエテ	アグリなせ	わが身教ゑて
	エサシメン	アマテルクニハ	得さしめん	アマテル地は
	ワガミタマ	アリトシルベシ	我が身魂	ありと知るべし
14-16	ワレムカシ	ヒノワニアリテ	われ昔	日の輪にありて

	テラセドモ	ヒトミオウケズ	照らせども	人身お受けず
	ミチビカズ	フタカミタメニ	導かず	二神ために
	タラチネト	ナリテマネケバ	両親と	なりて招けば
	ヒトノミト	ナリテハラメド	人の身と	成りて孕めど
	ナガキシテ	コソムツキマデ	長居して	九十六月まで
	クルシムル	ヤヤウルレド	苦しむる	やや生るれど
	ミヒタシニ	ヒトヒモヤスキ	み養しに	一日も安き
14-17	ココロナシ	ワガミハキミト	心 無し	わが身は君と
	ナリトテモ	ヲヤノメグミオ	成るとても	親の恵みお
	カエサント	フシテヲモエバ	返さんと	伏して思えば
	コオサヅク	ミチハメグミオ	子お授く	ミチは恵みお
	カエスナリ	ソノミナモトハ	返すなり	その源は
	トヨケカミ	カツラキヤマニ	トヨケカミ	カツラキ山に

	ミソギシテ	サワルヨコガオ	みそぎして	障る邪悪お
	ノゾカント	ヤチタビイノル	除かんと	八千度祈る
14-18	ニマヌケテ	アマカミヒルオ	ニマぬけて	天神ヒルお
	ワケクタシ	ワガココロウル	分け降し	わが心 得る
	ミチラルハ	アサヒノミヤニ	ミチなるは	アサヒの宮に
	カミマツリ	アメノミヲヤニ	神祭り	アメノミヲヤに
	コタフナリ	ヨツギノハタオ	応ふなり	世継ぎのハタお
	ヲラントテ	ヒナグルカズノ	織らんとて	梭投ぐる数の
	ヨツギコオ	サツクルイセノ	世継ぎ子お	授くるイセの
	アグリニハ	アサヒオウケテ	アグリには	朝日お受けて
14-19	アタタマル	トキニトツゲバ	暖まる	時に嫁げば
	コオハラミ	イキスコエミメ	子お孕み	イキスコエミメ
	ソナエウム	ヨツギモガナニ	備え生む	世継ぎもがもに

	ミコトノリ		勅	
	ワガココロ	マネケトホカミ	「『わが心	招けトホカミ
	エヒタメノ	クミハミチノブ	エヒタメの	地はミチのぶ
	ウツハモノ	マネカバウエニ	ウツハモノ	招かば上に
	アラハレテ	ハタレヤブレバ	顕はれて	ハタレ破れば
14-20	サハリナシ	ミノスガナレバ	障りなし	身の清成れば
	カミココロ	メグミテハナニ	神心	恵みてハナに
	ミオウルゾ	イセノヲシエノ	身お徳るぞ』	イセの教ゑの
	アメニコタエテ		天に応ゑて	
	ノトハコレ	モロニモフセト	祝詞はこれ	諸に申せ」と
	ヲラストキ	カスガワカヒコ	思す時	カスガ・ワカヒコ
	タチイデテ	オカミツツシミ	たち出でて	拝みつつしみ
	アルココロ	モフセルウタニ	ある心	申せる歌に

14-21	アメイノル	コノテカシハユ	『天祈る	子の手拍手ゆ
	オトオスグ	ヤトルオナカノ	音お直ぐ	宿るオナカの
	ミコトナル	コノコハマスグ	御子となる	この子は真直
	タラチネノ	ナエノヨツギノ	両親の	苗の世継ぎの
	ミコトナリケリ		御子となりけり』	
	カクミタビ	ウタヒマスレバ	かく三度	歌ひますれば
	ミホヒコモ	タチウヤマヒテ	ミホヒコモ	立ち敬ひて
	オモフコト	モフセルウタニ	思ふこと	申せる歌に
14-22	コオコフル	イモヲセノカニ	子お乞ふる	イモヲセのかに
	コモリクノ	コモリソタテン	こもりくの	子守り養てん
	タラチネノカミ		タラチネの神』	
	カクミタビ	ウタヒマスレバ	かく三度	歌ひますれば
	ヤスヒコモ	タチウヤマイテ	ヤスヒコモ	立ち敬いて

	オモフコト	モフセルウタニ	思ふこと	申せる歌に
	ヤスヤスト	サクラノババノ	『やすやすと	桜のババの
	ミトリコオ	カツテニカケテ	ミトリ子お	カツテにかけて
14-23	イデヤウマセン		いでや生ません』	
	カクミタビ	ウタヒマスレバ	かく三度	歌ひますれば
	ミコトノリ	ナンヂワカヒコ	勅	「汝ワカヒコ
	ヒトフルニ	アマノコヤネト	ひとふるに	アマノコヤネと
	ナニシアエ	ヤマフヲシテハ	名にしあゑ	賜ふヲシテは
	カスガカミ	マタミホヒコガ	カスガ神	又ミホヒコが
	ミソムコオ	ヒタスココロハ	三十六子お	養す心は
	ミニコタエ	タマフヲシデハ	身にこたえ	賜ふヲシデは
14-24	コモリカミ	マタヤスヒコハ	コモリ神	又ヤスヒコは
	ヤスヤスト	トリアグコトオ	やすやすと	とり上ぐ事お

ワザトナセ タマフヲシテハ 業となせ 賜ふヲシテは

カツテカミ マタモロカミニ カツテ神」 又諸神に

ミコトノリ ツギコイノラバ 勅 「継子祈らば

ワガウタト コヤネトコモリ 我が歌と コヤネとコモリ

カツテミナ アメニコタフル カツテ皆 天に応ふる

ヲシエナリ タミカナラズモ 教ふなり 民必らずも

14-25 コレナワスレソ これな忘れそ」

コノトキニ ヤモヨロカミモ この時に 八百万神も

モロタミモ ヲシエオキキテ 諸民も 教ふお聞きて

ヤチタビニ コダネウルコト 八千度に 子種得ること

サダマルト チタビウヤマフ 定まると 千度敬まふ

ノトコトゾコレ 祝詞ぞこれ

● 御食(ミケ)、万(ヨロズ)、生成(ナル)の紋(アヤ)

15- 1	アメツチモ	ノドケキトキニ	天地も	のどけき時に
	アマテラス	カミノミユキノ	天照らす	神の御幸の
	フタミガタ	ミシホオアビテ	二見浦	み潮お浴びて
	ミソギナス	トモノクスヒガ	みそぎなす	供のクスヒが
	イブカサオ	アメニモフサク	訝さお	天に申さく
	チチミカド	ヤブサクルマノ	「父帝	八房輿の
	ミユキナス	カミモケガレノ	み幸なす	神も穢れの
15- 2	アルヤラン	トキニアマテル	有るやらん」	時にアマテル
	ミコトノリ	ナンヂヌカタダ	勅	「汝ヌカタダ
	モロモキケ	ワガウマレネニ	諸も聞け	我が生まれ根に
	アカモナク	アヲウケウマレ	垢もなく	天陽受け生まれ

	ネハキヨク	ウゴメクタミニ	根は清く	蠹く民に
	メモケガレ	アシキウタエニ	目も穢れ	悪しき訴ゑに
	ミミケガレ	ハナモチナラヌ	耳穢れ	鼻持ちならぬ
	ヲシエグサ	ヲサメサトセル	教ゑぐさ	治め諭せる
15- 3	ココロバノ	ムハシソソギテ	ココロバの	ムハシ滌ぎて
	ミオシラゲ	ヒヲネニカヘル	身お精らげ	日陽根に帰る
	カンカタチ	ケノシシハメバ	神形	獣の肉食めば
	シムケガレ	ヨツナルシシハ	シム穢れ	四音なる肉は
	ナホスギテ	チヂミケガレテ	ナホ過ぎて	縮み穢れて
	ミモカルル	タトエバニゴル	身も枯るる	例えば濁る
	ミツカワク	シシモニゴレバ	水乾く	肉も濁れば
	カハキツク	キヨナオハメバ	乾き付く	青菜お食めば
15- 4	チモキヨク	ウシホノゴトシ	血も清く	ウシホの如し

	ヨヨタモツ	アメノウムタミ	代々保つ	天の生む民
	コノゴトク	ナガイキミント	この如く	長生きみんと
	クヒモノノ	ヨシアシワクル	食ひ物の	良し悪し分くる
	ナリソメオ	モロタミキケヨ	なりそめお	諸民聞けよ
	アメツチノ	ヒラケルトキノ	天地の	ひらける時の
	ヒトイキガ	メヲトワカレテ	一息が	陰陽と別かれて
	ヲハアメニ	メハツチトナル	陽は天に	陰は地となる
15- 5	ヲノウツボ	カゼウミカゼモ	陽の空	風生み風も
	ホトワカレ	ウオセノムネハ	火と分かれ	ウオセの宗は
	ヒノワナル	イメノミナモト	日の輪なる	イメの源
	ツキトナル	ツチハハニミヅ	月となる	地は埴水
	カツハニハ	ヤマサトトナル	かつ埴は	山里となる
	ハニウツボ	ウケテバハイシ	埴・空	受けてバは石

	スガハタマ	ヤマニウツボノ	清は玉	山に空の
	トホリナル	アラカネノアワ	徹り成る	粗金のアワ
15- 6	スズナマリ	スガハハキカネ	錫・鉛	清埴は黄金
	シシロガネ	ウビニアカガネ	シ銀	ウビに銅
	ハクロガネ	ソレハギハキニ	ハ鉄	それ萩は黄金に
	キリハシロ	ヒノキハキアカ	桐は銀	桧はキ銅
	クリハクロ	デルアラカネオ	栗は鉄	出る粗金お
	タタラナシ	ファイゴニネレヨ	タタラなし	ファイゴに錬れよ
	ハニウクル	ウツボアメミヅ	埴受くる	空・雨水
	ナルクサキ	ウツボハタスク	なる草木	空はたすく
15- 7	ミヅヒヤス	ハハケガレスル	水冷やす	埴は穢れ擦る
	ハナモミモ	アメノママナリ	花も実も	天のままなり
	ミツハクフ	フヨハクワヌゾ	三つは食ふ	二四は食わぬぞ

	イシタマノ	フナルハツキズ	石・玉の	二なるは尽きず
	アラカネノ	ミツハホネリテ	粗金の	水は火練りて
	イロカワル	クサキノムシノ	色変る	草木の虫の
	ミツノコエ	カゼニコエアリ	ミツの声	風に声あり
	ウツボハネ	ハニムシモコレ	空、羽根	埴虫もこれ
15- 8	ウツボカゼ	ホミヅノヨツガ	空・風	火・水の四つが
	ナルトリノ	ホカツハオヨグ	なる鳥の	火勝つは泳ぐ
	ハニトミツ	ホカゼノヨツガ	埴と水	火・風の四つが
	ナルケモノ	カゼミツヨルオ	なる獣	風・水寄るお
	ナモミコエ	キツネタヌキゾ	名も三声	狐・狸ぞ
	ホトハニノ	ヨルハフタコエ	火と埴の	寄るは二声
	ヰノマシヅ	ヨツナモコレゾ	猪・猿ぞ	四名もこれぞ
	ツキノミヅ	クタセルツユハ	月の水	下せる露は

15- 9	カハノミヅ	ウツボウクレバ	川の水	空 受くれば
	クモトナリ	チアユミノホル	雲となり	チアユミ昇る
	ハニノイキ	ノホルイガクリ	埴の息	昇るイガクリ
	イキノナリ	ソハトメヂツセ	イキのなり	十八トメヂツセ
	クモナカバ	フレバメツエニ	雲なかば	降ればメツエに
	アヒモトメ	アメトフルナリ	あひ求め	雨と降るなり
	サムカゼニ	ユキトコホレド	寒風に	雪と凍れど
	ヲニトケル	ヨルナミウケ	陽に融ける	ヨルナミ受けて
15-10	ナルウシホ	ヤクシホスガノ	なる潮	焼く塩清の
	ウツワナリ	ハメバミノアカ	器なり	食めば身の垢
	マヌガルル	ミヅハニフクム	免がるる	水・埴含む
	ホナルカキ	ミツウクウツホ	火なる貝	水受く空
	ホナルウオ	シハウロコヨシ	火なる魚	シハ鱗 良し

	ホハクサシ	ムカシナカクニ	火はクサシ	昔 中国
	ウケモチノ	カミガウケナオ	ウケモチの	神がウケナオ
	アニコエバ	ヒヨウルタネヲ	天に乞ふば	ヒヨウル種を
15-11	ワニクダス	ヒウルニハユル	地に下す	ヒウルに生ゆる
	ウルノソハ	ウルタノソナエ	ウルのソは	ウルタのソ苗
	ヨルナミニ	ハユルナロナハ	ヨルナミに	生ゆるナロナは
	ハタノタネ	クニトコタチノ	島の種	クニトコタチの
	アメマツル	ミケハコノミカ	天祭る	御饌は木の実か
	クニサツチ	ウムウケモチノ	クニサツチ	生むウケモチの
	ヤヨノマゴ	イマノカダナリ	八世の孫	今のカダなり
	ウケモチガ	ハツキハツヒニ	ウケモチが	八月初日に
15-12	ナルハツホ	トヨクンヌシニ	成る初穂	トヨクンヌシに
	タテマツル	カミハカシキノ	奉る	神はカシキノ

	ユフニギテ	アメナカヌシノ	ユフニギテ	天中主の
	カミマツル	ソロノホチミノ	神まつる	ソロの穂つ実の
	ミケモマタ	ウスツキシラゲ	御饌も又	臼つき精げ
	ハツヒニハ	カユトシルトゾ	初日には	粥と汁とぞ
	ウビチニハ	ツキゴトマツル	ウビチニは	月毎祭る
	オモタルノ	スエニホホソト	オモタルの	末に穂細と
15-13	ナルユエニ	ツキヨミヤリテ	なる故に	ツキヨミ遣りて
	ウルソタネ	エントイタレバ	ウルソ種	得んと至れば
	マルヤニテ	クニニムカエバ	厠屋にて	区域郷に向えば
	ツギオケノ	クチヨリヨネノ	注ぎ桶の	口より米の
	イキカシグ	ソノニムカエバ	飯炊ぐ	園に向えば
	コエカクル	テコニイレキテ	肥かくる	手籠に入れ来て
	ススナシル	モモタクワエテ	スス菜汁	沢山蓄えて

	ミアエナス	ツキヨミイカリ	饗なす	ツキヨミ怒り
15-14	イヤシキノ	ツバハクケカレ	卑しきの	唾吐く穢れ
	アワントヤ	ツルギオヌキテ	会わんやと	劔お抜きて
	ウチコロシ	カエゴトナセバ	打ち殺し	報告なせば
	ヲランカミ	ナンヂサガナシ	大御神	汝サガなし
	アヒミズト	マツリハナレテ	相見ずと	政り離れて
	ヨルキマス	アメクマヤレバ	夜来ます	アメクマやれば
	スデニサリ	カタガウルソノ	既に去り	カタがウルソの
	タネササグ	クマドカエレバ	種ささぐ	クマド帰れば
15-15	ヲサガタニ	ウユルソノアキ	長が田に	植ゆるその秋
	ヤツカホノ	ナレバクニトミ	八束穂の	なれば国富み
	ココロヨク	マタマユフクミ	快よく	又繭ふくみ
	イトヌキテ	コカキノミチモ	糸抽きて	養蚕の道も

	ヲシユレバ	カダノイノチハ	教ゆれば	カダの命は
	ヨヨノタミ	マモリツカサゾ	代代の民	守り司ぞ
	モロタミモ	ヨクキケツネノ	諸民も	良く聞け常の
	クイモノハ	ソロハサイワヒ	食物は	稲は幸ひ
15-16	ウロコイオ	ツギナリトリハ	鱗 魚	次なり・鳥は
	ホガカチテ	ホトンドマカル	火が勝ちて	殆んど死る
	トモシビノ	カキタテアブラ	灯の	掻き立て油
	ヘルゴトク	ホカチイノチノ	減る如く	火勝ち命の
	アブラヘル	アヤマリミテノ	油 減る	誤り三声の
	シシハメバ	シシコリチチミ	肉食めば	肉凝り縮み
	ソラコエテ	ミノアブラヘリ	空肥ゑて	身の油 減り
	ケモカレテ	ヤガテマカルゾ	気も枯れて	やがて死るぞ
15-17	フツキナカ	ススシロクエヨ	七月中	大根食えよ

	フテシシハ	クエバイキテモ	二声肉は	食えば生きても
	クサリクサ	カミトナカタエ	腐り臭	神と仲絶ゑ
	イミコヤニ	ミトセスシロ	忌み小屋に	三年ススシロ
	シラヒゲモ	ハジカミハミテ	シラヒゲも	ハジカミ食みて
	アカソソゲ	ヤヤヒトトナル	垢濯げ	やや人となる
	スワノカミ	シナノハサムク	スワの神	シナノは寒く
	トリシシニ	サムサシノグト	鳥肉に	寒さ凌ぐと
15-18	コフユエニ	ナホアラタメテ	乞ふゆゑに	なほ改めて
	アイモノノ	ウオハヨソアリ	アイモノの	魚は四十あり
	コレモミカ	ススナニケセヨ	これも三日	スス菜に消せよ
	ミヅトリオ	クヘバフソヒカ	水鳥お	食へば二十二日
	ススナエヨ	ヨノトリケモノ	スス菜得よ	世の鳥獸
	イマシメト	アマネクフレシ	戒め」と	普く布れし

	アヤマラバ	タトエイノチハ	誤らば	たとえ命は
	オシマネド	チケカレユエニ	惜しまねど	血穢れゆえに
15-19	タマノヲモ	ミタレテモトニ	魂の緒も	乱れて本に
	カエラネバ	タマシキマヨヒ	返らねば	魂 迷ひ
	クルシミテ	ケモノノタネオ	苦しみて	獣の種お
	アイモトム	トリモケモノモ	相求む	鳥も獣も
	ツキヒナシ	ソロハツキヒノ	月日無し	ソロは月日の
	ウルナミゾ	ユエニコタフル	ウルナミぞ	ゆゑに应ふる
	ヒトハモト	ナカゴココロバ	人はもと	ナカゴ・こころば
	ヒツキナリ	スグニマカレバ	日月なり	すぐに死れば
15-20	アヒコタエ	アメノミヤキニ	アヒこたえ	天の宮居に
	カエサント	ケモノニナルオ	帰さんと	獣になるお
	トトムナリ	ワガツネノミケ	止むなり	我が常の御食

	チヨミクサ	ヨノニガナヨリ	チヨミ草	世の苦菜より
	モモニガシ	ニガナノミケニ	百々苦し	苦菜の御食に
	ナガラエテ	タミユタカニト	長らえて	民豊かにと
	クニヲサム	ワレミルススキ	国治む	われ見るススキ
	チエヨタビ	ワガミモコトシ	千枝四度	わが身も今年
15-21	フソヨヨロ	キマダサカリノ	二十四万	ゐまだ盛りの
	カキツバタ	ノチモモヨロオ	カキツバタ	後百万お
	フルモシル	クスヒヨクキケ	経るも知る	クスヒよく聞け
	ココリヒメ	カタレルコトハ	ココリ姫	語れる事は
	トコタチノ	ヤモオメクリテ	トコタチの	八方お巡りて
	ミシノクニ	クロソノツミテ	西の国	玄圃積国
	カニアタル	ナモアカガタノ	カに当る	名もアカガタの
	トヨクンヌ	ヨヨヲサムレド	トヨクンヌ	世世治むれど

15-22	トシオヘテ	ミチツキヌルオ	年お経て	道尽きぬるお
	ウケステメ	ネノクニニキテ	ウケステメ	ネの国に来て
	タマキネニ	ヨクツカフレバ	タマキネに	よく仕ふれば
	ミニコタエ	ココリノイモト	身に応え	ココリの義妹と
	ムスバセテ	ヤマノミチノク	結ばせて	弥真のミチの奥
	サヅケマス	ヨロコビカエル	授けます	喜び帰る
	ウケステメ	コロヒンキミト	ウケステメ	コロヒンキミと
	チナミアヒ	クロソノツモル	チナミ合ひ	玄圃積もる
15-23	ミコウミテ	ニシノハハカミ	御子生みて	西王母
	マタキタリ	コロヤマモトハ	又来り	「崑崙山麓は
	オロカニテ	シシアヂタシミ	愚かにて	獣肉味嗜み
	ハヤカレシ	モモヤフモモゾ	早枯れし	百や二百歳ぞ
	タマユウニ	チヨロアレドモ	たまゆうに	千万(歳)あれども

	ヒヒノシシ	シナキミイデテ	日日の肉食	シナキミ出でて
	チヨミグサ	タヅヌトナゲク	千代見草	探づぬ」と嘆く
	ワガミミモ	ケガルルアカオ	わが耳も	穢るる垢お
15-24	ミソギセシ	ナガラフミチオ	みそぎせし	長らふミチお
	ヨロコベバ	カレオナゲキテ	喜べば	枯れお嘆きて
	ミチサヅク	オモエイノチハ	ミチ授く	思え命は
	ミノタカラ	コトワザモナセ	身の宝	諺もせな
	ヨロキミモ	ヒトリイノチノ	万君も	ひとり命の
	カハリナシ	トキキヌカレハ	かはり無し	時来ぬ枯れは
	クルシミテ	タマノヲミタレ	苦しみて	魂の緒乱れ
	アニカエス	ヨアヒタモチテ	天に帰す	齢 保ちて
15-25	アニアガル	トキハタノシミ	天にあがる	時は楽しみ
	マカルトキ	コレココナシノ	死るなり	これココナシの

	トキマチテ	カルルニホヒモ	時まちて	枯るる匂ひも
	ヒトノミモ	スガカテハミテ	人の身も	清糧食みて
	ヨロホエテ	カカルニホイモ	万歳得て	かるる匂いも
	ココナシゾ	オモムロスグニ	ココナシぞ	屍すぐに
	カンカタチ	ガシシハクサク	神形	悪肉は臭く
	ヲモミタレ	トクハアラヒミ	緒も乱れ	トクハアラヒミ
15-26	ウルトナモ	ココナヒツキノ	ウルトナも	ココナ日月の
	ミタネユエ	クエバメノタマ	御種ゆえ	食えば目の玉
	アキラカニ	アヒモトムナリ	明らかに	相求むなり
	アメノミチ	ナスヒトカミニ	天の道	なす人神に
	アヒモトム	ユエニココナシ	相求む	故にココナシ
	メヅルコレカナ		賞づるこれかな	

● 孕(ハラ)み慎(ツツ)しむ帯(オビ)の紋(アヤ)

16- 1	フソキスス	モモエフソヤホ	二十五スス	百枝二十八年
	トシサミト	カシマノミヤノ	歳サミト	カシマの宮の
	ヒトリヒメ	ヲナゴナケレバ	独り姫	男子なければ
	カシマキミ	カトリノミヤニ	鹿島君	香取の宮に
	ユキイタル	フウヌシムカエ	行き到る	フツヌシ迎え
	トコトオエ	イリマスノチニ	挨拶終え	入ります後に
	モノガタリ	シロスコトクニ	物語り	「知ろす如くに
16- 2	ヒヒメアリ	ツギコナケレバ	一姫あり	嗣ぎ子なければ
	カスガトノ	アマノコヤネハ	カスガ殿	アマノコヤネは
	ヨニヒイデ	カスガノカミト	世に秀いで	カスガの神と
	ナオタマフ	ワレネガワクハ	名お賜ふ	われ願わくは

	アマツキミ	ハシカケナシテ	上つ君	橋懸けなして
	タマワンヤ	フツヌシコタエ	賜わんや」	フツヌシ答え
	ワガオキノ	ワカヒコサキニ	「わが甥の	ワカヒコ先に
	ヲシカニテ	サカムカヒシテ	勅使にて	境迎ひして
16- 3	アヒソメテ	ソレヨリイマニ	会ひ初めて	それより今に
	ムツマジク	イマソノキミノ	睦じく	今その君の
	コトナサバ	ワレモモフケル	子となさば	われも儲ける
	コノゴトク	ナカオナサント	子の如く	仲おなさんと
	ヒタカミエ	シカニコタエテ	ヒタカミえ	使者に答えて
	カエロキキ	トモノノボリテ	帰ろきき	共に上りて
	ナカクニノ	カスガニイタリ	ナカ国の	カスガに至り
	ソノチチノ	ココトムスビニ	その父の	ココトムスビに
	コヒウケテ	タカマニノボリ	請ひ受けて	タカマに上り

	モロトモニ	コレウカガエバ	諸共に	これ何えば
	ミコトノリ	ミユルシウケテ	みことのり	御許し受けて
	オガムノチ	フタキミカエル	拝むのち	二君帰る
16- 4	モトツクニ	ココトムスビハ	本つ国	ココトムスビは
	ウラナヒテ	ヨキヒニチナミ	占ひて	吉き日に因み
	トトノエテ	コトホギオエテ	整えて	祝ぎ終えて
	ムツマジク	コヤネハアメニ	睦じく	コヤネは天に
	ツカエマス	イツシカヒメモ	仕えます	いつしか姫も
	ハラムヨシ	アメニツグレバ	孕む由	天に告ぐれば
	ミコトノリ	コモリニコレオ	勅	コモリにこれお
	トハシムル	ヒメキミアヒテ	診はしむる	姫君会ひて
16- 5	ミタネウム	ミハタオコエバ	御種生む	御幡お乞えば
	コモリダモ	ミメノイロセニ	「コモリだも	御姫の夫に

	ナラヒキト	ヒメハカエシテ	習ひき」と	姫は返して
	イトイナヤ	イロトニトハバ	「いと否や	夫に問はば
	アジモマダ	ヨソニトワント	アヂもまだ	他に問わんと
	オモフナリ	ココロマヨエバ	思ふなり	心 迷えば
	ヲシエコフ	ココニコモリノ	教ふ乞ふ」	ここにコモリの
	ミタネフミ	アメツチイマダ	御種文	天地いまだ
16- 6	ワカザルニ	ウイノヒトイキ	分かざるに	初の一息
	マドカニテ	ミヅニアブラノ	円にて	水に油の
	メヲワカレ	ヲマズノボリテ	陰陽分かれ	陽まず昇りて
	アメトナリ	メハノチクタリ	天となり	陰はのち降り
	クニドロノ	ハニミヅワケテ	地泥の	埴水分けて
	ハニハヤマ	ミヅハウミナリ	埴は山	水は海なり
	ヲノウツボ	カゼトウゴキテ	陽の空	風と動きて

	ホトバケル	ヲセノムナモト	火と化ける	陽のムナモト
16- 7	ヒトマルメ	アチカクメクリ	日と丸め	天近く巡り
	ヲニクバル	イモノミナモト	陽に配る	妹の源
	ツキトコル	ハニチカキユエ	月と凝る	埴に近き故
	メニクバリ	ウツボカゼホト	陰に配り	空・風・火と
	ミツハニノ	キツマジワリテ	水・埴の	五つ交わりて
	ヒトトナル	ノチハイモヲセ	人となる	後は妹夫
	トツギウム	ヲハハニムカヒ	とつぎ生む	男は埴に向ひ
	トツグトキ	カリノシジナミ	嫁ぐ時	カリノシジナミ
16- 8	ホネアブラ	メハアニムカイ	骨油	陰は天に向い
	マシワリノ	ヨガネノニチガ	交りの	ヨガネのニチガ
	チワタナス	チチノカリナミ	チワタなす	父のカリナミ
	タマシマエ	ミハスルトキニ	タマシマエ	ミハする時に

	チナミアヒ	ヒルハニウエニ	因み合ひ	昼はニウエに
	ヒタノボリ	ヨルハシウエニ	左登り	夜はシウエに
	ミギクダリ	アスフタメグリ	右降り	翌日二巡り
	ミメグリト	ミソカニハミソ	三巡りと	三十日には三十
16- 9	ミソヒフミ	ミカタリユルム	三十一フミ	三日足り緩む
	タラムトテ	ハハノツツシミ	タラムとて	母の慎しみ
	ヲノイクス	ヨロミチムヤソ	陽の息す	万三千六八十
	メノイクス	ヨロミチモヤム	陰の息す	万三千百八十六
	ミタネエテ	ハハニマスイキ	御種得て	母に増す息
	ミモムソノ	アスハナモフソ	三百六十の	翌日は七百二十
	ミカチヤソ	ミソカヨロヤモ	三日千八十	三十日万八百
	ミソヤカニ	ヨロミチムヤソ	三十八日に	万三千六百八十
16-10	モトトマシ	ニヨロムチヤモ	元と増し	二万六千八百

	ヨソムタビ	マシトトマリテ	四十六度	増し止まりて
	ミメグリハ	フツキノノチノ	み巡りは	二月の後の
	ミカハシリ	シワサラニキル	三日走り	シワサラニキル
	キサラトテ	ハハノツツシミ	キサラとて	母の慎しみ
	ムソヨカハ	ムソヨメグリニ	六十四日は	六十四巡りに
	キワマリテ	ミメグリスベテ	極まりて	み巡りすべて
	チヤソナリ	ツイニタネナル	千八十なり	遂に種なる
16-11	オノコロノ	エナノヘソノヲ	オノコロの	胞衣の臍の緒
	カワクルマ	ヤヤシシオモリ	カワクルマ	やや肉お盛り
	メグリヘル	アスムソミタビ	巡り経る	翌日六十三度
	ツギムソフ	ホソリメグリテ	つぎ六十二	細り巡りて
	ミツキニハ	ミソコトナレバ	三月には	三十九となれば
	ミカヤスム	ミドリハナナリ	三日休む	ミドリ初なり

	ヤヨイサム	ヤヨモツツシミ	八夜イサム	八夜も慎しみ
	ヨツキニハ	コノミウルウモ	四月には	この身潤うも
16-12	ツツシミヨ	キツキハモトノ	慎しみよ	五月は元の
	ヒトメグリ	イハフヨロムチ	一巡り	祝ふ万六千
	ヤモヨソム	ハラオビノイモ	八百四十六	腹帯の妹
	ツツシミヨ	アモトニマネク	慎しみよ	天元に招く
	アラミタマ	ツギハニコタマ	アラ御魂	次ぎはニコ魂
	タラノヒト	ミツマジハリテ	両親のヒト	三つ交はりて
	ココロイキ	ナリテミヅカフ	心 生き	なりてミヅ交ふ
	ツユアフレ	ムツキイタレバ	露溢れ	六月至れば
16-13	カワクユエ	ホゾノヲクダニ	乾く故	臍の緒管に
	チシルカフ	ナツキチオニテ	乳汁交ふ	七月血お煮て
	キイロハに	コレクラワタト	キイロハに	これ臓腑と

	アフミマス	ココモツツシミ	アフミなす	ここも慎しみ
	ヤツキニテ	ソフハナリハノ	八月にて	十二ハナリハの
	ハナルトキ	ハハノツツシミ	離る時	母の慎しみ
	コレナルゾ	チチハチトテノ	これなるぞ	父はチテトの
	ヲシテナリ	コツキミメコエ	ヲシテなり	九月ミ目声
16-14	ソナハリテ	トツキクライシ	備はりて	十月座位し
	ソフツキハ	ツキミチウマル	十二月は	月満ち生まる
	ミタネコレナリ		御種これなり	
	オリシモニ	ヒメノナゲキハ	折りしもに	姫の嘆きは
	コオヲモフ	カゼノトモシビ	子お思ふ	風の灯
	タマゴツム	ヤスキヒモナク	玉子積む	安き日もなく
	ミツオコヒ	アルハスオコヒ	水お乞ひ	あるは酢お乞ひ
	ムナサワギ	ツラニノボセバ	胸騒ぎ	面に上せば

16-15	エダヒエテ	ヒメモスナヤミ	手足冷えて	ひめもす悩み
	ミケタベズ	ムネノイタミヤ	御食食はず	胸の痛みや
	メノクラミ	タマニヨキヒハ	目のくらみ	たまによき日は
	マメヒロフ	コノイタワリモ	豆拾ふ	この労りも
	ツツシミテ	ヨキトシノベド	慎しみて	よきと忍べど
	イマワガミ	イキスヒトトキ	今わが身	息す一時
	ヨソジホド	タラヌヤマフノ	ヨソジほど	足らぬ病ふの
	カナシサヤ	コモリハヒメノ	悲しさや	コモリは姫の
16-16	イキスミテ	チハラオナデテ	息すみて	乳腹お撫でて
	エミスカオ	イキスタラヌハ	笑みす顔	「息す足らぬは
	ヒメミコヨ	コレトノキミノ	姫御子よ」	これ殿君の
	トコカタリ	ワレヒメミコオ	床語り	「われ姫御子お
	マフケラン	タチカラワコオ	儲けらん」	タチカラワコお

	マネカンナ	ワガヨロコビノ	招かんな	わが喜びの
	カドヒラキ	シカハモフケノ	門開き	勅使はモフケの
	ムネノハナ	ミナルヲノコハ	ムネノハナ	実なる男の子は
16-17	ヒノミタマ	マズコモリクノ	日の御魂	まずコモリクの
	ミハシラニ	ムカヒタニキテ	御柱に	向ひ左に居て
	メオマネキ	ヲマズメグリテ	陰お招き	陽まず巡りて
	メオツツム	メガセバマリテ	陰お包む	陰が狭まりて
	ハエイヅル	ハナクキハキク	生ゑ出づる	花茎はシヂ
	ヲノハジメ	ヲノコウムナリ	陽の初め	男の子生むなり
	メノコニハ	メノメヨリウク	女の子には	陰の目より受く
	ツキミタマ	ミヤオウルオシ	月御魂	宮お潤おし
16-18	ソムキイテ	ノチウクルヒノ	背き居て	のち受くる日の
	マジワリハ	メマズメグリテ	交わりは	陰まず巡りて

	ヲオツツム	ヲハシヂナラズ	陽お包む	陽はシヂならず
	タマシマガ	ウチニツボミテ	タマシマガ	内につぼみて
	メノハジメ	メノコウムナリ	陰の初め	女の子生むなり
	メハツキノ	オソクメグレバ	女は月の	遅く巡れば
	ヒビノマシ	ミモヨソナツツ	日々の増し	三百四十七つつ
	フソコカハ	ヨロチムソミノ	二十九日は	万千六十三の
16-19	ミソカニハ	ヒトツモドリテ	三十日には	一つ戻りて
	ミソヒヨリ	ミソミカマデモ	三十一より	三十三日までも
	ミカノウチ	ヒニソコモドリ	三日のうち	日に十九戻り
	ミソヨカモ	ヒトモドリシテ	三十四日も	一戻りして
	サツメヘリ	ミソイカヨリゾ	サツメ減り	三十五日よりぞ
	ヒビノマシ	ミモヨソナツツ	日々の増し	三百四十七つつ
	ヨソカニハ	モトマシトモニ	四十日には	元増し共に

	フヨロムチ	ミモナソフニテ	二万六千	三百七十二にて
16-20	ミチキワム	エナノメグリモ	道究む	胞衣の巡りも
	ナヅラエテ	ヤガテウマレン	擬えて	やがて生れん
	ヲランカミ	コソムツキザス	大御神	九十六月坐す
	コノコヤネ	モモツキマセリ	子のコヤネ	百月坐せり
	タチカラヲ	ミソムツキマス	タチカラヲ	三十六月坐す
	サルタヒコ	ソムトシオレド	サルタヒコ	十六年居れど
	コレハマレ	ヲノコハトシニ	これは稀れ	男の子は年に
	メハトツキ	イキスヨケレバ	女は十月	息すよければ
16-21	ウムモヤスキゾ		生むも安きぞ	
	マタノトヒ	タミハコサワニ	又の問ひ	「民は子沢に
	カミトノノ	コナキハイカン	上殿の	子なきはいかん」
	コモリマタ	セオリツヒメノ	コモリ又	「セオリツ姫の

	ツツシミニ	タミノナスワザ	慎しみに	民のなす業
	ミオクダキ	ハタラクトテモ	身お砕き	働くとても
	ココロムク	オフラサカンニ	心 向く	油 盛んに
	コオウルゾ	クニカミナドハ	子お得るぞ	国神などは
16-22	タミノタメ	ココロツクシテ	民のため	心 尽して
	アブラヘリ	コタネマレナリ	油 減り	子種稀れなり
	タカキミハ	シタガウラヤミ	タカ君は	下が羨み
	カナナネバ	オキテオウラミ	叶はねば	掟お恨み
	キミソシル	コレモアダナリ	君誇る	これも仇なり
	ウチミヤノ	アオメノイブリ	内宮の	青女の訝り
	ケオサマス	ソバノコトシロ	気お覚ます	傍のコトシロ
	マメナレバ	コレオサムメガ	忠誠なれば	これおサムメが
16-23	ウラムナリ	キミガメグミモ	恨むなり	君が恵みも

	ツヒワスレ	ウラミネタムノ	つひ忘れ	恨み妬むの
	ニハサクラ	サカズバシレヨ	庭桜	咲かずば知れよ
	ヨロタミノ	ウラメンメドノ	万民の	ウラメンメドノ
	ヨロサクラ	アメニウエテゾ	万桜	天に植ゑてぞ
	オロカメガ	ネタムイソラノ	愚か女が	妬むイソラの
	カナツエニ	コタネウタレテ	金杖に	子種打たれて
	ナガレユク	アルハカタハト	流れゆく	或は不具者と
16-24	ナルイソラ	ネタムソノイキ	なるイソラ	妬むその息
	ヒヨロミチ	ムレテウロコノ	一万三千	群れて鱗の
	オロチナス	タマシマノヒマ	大蛇なす	タマシマの隙
	ウカガヒテ	コツボニイリテ	窺ひて	子宮に入りて
	ハラミコオ	カミクダクユエ	孕み子お	噛み砕く故
	タネナラズ	カタワウムナリ	種ならず	不具者生むなり

	マツシキハ	オヨバヌトミオ	貧しきは	及ばぬ富お
	ウラヤミテ	ウラミノアダニ	羨みて	恨みの仇に
16-25	タネホロブ	ヒトオウラメバ	種滅ぶ	人お恨めば
	ヒニミタビ	ホノホクラヒテ	日に三度	焔 食らひて
	ミモヤスル	ネタムネタマル	身も瘦する	妬む妬まる
	ミナトガゾ	タトエバハベル	みな咎ぞ	例えば侍る
	アオメタチ	キイロノハナゾ	青女達	五色の花ぞ
	ソノキミノ	ココロアオキハ	その君の	心 青きは
	アオニメデ	キナルハハナノ	青に賞で	黄なるは花の
	キオメデシ	アカキハハナノ	黄お賞でし	赤きは花の
16-26	アカニメデ	シロキハハナノ	赤に賞で	白きは花の
	シロニメデ	クロキハハナノ	白に賞で	黒きは花の
	クロニメズ	オナジココロニ	黒に賞ず	同じ心に

	アイモトム	キミノココロト	相求む	君の心と
	ワガハナト	アフヤアワヌヤ	わが花と	合ふや合わぬや
	アエシラズ	テレバウラムナ	敢えしらず	テレバ恨むな
	アゲラルモ	エモベモヨラズ	挙げらるも	エモベモヨラズ
	モトムナリ	テレバメストモ	求むなり	テレバ召すとも
16-27	イクタビモ	オソレテノチハ	幾度も	恐れて後は
	ウラミナシ	ツツシミハコレ	恨みなし	慎しみはこれ
	モロヒメラ	マサニシルベシ	諸姫ら	正にしるべし
	イロノハナ	ヒトタビメデテ	色の花	一度賞でて
	ハヤチレバ	チリトステラレ	はや散れば	塵と捨てられ
	ヨソノハナ	メストキハソノ	他所の花	招す時はその
	ハナサカリ	ツラツラオモエ	花盛り	つらつら思え
	ミノハナモ	ヒトモウツレバ	ミの花も	人も移れば

16-28	チルハナヅ	タレサシウラム	散る花ぞ	誰さし恨む
	ヒトモナシ	モシアヤマレバ	人もなし	もし誤れば
	タネタチテ	ミトガメアレド	種断ちて	身咎めあれど
	ソノヒトハ	マダタチモタズ	その人は	まだ太刀持たず
	ツエウタズ	ヒトウチコロス	杖打たず	人打ち殺す
	ユエモナシ	メハヒトミチニ	故もなし	女は一道に
	オモエドモ	ネタミワツラフ	思えども	妬み煩ふ
	ムネノホガ	オロチトナリテ	胸の火が	大蛇となりて
16-29	コタネカム	サワリノゾカン	子種噛む	障り除かん
	ヨツギフミ	ツツシムアヤノ	世継ぎ文	慎しむアヤの
	ハナトハナ	ウテバチルナリ	花と花	打てば散るなり
	モロトモニ	ツネニツツシミ	諸共に	常に慎しみ
	ナワスレソコレ		な忘れそこれ」	

	ハラミコオ	トヒウルタメノ	孕み子お	問ひ得るための
	タビヤドリ	アルヒヒメカミ	旅宿り	ある日姫君
	マタノトヒ	オシエノオビハ	又の問ひ	「教えの帯は
16-30	ワザアリヤ	コモリコタエテ	業ありや」	コモリ答えて
	タマキネノ	ヲシエノオビハ	「タマキネの	教ふの帯は
	ミミノハニ	シナワキマエテ	御身の衣に	品弁えて
	クニヲサム	オビハキワタノ	国治む	帯は齋身の
	カタメナリ	ヲハシタアワセ	固めなり	男は下合せ
	メハウエゾ	ハラミノオビハ	女は上ぞ	孕みの帯は
	カツラギノ	ヨツギヤシロニ	カツラギの	世嗣社に
	ミタネノル	トキニアメヨリ	御種祈る」	時に天より
16-31	ニイトリノ	ヒトハオツレバ	新鳥の	一羽落つれば
	アマツノリ	コレハイフキノ	天つ祈り	「これはイフキノ

	ナルモミヂ	バケテカツラキ	なるモミヂ	化けてカツラキ
	イトリヤマ	ハネサキミレバ	イトリ山	羽根先みれば
	フソヨスヂ	カツソナワレド	二十四筋	数備われど
	ツネアラズ	モロトリミレバ	常あらず	諸神とりみれば
	ソキニサケ	ヒタカミニツル	十五に裂け	ヒタカミに鶴
	タテマツル	ハネサキミレバ	奉る	羽根先みれば
16-32	フソヨナリ	カレモロハネオ	二十四なり	故諸神羽根お
	ヨリタタシ	ヲツルオタケニ	撚り直し	雄鶴お徑に
	メオヨコニ	ケフノホソヌノ	雌鶴お横に	ケフの細布
	オリモチテ	ヨソヤソナワル	織り持ちて	四十八備わる
	ミハラオビ	ハハコイザナミ	御腹帯	母子イザナミ
	ナガハラミ	コソムツキシテ	長孕み	九十六月して
	ウミタマフ	アマテルカミゾ	生み給ふ	アマテル神ぞ

	ハタレマノ	サハレドオビニ	ハタレマの	障れど帯に
16-33	トトノヒテ	ヨソヤソナワル	整のひて	四十八備わる
	ソノタメシ	テレハヒメキミ	その例	テレハ姫君
	サハラネド	イキスヒタチト	障らねど	息すヒタチと
	ナルオビゾ	トキニミカツチ	なる帯ぞ	時にミカツチ
	イフカシク	イキスヒタチト	訝しく	「息すヒタチと
	ナルオビノ	ワザニイキスハ	なる帯の	術に息すは
	イツコエカ	トキニコモリノ	何処えか」	時にコモリの
	コタエニハ	ムカシトヨケノ	答えには	「昔トヨケの
16-34	ノタマフハ	アメヨリサツク	宣ふは	天より授く
	ケフノオビ	アメニノトリテ	ケフの帯	天に則りて
	チチノタケ	クラブルオビノ	父のタケ	較ぶる帯の
	ハハノイキ	ヒタチロナルハ	母のイキ	ヒタチとなるは

	イタクナリ	アメヨリイタキ	イタクなり	天よりイタキ
	ハニアミテ	ツラナリソタツ	衣に編みて	連なり育つ
	コノタメシ	チチノメグニハ	コの例し	父の恵みは
	イタタクア	ハハノイツクシ	頂く天	母の恵くし
16-35	ノスルハニ	アマテルカミモ	載する埴	アマテル神も
	ワスレジト	イトヨソヨスヂ	忘れじと	糸二十四筋
	ヨリアハセ	メヲハブタエノ	撚り合はせ	陰陽ハブタエの
	ミハトナス	コノミハメシテ	御衣となす	この御衣召して
	アサゴトニ	アメツチマツリ	朝毎に	天地祀り
	タラチネニ	ツカフミココロ	両親に	仕ふ御心
	ソノキミモ	コレトモフセバ	その君も	これ」と申せば
	ミカツチモ	ヨロコビケフノ	ミカツチも	喜びケフの
16-36	ヌノオラン	イワクハブタエ	布織らん	日く「ハブタエ

	アラザルカ	コタエテヒラク	あらざるか」	答えて開く
	タカラトノ	ウチヨリイヅル	宝 殿	内より出づる
	ハブタエハ	キミノタマモノ	ハブタエは	君の賜物
	フタハアリ	ナスユエシラズ	二衣あり	「なす故しらず
	アメノハオ	キルモオソレテ	天の衣お	着るも懼れて
	クチントス	イマサイワヒノ	朽ちんとす	いま幸ひの
	ヲシエウル	ヒメハコヤネノ	教ふ得る	姫はコヤネの
16-37	タケシルヤ	シレリヒトタケ	丈知るや」	「知れり一丈
	フタキキゾ	カネキクウエノ	二尺五寸ぞ	かね聞く上の
	ヲンタケト	ウマレアヒタル	御丈と	生れ合ひたる
	ミメグミト	モロノタマエバ	御恵み」と	諸のたまえば
	キメガミニ	イトアリガタト	「姫が身に	いと有難」と
	エミストキ	チチヨロコビテ	笑みす時	父喜びて

	ハブタエオ	ミタケノオビト	ハブタエお	御丈の帯と
	ナシタマフ	ハラオビナセバ	なし給ふ	腹帯なせば
16-38	ミノイキス	ヒタチトナリテ	ミの息す	ヒタチとなりて
	ヒメノトヒ	ウムトキイカン	姫の問ひ	「生む時いかん」
	コモリマタ	コレハカツテガ	コモリ又	「これはカツテが
	ヨクシレリ	ワレカエルノチ	よく知れり	われ帰る後
	クタスベシ	アルヒミトノニ	下すべし」	ある日御殿に
	ミアエシテ	コモリオマネキ	御饗して	コモリお招き
	モノカタリ	ワガウマレツキ	物語り	「わが生まれつき
	ミノタケモ	ヒタケムタアリ	身の丈も	一丈六寸あり
16-39	チカラワザ	ヤタノヒトラノ	力業	ヤタの人らの
	ヨロヒキノ	イワオモナゲテ	万引きの	岩おも投げて
	ウツロヒモ	ヒシゲバタマフ	ウツロヒも	挫げば賜ふ

	フタツルギ	イマフシミレバ	二劍	今伏しみれば
	ヲキナカミ	サカルコモリト	翁 神	栄るコモリと
	クラブレバ	ワレハアカゴノ	較ぶれば	われはアカゴの
	ミチウケテ	ヒトナルカエノ	道うけて	人なる返礼の
	イシヅツオ	ススメウヤマフ	石槌劍お	進め敬ふ
16-40	トキコモリ	オドロキワレハ	時コモリ	驚き「われは
	ミチノオト	コヤネノヲヤモ	道の弟	コヤネの親も
	ワガラヤト	カエモノウケズ	わが親」と	返礼もの受けず
	ミカツチハ	ナホハヂススム	ミカツチは	なほ辱ち進む
	コモリミテ	ツルギオオガミ	コモリみて	劍お拝み
	イタタケバ	ミカツチエミテ	載けば	ミカツチ笑みて
	クラナシテ	マツリタエンオ	座なして	「祀り絶ゑん」お
	ヒメアリテ	ヨツギミチキク	姫ありて	世継ぎ道聞く

16-41	コハタカラ	イキスモシレバ	子は宝	イキスも知れば
	イキスミヤ	コヤネトヒメト	イキス宮	コヤネと姫と
	ココニオキ	ワレハノチヤニ	ここに置き	我は後屋に
	フツヌシト	ヒタチオビナシ	フツヌシと	ヒタチ帯なし
	サツケント	カタリトコトモ	授けん」と	語りトコトモ
	トトノヒテ	コモリハアメニ	整ひて	コモリは天に
	カエリケリ	ノチニカトリノ	帰りけり	後にカトリの
	ミヤニユキ	カタリテトモニ	宮にゆき	語りて共に
16-42	ヒタカミニ	ツグレバキミモ	ヒタカミに	告ぐれば君も
	ヨロコビテ	ケフノホソヌノ	喜びて	ケフの細布
	オラシムル	タカマノハラノ	織らしむる	タカマの原の
	カリミヤニ	オビタマワレバ	カリ宮に	帯賜われば
	モロガナモ	ヒタチノミヤト	諸が名も	ヒタチの宮と

	モノノベガ	メデテツクレル	モノノベガ	賞でて造れる
	カシマミヤ	コヤネトヒメト	カシマ宮	コヤネと姫と
	イキスマヤ	ヒメハモロメノ	イキス宮	姫は諸女の
16-43	ハラムトキ	イキスツツシミ	妊む時	息す慎しみ
	ヲシエマス	ヤメルハクスリ	教ゑます	病めるわ薬
	コレオウク	カトリトカシマ	これお受く	カトリとカシマ
	イスキミヤ	タマフヒタチノ	イキス宮	賜ふヒタチの
	オビノナモ	キハタオビトゾ	帯の名も	キハタ帯とぞ
	タケヤタハ	ヤソヨロヲノコ	タケヤタは	八十万男の子
	ナレタケヅ	ハラミノウチノ	成れ丈ぞ	孕みの内の
	アソビニハ	マメオヒロエヨ	遊びには	豆お拾えよ
16-44	マメナルヅ	モシモソフコオ	マメなるぞ	もしも十二子お
	ウムハハハ	ツキノクライヅ	生む母は	月の位ぞ

	ヒタハラニ	ミツコオウメバ	一胎に	三つ子お生めば
	ミヒカリノ	サイワヒアルト	御光りの	幸ひあると
	アメニツグ	アマネクフレテ	天に告ぐ	普く布れて
	ホツマクニ	ヲサマルノチニ	ホツマ国	治まる後に
	フツヌシノ	カトリノミチオ	フツヌシの	カトリの道お
	コトゴトク	コヤネニサヅケ	尽く	コヤネに授け
16-45	カクレマス	カシマノミチノ	隠れます	カシマの道の
	オクモミナ	コヤネニサヅク	奥も皆	コヤネに授く
	カスガトノ	タマカエシナス	カスガ殿	魂返しなす
	オクノリモ	コヤネニサズク	奥法も	コヤネに授く
	コノユエニ	ヨモノマツリモ	この故に	四方の祭りも
	オノヅカラ	ヒトリニツケリ	おのづから	一人に付けり
	カシマカミ	ヒメウムトキニ	カシマ神	姫生む時に

	ハハガナオ	コエドナツケズ	母が名お	請えど名つけず
16-46	マレヒトリ	ヒメハヒメナリ	まれ一人	姫は一女なり
	マタウマバ	マギレンタメニ	又産まば	紛れんために
	イミナセン	マズヒメキミト	イミ名せん	まづ姫君と
	バカリイフ	ユエにコヤネモ	ばかりいふ	故にコヤネも
	ヨヨノリト	ハツハヒメキミ	世々告と	初は姫君
	ツギニナモ	タエノオクノリ	次に名も	妙の奥法
	ツツシミノ	ヒタチオビコソ	慎しみの	ヒタチ帯こそ
	イトモカシコシ		いとも畏こし	

● 神鏡(カンカガミ)八咫(ヤタ)の名の紋(アヤ)

17- 1	アメツチモ	ウチトモキヨク	天地も	内外も清く
-------	-------	---------	-----	-------

	ナルトキニ	ヲウチニハベル	成る時に	大内に侍べる
	トミタミモ	ヤタノカガミオ	臣民も	八咫のカガミお
	オガムトキ	アマノコヤネガ	拝む時	アマノコヤネが
	ツツシミテ	ヤタトナヅクル	謹みて	八咫と名づくる
	ユエオコフ	トキニアマテル	故お乞ふ	時にアマテル
17- 2	ミコトノリ	ヤタハヤミタノ	勅	「八咫は八民の
	モトノタケ	イニシエツクル	元の身長	昔 作る
	マハカリハ	ヤソヨロヒトノ	間許りは	八十万人の
	ナレタケオ	アツメハカリテ	成れ身長お	集め計りて
	ヒトツボオ	イマノヒトマノ	一坪お	今の一間の
	モノサシヅ	コノマバカリオ	物差しぞ	この間計りお
	ヤキダワケ	コレニヒツキノ	八段分け	これに日月の
	フタタマシ	ヨノヒトガラノ	二タまし	世の人体の

17- 3	タカバカリ	タオトツダキリ	高計り	タお十ダ切り
	キトナヅク	タミハヤタナリ	キと名づく	民はヤタなり
	タカバカリ	ホカゼハニミズ	高計り	火・風・埴・水
	ヨツニワケ	ウツホノヒトツ	四つに分け	空の一つ
	ツギアワセ	アマノメグリノ	継ぎ合せ	天の巡りの
	マガリザシ	コレデヒトミオ	曲り差し	これで人身お
	イタカント	マルメテワタリ	抱かんと	丸めてワタリ
	フタタタル	カガミハミヤノ	二タたる	カガミは宮の
17- 4	ミハシラニ	カミオマネクノ	御柱に	神お招くの
	ヤタカガミ	イマワタリタノ	ヤタカガミ	今ワタリタの
	マルカガミ	アテテヤタミノ	円カガミ	当てて八民の
	ココロキル	ヤタノカガミノ	心キる	ヤタのカガミの
	ナニヨルナ	ワレキクイニシ	名に由る名	われ聞く昔

	カミノヤハ	ムノタミメヨリ	神の屋は	ムのタミメより
	ムロヤタツ	タミニヲシエテ	ムロ屋建つ	民に教ゑて
	ヤネオナス	マタヤノタミメ	ヤネおなす	又ヤのタミメ
17- 5	ヤシロナル	イマミヤトノニ	社なる	今宮殿に
	タミオタス	ヤツハヤカタゾ	民お養す	ヤツはヤカタぞ
	タノオシテ	ミヒカリマルノ	タの璽	三光 円の
	ウチニキル	タリタスクノリ	内に入る	養り助く法
	アメトチチ	ウエシタカエス	天と父	上下返す
	ラノオシテ	ツチトハハノリ	ラの璽	地と母法
	ヲヤガコオ	ハラメバチタル	親が子お	妊めば乳足る
	チチハハハ	ゲニタラチネヨ	父・母は	げにタラチネよ
17- 6	タモヲシモ	チナキノタラヨ	タもヲシも	乳なきのタラよ
	カンガミテ	タスクルタミハ	鑑みて	助くる民は

	コノゴトク	ヤタハヲヲヤケ	子の如く	ヤタはヲヲヤケ
	ムカシカミ	ツクリサヅクル	昔 神	造り授くる
	トホコアリ	トハトトノフル	ト・ホコあり	トは整ふる
	オシテナリ	フタカミウケテ	オシテなり	二神受けて
	ヲヤトナリ	タミオワガコト	親と成り	民お我が子と
	ソダツルニ	アツクヲシエテ	育つるに	篤く教えて
17- 7	ヒトトナス	ヲシエテモナオ	人となす	教えても尚
	サカラハバ	ウチホコロバセ	逆らはば	打ちホコロバセ
	ツミトガノ	タダシモトホギ	罪・科の	糺しもとほき
	アメトツチ	トドカヌコトヲ	天と地	届かぬことお
	オモフナリ	トミラヒメモス	思ふなり	臣らヒメモス
	ウマナクテ	ヲシエオツネノ	倦まなくて	教ふお常の
	ワザトナセ	トミタミコマゴ	業となせ	臣民・子孫

	ヘタテナク	キツクメグマン	隔てなく	慈く恵まん
17- 8	オモヒナリ	オシエヌモノは	思ひなり	教えぬ者は
	トミナラズ	オシエウケヌハ	臣ならず	教ゑ受けぬは
	タミナラズ	ツネニオモエヨ	民ならず	常に思えよ
	アマノリオ	エテミオヲサメ	天法お	得て身お修め
	タガヤシテ	ソロオウエマキ	耕して	ソロお植ゑ蒔き
	クサキリテ	カリヲサムミノ	草切りて	刈り納む身の
	タミハマコ	タクミアキドモ	民は真子	工人・商人も
	ヒコヤサゴ	モノシルトテモ	曾孫・玄孫	物知るとても
17- 9	ウグメカデ	トノミチビキニ	蠢かで	トの導きに
	キラザランオヤ		キラざらんおや	
	ワレニミル	ヲサマルミヨハ	われみるに	治まる御世は
	ナノキコエ	ヒトノココロバ	ナノキ肥ゑ	人のココロバ

	オヨソコシ	アラハニツトメ	凡そ濃し	現はに努め
	ウラヤスム	ナカニヒトリハ	裏休む	中に一人は
	ウラナクテ	アメシルキキノ	裏なくて	天知る木々の
	ハナモミモ	ワガミノミチト	花も実も	わが身のミチと
17-10	シラザラメ	オカシカクスモ	知らざらめ	犯し隠すも
	アメガシル	ウツボハアマノ	天が知る	空は天の
	ココロバノ	ツネニメグレド	ココロバの	常に巡れど
	ミエナクテ	ミヅノメグリオ	見ぬなくて	水の巡りお
	ミルゴトク	ウツボハミユル	見るごとく	空は見ゆる
	ウオトメノ	カワルヒトメノ	魚のメと	変る人メの
	ウラカガミ	ヒタリニモテバ	ウラカガミ	左に持てば
	ミギニミエ	ヒタリエヤレバ	右に見え	左えやれば
17-11	ミギニユク	ムカフエヤレバ	右にゆく	向ふえやれば

	マエニヨル	ミナヒルカエル	前に寄る	みな翻える
	コノカガミ	ナンノタメゾヤ	このカガミ	何の為ぞや
	マサニキケ	モトモトアケノ	正に聴け	もともと明の
	ミヲヤカミ	ソバノトホカミ	御親神	側のトホカミ
	エビタメノ	ヤモトノカミニ	エビタメの	八元の神に
	マモラシム	ヒトノネコエハ	守らしむ	人の音声は
	アナミカミ	ミソフノカミノ	天並神	三十二の神の
17-12	ミメカタチ	ソフヨロヤチノ	耳目形	十六万八千の
	モノオシテ	ヒトノタマシキ	モノおして	人の魂
	ヨロコバス	トキニモトムル	喜ばず	時に求むる
	ウマレツキ	ソムヨロヤチニ	生れつき	十六万八千に
	シナカハル	アオヒトクサハ	品変る	青人草は
	コトゴトク	アメノミオヤノ	尽々く	天の御祖の

	タマモノト	マモラヌハナシ	賜物と	守らぬはなし
	フタカミノ	トホコニヲサム	二神の	トホコに治む
17-13	トシフレバ	ニブナレトキノ	年経れば	鈍・並・鋭の
	タミアルモ	タトヘバカズノ	民あるも	例へば数の
	ウツワモノ	クヅオステナデ	器 物	屑お捨てなで
	ニブトキオ	ナラシモチケン	鈍・疾お	均し用ゐん
	アメノココロゾ		天の心ぞ	
	ワレミルニ	ヨシワロメデツ	われみるに	善し悪ろ賞でつ
	タノシミテ	ヒトのナカゴモ	楽しみて	人のナカゴも
	ヒトフタリ	ヤヤシルミチハ	一二り	やや知る道は
17-14	マスカガミ	アメノムクヒハ	マスカガミ	天の報ひは
	ヌスメルモ	ソシルモウツモ	盗めるも	譏るも打つも
	ミニカエル	ヒトオウテドモ	身に返る	人お打てども

	ソノトキハ	イタキムクヒモ	その時は	痛き報ひも
	アラザレド	ノチノヤマフハ	あらざれど	後の病ふは
	アマガツチ	ヌスミモヒトガ	天が槌	盗みも人が
	シラザレバ	タカラウルトゾ	知らざれば	宝 得るとぞ
	オモエドモ	ヒトタビカクシ	思えども	一度隠し
17-15	フタヌスミ	ミタビソコナヒ	二盗み	三度害ひ
	アラタメズ	アメツチヒトノ	改めず	天地人の
	ミルトコロ	アメノミツゲハ	見るところ	天の御告げは
	ヒトニツグ	ツミアラハレテ	人に告ぐ	罪現はれて
	ホロブトキ	ナスコトナクテ	滅ぶ時	なすことなくて
	カナシキハ	ヨソハヨロコブ	悲しきは	ヨソは喜ぶ
	シムノハヂ	クヤネドカエヌ	シムの恥	悔めど返ぬ
	コオモタバ	シカトキクベラ	子お持たば	確と聴くべら

17-16	アラダケノ	マツハネジケテ	荒猛の	松はねじけて
	ワダカマル	ヒトノワカバモ	蟠る	人の若葉も
	ワガママニ	ミチニモトリテ	わが俣に	道に悖りて
	ワタカマル	ヒトモタキギニ	蟠る	人も薪に
	キルゴトク	オシマデシムノ	切るごとく	惜までシムの
	キタミカナ	コオヒタスノリ	痛みかな	子お育す法
	クセマツオ	ヒキウエアラコ	癖松お	引き植え新木
	ツチカエバ	ナオキトゾナル	培えば	直きとなるぞ
17-17	ヲヤココロ	コマゴマアツキ	親心	こまごま篤き
	トノヲシエ	コハオサノネゾ	トの教ゑ	子は長の根ぞ
	オサナコハ	アラコヲシエテ	幼な子は	アラコ教ゑて
	ツチカエバ	ナオキオサトゾ	培えば	直き長とぞ
	ナルココロ	メグミオシラバ	なる心	恵お知らば

	コタカラノ	ムネウツバリト	子宝の	棟・梁と
	ナルゴトク	ヒトノスマキノ	なるごとく	人の住居の
	ウエニアリ	アラタケココロ	上にあり	荒猛心
17-18	コニモトメ	キキスギネジケ	子に求め	利き過ぎねぢけ
	ヨコシマノ	ハタレトナルゾ	邪の	ハタレとなるぞ
	マスヒトラ	オサナノトキハ	マスヒトラ	幼な時は
	ネジケノメ	ハヤアラタメヨ	ねぢけの芽	はや改めよ
	スデミマエ	ノリオアヤマル	既に前	法お誤る
	マスヒトノ	ホメスギネジケ	マスヒトの	賞め過ぎねぢけ
	ヨコシマガ	タテオモネジケ	邪が	経おもぢけて
	トコヤミノ	ナンダヤワシテ	常闇の	涙 和して
17-19	ヤヤシヅム	コレモミクサノ	ややシヅム	これも三種の
	ウツワノリ	アラデイカンゾ	器 法	あらでいかんぞ

	エザランカ	カネテオモエバ	得ざらんや	かねて思えば
	タスカガミ	アオヒトクサモ	タスカガミ	青人草も
	スグトナル	ヒトにオケルハ	直ぐとなる	人におけらば
	カギリナシ	ナガクツチカフ	限りなし	長く培ふ
	オシエナスメキ		教ゑなすべき	
	ヲヤココロ	トケヌミツホメ	親心	積けぬミツホ姫
17-20	コモリタラ	ソノコニモトム	コモリ・タラ	「その子に求む
	アラタケノ	ココロモガナト	荒猛の	心もがな」と
	コヒケレバ	カミノミツゲニ	乞ひければ	神の御告げに
	アラタケハ	カゼハゲシクテ	「荒猛は	風激しくて
	ニハカブリ	マツフシコブト	俄か降り	松・節瘤と
	ワダカマリ	チヨオフルトモ	蟠り	千代お経るとも
	マシナラズ	ヲヤノココロモ	ましならず	親の心も

	トシハゲシ	アエシノバズテ	利し激し	敢忍ばずて
17-21	ニハカカゼ	オロカニクラキ	俄か風	愚かに暗き
	ニブキコハ	ソノアラカゼニ	鈍き子は	その荒風に
	フキウタレ	イタミシノベバ	吹き打たれ	痛み忍べば
	ナオカラズ	ムチオノガルル	直からず	鞭お逃るる
	ハヤギキオ	ホメヨロコベバ	早聞きを	賞め喜べば
	スギネジケ	ハタレトナルゾ	過ぎねちけ	ハタレとなるぞ
	アヤマルマ	ヲヤツツシメヨ	誤るな	親慎しめよ
	クラキコモ	コマカニヲシエ	暗き子も	細かに教ふ
17-22	ヒオツミテ	スコシハトフル	日お積みて	少しは通る
	ツキオヘテ	アツクヲシエバ	月お経て	篤く教ふば
	ニブサルル	トシトシマナブ	鈍ぶ去るる	年々学ぶ
	アケボノノ	ワザモハヤキゾ	曙の	業も早きぞ

	ハツヨリモ	ヨカラデワザオ	初よりも	良からで業お
	カエズトモ	モモチヲシエテ	変えずとも	百千教ゑて
	オボエズバ	シヅムルツエニ	覚ゑずば	鎮むる杖に
	マタヲシフ	エエコハタノメ	又教ふ	エエコは頼め
17-23	ヲシエドノ	テモトモマツノ	教人の	手元も松の
	シモトツエ	オエルママニテ	苔杖	おゑる俣にて
	ツチカエバ	ソトセニナオル	培えば	十年に直る
	キザシオエ	ミソトセヤヤニ	兆お得	三十年やゝに
	ノビサカエ	モモノツクリキ	伸び栄ゑ	百の作り木
	ミモノハリ	キモハムナキゾ	三百の梁	五十は棟木ぞ
	ヒトノリモ	ソトセホボナル	人法も	十年ほぼなる
	ミソノハリ	キソハムナギノ	三十の梁	五十は棟木の
17-24	イサオシモ	アツキメグミノ	功績も	篤き恵みの

	ユルノリオ	カナラズウムナ	ユル法お	必ず倦むな
	ハヤルナヨ	ハヤキハタレニ	逸るなよ	速きハタレに
	オモムカデ	ヤタノカガミノ	赴か	ヤタのカガミの
	アヤキケバ	ヨコマオサルゾ	綾聞けば	ヨコマお去るぞ
	ワガココロ	イレテイヤスク	わが心	入れてい安く
	アメガマモルゾ		天が守るぞ	
	タヂカラヲ	ススミモフサク	タヂカラヲ	進み申さく
17-25	ヌスビトノ	ミツメニシルル	盗人の	三つ目に知るる
	ツチイカン	カミハヤワシテ	ツチいかん	神は和して
	ミコトノリ	シバシココロオ	勅	しばし心お
	シズメマテ	ワレヒトフリオ	鎮め待て	われ人ふりお
	ツネミルニ	フツクコトナル	常みるに	悉く異る
	クニカミノ	イキフクカゼオ	国神の	息吹く風お

	ウケウマレ	イキストナレバ	受け生まれ	息すとなれば
	ナラハシノ	コトバモクニオ	習慣の	言葉も国お
17-26	ヘダツレバ	カハレドヨソノ	隔つれば	変れど余所の
	オサナゴモ	ナジメバヨソノ	幼子も	なじめば余所の
	フリトナル	ウツホニスメド	ふりとなる	空に住めど
	ソラトバズ	ハニフミイレバ	空飛ばず	埴踏み居れば
	コタエシル	カゼハニカミノ	答え知る	風埴神の
	マモルユエ	ミルキクタビニ	守る故	見る聞くたびに
	ヨシアシモ	ヒメモスアメニ	善し悪しも	ひめもす天に
	ツゲアレバ	カクスヌスムモ	告げあれば	隠す盗むも
17-27	ミニソフル	カゼヨリアメニ	身に添ふる	風より天に
	ツグルナリ	フタノヌスミハ	告ぐるなり	二の盗みは
	セグクマリ	ヌキアシナスモ	せぐくまり	抜き足なすも

	ツチノカミ	メグミニヨリテ	土の神	恵みによりて
	マダツゲズ	ミタビソコナフ	まだ告げず	三度損ふ
	オノガムネ	サワギアルヨリ	己が胸	騒ぎあるより
	コトフルエ	ミメニアラハレ	こと慄え	耳目に現はれ
	ソノヌシハ	カレニトヒツメ	その主は	彼に問ひつめ
17-28	ココサトシ	マタウラドエバ	ここ諭し	また占問 えば
	ツイカタル	ヨソノウタエモ	つい語る	余所の訴えも
	アツカレド	ミツシルツゲノ	預かれど	三つ知る告げの
	フタタビモ	アメノミタネト	再びも	天の御種と
	キミノツゲ	マチュルセドモ	君の告げ	待ち許せども
	シナニヨリ	アメヨリキミニ	品により	天より君に
	ツゲアルゾ	マサニハツベシ	告げあるぞ	正に恥づべし
	アメツチガ	ワルサナセソト	天地が	悪さなせそと

17-29	サガシコソスレ		探しこそすれ	
	ハタレカミ	ハルナススミテ	ハタレ神	ハルナ進みて
	ヲヲンツゲ	ソラカミシレド	大ん告げ	空神知れど
	スメラカミ	ツゲナデオラバ	統ら神	告げなでおらば
	オヤオヤヤ	アラコキキテン	おやおやや	荒子聞きてん
	オサザズリ	アラサネタケル	オサザズリ	アラサネタケル
	コレウンツ	アナトルスリラ	これウンツ	侮るスリラ
	モジケマス	サソアシナンド	もぢけ増す	サソアシナンド
17-30	ハニシラン	イヤスリタケル	埴知らん	いやスリタケル
	コレフンタ	シキバフスリモ	コレフンタ	魄奪スリモ
	オタケンバ	ツラモカタルモ	雄叫んば	ツラモカタルモ
	ワケランヤ	スベカミソラニ	分けらんや	統神空に
	シラセヌバ	アラコズリナル	知らせぬば	荒子ズリなる

	コレミウン	サソラキキテン	これミウン	サソラ聞きてん
	オノガベラ	ナンマスコンチ	オノガベラ	ナンマスコンチ
	ワザツゲテ	ソラツカマント	業告げて	空掴まんと
17-31	ミチヒネリ	ムタビタタカヒ	ミチヒネリ	六度戦ひ
	ナシタレド	マサグルコトハ	なしたれど	ま探ることは
	アカナラン	ソノトキカミハ	如何ならん」	その時神は
	ニコエミテ	マタハナドルナ	にこ笑みて	「又ハナドルナ
	タダココロ	シツメテキケヨ	ただ心	鎮めて聴けよ
	オノガトギ	サカリアザムク	おのが利き	サカリ欺く
	ムクヒアリ	ユエオキカセン	報ひあり	故お聞かせん
	ワレミルニ	ヒトノミヤビハ	我見るに	人のミヤビは
17-32	ナサケエダ	アメヨリサツク	ナサケエダ	天より授く
	タマトシキ	ムスブイノチノ	魂と魄	結ぶイノチの

	タマナカゴ	ウムチハキモゾ	魂ナカゴ	生むちは肝ぞ
	シキノネハ	ムラトココロバ	魄のネハ	腎ココロバ
	フクシユフ	ヨクラヨコシヤ	肺結ふ	ヨクラ脾や
	ネノムクラ	ワタルミヤビガ	ネのムクラ	渡るミヤビが
	モノオシル	ナサケナカゴニ	物お知る	ナサケナカゴに
	カヨエルト	タトエバクセド	通えると	例えば癖人
17-33	マイナヒテ	サカキマサンオ	賄賂ひて	境 増さんお
	トミモホシ	トリヒキマシテ	富も欲し	取引増して
	ヨロコベバ	ヘリニクムタミ	喜べば	減り憎む民
	マタツヨク	ネガエバイカル	又強く	願えば怒る
	トモノオミ	セマルオエラミ	伴の臣	迫るお選み
	ワケカエス	メグミヨロコブ	分け返す	恵み喜ぶ
	マケニクム	キミメスオソレ	負け憎む	君召す恐れ

	タタサレテ	カルルカナシサ	糺されて	枯るる哀しさ
17-34	モロコエド	キミノイカリニ	諸乞えど	君の怒りに
	マタユリズ	カナシキノチノ	また許ず	悲しき後の
	イサオシト	モロガモラエバ	功績と	諸が貰えば
	ユルサルル	オソレバマドヒ	許さるゝ	恐れば惑ひ
	アラタメテ	マメナルゴトシ	改めて	まめなる如し
	マドエルモ	ミヤビナカゴニ	惑えるも	ミヤビナカゴに
	ツゲオケバ	ヒトウツトキハ	告げおけば	人打つ時は
	イタミシル	ソシレバウラミ	痛みしる	譏れば恨み
17-35	ウツワモノ	ヌスマバオシム	器物	盗まば惜しむ
	ソコナハバ	シムノイタミモ	損なはば	シムの痛みも
	シルマカゴ	ココロハアシキ	しるナカゴ	ココロハ悪しき
	ワザナセバ	ミヤビナカゴニ	業なせば	ミヤビナカゴに

	ツグアハレ	ヒトガヒトウツ	告ぐあはれ	人が人打つ
	コロスオモ	ミレバノゾカン	殺すおも	見れば除ん
	オモヒアリ	コロブモオコス	思ひあり	転ぶも起す
	アハレエダ	マシテワガミハ	あはれエダ	ましてわが身は
17-36	ミヤビヨリ	ムネニトホレバ	ミヤビより	胸に通れば
	アヤシナク	ミオオサムレド	あやしなく	身お修むれど
	ココロバハ	オコリオキケバ	ココロバは	奢りお聞けば
	ホシニシム	アヂモイロメモ	欲しにシム	アヂもイロメモ
	ヨコシマニ	シキニアヤカリ	邪に	魄にあやかり
	ミオカラス	ホシモソソゲバ	身お枯らす	欲しもそそげば
	アヂナオリ	イセノミチナル	アヂ直り	伊勢の道なる
	イサムトモ	ヌスムココロバ	勇むとも	盗むココロバ
17-37	ミヤビヨリ	キクラニツゲテ	ミヤビより	五蔵に告げて

	ヤスカラズ	ミメニコトバニ	安からず	耳目に言葉に
	セグクマリ	ヌキアシコタフ	せぐくまり	抜き足答ふ
	ハニココロ	ヨロマスシレド	埴心	万増す知れど
	ミヤビカラ	トキスギテナル	ミヤビから	時過ぎてなる
	ハタレドモ	ソレココロミニ	ハタレども	それ試みに
	ワザオナセ	ワレハヤノゾク	業おなせ	われ早や除く
	ミヤビアリ	コレマツカヤノ	ミヤビあり	これ松カヤの
17-38	ニベナルゾ	ミヤビナケレバ	贅なるぞ	ミヤビなければ
	ミモカルル	カレテイロホシ	身も枯ゝる	枯れて色・欲
	ナンノタメゾヤ		何の為ぞや」	
	ツツシミテ	アマノコヤネガ	謹みて	アマノコヤネが
	モトモリオ	コヘバマタトヨ	元守お	乞へば「又とよ」
	ミコトノリ	ヒトハアメツチ	勅	「人は天地

	カタドレリ	ソラハタカマノ	形どれり	空はタカマの
	ハラノウチ	メハナニシルモ	原の内	目鼻に知るも
17-39	ヒツキホシ	キワタムクラモ	日・月・星	五腑六臓も
	クニノミチ	ナカゴハキミゾ	国の道	ナカゴは君ぞ
	キモハトミ	ヨコシハタミヨ	肝臓は臣	脾臓は民よ
	フクシカキ	ムラトハナラス	肺臓・垣	腎は均す
	ワタソエテ	ミアビメツケノ	腑添えて	ミヤビ目付けの
	ワルサツゲ	フクシカマエノ	悪さ告げ	肺臓かまえの
	アツサムモ	コロモカユレド	暑寒も	衣 変ゆれど
	ホシニシム	トキハカマワズ	欲しにシム	時はかまわず
17-40	アマキニハ	ヨコシムサボル	甘きには	脾臓むさぼる
	ココロザシ	ムラトノイキオ	こころざし	腎臓の息お
	メグラスモ	イロニオボレテ	回らすも	色に溺れて

	ラミカラス	コレミノカガミ	ラミ枯らす	これ身のカガミ
	クモリサビ	ウバウルナカゴ	曇り錆び	奪わるナカゴ
	ミガカント	ヤタノカガミニ	磨かんと	八咫のカガミに
	ムカワセテ	ミガクウツワハ	向かわせて	磨く器は
	モトノモリ	ナカゴノカタチ	元の守	ナカゴの形
17-41	カガミゾヨ	ヒトミヌトテモ	カガミぞよ	人見ぬとても
	ヌスムナヨ	オヨソノヒトハ	盗むなよ	凡その人は
	シラネドモ	ミナアラハルル	知らねども	皆現はるゝ
	モトノモリ	アメハイニシル	元の守	天は昔知る
	ハニコタフ	ヒトハツゲシル	埴答ふ	人は告げ知る
	コノミツニ	ツゲアラハレテ	この三つに	告げ現はれて
	オオヤケノ	ツミマヌカルル	公の	罪免かるゝ
	トコロナシ	ツネニオソレヨ	所なし	常に恐れよ

17-42	ヒノメグリ	ヒルハヒトカモ	日の運行	昼はヒトかも
	アキラカニ	ヨハガトニゴル	明らかで	夜はガと濁る
	ムシバミモ	アメノココロニ	蝕みも	天の心に
	ミルハカミ	ハニトシハガミ	みるは神	埴とシハガミ
	コノアジオ	ヒトノミニシル	このアヂお	人の身に知る
	コノミツオ	アワスカガミノ	この三つお	合すカガミの
	ヤハヤシロ	タハタミオタス	ヤは社	タは民お養す
	ソノキミノ	ヨロノミハタノ	その君の	万の御幡の
17-43	マツリゴト	ヲサムヤスミノ	祭りごと	治むヤスミの
	タミハヤタ	ヤタミアマネク	民はヤタ	八民普く
	テラサント	ヤタノカガミト	照らさんと	ヤタのカガミと
	ナヅクナリ	ナオミサノリノ	名づくなり	尚ミサノリの
	アヂハヒオ	フカクマナビテ	アヂハヒお	深く学びて

	ココニシルベシ		ここに知るべし	
	トキニエム	ハルナムハタレ	時に笑む	ハルナ六ハタレ
	サキノツミ	ユリテモトケヌ	先の罪	ユリテモ積けぬ
17-44	オノガムネ	イマヤヤワルル	己が胸	今やや割るゝ
	コリタマノ	オドロソソギテ	凝り魂の	おどろ滌ぎて
	ノチノヲオ	オクアラダケニ	後の緒お	置く荒猛に
	ヨルヒトモ	オドロソソガン	寄る人も	おどろ滌がん」
	チカヒナス	マタタチカラヲ	誓ひなす	又タチカラヲ
	タニオデテ	タマユラキケバ	「谷お出て	タマユラ聞けば
	ミツシレリ	タトヒイソラモ	瑞知れり	例ひイソラも
	タツイヌモ	ヒシグココチデ	タツ犬も	ひしぐ心地で
17-45	ハンベリキ	コモリタウタオ	侍べりき	コモリ養歌お
	カンガエテ	フクシノヤマヒ	考えて	『肺臓の病

	タシヤスシ	ナサケトアヂノ	治し易し	ナサケとアヂの
	スギヤムモ	ネニイラヌマヨ	過ぎやむも	根に入らぬ間よ
	ハヤイヤセ	ヒトワザモコレ	はや癒せ	人業もこれ
	イロホレモ	ミチモテナセバ	色惚れも	道もてなせば
	アヤマタズ	ヨコヤラバヤム	誤たず	ヨコやらばやむ
	ホシキオモ	イエワザナセヨ	欲しきおも	家業なせよ
17-46	トボシクモ	ヌスマバカルル	乏しくも	盗まば枯るゝ
	トミツネニ	ヒトノイクスオ	臣常に	人の息すお
	カンガエバ	タマスハフクシ	考えば	騙すは肺臓
	イロムラト	ヌスメバキモエ	色腎臓と	盗めば肝臓エ
	ソコナエバ	オトロクナカゴ	損なえば	驚くナカゴ
	ミメニシル	コトバイキスノ	耳目に知る	言葉息すの
	ミツシレバ	ツタエミチビキ	ミツ知れば	伝え導き

	ソロコヤシ	タミニギハサン	ソロ肥やし	民賑はさん
17-47	チカヒノミ	トキニアマテル	誓ひのみ	時にアマテル
	ミコトノリ	ムベナリナンヂ	勅	宣なり汝
	ヨモメグリ	ツチカフミチニ	四方巡り	培ふ道に
	カテフヤシ	イトマアラセデ	糧増やし	暇あらせで
	クニメグリ	ヨノアシハラモ	国巡り	世の葦原も
	ミツホナル	カミノミウタニ	瑞穂なる	神の御歌に
	ツチカフハ	ミノアシハラモ	『培ふは	泥の葦原も
	ミツホナル	タミトナセトミ	瑞穂なる	民となせ臣
17-48	トミトナレタミ		臣となれ民』	
	モロヒトニ	アマノコヤネノ	諸人に	アマノコヤネの
	モフサクハ	ミウタノアヂハ	申さくは	「御歌のアヂは
	スエスエノ	タミモミチビキ	末々の	民も導き

	スナオナル	ワザモヲシエテ	素直なる	業も教ゑて
	ツチカエバ	イエモサカエテ	培えば	家も栄えて
	ソロフェル	ミツホトナセル	ソロ増ゑる	瑞穂となせる
	カミウタゾ	カクノヲシエニ	神歌ぞ	かくの教ゑに
17-49	ミチビキテ	タミモイヤスク	導きて	民もい安く
	ニギハセテ	ソノクニタモツ	賑はせて	その国保つ
	モノアラバ	スエタミトテモ	ものあらば	末民とても
	ウエノトミ	カナラズヲシデ	上の臣	必ずヲシデ
	タマフナル	ミウタナリケリ	賜ふなる	御歌なりけり
	カケマクモ	イトオソレミノ	かけまくも	いと畏みの
	オンウタト	ミチトミヒコモ	御歌」と	道臣・彦も
	モロコエニ	ヤモヨロタミハ	諸声に	八百万民は
17-50	モモチコエ	アナアリガタヤ	百千声	「あな有難や

アナニヤエ アナウレシヤト あなにゑや あな喜しや」と

ヲカミサル ヤタノカカミノ 拝み去る ヤタのカカミの

ミナノアヤ イトメグミナリ 御名の紋 いと恵みなり

17-51 アナカシコカナ あな畏こかな

● オノコロとまじなふの紋(アヤ)

18- 1 アメハレテ ノドカニミユキ 天晴れて のどかに御幸

アソビマス タカマノヨロノ 遊びます 「タカマは万の

クニカタチ コレオノコロト 国形 これオノコロ」と

18- 2 ニコエミテ ナカノイワホニ にこ笑みて 中の巖に

オワシマス ソバニトミアリ おわします 側に臣あり

アメミマゴ ミマエニモフデ 天御孫 御前に詣で

	ツツシミテ	ソノオノコロニ	慎みて	そのオノコロの
	ユエオコフ	キミノヲシエは	故お乞ふ	君の教ゑは
	フタカミノ	ウキハシニタチ	「二神の	浮橋に立ち
	コノシタニ	クニナカラント	この下に	国なからんと
	トホコモテ	サグルミホコノ	ト矛もて	探る御矛の
18- 3	シタダリガ	コリナルシマオ	滴りが	凝り成る島お
	オノコロト	クダリテトモニ	オノコロと	降りて共に
	トツギシテ	ミハシラマハリ	交合ぎして	御柱 廻り
	アワウタオ	ヨミテオノコロ	天地歌お	詠みてオノコロ
	ヨロモノオ	ウミシハムカシ	万物お	生みしは昔
	アメツチノ	アホウビイマダ	天地の	アホウビ未だ
	アメミヲヤ	アテオムスビテ	天御祖	アテお結びて
	フクウツホ	キワナクメグリ	吹く空	際なく巡り

18- 4	ウキトウヌ	アウヌムスビテ	ウキとウヌ	アウヌ結びて
	アマツクリ	ウヌアマシリテ	天造り	ウヌア混りて
	ウハムスビ	ウビオクニタマ	ウハ結び	初お国魂
	カテムスビ	ムネホエラミテ	カテ結び	宗火選みて
	ヒトマロメ	アカミヤニスエ	日と丸め	アカミヤに据え
	シテムスビ	ミナモトエラミ	シテ結び	源選み
	ツキノワト	シラミヤニスエ	月のワと	シラミヤに据ゑ
	ウンノテノ	ウツロキオムマ	ウンノテの	移神お馬
18- 5	イニノテノ	シナドハクツハ	イニノテの	風神は轡
	ヒカリムチ	オテニキニタマ	光り鞭	オテに国魂
	ノリメグル	ハオトホオコホ	乗り巡る	音はホオコホ
	ウビコニエ	ニアガルヤマゾ	ウビコ煮え	煮あがる山ぞ
	ノテムスビ	ノカゼニカワク	ノテ結び	野風に乾く

	クコハニニ	ヒズメノアトハ	奇肥埴に	蹄の跡は
	ノラトミチ	シノタマヤマニ	野らと道	シの魂・山に
	シタタリガ	ナガレウミナル	したゝりが	流れ海なる
18- 6	カノミタマ	コワニヨロコビ	カの御魂	コワに喜び
	ウハノテオ	ワトアニワケテ	ウハノテお	ワとアに別けて
	アイウエオ	ウツホカゼホト	アイウエオ	空・風・火と
	ミヅハニノ	マジワリナレル	水・埴の	混わり成れる
	ミナカヌシ	ヤオモニウメル	ミナカヌシ	八面に生める
	ヒトハホシ	ホシハタネナス	人は星	星はタネなす
	ミヲヤカミ	ヒトニウマレテ	御祖神	人に生れて
	ウグメクニ	トコヨノミチオ	うぐめくに	常世の道お
18- 7	ヲシユカミ	クニトコタチモ	教ゆ神	クニトコタチも
	ノリメグリ	クコワニヤモオ	乗り巡り	奇肥地に八方お

	ナニガタト	ウムクニスベテ	何県と	生む国総べて
	オノコロゾ	クニトコタチノ	オノコロゾ	クニトコタチの
	ヤクダリコ	ナニクニサツチ	八下り子	何クニサツチ
	ヤモヌシト	ナリテトホカミ	八方主と	成りてトホカミ
	エヒタメノ	クニニウムコハ	エヒタメの	国に生む子は
	ミクタリノ	キミトミタミゾ	三下りの	君・臣・民ぞ
18- 8	トヨクンヌ	モモアマルコモ	トヨクンヌ	百余る子も
	アメニユキ	アナミノヤカミ	天にゆき	天並の八神
	ミソフカミ	ミコウビチニハ	三十二神	御子ウビチニは
	モモヒナニ	サイアヒナシテ	桃雛に	さいあひなして
	マサカキオ	ウエテカゾフル	マサカキお	植ゑて数ふる
	ムソトシノ	ズハエモムモニ	六十年の	ズは枝も六百に
	ソエタオエ	ムヨトシチエニ	十枝終え	六万年千枝に

	ツキカルル	ウエツギキモノ	尽き枯るる	植え継ぎ五百の
18- 9	ノチノハツ	キモツギアマノ	後の初	五百継ぎ天の
	マサカキオ	キミノミワザト	マサカキお	君の御術と
	モロトモニ	マサカキフソノ	諸共に	マサカキ二十の
	アマルコロ	ワイタメアラズ	余る頃	弁別あらず
	フタカミノ	ツギテアマネク	二神の	継ぎて普く
	ノリメグリ	タミノヲシエハ	乗り巡り	民の教えは
	スキクワヤ	ツノアルナキノ	鋤・鍬や	角あるなきの
	ケタモノオ	ノリムマケレバ	動物お	乗り旨ければ
18-10	ムマトナシ	ノリウシケレバ	ムマとなし	乗り厭しければ
	ウシトシテ	タノアラスキヤ	ウシとして	田の粗鋤きや
	ニモツモノ	カクゾミココロ	荷持つ物	かくぞ御心
	ツクシモテ	タミモキヤスク	尽し以て	民も居易く

	ナスクニオ	オノコロシマト	なす国お	オノコロシマト
	ナヅクナリ	トキニミマゴノ	名づくなり	時に御孫の
	モウサクハ	ミオヤノメグル	申さくは	「御祖の巡る
	ホオコホオ	イマオノコロト	ホオコホお	今オノコロと
18-11	ナマルカヤ	カミノコタエハ	訛るかや」	神の答えは
	ホオコホハ	マヂルオトナリ	「ホオコホは	交る音なり
	ヨクキケバ	クルマハギイン	よく聴けば	車はギイン
	ナルカミハ	ホオロホオロゾ	鳴雷は	ホオロホオロぞ
	コエノオハ	コハニオサマル	声の緒は	肥地に収まる
	ヲノヲシテ	ノカゼニノレル	ヲのヲシテ	野風に乗れる
	クツハミノ	オトハコオコオ	轡の	音はコオコオ
	フムアトノ	ノニヒトウミテ	踏む跡の	野に人生みて
18-12	ノルハノテ	ネワニヨロコブ	乗るはノテ	ネワに喜ぶ

	ネワハコテ	ヒトナルミチハ	ネワはコテ	人なる道は
	トオモチヒ	ソノモトハロテ	トお用ひ	その元はロテ
	オノコロノ	ヨツハワニアヒ	オノコロの	四つはワにアヒ
	クニオサム	ワザトコノマデ	国治む	禍と濃の魔で
	オノコロノ	モシモウゴカバ	オノコロの	もしも動かば
	ヨナオリオ	オノコオノコト	世直りお	オノコオノコと
	イノルベシ	ワランベイネテ	祈るべし	童寝ねて
18-13	オソワレバ	オノコオノコト	襲われば	オノコ・オノコと
	タナコナデ	ハタタカミナリ	掌 撫で	はたた雷鳴り
	トマザラバ	ホメコホサワゾ	止まざらば	ホメコホサワゾ
	ヒナオリト	イノリトトムル	ヒナオリと	祈り止むる
	ヲノコロト	ワラベノヒタヒ	ヲノコロと	童の額
	カニオセバ	オソワレヌノリ	かに押せば	襲われぬ法

オノコロアヤゾ

オノコロ・アヤゾ

● 騎乘法(ノリノリ)一貫(ヒトヌ)き間(マ)の紋(アヤ)

19-1(イ)	フタカミノ	ミヨノヨワイモ	二神の	御世の齢も
	ヤスラカニ	オウミノタガニ	安らかに	近江の多賀に
	キマサント	ミコワカヒトニ	居まさんと	御子ワカヒトに
	アマテラス	ヒツギオユツリ	天照らす	日嗣ぎお譲り
	マストキニ	ヒタリノトミハ	坐す時に	左の臣は
	オモイカネ	ミキサクラウチ	オモイカネ	右サクラウチ
	カナサキハ	ヒオウツシマス	カナサキは	日お移します
	エヲヤトミ	カダハウケモチ	兄親臣	カダはウケモチ
	オバシリハ	ムマヤヲサメゾ	オバシリは	馬事長官ぞ

	キニトミト	ココロヒトツニ	君臣と	心 一つに
	ツカサトレ	トキニヲバシリ	司とれ	時にヲバシリ
	ヒタカミノ	ミヤニモフデテ	ヒタカミの	宮に詣でて
	ミチコエバ	トヨケノカミノ	道乞えば	「トヨケの神の
	オシエニハ	ノリハヂミチオ	教えには	法は地道お
19- 3	ツネトナス	マゴニタヅナオ	常となす	馬子に手綱お
	ヒカセオキ	ムマノミキヨリ	曳かせおき	馬の右より
	フミノボリ	シクヤスクラノ	踏みのぼり	敷く鞍の
	アブミナワ	マチニキキアゲ	鎧縄	襠に居木あげ
	ココロミテ	モモトハラビノ	試みて	股と腹帯の
	ユルミアイ	コシスエノリテ	緩みあひ	腰据え乗りて
	ヤワヤワト	ムマノアシドリ	和々と	馬の足どり
	イキシアヒ	アハスカナメノ	息す合ひ	合はず要の

19- 4	ノリノリゾ	ツネニココロオ	乗馬法ぞ	常に心お
	ウベキナリ	ムマハウマレテ	得べきなり	馬は生れて
	モノシラズ	アダハシルトキ	もの知らず	徒走るとき
	ノリオツゾ	カネテヲシエバ	乗り落つぞ	かねて教えば
	カナフモノ	マタイツノリハ	叶ふもの	また逸乗は
	ハセルトキ	シタナメクラオ	馳せる時	下滑鞍お
	シキオビテ	ハラビユルメズ	敷き帯びて	腹帯緩めず
	ヒヂヨケノ	タレカワウバト	泥除けの	垂皮浮羽と
19- 5	ナルユエハ	ハセユクミチニ	なる故は	馳せゆく道に
	ナカクボノ	コミゾにユキテ	中窪の	小溝にゆきて
	アブミニテ	ソノタレカワオ	鐙にて	その垂皮お
	ウチアオツ	ウチアオカレテ	打ち煽つ	打ち煽かれて
	アゼフクミ	ハネトナルトキ	風含み	羽根となる時

	トビコサス	タトヒトブトモ	跳び越さず	たとひ跳ぶとも
	ノルヒトノ	ユクリナケレバ	乗る人の	ゆくりなければ
	アエトバズ	クツハニツケル	敢え跳ばず	轡につける
19- 6	ヒキツナオ	ヒトヌキノマト	曳き綱お	一貫きの間と
	ナヅクナリ	ユエハアメツチ	名づくなり	故は天地
	ワカザルニ	アメノミオヤノ	分かざるに	天の御祖の
	アホオアメ	ウビオクニタマ	天洞お天	初泥お地球
	ウツロノリ	シナドノタヅナ	空乗り	級戸の手綱
	ノリメグリ	ヨロモノウメル	乗り巡り	万物生める
	フタカミモ	ノリメグリテゾ	二神も	乗り巡りてぞ
	クニヲサム	ウツロクツワヤ	国治む	移ろ轡や
19- 7	クシタマオ	ヒトヌキノヲト	地球お	一貫きの緒と
	ココロエバ	タトヒハスレド	心得ば	たとひ走れど

	ノリオチズ	ムマクルハセヌ	乗り落ちず	馬狂はせぬ
	ワガココロ	ヒチツラヌキノ	わが心	一貫きの
	タツナヒク	アルヂノママト	手綱ひく	主の俣と
	ナルモノゾ	ウバノアオリオ	なるものぞ	浮羽の煽りお
	ウツトテモ	ツナツヨケレバ	打つとても	綱強ければ
	ムマトバズ	ツナユルケレバ	馬跳ばず	綱緩ければ
19- 8	マエアシオ	オリテタオルゾ	前足お	折りて倒るぞ
	イツトユル	カケコエメヲノ	逸と緩	掛声陰陽の
	アイタアリ	コノホドライノ	間あり	この程らいの
	マオシレバ	ヂミチイツアレ	間お知れば	地道・逸・荒
	ノリノリオ	マタクエルゾト	乗馬法お	全く得るぞ」と
	サツケマス	ココニヲバシリ	授けます	ここにヲバシリ
	ミチオエテ	ヒヒニモモタビ	道お得て	日々に百度

	ノリナルル	チヨロトトノヒ	乗り馴るる	千万整ひ
19- 9	ネリナレテ	ヤヤウルヂミチ	練り馴れて	やや得る地道
	ツツノワザ	トシオカサネテ	ツツの術	年お重ねて
	ネリナレテ	アレノリミソコ	練り馴れて	荒馬乗三十九
	ハナワザモ	マタナレソミテ	ハナ術も	又馴れ染みて
	イヅノリノ	キソコサツメノ	逸乗馬の	五十九サツメの
	タエワザノ	ノリノリサダム	妙術の	乗馬法定む
	ミコトノリ	ノリヲシエドト	勅	「乗教人と
	ナルヨリコ	イフキドヌシヤ	なるヨリコ	イフキドヌシヤ
19-10	ソサノヲト	スベヤソキヨロ	ソサノヲと	総べ八十五万
	ミチソヤノ	カミニツタフル	三千十八の	神に伝ふる
	ノリワザモ	ミツレバカクル	乗馬術も	満つれば欠くる
	ヨコシマノ	ハヤルマスビト	邪心の	逸るマスビト

	ムラガルル	ナンマスコチノ	群がるる	何増す九千の
	サマタゲモ	ヤブルヲシデオ	妨害も	破るヲシテお
	タマワレバ	ホドヨクハラフ	賜われば	程よく祓ふ
	ムツノカミ	タケモノノベラ	六つの首	武モノノべら
19-11	アレイツオ	ノリュミワザニ	荒れ逸お	乗馬弓業に
	ヨコシマオ	ノゾケバスベテ	邪道お	除けば総て
	ヨソヤマス	オヲンタカラモ	四十八ます	大御宝も
	ミナスデニ	キオヤスクヌル	皆既に	居お安く寝る
	ノリュミノ	イザオシタツル	乗馬弓の	功績立つる
	モノノベオ	メグミタマヒテ	モノノベお	恵み賜ひて
	ヲバシリニ	キヅノナタマフ	ヲバシリに	逸の名賜ふ
	コノカミハ	トヨケノマゴノ	この神は	トヨケの孫の
19-12	ミカサヒコ	ソノコヒサヒコ	ミカサヒコ	その子ヒサヒコ

	カシマカミ	イカツチヒシグ	カシマ神	雷神拉ぐ
	イサオシオ	タケミカツチト	功績お	タケミカツチと
	ナヅクコレカナ		名づくこれかな	
	ホツマツタエミハタノソコ		ほつまつたゑ御織の十九	
	ノリノフミテルタエノアヤ		馭典の鑑 照妙の紋	
19-1(甲)	フソキスス	モモミソエダノ	二十五スス	百三十枝の
19- 2	トシサナト	ハルノハツヒニ	歳サナト	春の初日に
	ヨノヒツギ	ミコオシヒトニ	世の日嗣	御子オシヒトに
	ユツリマシ	アメヨリイセニ	譲りまし	天よりイセに
	オリイマス	トキニツキスミ	降り居ます	時にツキスミ
	オオクマト	ヒツメアオコマ	オオクマト	秀馬 青駒
	タテマツル	カミオモシロク	奉る	神おもしろく
	オボスレバ	クマトニタマフ	おぼすれば	クマトに賜ふ

	ミアエニハ	ヌエアシモチガ	御饗には	鶴足持が
19- 3	ガサクサモ	コゲウハコベラ	瘡疥癬も	コゲウ・ハコベラ
	イタヒラコ	スズナスズシロ	イタヒラコ	スズナ・スズシロ
	スセリナヅ	コノナナクサニ	スセリ・ナヅ	この七草に
	ノゾクナリ	サクラハナレバ	除くなり	桜 葉なれば
	マタノモチ	コガネヒツメノ	又のモチ	黄金秀馬の
	クロコマオ	タカギガヒケバ	黒駒お	タカギが曳けば
	タテマツル	ミツボマナキニ	奉る	三局マナ井に
	ノリミユキ	シバシバマツリ	乗り御幸	しばしば政治
19- 4				
19- 4	キコシメス	コレソラクモリ	聞き召す	これ空曇り
	アラザリキ	トシヘテノチニ	あらざりき	歳経てのちに
	ニニキネノ	ミユキホツマノ	ニニキネの	御幸ホツマの
	ニハリナル	ノリノリメセバ	ニハリなる	乗馬法召せば

	ヲバシリガ	ワザオウケタル	ヲバシリガ	術お受けたる
	タカヒコネ	ヂミチハヤスク	タカヒコネ	地道は易く
	アレキツノ	ワザハエガタキ	荒乗逸乗の	術は得がたき
	モモチタビ	トトノヘネリテ	百千度	整へ練りて
19- 5	コレオウル	マヅシルムマノ	これお得る	まづ知る馬の
	ウマレツキ	アラマシトカン	生れつき	あらまし説かん
	ヒタカミハ	シシタクマシク	ヒタカミは	肉逞ましく
	ユルヤカデ	ヤヤヒトトセニ	緩やかで	やや一年に
	ノリナルル	ヂミチノノチハ	乗り馴るる	地道の後は
	アレノリヤ	ツクシノムマハ	荒れ乗りや	ツクシの馬は
	スコヤカニ	ユルクナルルモ	健やかに	緩く馴るるも
	トシナカバ	ハセイツカケモ	年半ば	馳せ逸駆けも
19- 6	ナカナレヤ	マタコシクニハ	長馴れや	またコシ国は

	タクマシク	シシナガナレニ	遅ましく	肉長馴れに
	イソグユエ	ミヨツキナレテ	急ぐ故	三・四月馴れて
	イツカケモ	ナレトイソグハ	逸駆けも	馴れと急ぐは
	アヤシアリ	ミナミノムマハ	奇しあり	南の馬は
	チイサクテ	トシナレハヤク	小さくて	年馴れ早く
	ネガウスク	イサオシナラズ	願う速く	功績ならず
	シカシマタ	ツヨキヨハキモ	然しまた	強き弱きも
19- 7	タネニヨリ	ケイロニワカツ	種により	毛色に分つ
	ヨシアシモ	ソタチニヨリテ	善し悪しも	育ちによりて
	シナカワル	ヨクノリナレテ	品変わる	よく乗り馴れて
	コレオシル	ムマモチユルハ	これお知る	馬用ゆるは
	イナムシガ	ヒミツノナセル	稲虫が	火水のなせる
	ワサハヒモ	ハヤノリナシテ	禍も	早乗りなして

	ノゾクナリ	モシノリオカス	除くなり	もし法犯す
	モノアレバ	テニハツルギオ	者あれば	手には剣お
19- 8	モツユエニ	クツハノツナハ	もつ故に	轡の綱は
	アカルタエ	キヌハモチヒズ	明る妙え	絹は用ひず
	チチミノ	チチメルユフデ	縮み布	縮める木綿で
	ヤタフタツ	ソノミヅツキオ	八尺二つ	そのミヅツキお
	ハニユヒテ	テヅキオコシニ	輪に結ひて	手綱お腰に
	ハサミオブ	コノフタスヂオ	挟み帯ぶ	この二条お
	ミキヒダリ	コシノヒネリニ	右左	腰の捻りに
	ツナオヒク	ムマノココロニ	綱お引く	馬の心に
19- 9	コタエテゾ	タエナルワザオ	応えてぞ	妙なる術お
	ナスタトエ	アメツチツナグ	なす例え	天地繋ぐ
	ナカクシノ	イギニツキヒノ	中奇しの	息に月日の

	ナガミヂカ	ハルアキトナス	長・短か	春秋となす
	ミヲヤカミ	カクコシツカフ	御祖神	かく腰使ふ
	アカルタエ	ワザオオモハバ	明る妙	術お思はば
	クラシキテ	ユキツモドリツ	鞍敷きて	行きつ戻りつ
	ムソアユミ	アシドリオミテ	六十歩み	足取りおみて
19-10	ノチニノル	ヂミチノアブミ	後に乗る	地道の鑑
	カナツクリ	カケバヲザシノ	鉄作り	駆けばヲザシの
	ツリナワモ	キツキミジカク	吊綱も	五寸短かく
	ヂミチニハ	ハラビユルクテ	地道には	腹帯緩くて
	キツユビノ	トフルホドヨシ	五指の	通る程よし
	キヅカケハ	ハルビユルメズ	逸駆けは	腹帯緩めず
	チトシメテ	シタナメキヅナ	ちと締めて	下滑絆
	ムナガヒモ	シホデニソエテ	胸繫も	シホデに添えて

19-11	クツハツナ	ヒトタケムタノ	轡綱	一丈六尺の
	ナカホドオ	キツナニソエテ	中ほどお	絆に添えて
	クツハミノ	ワニユフハシオ	轡衝の	輪に結ふ端お
	マテニモツ	アダバシリナキ	両手に持つ	徒走りなき
	ヒトヌキマ	マタテルタエハ	一貫き間	また照る妙は
	タケムタノ	ソノミヅツキオ	丈六尺の	そのミヅツキお
	マテノワニ	ユヒテナカモツ	両手の輪に	結ひて中持つ
	アカタエト	ヌキマオカヌル	明妙と	貫き間お兼ねる
19-12	テルタエヤ	ムマノサダメハ	照る妙や	馬の定めは
	メハナヨリ	オホネエヤタノ	目鼻より	尾骨え八尺の
	ツツタチハ	キタキキノリオ	ツツタチは	五尺五寸法お
	ハツキモチ	サツキキツカノ	ハツキモチ	五月五日の
	コトホキノ	ノリにカケルハ	寿きの	乗馬にかけたは

	アヤシアリ	タトエフトクト	奇しあり	たとえフトクト
	ヤツキキノ	ワリアヒカガエ	八つ五五の	割合考ゑ
	タマフベシ	ココニミマゴノ	給ふべし	ここに御孫の
19-13	ヂミチヨリ	ノリナレネリテ	地道より	乗り馴れ練りて
	アレノリモ	ヒツミツキヘテ	荒れ乗りも	日積み月経て
	ツヒニエテ	マタキヅノリオ	遂に得て	又逸乗りお
	トシカサネ	ワザエタマヘバ	歳重ね	術得たまへば
	ミコトノリ	キツノヲシデオ	勅	稜威の璽お
	タマヒケリ	タカヒコネニハ	賜ひけり	タカヒコネには
	フタアレノ	ヲシデタマエバ	二荒の	璽 賜えば
	コモマゴモ	ムマノキミナリ	子も孫も	馬の君なり
19-14	クスリニハ	ヒトミコマヒザ	薬には	ヒトミコマヒザ
	ウハナクズ	ツチヒトエバハ	卯花葛	ツチヒトエバは

マメハゴゾ イツヲハシリト 豆ハゴゾ イツヲハシリと

タカコヒネ フタアレカミト タカコヒネ 二荒神と

キサラシエ マツルノリュミ キサラシエ 祭る乗馬弓

ナラフコロカナ 習ふ頃かな

● 皇御孫(スメミマゴ)十種神宝(トクサ)得る紋(アヤ)

20- 1 フソムス スムエヨソヒホ 二十六スス 十六枝四十一穂

トシキヤエ ヤヨイカスガノ 歳甲辰 三月春日神の

トシヲイテ マツリヤスマン 歳老いて 政 休まん

コトワリニ アマテラシマス 道理に 天照します

オシホミミ ミコハクシタマ オシホミミ 御子はクシタマ

ホノアカリ イミナテルヒコ 火のあかり イミ名テルヒコ

20- 2	クダサント	チチミヅカラノ	下さんと	父みづからの
	ツゲフミオ	カグヤマシカニ	告げ文お	カグヤマ勅使に
	タテマツル	フミニモフサク	奉る	文に申さく
	ミヅカラガ	アシハラクニオ	「ミヅカラが	アシハラ国お
	ヲサメント	ヨソフマニタミ	治めんと	装ふ間に民
	アツマリテ	ヒタトトムユエ	集まりて	ひた留む故
	テルヒコオ	クダスベキヤト	テルヒコお	下すべきや」と
	ウカカエバ	イセノランカミ	伺ゑば	イセの御神
20- 3	キコシメシ	ユルセバシカノ	きこしめし	許せば勅使の
	カエコトス	ココニトヲヤノ	返言す	ここにト親の
	アマツカミ	トグサタカラオ	天つ神	十種宝お
	サツケマス	オキツカガミト	授けます	オキツ鏡と
	ヘツカガミ	ムラクモツルギ	ヘツ鏡	ムラクモ劍

	ウナルタマ	タマカエシタマ	ウなる玉	魂返し玉
	チナルタマ	ミチアカシタマ	チなる玉	ミチ明かし玉
	オロチヒレ	ハハチシムヒレ	オロチヒレ	ハハチシムひれ
20- 4	コノハヒレ	コノトグサナリ	コノハひれ	この十種なり
	イタムコト	アラバヒフミヨ	痛むこと	あらば一三四
	キムナヤコ	トマデカゾエテ	五六七八九	十まで数えて
	フルエタダ	ユラユラフルエ	振るゑただ	ゆらゆら振るゑ
	カクナセバ	スデニマカルモ	かくなせば	既に死るも
	ヨミカエル	フルノコトゾト	蘇える	振ることぞと
	ミコトノリ	ナカクニノカミ	勅	ナカ国の神
	カバマンオ	フセグトモカミ	拒まんお	防ぐ伴神
20- 5	カグヤマハ	ヤマズミノフコ	カグヤマは	ヤマズミの二子
	フトタマハ	ミムスビノミコ	フトタマは	ミムスビの三子

	コヤネトハ	カスガトノノコ	コヤネとは	カスガ殿の子
	クシタマハ	ミムスビノヨコ	クシタマは	ミムスビの四子
	ミチネトハ	カンミノヒマコ	ミチネとは	カンミの曾孫
	カンタマハ	ヤマスミノミコ	カンタマは	ヤマスミの三子
	サワラノハ	アカツチノマコ	サワラノは	アカツチの孫
	ヌカドトハ	カガミツコノコ	ヌカドとは	カガミツコの子
20- 6	アケタマハ	タマツコノコゾ	アケタマは	タマツコの子ぞ
	ムラクモハ	ミチネガオトト	ムラクモは	ミチネが弟
	ウスメヒコ	ミケモチノマゴ	ウスメヒコ	ミケモチの孫
	カンタチハ	コモリノハツコ	カンタチは	コモリの長子
	アメミカゲ	タタキネノオコ	アメミカゲ	タタキネの御子
	ミヤツヒコ	カナサキノミコ	ミヤツヒコ	カナサキの三子
	ヨテヒコハ	コモリノヨツコ	ヨテヒコは	コモリの四つ子

	アメトマミ	ヌカタダノオコ	アメトマミ	ヌカタダの御子
20- 7	アマセオハ	カンミノヤサゴ	アマセオハ	カンミの玄孫
	タマクシハ	セオノイトコゾ	タマクシハ	セオの従弟ぞ
	ユツヒコハ	サワラノノオト	ユツヒコハ	サワラノの弟
	カンタマハ	タマクシノオト	カンタマハ	タマクシの弟
	ミツギヒコ	カンタマノオト	ミツギヒコ	カンタマの弟
	アヒミタマ	タカギノヨツコ	天日ミタマ	タカギの四つ子
	チハヤヒハ	ヨテノオトキコ	チハヤ日は	ヨテの弟・五子
	ヤサカヒコ	コモリノヤツコ	ヤサカヒコ	コモリの八つ子
20- 8	イサフタマ	ツノコリノコゾ	イサフタマ	ツノコリの子ぞ
	イキシニホ	オモヒガネノコ	イキシニホ	オモヒガネの子
	イクタマハ	タカギノキツコ	イクタマハ	タカギの五つ子
	サノヒコネ	ヒコナノコナリ	サノヒコネ	ヒコナの子なり

	コトユヒコ	ハラキネノオコ	コトユヒコ	ハラキネの御子
	ウワハルハ	ヤツココロノコ	ウワハルは	ヤツココロの子
	シタハルハ	ウワハルノオト	シタハルは	ウワハルの弟
	アヨミタマ	タカギノナナコ	天ヨミタマ	タカギの七子
20- 9	スベミソフ	ミナノリムマデ	総三十二	皆乗馬で
	マモリユク	ミコハヤフサノ	守りゆく	御子は八房の
	イテクルマ	フソキノハトオ	極上車	二十五のハトオ
	キツトモノ	マモルミヤツコ	五伴の	まもる宮つ子
	アマツマラ	カンミノヤサコ	アマツマラ	カンミの玄孫
	アカマロハ	ツクバツソノコ	アカマロは	ツクバツソの子
	アカウラハ	シホモリノフコ	アカウラは	シホモリの二子
	マウラトハ	ヤマスミノキコ	マウラとは	ヤマスミの五子
	アカホシハ	カツテノオトト	アカホシは	カツテの弟

20-10	コノキタリ	オオモノヌシハ	この五人	オオモノヌシは
	キツクミノ	モノヘフソキオ	五組の	モノヘ二十五お
	ヒキノフテ	トモヒトスベテ	率き添ふて	伴人すべて
	ヤラムソヨ	ヒタカミオデテ	八百六十四	ヒタカミお出で
	カシマミヤ	ソノミチタミノ	カシマ宮	その道民の
	イデムカヒ	タガヤシカクト	いで迎ひ	耕し斯くと
	キコシメシ	イセニハンベル	聞しめし	イセに侍べる
	ミコノオト	キヨヒトニカミ	御子の弟	キヨヒトに神
20-11	ミコトノリ	ナレトチカラト	勅	「汝とチカラと
	ハヤフネニ	ユキテアワフネ	早船に	行きて齊船
	ススムベシ	ユリテミマゴト	進むべし」	依りて皇孫と
	タチカラヲ	ワニフネニノリ	タチカラヲ	ワニ船に乗り
	カンフサノ	ツクモニツキテ	上総の	九十九浜に着きて

	カトリミヤ	カンコトナレバ	カトリ宮	神事なれば
	ホノアカリ	マウラオメシテ	火のアカリ	マウラお召して
	ウラトエバ	マウラフトマニ	占問えば	マウラ・フトマニ
20-12	アキニトル	コチニヒモトケ	アキニとる	「東風に氷も融け
	ツミノガル	イマハルナレバ	罪逃る	今春なれば
	ニシノソラ	タミツカレナシ	西の空	民勞れなし
	トシヨシト	ミコトサダマル	よしよし」と	勅 定まる
	ニニギネト	タチカラトユク	ニニギネと	タチカラと行く
	ヒタカミノ	キミオヲカミテ	日高見の	君お拝みて
	ヨシオツゲ	ノチニミマゴト	由お告げ	後に皇孫と
	タチカラト	イサワニカエリ	タチカラと	イサワに帰り
20-13	カエコトス	トキニスメミコ	返言す	時に皇御子
	イワスクノ	フネオモフケテ	齋奇の	船お設けて

	マラガオヂ	アマツハバラヲ	マラが叔父	アマツハバラを
	フナオサニ	マラハカヂトリ	船長に	マラは舵とり
	アカウラオ	フナコツカサオ	アカウラお	船子司に
	アカマロト	アカホシモノオ	アカマロと	アカホシ物部お
	ソエカゴニ	カウラハカゼミ	添え水手に	マウラは風見
	ツクモヨリ	イツノミサキニ	九十九より	伊豆の岬に
20-14	ホオアゲテ	オキハシルメハ	帆おあげて	沖走る目は
	オホソラオ	ハルカニカケリ	大空お	遙かに駈けり
	ミクマノノ	ミヤキオカミテ	御熊野の	宮居拝みて
	ナニハヨリ	カモニテイタル	浪速より	鴨船にて至る
	イカルガノ	ミネヨリトリノ	斑鳩の	峯より鳥の
	シラニハニ	アマノイワフネ	白庭に	天の齋船
	オホソラオ	カケリメクリテ	大空お	駈けり巡りて

	コノサトノ	ナオモソラミツ	この里の	名おも空みつ
20-15	ヤマトクニ	ミヤツヤナリテ	ヤマト国	宮つ屋なりて
	ソフノカミ	スガタガムスメ	十二の後	スガタが娘
	ミキサキニ	ナシテウタヨミ	御後に	なして歌よみ
	カダカキノ	コトオタノシム	カダカキノ	琴お楽しむ
	イカルガノ	ミヤニウツリテ	斑鳩の	宮に移りて
	ソノアスカ	ウテナニヨモオ	その明日	高台に四方お
	ノソムオリ	シラニハヤマニ	望む折	白庭山に
	カラストブ	クマノトオモヒ	鳥 飛ぶ	熊野と思ひ
20-16	ミヤウツシ	トキニコヤネハ	宮移し	時にコヤネは
	ハヤカレト	オホモノヌシモ	「早かれ」と	オホモノヌシも
	トトメケル	フトタマガイフ	止めける	フトタマがいふ
	カカナエテ	キミノオボスオ	「日夜なえて	君の思すを

	トトメンヤ	カグヤマモイフ	止めんや」	カグヤマもいふ
	クマノナル	アスカウツセバ	「クマノなる	アスカ移せば
	ヨキタメシ	スデニキワマル	よき例し	既に極まる」
	モノヌシハ	イカリテイワク	モノヌシは	怒りて日く
20-17	フトタマハ	キミノチノオヂ	「フトタマは	君の道の叔父
	トミヲキナ	キナフヨロトシ	臣翁	昨日万歳
	キミイワヒ	ケフマタカワル	君祝ひ	今日また変る
	キヤウツシ	ヨロチハトホシ	宮移し	万千は遠し
	ヒトトセモ	ヘザルオセメバ	一年も	経ざるお責めば
	ヨノハチハ	ナンチノココロ	世の恥は	汝の心
	ケガリヨリ	キミアヤカラバ	汚れより	君あやからば
	ワレオラズ	アカネホノホニ	我れ居らず	茜火のほに
20-18	ツミストモ	マロカネハメド	罪すとも	マロカネ食めど

ケガレエズ	カクイイカエル	汚れ得ず」	かくいい帰る
モロハカリ	ツイニウツシテ	諸議り	遂に移して
アスカカワ	クルハニホリテ	アスカ川	くる地に堀りて
ミソギナスカナ		ミソギなすかな	

● ニハリ宮(ミヤ)法(ノリ)定(サダ)む紋(アヤ)

21- 2	フソムスス	ソナエフソミホ	二十六スス	十七枝二十三年
	ヤヨヒツヒ	キヨヒトミコノ	三月初日	キヨヒト御子の
	ミコトノリ	オホモノヌシガ	勅	「オホモノヌシが
	ヲヤノクニ	イズモヤエガキ	親の国	イツモ八重垣
	ノリヲサム	ソノモトノリハ	法整む	その元法は
	サキカミノ	イサオシナレバ	先神の	功績なれば

	ワレモコト	タテントヨモオ	我も事業	立てんと四方お
21- 3	メグルウチ	ヨキノオエタリ	巡るうち	よき野お得たり
	ココニキテ	タオヒラカント	ここに居て	田お開かんと
	マヅタツル	ナモニハリミヤ	まづ建つる	名もニハリ宮」
	フトマニニ	ミヤツクリノリ	「フトマニに	宮造り法
	サダメヨト	オオモノヌシニ	定めよ」と	オオモノヌシに
	ミコトノリ	モノヌシウケテ	勅	モノヌシ受けて
	ノリサダム	マヅソマオシテ	法定む	まづ杣人おして
	キオキルハ	キヤエノヒヨシ	木お伐るは	キヤエの日よし
21- 4	ツオノソメ	ネシエキシズエ	手斧初め	ネシエ石据
	ハシラタテ	ナカスミハシラ	柱建て	中隅柱
	ミナミムキ	キタヒガシニシ	南 向き	北・東・西
	メグリタツ	シマカラフカド	めぐり建つ	シマカラフ門

	ナカスミニ	ヨリテサダマル	中隅に	よりて定まる
	ムネアゲハ	ツアエニイハヒ	棟上げは	ツアエに祝ひ
	アカコワキ	ソミカシワアメ	小豆強飯	十三膳 天
	ヒトツキト	ヤカシワアモト	日と月と	八膳 天元
21- 5	ムネニスエ	モチミモムソム	棟に据ゑ	餅三百六十六
	ユミヤソエ	ハシラニマツル	弓矢添え	柱に祭る
	キクラノキ	トシノリタマメ	五クラの五膳	トシノリタマメ
	ムワタノナ	ミナヒトヨミキ	六ワタの七膳	皆一夜神酒
	ザイオフル	ムネトハシラネ	ザイお振る	棟と柱根
	ツチオウツ	トキニタクミハ	槌お打つ	時に内匠は
	ムノタミメ	ソノトコトハ	ムのタミメ	その祝詞は
	アメツチノ	ヒラクムロヤノ	「天地の	開く室屋の
21- 6	カミアレバ	エヤハトワカレ	神あれば	エヤは弱かれ

	ヌシハナガカレ		主は永かれ」	
	カクミタビ	ノトシテモチオ	かく三度	祝詞して餅お
	ナゲチラス	サキニミヤバニ	投げ散らす	さきに宮場に
	オコロアリ	モチウコニニテ	土竜あり	モチウコに似て
	ホノホハク	タミラオソレテ	焰 吐く	民ら恐れて
	コレツゲル	モノヌシトエバ	これ告げる	モノヌシ問えば
	コタエイフ	カグツチタツオ	答えいふ	「カグツチタツお
21- 7	ハニヤスニ	ヨロコウマセド	ハニヤスに	万子生まれせど
	タツナラズ	アナニウレフル	タツならず	あなに憂ふる
	ネガワクハ	ヒトナシタマエ	願わくは	人為し給え」
	モノヌシガ	モフセバミマゴ	モノヌシが	申せば御孫
	ミコトノリ	ナンチウケベシ	勅	「汝 受けべし
	アメノカミ	ヤマサオウミテ	天の神	ヤマサ神お生みて

	ミコマモリ	オフカンツミハ	御子守り	オフカンツミは
	ハニシキテ	マツルヤツクリ	埴敷きて	祭る家造り
21- 8	シコメナシ	エトノイクシマ	醜女なし	兄弟のイクシマ
	タルシマト	カミナタマエバ	タルシマ」と	神名賜えば
	モリモナシ	ワガニヒハリノ	守も為し	我がニヒハリの
	アラヤタツ	ナカツハシラノ	新屋建つ	「中つ柱の
	ネオカカエ	マタヨトコロノ	根お抱え	また四処の
	モリモカネ	トモニマモレヨ	守りも兼ね	共に守れよ
	ハルカマド	コタソコニアリ	春竈	九尺底にあり
	サオムキテ	キマクラニフセ	南お向きて	東枕に伏せ
21- 9	ナツハカド	ミタソコニアリ	夏は門	三尺底にあり
	ネニムキテ	ツマクラニフセ	北に向きて	西枕に伏せ
	アキハキド	ナタソコニアリ	秋は井戸	七尺底にあり

	キニムキテ	サマクラニフセ	東に向きて	南枕に伏せ
	フユニワド	ヒタソコニアリ	冬庭処	一尺底にあり
	ツニムキテ	サマクラニフセ	西に向きて	南枕に伏せ
	ハラセクビ	アシニシタガフ	腹背首	足に従ふ
	イシヅエニ	シキマストコオ	礎に	敷きます床お
21-10	イカスレト	オコロノカミト	床摩れ」と	オコロの神と
	ナオタマフ	ヨヨユカスリテ	名お賜ふ	代々床摩りて
	アラヤモルカナ		新屋守るかな	
	ミヅガキオ	トシヨツニワケ	瑞垣お	年四つに分け
	トハトフカ	ヒタカニコカド	トは十日	ヒカタに九門
	ニガマダラ	ヒフミニシルス	ニ・ガ・斑	ヒフミに記す
	サノキヨリ	アカツキノアハ	南の際より	暁の天は
	ニノタカラ	クアヤメノアハ	ニの宝	クラヤメの天は

21-11	ガニヤメル	ヒワカレノアハ	ガに病める	日分れの天は
	ガノハナレ	ヒノイデノアハ	ガの離れ	日の出の天は
	ニノイハヒ	ハナヤカノアハ	ニの祝ひ	ハナヤカの天は
	ニノミヤト	テルアレノアハ	ニの宮処	照荒の天は
	ナナオビエ	ガニナスノアハ	ナナオビエ	ガになすの天は
	ガニソコネ	アキラカノアハ	ガに損ね	明らかなの天は
	ニノヨロシ	ホシテルノアハ	ニのよろし	星照るの天は
	ニノヒカリ	サノコカドコレ	ニの光り	南の九門これ
21-12	ツハサヨリ	アキラカノアハ	西は南より	明らかなの天は
	ニノヨロシ	クラヤメノアハ	ニのよろし	クラヤメの天は
	ガニヤメル	カノフルノアハ	ガに病める	カのフルの天は
	ニミタカラ	アカツキノアハ	ニミ宝	暁の天は
	ニノタカラ	アカルキノアハ	ニの宝	明るきの天は

	ニノイノチ	アケボノアハ	ニの生命	曙の天は
	コノタカラ	マツクラノアハ	コの宝	真暗の天は
	ガノウレヒ	ヒルノヒノアハ	ガの憂ひ	昼の日の天は
21-13	ニニミツル	ツコモリノアハ	ニに満つる	月隠の天は
	ガニキユル	ツノコカドコレ	ガに消ゆる	西の九門これ
	ネハツヨリ	メグルヒノアハ	北は西より	巡る日の天は
	ニモメグル	アカルキノアハ	ニも巡る	明るきの天は
	ニノイノチ	ハナヤカノアハ	ニの生命	ハナヤカの天は
	ニノミヤト	ミナルヒノアハ	ニの宮処	ミなる日の天は
	ナカミナル	クラヤメノアハ	ナカミ成る	クラヤメの天は
	ガニヤメル	オボロヨノアハ	ガに病める	朧夜の天は
21-14	ナカクラシ	トマヨイノアハ	中暗し	トマヨイの天は
	ガニクルシ	アラハルノアハ	ガに苦し	現はるの天は

	ニノアグル	ヒカハクノアハ	ニの名あぐ	ヒ乾くの天は
	ガノトガメ	ネノコカトコレ	ガの咎め	北の九門これ
	キハネヨリ	サカエルノアハ	東は北より	栄えるの天は
	ニノサカエ	ヒオツルノアハ	ニの栄え	日落つるの天は
	ガニオトル	ノドヤカノアハ	ガに劣る	長閑かの天は
	ニニヤスシ	アヤウキノアハ	ニに安し	危うきの天は
21-15	ガニアヤブ	ナレヤフノアハ	ガに危ぶ	ナレヤフの天は
	ニニモナル	タソガレノアハ	ニにも成る	黄昏の天は
	ガニヤブル	テリオレノアハ	ガに破る	テリオレの天は
	マダラエダ	アヒノデノアハ	斑 枝	天日の出の天は
	ニノタラチ	アキラカノアハ	ニの父母	明らかなの天は
	ニノヨロシ	キノコカトコレ	ニの良ろし	東の九門これ
	キツオサネ	ヲハウチオモル	東・西・中・南・北	中は内お守る

	トコタチノ	コノトシノリノ	トコタチの	子のトシノリの
21-16	タマメカミ	キクラムワタオ	玉女神	五臓・六腑お
	ウミアゲル	アメヨリクダス	生みあげる	天より下す
	ヒヨミカミ	フタカミコレニ	日ヨミ神	二神これに
	ヤマサナス	アメノミマゴハ	ヤマサなす	天の御孫は
	ニヒハリノ	カドノタカヤニ	ニヒハリの	門の高屋に
	ヤマサカミ	マツルハタミノ	ヤマサ神	祭るは民の
	カラフシマ	ワカクシマドト	カラフ門	ワカクシマドと
	トヨマドト	ツネニマモリテ	トヨマドと	常に守りて
21-17	トリオカフ	タミノカラガレ	鳥お飼ふ	民の枯ら枯れ
	アラジナト	ヲサガオゴレバ	あらしなど	長が奢れば
	タミツカル	ツカレテワザモ	民疲る	疲れて業も
	カラカレト	ウツタフトキニ	枯ら枯れと	訴ふ時に

	イマシメテ	クニオタサネバ	戒めて	国お治さねば
	タミココロ	アメニトトキテ	民心	天に届きて
	キミガカド	ヤマサノカミガ	君が門	ヤマサの神が
	シルユエニ	ココロクルシム	知る故に	心 苦しむ
21-18	ソノトキハ	トモニミタルル	その時は	共に乱るる
	トリノトキ	ミタレイタメバ	鳥の関	乱れ傷めば
	ヒトモシル	フトマニミレバ	人も知る	フトマニみれば
	ケタオシル	ツウジヨコベオ	方お知る	ツウジヨコベお
	ツカワシテ	タミオミタレバ	遣わして	民お乱れば
	ソノツカサ	アラタメカエテ	その司	改め変えて
	カレヲトク	ユエカラフナル	枯れを解く	故枯門なる
	ニヤトリハ	カオウケナキテ	鶏は	光お受け鳴きて
21-19	ツアカエス	コヌカオコエバ	告天返す	小糠お乞えば

	コカコフト	ナクハスナオヤ	コカコフト	鳴くは素直や
	クダクレバ	クダカケナクゾ	摧くれば	クダカケ鳴くぞ
	カラスダモ	ヨキイオウケテ	鳥だも	よきイお受けて
	ヨロコベリ	ウレヘバウレフ	喜べり	憂へば憂ふ
	オノガカオ	ツゲズユラスハ	己が光お	告げず清すは
	カラスナリ	トリヨリサキニ	鳥なり	鳥より先に
	シルカミノ	シマハトリキゾ	知る神の	門は鳥居ぞ
21-20	コレカミノ	ミコニヲシエテ	これ神の	御子に教ゑて
	イタワリオ	シラネバカミハ	労わりお	知らねば神は
	トリイヌゾ	ホツマオナメテ	鳥犬ぞ	ホツマおなめて
	トリキナリケル		鳥居なりける	
	サノミカド	ハシラハミソキ	南の御門	柱は三十寸
	ハバミタケ	タカサモミタケ	幅三丈	高さも三丈

	ケタノウエ	ムタハトシカズ	桁の上	六尺は年数
	フトサツキ	マルケタトモニ	太さ月数	丸桁ともに
21-21	ヤツクリノ	モトハトコタチ	家造りの	元はトコタチ
	ムテムスビ	ムロヤツクリテ	ム手結び	ムロヤ造りて
	タミオウム	ノチヤテムスビ	民お生む	のちヤ手結び
	ヤシロナル	コレニイマスル	ヤシロなる	これに居まする
	イマノミヤ	オオクンヌシノ	今の宮	オオクンヌシの
	カンガエハ	キハサカシマニ	考えは	木は逆しまに
	カシラシタ	カレムネオモテ	頭 下	故棟おもて
	ヤネトナス	フクハヤネネゾ	屋根となす	葺くは屋根根ぞ
21-22	モシハシラ	ツガバシモツゲ	もし柱	継がば下継げ
	カミハネゾ	ネハタチツガズ	上は根ぞ	根は立ち継がず
	ムノヲシテ	ノキヨリムネニ	ムのヲシテ	軒より棟に

	テオアワス	ムツキネトナス	手お合わす	一月根となす
	ムナキモシ	スエハツグベシ	棟木もし	末は継ぐべし
	ネハツガズ	ハリノネハフユ	根は継がず	梁の根は冬
	ウツキスエ	スエハツグベシ	四月末	末は継ぐべし
	ネニツグナ	ヒサシハオオヒ	根に継ぐな	庇は覆日
21-23	キサニサセ	シトミハトミノ	東南に指せ	薮は臣の
	トノヲシエ	トホルオミルゾ	トの教え	徹るおみるぞ
	ホノキツメ	トノアケタテニ	火の鎮め	戸の開け閉てに
	スレアエバ	シタオシキキト	摺れ合えば	下お鳴居と
	ウエカモキ	シキハタノトリ	上鴨居	鳴は田の鳥
	トハウシホ	ナルトノヒビキ	戸は潮	鳴門の響き
	ウシホナル	ウエニカモフネ	潮 鳴る	上に鴨船
	ミツトリノ	ホノシツメナス	水鳥の	火の鎮めなす

21-24	シキカモキ	ココニタツタノ	鳴鴨居	ここにタツタの
	カミキマス	カツヤマイリハ	神居ます	且つ山入りは
	ツエサエゾ	キヲノフハイム	西兄南兄ぞ	東中の二は忌む
	エトニソム	アメアカルヒハ	兄弟に初む	天明る日は
	ヨロツヨシ	ヤツクリハコレ	万吉し	家造りはこれ
	トキニキミ	ヲコヌシカミト	時に君	ヲコヌシ神と
	ナオタマフ	ハシラナモコレ	名お賜ふ	柱 名もこれ
	ミヤツクリ	フキイラカマデ	宮造り	葺き薨まで
21-25	ミナナリテ	ミマゴニニキネ	みな成りて	御孫ニニキネ
	ツクバヨリ	ウツリマスヒハ	ツクバより	遷ります日は
	ヲコヌシノ	フソキモノノベ	ヲコヌシの	二十五モノノベ
	ジシハナス	カスガモロトモ	膳なす	カスガ諸共
	ノリソヒテ	ミマゴノミユキ	乗り添ひて	御孫の御幸

	マモリユク	コノヒアスカノ	護りゆく	この日アスカの
	ミヤシロド	フトタマオシテ	宮代人	フトタマおして
	イワワシム	キミヨオコメテ	祝わしむ	君夜お込めて
21-26	トサトキテ	ニハリワタリハ	十里きて	ニハリ渡りは
	カキクモリ	ハタタカミナリ	かき曇り	ハタタ神鳴り
	カキタブル	ヲコヌシイワク	垣破る	ヲコヌシ日く
	ワタマシオ	タミモイハフニ	渡ましお	民も祝ふに
	ナサケナト	ハハヤオイレバ	情など	ハハヤお射れば
	シナトベニ	フキハラフトキ	シナトベに	吹き払ふ時
	チオムカヒ	トモニイリマス	道お迎ひ	共に入ります
	ミアエスミ	ヲコヌシカキノ	御饗すみ	ヲコヌシ垣の
21-27	ヤレオツグ	ミコノタマフハ	破れお告ぐ	御子宣給ふは
	ユミノコト	アレドノチタメ	「弓のこと	あれど後ため

	スレラレズ	カスガニノレバ	捨てられず」	カスガに宣れば
	フトマニノ	アコケハサワザ	「フトマニの	アコケは業
	ウツヲカミ	トキミコトナリ	空 神」	時みことのり
	ウツヲカミ	ヤシロトザシテ	空 神	社 閉ざして
	アメニツグ	アノミコトノリ	天に告ぐ	「天のみことのり
	ナサケナキ	ヤシロヒシゲト	情なき	社ひしげ」と
21-28	トキミマゴ	シルシササゲテ	時御孫	シルシ捧げて
	ノチオコフ	アメハタアシク	後お請ふ	天はた悪しく
	ユルサレズ	マタネガワクハ	許されず	又願わくは
	ウツオカミ	タトヒヒトタビ	「ウツオ神	たとひ一度
	コトミタレ	サラニアランヤ	事乱れ	更に有らんや
	オオナムチ	ヒトタビオチテ	オオナムチ	一度落ちて
	ヒスミキミ	ソノコモノヌシ	日隈君	その子モノヌシ

	マメオナス	コレニハニズモ	マメおなす	これには似ずも」
21-29	ウツヲマタ	ノチコトタテン	空神また	「後事立てん
	ユルシタマエヤ		許し賜えや」	
	ヲヲンカミ	ユルスミコトハ	大御神	許す勅は
	エトノスエ	ヤナキカクロヒ	「兄弟の末	ヤナキ隠ろひ
	ウツロモリ	キネノヒトキオ	空 守り	東北の一木お
	キヤシロニセヨ		居社にせよ」	
	ヲヲコヌシ	ミマゴニモウス	ヲヲコヌシ	御孫に申す
	ワガオヤノ	ヒスミノキミハ	「我が親の	日隅の君は
21-30	ヨロコバシ	ウツオモカミノ	歎ばし」	ウツオも「神の
	ヨロコビト	コエバミコトゾ	喜び」と	乞えば勅ぞ
	ナルカミノ	ヌシキネマモリ	鳴雷の	主東北守り
	ウツロキノ	ヲマサキミトゾ	空神の	ヲマサ君』とぞ

	トシノリニ	ヤシロタマワル	トシノリに	社 賜わる
	ミツガキオ	ナオスタクミラ	瑞垣お	直す内匠ら
	ウツロキノ	ヤシロギアレバ	空神の	社 木あれば
	オソルルオ	ヲコヌシホカノ	恐るるお	ヲコヌシ他の
21-31	キニウツシ	ツクロヒナリテ	木に移し	繕ひなりて
	マタノドス	コレカリウツシ	また戻す	これ仮遷し
	サワリナシ	マタウツロキノ	障りなし	また空神の
	ヤマサモリ	エトノホニヨリ	ヤマサ守り	兄弟の年により
	ツキマモル	シカレドアラヤ	月守る	然れど新屋
	ツクルトキ	ツヨクトガムル	造る時	強く咎むる
	コレニヨリ	マタオコヌシニ	これにより	またオコヌシに
	トハシムル	ヲコヌシイワク	問はしむる	ヲコヌシ日く
21-32	ナンヂマタ	タミノアラヤオ	「汝また	民の新屋お

	トガムルヤ	ウツロヒコタエ	答むるや」	ウツロヒ答え
	ヲタフセズ	ニワヤケガレオ	「ヲタフせず	庭屋穢れお
	ワレニダス	ユエニトガムル	われに出す	故に答むる」
	オコヌシガ	モフセバミコト	オコヌシが	申せば勅
	コレナンヂ	モリハナルルオ	「これ汝	守離るるお
	ワレコフテ	マタモリトナス	われ乞ふて	また守りとなす
	ワガタミオ	ユエナクトガム	わが民お	故なく答む
21-33	タミハタオ	コヤシソロウユ	民は田お	肥やしソロ植ゆ
	ナンヂシレ	コワオニワトス	汝 知れ	肥土おニワとす
	カレニワヤ	シラデケガルヤ	故ニワヤ	知らで穢るや
	コレニヨリ	アエヨリヤエノ	これにより	アエよりヤエの
	ナカキツカ	モリオハナレテ	中五日	守りお離れて
	アソビユケ	コノマキツカニ	遊び行け	この間五日に

	ヤツクリス	コレモナンヂガ	屋造りす	これも汝が
	ナノホマレ	イナバホトンド	名の誉れ	イナバ殆ど
21-34	ウツロイノ	モリヤハナレン	ウツロイの	守りや離れん」
	コレニヨリ	タミオサマリテ	これにより	民治まりて
	ムヨロトシ	ツクバノミヤニ	六万年	ツクバの宮に
	ウツリマス	マタムヨロトシ	移ります	また六万年
	フタアレノ	イツノカミトテ	再生の	稜威の神とて
	ムヨロトシ	ヘテマタモトノ	六万年	経てまた元の
	ニハリミヤ	キツヲヲカミノ	ニハリ宮	稜威大神の
	コトオオイカナ		事業大いかな	

● オキツヒコ火(ヒ)水(ミズ)の祓(ハライ)の紋(アヤ)

22- 1	ミカマトノ	カミノヒミズノ	ミカマトの	神の火・水の
	ミヅノネハ	ニハリノミヤノ	瑞の元は	ニハリノ宮の
	ミワタマシ	アメノミマゴノ	御渡まし	天の御孫の
	ミコトノリ	モリオタマワル	勅	守りお賜わる
	オキツヒコ	カシキノユフノ	オキツヒコ	赤白黄の木綿の
	ミテグラニ	ヤヲヨロカミノ	御幣に	八百万神の
22- 2	カンツドエ	タカマノハラノ	神集え	タカマの原の
	カンスカサ	アマテラシマス	神司	天照らします
	ヲオンカミ	ホギタテマツル	大御神	祝ぎ奉る
	ノトナカニ	ミカマノホギノ	祝詞中に	ミカマの祝ぎの
	ソノカミハ	アメツチヒラケ	その神は	天地開け
	ソムトキニ	クニトコタチノ	初む時に	クニトコタチの
	カンハラミ	ヲフヒノミナノ	神胎み	ヲフ日の御名の

	キツオサネ	キクラノカミノ	東西中南北	五臓の神の
22- 3	ナリイデテ	ナナヨノウチノ	成り出てて	七世の内の
	アマツコト	マツルトホカミ	天つこと	祀るトホカミ
	エヒタメノ	ヤモトノカミノ	エヒタメの	八基の神の
	マツラセキ	クニツマツリハ	守らせき	国つ祭は
	キツオサネ	ムロソヒカミノ	東西中南北	ムロ十一神の
	マモラセキ	コノユエヒビノ	守らせき	この故日々の
	ミカマドノ	エトモリカミト	ミカマドの	兄弟守り神と
	タタエマスナリ		讃えますなり	
22- 4	ヒサカタノ	アマテルカミノ	ヒサカタの	アマテルカミの
	ヨツミヨニ	ヒヨミノトリノ	初御世に	ヒヨミの鳥の
	カオツグル	キツオカナネノ	光お告ぐる	東西オカナネの
	トツギシテ	トシノリカミノ	とつぎして	トシノリ神の

	アレマセル	ソノソヒカミオ	生まれませる	その十一神お
	エトモリト	アミヤシナウテ	兄弟守りと	アミヤシナウテ
	ヤカミナル	アメフタカミノ	八御子成る	天二神の
	ミコトノリ	コレニタマハル	勅	これに賜はる
22- 5	ヒエノナハ	ウツロイノカミ	一兄の名は	ウツロイの神
	ツギノナハ	シナトベノカミ	次の名は	シナトベの神
	ミツノナハ	カグツチノカミ	三の名は	カグツチの神
	ヨツノナハ	ミズハメノカミ	四つの名は	ミズハメの神
	キツノナハ	ハニヤスノカミ	五つの名は	ハニヤスの神
	ムツノナハ	ソロヲヲトシノ	六つの名は	ソロヲヲトシの
	チカラモル	ヲヲトシカミト	チカラ守る	ヲヲトシ神と
	タタエマス	ナナナハミナノ	讃えます	七名は皆の
22- 6	モトシゲル	スベヤマズミノ	元繁る	スベヤマズミの

	カミトナル	ヤオトノカミワ	神となる	八弟の神わ
	ホノシヅメ	タツナミオサム	火の鎮め	立つ浪治む
	タツタヒメ	オノオノミナオ	タツタ姫	おのおの御名お
	タマハリテ	コヨミオマモル	賜はりて	暦お守る
	ヤマサカミナリ		八マサ神なり	
	コノカミノ	ツネニメグリテ	この神の	常に巡りて
	マモルユエ	ヒミヅノワザノ	守る故	火水の業の
22- 7	サワリナシ	サワリナケレバ	障りなし	障りなければ
	ヲサマリテ	カグツチカミト	治まりて	カグツチ神と
	ハニヤスメ	チナミテヨロノ	ハニヤス女	ちなみて万の
	オゴロウム	タツナラザレバ	オゴロ産む	たつならざれば
	ステラルオ	オオクヌカミノ	捨てらるお	オオクヌ神の
	ツゲニヨリ	アメノミマゴノ	告げにより	天の御孫の

	ミコトノリ	オゴロノカミヨ	勅	「オゴロの神よ
	ハルハカマ	コタソコニアレ	春はカマ	九尺底にあれ
22- 8	ナツハカド	ミタソコニアレ	夏は門	三尺底にあれ
	アキハキド	ナタソコニアレ	秋は井戸	七尺底にあれ
	フユハニハ	ヒタソコニアレ	冬は庭	一尺底にあれ
	ニヒミヤノ	シキマスクニオ	ニヒ宮の	敷きますクニお
	イカスリテ	ヒトフルナセヨ	床摩りて	一途なせよ
	スミヨロシ	エオゴロモラバ	すみよろし	兄オゴロ守らば
	オトオゴロ	カタミニカワリ	弟オゴロ	交互に代り
	ヒメモスニ	ミヤノウテナノ	終日に	宮の台の
22- 9	クロトコロ	ナカツハシラノ	玄処	中つ柱の
	ネニスミテ	ヤマサノカミト	根に住みて	八まさの神と
	モロトモニ	ヨヨノカマドオ	諸共に	代々の竈お

	マモラシムベシ		守らしむべし	
	チカヒニハ	ミハシラタテヨ	誓ひには	御柱立てよ」
	コノトキニ	アマツミコトノ	この時に	天つ御言の
	サダマレバ	カシキノユフノ	定まれば	赤白黄の木綿の
	ミテグラニ	ヒミツオムスブ	御幣に	火水お結ぶ
22-10	オキツヒコ	ココモタカマノ	オキツヒコ	ここもタカマの
	ハラナレバ	ヨヨニチカフル	ハラなれば	代々に誓ふる
	ミコトノリ	モシモクニユリ	詔に	『もしも国揺り
	ナルカミノ	サワルタタリノ	鳴神の	障る障りの
	アラントキ	キネノヒトキオ	あらん時	東北の一木お
	キヤシロニ	エトノムソカニ	坐社に	兄弟の六十日に
	モリアマル	ヤナキカクロヒ	守りあまる	ヤナキ隠ろひ
	ウツルモル	ウツロイノカミ	空守る	ウツロイの神

22-11	アラハレバ	タトエナルカミ	現れば	たとえ鳴神
	クニユルモ	イツワザナシテ	国揺るも	稜威術なして
	シヅムベシ	モシモムラクモ	鎮むべし	もしも叢雲
	カオウバヒ	ミチニサワリノ	光お奪ひ	道に障りの
	アラントキ	シナトベノカミ	あらん時	シナトベの神
	アラハレバ	ミチノカウバフ	現れば	道の光奪ふ
	ヤエクモオ	シナトノカゼニ	八重雲お	シナトの風に
	オシハラヒ	ヨモアケカタト	押し払ひ	夜も明け方と
22-12	シラスベシ	モシモヒケガレ	知らすべし	もしも火汚れ
	アラントキ	カグツチノカミ	あらん時	カグツチの神
	アラハレバ	タトエオダキノ	現はれば	たとえオダキノ
	カクヤアレ	サラニヒウチノ	斯くやあれ	さらに火打ちの
	アラタメテ	キヨキアタゴト	改めて	清き愛宕と

	シキミミリ	ミカマドキヨク	敷き泥みり	ミカマド清く
	マモルベシ	モシモホワザノ	守るべし	もしも火災の
	アラントキ	タツタメノカミ	あらん時	タツタメの神
22-13	アラハレバ	タトヒホノホニ	現はれば	たとひ炎に
	ハタルトモ	タツタニシヅメ	徴るとも	タツタに鎮め
	ノゾクベシ	モシモ井ノミツ	除くべし	もしも井の水
	クミタエテ	ミケツノサハリ	汲み絶えて	御食の障り
	アラントキ	ミヅハメノカミ	あらん時	ミヅハメの神
	アラハレバ	イテノシミヅオ	現はれば	最の清水お
	アサギヨク	アラタメカエテ	潔よく	改め変えて
	ヒトフルニ	ミカメモキヨク	一途に	御瓶も清く
22-14	マモルベシ	モシモミワザノ	守るべし	もしも水禍の
	アラントキ	スベヤマツミノ	あらん時	スベヤマツミの

アラハレバ タトヒナガアメ 現はれば たとひ長雨

アブレテモ ヤマハシゲキニ 溢れても 山は繁きに

モチコタエ ナカレオフカク 持ち耐え 流れお深く

ナスコトモ ツネニイセキオ なすことも 常に井堰お

マモルナリ ミナカンチカヒ 守るなり みな神誓ひ

イチジルキカナ 著るきかな

22-15 コノトキニ トシノリカミノ この時に トシノリ神の

マテニアル オオトシカミト 左右にある オオトシ神と

ハニヤスメ オゴロモトモニ ハニヤスメ オゴロも共に

チカヒシテ イサギヨカレト 誓ひして 潔よかれと

カンホキニ ホキノリネセル 神祝きに 祝宣なせる

カナギユヒ タキビモキヨク カナギ結ひ 焚火も清く

ミヅキヨク ミカマドキヨク 水清く ミカマド清く

	ミナキヨク	ヒミツノミツノ	みな清く	火水の瑞の
22-16	タカラオノ	スサミナケレバ	宝 緒の	荒みなければ
	イサギヨク	ニアグルミケノ	潔よく	煮あぐる御食の
	ヒモロゲオ	ササグルスエモ	供物お	捧ぐる陶も
	キヨラカニ	ムスブホミツノ	清らかに	結ぶ火水の
	キヨハラヒ	ヨツギタカラト	清祓ひ	世嗣宝と
	スサマジク	シツムチカヒノ	進まじく	鎮む誓ひの
	イサオシオ	ユキスキハニノ	功績お	ユキ・スキ・ハニの
	ヲランカミ	キヨシメサルル	大御神	清し召さるる
22-17	キヨハラヒ	ヒミツオカミニ	清祓ひ	火水お神に
	ツツシミテ	キヨメタマエト	謹みて	清め給えと
	モウシテモフス		申して申す	

● 御衣(ミハ)定(サダ)め劔名(ツルギナ)の紋(アヤ)

23- 2	アメツチモ	ウチトモキヨク	天地も	内外も清く
	トホルトキ	ミチモノノベラ	徹る時	ミチモノノベラ
	シラキシニ	ツルギオガミテ	白石に	ツルギ拝みて
	モノヌシガ	キルモタカラカ	モノヌシが	「斬るも宝か」
	ユエオコフ	トキニアマテル	故お乞ふ	時にアマテル
	ミコトノリ	ツルギノモトハ	勅	「ツルギの元は
	アメノホコ	クニトコタチノ	天の矛	クニトコタチの
23- 3	ヨニハマダ	ホコナキユエハ	世にはまだ	矛なき故は
	スナホニテ	ノリオマモレバ	素直にて	法お守れば
	ホコイラズ	ココロユキスク	矛いらず	心ユキスク
	カミノヨハ	マスヨロトシノ	神の世は	マス万年の

	コトフキモ	ウチビニノヨハ	寿きも	ウビチニの世は
	オゴソカニ	カザルココロノ	巖かに	飾る心の
	コトブキモ	モモヨロトシゾ	寿きも	百万年ぞ
	オモタルノ	タミトキスギテ	オモタルの	民鋭き過ぎて
23- 4	モノウバフ	コレニオノモテ	もの奪ふ	これに斧もて
	キリヲサム	オノハキオキル	斬り攻む	斧は木お伐る
	ウツワユエ	カネリニホコオ	器ゆえ	金鍊人に矛お
	ツクラセテ	トキモノキレバ	造らせて	鋭き者斬れば
	ヨツギナシ	タミノヨハイモ	世継ぎなし	民の齢も
	ヤヨロナレ	ケニモヨレドモ	八万なれ	食にもよれども
	ムカシアリ	ヨロスズモヘリ	昔あり	万スズも減り
	モトセヨリ	マタヨロニマス	百歳より	また万歳に増す
23- 5	コレスズオ	ムスブカミナリ	これスズお	結ぶ神なり

	オソルルハ	ナツミトキレバ	惧るゝは	無罪人斬れば
	コタネタツ	ゲニツツシメヨ	子種絶つ	げに慎めよ
	アメノカミ	ツギナクマツリ	天の神	世継ぎ無く祀り
	ツキントス	カレイサナギニ	尽きんとす	故イサナギに
	ノタマフハ	トヨアシハラノ	のたまふは	「豊葦原の
	チキモアキ	ミヅホノタアリ	千五百秋	瑞穂の田あり
	ナンヂユキ	シラスベシトテ	汝ゆき	治らすべし」とて
23- 6	トトホコト	サヅケタマワル	トと矛と	授け賜わる
	トハオシデ	ホコハサカホコ	トはヲシデ	矛は逆矛
	フタカミハ	コレオモチヒテ	二神は	これお用ひて
	アシハラオ	オノコロオエテ	葦原お	オノコロお得て
	ココニオリ	ヤヒロノトノト	ここに居り	八尋の殿と
	ナカハシラ	タテテメグレバ	中柱	立てて巡れば

	オオヤシマ	トホルマコトノ	大八島	徹るマコトの
	トノヲシエ	チイモノアシモ	「トの教」	千五百の葦も
23- 7	ミナヌキテ	タトナシタミモ	皆抜きて	田となし民も
	ニギハエバ	キヤマトトホル	賑はえば	弥マト徹る
	ヤマトクニ	マトノオシヘハ	弥マト国	「マトの教」は
	ノボルヒノ	モトナルユエニ	登る日の	元なる故に
	ヒノモトヤ	シカレドヤマト	日の本や	然れど弥マト
	ナステソヨ	ワレハトノチニ	な捨てそよ	我れはトの靈に
	ヲサムユエ	オミモトミナリ	治む故	大臣も臣なり
	ソノユエハ	モトモトアケノ	その故は	モトモト明けの
23- 8	ミヲヤカミ	キマスウラニハ	御祖神	居ますウラには
	キタノホシ	イマコノウエハ	北の星	今この上は
	ミソムメノ	トノカミキマス	三十六メの	トの神居ます

	ソノウラガ	ナカハシラタツ	そのウラが	中柱たつ
	クニノミチ	アメヨリメグム	国の道	天より恵む
	トノカミト	ムネニコタエテ	トの神と	ムネに答えて
	マモルユエ	ヒトノナカゴニ	守る故	人のナカゴに
	アイモトメ	ヒトツニイタス	相求め	一つに致す
23- 9	トノヲシエ	ナガクヲサマル	「トの教」	永く治まる
	タカラナリ	アメノヒツギオ	宝なり	天の日嗣お
	ウクルヒノ	ミツノタカラノ	受くる日の	三種の宝の
	ソノヒトツ	アメナルフミノ	その一つ	「アメナル文」の
	ミチノクゾコレ		道の奥ぞこれ	
	マタホコモ	タカラノユエハ	また矛も	宝の故は
	トノミチニ	クミヲサムレド	トの道に	国治むれど
	ソノナカニ	ヨコキクモノハ	その中に	邪道聞く者は

23- 9	オノガミニ	アワネバミチオ	己が身に	合わねば道お
	サカニユク	ヒトリモトレバ	逆にゆく	一人悖れば
	トモオマシ	ムレアツマリテ	友お増し	群れ集りて
	ワタカマリ	ミチサマタゲハ	蟠り	道妨げは
	メシトリテ	タダシアカシテ	召し捕りて	糺し明かして
	ツミオウツ	ヲサムルミチノ	罪お撃つ	治むる道の
	ミタレイト	キリホコロバス	乱れ糸	斬りほころばす
	ウツワモノ	アメノヲシエニ	器物	天の教ゑに
23-11	サカラエバ	ミニウクアマノ	逆えば	身に受く天の
	サカホコゾ	クニミタルレバ	サカホコゾ	国乱るれば
	タモアレテ	ミヅホノボタズ	田も荒れて	瑞穂のぼらず
	マズシキオ	ツミビトキリテ	貧しきお	罪人斬りて
	タガヤセバ	ミツホノナリテ	耕せば	瑞穂の実りて

	タミュタカ	チカラオホトシ	民豊か	チカラオホトシ
	ササグレバ	ヤモノニギワヒ	捧ぐれば	八方の賑ひ
	タカラデル	カレニタカラゾ	田から出る	故に宝ぞ
23-12	サカホコモ	ウチヲサムユエ	逆矛も	討ち治む故
	タカラナリ	イサナミイワク	宝なり	イサナミ日く
	アヤマタバ	ヒビニチカウベ	「誤たば	日々に千頭
	コロスベシ	イサナキイワク	殺すべし」	イサナキ日く
	ウルハシヤ	チキモノカフベ	「麗はしや	千五百の頭
	ウマントテ	ウミテヲシエル	生まん」とて	生みて教ふる
	トノミチオ	ウケテヲサムル	トの道お	受けて治むる
	チキモムラ	トノミチトホリ	千五百村	トの道徹り
23-13	オホトシノ	ミヅホエルナリ	大年の	瑞穂得るなり
	ヒカシラハ	ヒタカミよりゾ	日頭は	ヒタカミよりぞ

	ヲサマリシ	ソノヤスクニノ	治まりし	そのヤスクニの
	チキヲムラ	ミナカウベアリ	千五百村	みな頭あり
	イマコレオ	アワセテミチノ	いまこれお	合せて三千の
	カミヲサム	アメツチサリテ	神治む	天地離りて
	トオケレバ	ワタクシタツル	遠ければ	わたくし立つる
	コノユエニ	モノノベヨモニ	この故に	モノノベ四方に
23-14	ツカワシテ	アメマスヒトト	遣わして	天マスヒトと
	ソヘフタリ	サガオカゾエル	副二人	サガお数える
	ミチタテテ	ガノミモムソキ	道立てて	ガの三百六十五
	アメノミチ	オヨベバコロス	天の道	及べば殺す
	ミチハコレ	モシアヤマリテ	道はこれ	もし誤りて
	コロレルモ	カタキオトレバ	殺さるも	仇おとれば
	ヲオトクト	アマネクタミニ	緒お解くと	普く民に

	フルルナリ	サホコノクニノ	ふるるなり	サホコの国の
23-15	マスヒトガ	ミチオミタレバ	マスヒトが	道お乱れば
	コレオメス	タタセバコロス	これお召す	糺せば殺す
	ツミナルオ	サオエテノガル	罪なるお	南お得て遁る
	マタノガニ	ツイニアメヨリ	またのガに	遂に天より
	ツミセラル	カレガオコリオ	罪せらる	かれガ起りお
	タヤスクニ	ユルセバタミモ	たやすくに	許せば民も
	ミナオゴル	コレヨリハタレ	みな奢る	これよりハタレ
	アラハルル	タトエバカワノ	現はるる	例えば川の
23-16	ミナモトノ	ヒトシヅクヨリ	源の	一滴より
	ナカレマシ	ノダニアフルル	流れ増し	野田に溢るる
	ヒトモコレ	ヒトリユルセバ	人もこれ	一人許せば
	モロムレテ	ソノミチモトル	万群れて	その道悖る

	サシオケバ	ツイニハヨモオ	さし置けば	遂には万お
	ミタレナス	コレミナモトオ	乱れなす	これみな元お
	タタサネバ	オオミツナシテ	糺さねば	大水なして
	フセガレズ	コレシラズンバ	防がれず	これ知らずんば
23-17	ヲサマラヌナリ		治まらぬなり	
	ワレミルニ	ヒトイハカワル	我れみるに	人イは変る
	オゴリガチ	ヘリニハカタク	奢りがち	滅りには難く
	ワレハタノ	ヲリノリサダム	かれ織機の	機法定む
	ユウノハバ	タテイトヤモリ	木綿の幅	経糸八織り
	ヲサヨモハ	ヤソリヒトヨミ	箴四百衣	八十織梭十数み
	ヤリヒトテ	ヘグキニスエテ	遣梭とて	縁杭に揃ゑて
	アレヲサニ	マキヲサニイレ	梗箴に	巻き箴に入れ
23-18	カサリカケ	メヲフミワケテ	飾りかけ	陰陽踏み分けて

	カヒナグル	ヲサメグラセテ	梭投ぐる	箴巡らせて
	ユウヌノモ	キヌモヲルナリ	木綿布も	絹も織るなり
	トヨミモノ	モノヌシカミガ	十数みもの	モノヌシ神が
	ツネノハヅ	モニハカタオリ	常の衣ぞ	喪にはカタ織り
	コヨミモノ	ムラジアタイラ	コヨミ物	連直ら
	ツネノハヅ	モハクノカタハ	常の衣ぞ	喪は九のカタ衣
	ヤヨミモノ	アレヲサベヲミ	ヤヨミモノ	村長部臣
23-19	ツネノハヅ	モハヤノカタハ	常の衣ぞ	喪は八のカタ衣
	ナヨセヨリ	フトノハタミノ	ナヨミ搓り	太布は民の
	ツネノハヅ	モハムノカタハ	常の衣ぞ	喪は六のカタ衣
	ワレツネニ	ソフヨミオキル	我れ常に	十二臣お着る
	ツキノカズ	モハソノカタハ	月の数	喪は十のカタ衣
	ナツハヌサ	ウミテヌノヲリ	夏はヌサ	紡みて布織り

	フユハユキ	ヨリテユフヲリ	冬はユキ	搓りて木綿織
	キルトキハ	カミシモヨヨノ	着る時は	上下世々の
23-20	キモヤスク	カザルオミレバ	居も安く	飾るお見れば
	ニギハエド	ウチハクルシム	賑はえど	内は苦しむ
	ソノユエハ	ユフヌノキヌオ	その故は	木綿布絹お
	ソメカザル	コレナスヒトハ	染め飾る	これ為す人は
	タガヤサデ	ヒマカクユエニ	耕さで	暇欠く故に
	タモアレテ	タトヒミノレド	田も荒れて	たとひ実れど
	トボシクテ	ヤヤヒトカズノ	乏しくて	やや人数の
	カテアレド	モトチカラエヌ	糧あれど	元力 得ぬ
23-21	イネノミハ	ハミテモコエズ	稲の実は	喰みても肥ゑず
	ヤフヤクニ	カテタラザルゾ	漸くに	糧たらざるぞ
	ホコルヨハ	アメノニクミニ	慢る世は	天の憎みに

	アメカゼモ	トキモタガエバ	雨風も	時も違えば
	イネヤセテ	タミノチカラモ	稲瘦せて	民の力も
	ヤヤツキテ	ヨニクルシムゾ	漸尽きて	世に苦しむぞ
	カザリヨリ	オゴリニナリテ	飾りより	奢りになりて
	トキハカル	ハテハハタレノ	鋭き謀る	果てはハタレの
23-22	クニミタレ	タミヤスカラズ	国乱れ	民安からず
	カレツネニ	タミノキヤスキ	故れ常に	民の居安き
	ユフオキル	アサコトスガノ	木綿お着る	麻蚕と清の
	ハフタエハ	タミノキヤスク	ハフタエは	民の弥安く
	ナガラエト	ヒニイノルハゾ	永らゑと	日に祈る衣ぞ
	ニシコリハ	ユキスキミヤノ	錦織は	ユキ・スキ宮の
	オオナメノ	エノトキノハゾ	オオナメの	会の時の衣ぞ
	アヤオリハ	ハニノヤシロノ	綾織は	埴の社の

23-23	サナメエニ	スキイノルハヅ	サナメエに	スキ祈る衣ぞ
	コノユエハ	アヤニシコリハ	この故は	綾錦織は
	オサハヤモ	ヒトハニヨタリ	箴衣八百	一衣に四垂り
	ミチフヲリ	コレアシハラノ	三千二織り	これ葦原の
	トヨノカズ	タナガタカミト	豊の数	タナバタ神と
	タハタカミ	オナジマツリノ	田畑神	同じ祭りの
	アヤニシキ	ミチリノタテニ	綾錦	三千織の経に
	ヘカザリオ	カケテヨツムツ	縁飾りお	掛けて四つ六つ
23-24	フミワクル	ヤナギアヤナル	踏み分くる	柳 綾なる
	ハナガタハ	エガキマノリニ	花形は	描き間矩に
	アテウツシ	ツウヂコカヘニ	当て写し	ツウヂコカヘに
	ツリワケテ	ヲリヒメカザリ	吊り分けて	織姫飾り
	フムトキニ	ヨコヘニワケテ	踏む時に	ヨコヘに分けて

	ツウチヒク	カヒヌキナゲテ	ツウチ引く	梭抜き投げて
	ヲサメグル	アヤニシキゴリ	箆巡る	綾錦織も
	コレナスゾ	タカハタノリノ	これなるぞ	高機法の
23-25	アラマシゾコレ		大要ぞこれ	
	マツリゴト	タミノイモセハ	政事	民の夫婦は
	ヲサヒトハ	キヤクムヲサハ	箆一衣	五屋組む長は
	ヒトテユビ	ヤソテベヒトリ	一手指	八十手部一人
	アレヲサト	ナルオオトラガ	村長と	なる長老らが
	チギリマク	ヤソアレベオク	契り任く	八十村部置く
	アガタヌシ	コレヒトヨミノ	アガタヌシ	これ一数みの
	モノノベゾ	ヤソベノクニニ	モノノベぞ	八十部の国に
23-26	ツウヂオキ	モノノベタテオ	ツウヂ置き	モノノベ経お
	ヲシエシム	コノクニツコニ	教ゑしむ	このクニツコに

	ヨコベソリ	ソエテアマネク	ヨコベ十人	添えてあまねく
	ミチワキテ	サガオミアタヒ	道別きて	サガ臣アタヒ
	ツウヂヘテ	タタチニツグル	ツウヂ経て	直ちに告ぐる
	アノメツケ	コレアタヒラゾ	天の目付け	これアタヒらぞ
	モノノベオ	ヤモリツカヌル	モノノベお	八百人束ぬる
	ヌシハコレ	オオモノヌシヤ	主はこれ	オオモノヌシヤ
23-27	ソエムラジ	コトシロヌシト	添ムラジ	コトシロヌシと
	タスカシム	ソエノフタリハ	助けしむ	添の二人は
	ヘトカザリ	オオモノヌシハ	へと飾り	オオモノヌシは
	ハタノヌシ	カレサガオヨム	織の主	故れサガお数む
	ソノガマデ	アレバアレオサ	十のガまで	あれば村長
	クミオヨビ	ソウチハシカル	組お呼び	十内は叱る
	ソノソトハ	アガタニツグル	十の外は	アガタに告ぐる

	アガタヌシ	クソウチハツエ	アガタヌシ	九十内は杖
23-28	ケタノガハ	ガトヤニイレテ	一桁のガは	獄舎に入れて
	クニツコニ	ツグレバハカリ	クニツコに	告ぐれば謀り
	ケタノガハ	ツエウチアガタ	一桁のガは	杖打ちアガタ
	オヒヤラレ	フタケタナラバ	追ひ逐られ	二桁ならば
	クニオサル	アマレバツグル	国お去る	余れば告ぐる
	モノヌシノ	タダシアカシテ	モノヌシの	糺し明して
	フヨノガハ	シマニサスラス	二百のガは	島に追放す
	ミタノガハ	カミツメヌキテ	三桁のガは	髪爪抜きて
23-29	イレスミシ	アメニワタレバ	入墨し	天に渡れば
	ミオカラス	マカルノツミハ	身お死らす	死るの罪は
	モノヌシノ	ミコトオウケヨ	モノヌシの	命令お受けよ
	モノノベラ	シカトキケコレ	モノノベら	確かと聴けこれ

	ワガママニ	タミオキルナヨ	我が俣に	民お斬るなよ
	タミハミナ	ナホワガマコゾ	民はみな	なほ我が真子ぞ
	ソノタミオ	マモリヲサムル	その民お	守り治むる
	クニカミハ	コレナオワガコ	国主は	これなを我が子
23-30	クニカミハ	タミノタラチネ	国主は	民のタラチネ
	ソノタミハ	クニカミノコゾ	その民は	国主の子ぞ
	ワガコデモ	ヲヤガキルナヨ	我が子でも	親が斬るなよ
	ワガコサス	ツミモヤソクラ	わが子刺す	罪百八十座
	ママコサス	ツミフモナソガ	ママ子刺す	罪二百七十ガ
	イモイサス	ツミフモナソガ	イモい刺す	罪二百七十ガ
	ウマズメハ	ヨソメゾアニモ	産まず女は	四十メぞ兄も
	セモカラズ	トガミモムソガ	夫も死らす	トガ三百六十ガ
23-31	ウマザルハ	ヨソウメバアニ	産まざるは	四十産めば豈

	タラチウツ	トガミモムソガ	タラチ打つ	トガ三百六十ガ
	ママヲヤオ	ウツトガヨモガ	ママ親お	打つトガ四百ガ
	アメノリオ	タミヒトクミガ	天法お	民一組が
	ミタレテモ	ヲサメクラネバ	乱れても	箴巡らねば
	ハタオレズ	カレオサムルハ	幡織れず	故れ治むるは
	ハタノミチカナ		幡の道かな	
	トキニマタ	オオモノヌシガ	時に又	オオモノヌシが
23-32	モウサクハ	ムカシミタレズ	申さくは	「昔乱れず
	オコラヌハ	アラコオキテハ	驕らぬお	粗コお着ては
	イツクンゾ	キミエミイワク	いづくんぞ」	君笑み日く
	ナンヂモト	タダチオモヘド	「汝モト	直ち思へど
	ノチノヨニ	イヤヲサマレバ	後の世に	礼治まれば
	ウエシラデ	オゴルタノシミ	飢ゑ知らで	驕る樂しの

	ミツルトキ	ウエトシコロハ	満つる時	ウエとシコロは
	ミノラズテ	マコトニウエル	実らずて	真に飢ゑる
23-33	コレカネテ	サタムルハノリ	これかねて	定むる衣法
	カンガミゾ	コレツツシメヨ	鑑みぞ	これ慎しめよ
	ムカシナル	アオヒトクサモ	昔なる	青人草も
	ソニフエテ	ミチオフレテモ	十に殖ゑて	道お告れても
	トドキカネ	コスエヤブルル	届きかね	子末破るる
	モトイカヤ	トキホコフラバ	基かや	時矛振らば
	スミヤカニ	トホランモノト	速やかに	通らんものと
	ツルギナス	ソノトキフレテ	ツルギなす」	その時告れて
23-34	カネリトオ	ソタリニツルギ	金鍊人お	十人にツルギ
	ツクラシム	ナカニヒトリハ	造らしむ	中に一人は
	ヒイデタリ	ヤヒバスルドク	秀でたり	刃 鋭く

	ミツオワル	コノカネリトニ	水お割る	この金鍊人に
	ミコトノリ	ナンヂガヤイバ	勅	「汝が刃
	ヨクトキヅ	シカレドマテノ	よく鋭きぞ	然れど真手の
	イキカレオ	シラズヲシエン	生き死れお	知らず教えん
	シカトキケ	タノメハハルノ	確かと聴け	左の目は春の
23-35	イキルコロ	タノメオイレテ	生きる頃	左の目お入れて
	ネルツルギ	イキミニチカク	鍊るツルギ	生き身に近く
	カレウトシ	モシアヤマルヤ	死れ疎し	もし誤るや
	オソルナリ	カノメハアキノ	恐るなり	右の目は秋の
	カラスコロ	カノメオイレテ	枯らす頃	右の目お入れて
	ネルツルギ	カレミニチカク	鍊るツルギ	死れ身に近く
	イキウトシ	ツミアルモノオ	生き疎し	罪ある者お
	カレトイフ	ナキハイキナリ	死れといふ	無きは生きなり

23-36	カノツルギ	カレミオコノミ	右のツルギ	死れ身お好み
	イキオソル	コレゾヲサムル	生き恐る	これぞ治むる
	タカラモノ	コレウツベシト	宝物	これ打つべし」と
	ノタマエバ	ヲソレテモカノ	宣給えば	畏れて百日の
	モノイミシ	ミキメヒトツデ	物忌みし	右目一つで
	ネルツルギ	ヤフリアグレバ	鍊るツルギ	八振りあぐれば
	ミコトノリ	イマコノツルギ	勅	「今このツルギ
	ムベイタル	ワガミココロニ	宣べ至る	わが身心に
23-37	ヨクカナヒ	ミヨノヲサマル	よく叶い	御世の治まる
	タカラモノ	ナモヤエガキノ	宝物	名も八重垣の
	ツルギトゾ	カネリオホメテ	ツルギ」とぞ	金鍊人お賞めて
	タマフナハ	アマメヒトツノ	賜ふ名は	アマメヒトツの
	カミトナル	ノチニハタレガ	神となる	後にハタレが

	ミタルトキ	カナサキオヨビ	乱る時	カナサキ及び
	ムマサカミ	ツルギタマワリ	ムマサ神	ツルギ賜わり
	ハタレウチ	ヤタミヲサムル	ハタレ討ち	八民治むる
23-38	イキオヒモ	カレハカラシテ	勢ひも	カレハカラシテ
	イキオエル	タトエバハヤシ	生きお得る	例ゑば林
	キリヒラキ	タクニコタマノ	伐り開き	焚くに森林の
	ナキコトク	キルベキトガハ	無き如く	斬るべきトガは
	キリツクス	オモヒノコラジ	斬り尽す	思い残らじ
	ツルギトハ	ツハキノヨハヒ	ツルギとは	ツは生の齡
	アニツキテ	カレルアノツゾ	天に尽きて	死れる天の尽ぞ
	ルハシバノ	カワケバモユル	ルは柴の	乾けば燃ゆる
23-39	ルギノホゾ	ギハキノカレテ	ルギノホぞ	ギは生の死れて
	オモヒナシ	カレにツルギト	思ひなし	故にツルギと

	ナヅクナリ	モシタミオゴリ	名づくなり	もし民驕り
	ミノホドモ	ワスレテツヒニ	身の程も	忘れて遂に
	ツルギウク	ウケサセジトテ	ツルギ受く	受けさせじとて
	ミノカキヨ	モシモツカサノ	身の垣よ	もしも司の
	オゴリニテ	タミオカラセバ	驕りにて	民お死らせば
	ツミオオシ	ヨコベニサラニ	罪多し	ヨコベに更に
23-40	アラタメテ	ソノタミイカス	吟味めて	その民生かす
	トミコトミ	オゴリシノビテ	臣事見	驕り堪びて
	ミチマモレ	ワガミノタメノ	道守れ	わが身の為の
	ヤエカキハコレ		八重垣はこれ」	
	トキニマタ	オオモノヌシガ	時に又	オオモノヌシが
	モフサクハ	ハタレヤブルノ	申さくは	「ハタレ破るの
	ナオモガナ	トエバアマテル	尚もがな	問えばアマテル

	ミコトノリ	ハタレガワザハ	勅	「ハタレが術は
23-41	チカヅケズ	ユミヤニヤブリ	近づけず	弓矢に破り
	チカヅケバ	タチウチハラフ	近づけば	太刀打ち払ふ
	ミノカキゾ	マタトフヤタミ	身の垣ぞ」	又問ふ「八民
	オサムレバ	ヤタナハイカン	治むれば	ヤタ名は如何」
	ミコトノリ	カガミハタミノ	勅	「カガミは民の
	ココロイル	イレモノナレバ	心 入る	容器なれば
	ヤタカガミ	ツルギハアダオ	ヤタカガミ	ツルギは仇お
	チカヅケズ	マタトフカキノ	近づけず」	又問ふ「垣の
23-42	ヤエイカン	キミノコエミテ	八重如何」	君にこ笑みて
	ノタマフハ	イシクモコエリ	宣給ふは	いしくも乞えり
	ソレヤエハ	ムカシフタカミ	それ八重は	昔 二神
	クニシラス	モノイフミチノ	国治らす	ものいふ道の

	アワウタノ	アハアメトチチ	アワ歌の	アは天と父
	ワハハハヅ	ヤハワガミナリ	ワは母ぞ	ヤはわが身なり
	コノアワヤ	ノドヨリヒビク	このアワヤ	咽より響く
	ハニノコエ	クニオシラスル	埴の声	国お治らする
23-43	タネナレバ	アワハアワクニ	種なれば	アワはアワ国
	ヤハヨモノ	アオヒトクサノ	ヤは四方の	青草人の
	ナモヤタミ	ヤハイエニナリ	名もヤタミ	ヤはイエニなり
	アハヲサム	ミハワガミナリ	タは治む	ミは我が身なり
	アワノクニ	ヤニイテヤシマ	アワの国	ヤに居て八島
	シラスレバ	ヤハヤツナラズ	治らすれば	ヤは人ならず
	モモチヨロ	カサヌルフシノ	百千万	重ねる節の
	ヤエカキヅ	トキニモノヌシ	八重垣ぞ」	時にモノヌシ
23-44	エミイワク	ムカシモノヌシ	笑み日く	「昔モノヌシ

	タマワリテ	フカクオモエド	賜わりて	深く思えど
	マダトケズ	イマヤフヤクニ	まだ積けず	今漸くに
	コレオシる	コレヤエカキハ	これお知る	これ八重垣は
	モノノベノ	ナナリトオノガ	モノノベの	名なりと己が
	ヲニコタユ	デレバスベラノ	緒に応ゆ	出ればスベラの
	ヨヨノカキ	オノガヲナリト	代々の垣	己が緒なり」と
	チカイナス	マタミコトノリ	誓いなす	又みことのり
23-45	ムベナルヤ	クシヒコナンヂ	「宣べなるや	クシヒコ汝
	ミマゴヨリ	ヲコヌシカミト	御孫より	ヲコヌシ神と
	タマフナモ	マダタラズワレ	賜ふ名も	まだ足らず我
	フタカミノ	タマフサカホコ	二神の	賜ふ逆矛
	サイワヒニ	ソノキオエレバ	幸ひに	その気お得れば
	ユヅルナリ	ウマレスナオニ	譲るなり	生れ素直に

	ヤマトチノ	ヲシエニカナフ	ヤマトチの	教ゑに叶ふ
	スヘラギノ	ヤエカキノヲキ	スヘラギの	八重垣の翁
23-46	タマフナモ	ヤマトヲヲコノ	賜ふ名も	ヤマトヲヲコの
	ミタマカミ	トキニクシヒコ	御魂神」	時にクシヒコ
	オソレフシ	シハシコタエズ	懼 伏し	暫し答えず
	モノノベラ	サウケタマエト	モノノべら	「さ受給え」と
	ススムレド	マダウナタルオ	勸むれど	まだ頂垂るお
	コヤネマタ	ナフカオソレソ	コヤネ又	「な深懼れそ
	ウケタマエ	ワレワカケレド	受け賜え	我れ若けれど
	コモリトハ	ヨヨムツマシク	コモリとは	世々睦じく
23-47	キミノタメ	ナカコヒトツニ	君のため	ナカコーつに
	マメナサン	トキニクシヒコ	マメなさん」	時にクシヒコ
	ウヤマヒテ	ウケイタダケバ	敬ひて	受けただけば

	キミハマタ	フトタマカグニ	君は又	フトタマ・カグに
	ミコトノリ	マゴテルヒコノ	勅	「孫テルヒコの
	ハネノオミ	フトタマハヨヨ	輔翼の臣	フトタマは世々
	マツリトレ	マタカグヤマハ	政りとれ	又カグヤマは
	モノヌシヨ	ムソノモノノベ	モノヌシよ	六十のモノノベ
23-48	ツカサドリ	タミオヲサメヨ	司どり	民お治めよ」
	トキニマタ	コヤネコモリニ	時に又	コヤネ・コモリに
	ミコトノリ	イマキヨヒトノ	勅	「今キヨヒトの
	ハネノオミ	コヤネはヨヨノ	輔翼の臣	コヤネは世々の
	マツリテレ	コモリハヨヨノ	政りとれ	コモリは世々の
	モノヌシゾ	トモニマモリテ	モノヌシぞ	共に守りて
	タミオタセ	マタスベマゴニ	民お養せ」	又総孫に
	ミコトノリ	ナンヂラマツリ	勅	「汝ら政り

23-49	オコタラズ	ホツマナルトキ	怠らず	ホツマなる時
	ヤヤヤストシフラン		やや安す年経らん」	
	クシヒコハ	ヤマトヤマベニ	クシヒコは	ヤマトヤマベに
	トノツクリ	ヨオカンガエバ	殿造り	世お考えば
	トシスデニ	ソフヨロヤチモ	年既に	十二万八千も
	キワアレバ	ノチノマモリハ	際あれば	後の守りは
	トヨケノリ	タマノヲイレテ	トヨケ法	魂の緒入れて
	スベラギノ	ヨヨマモランハ	スベラギの	世々守らんは
23-50	アメノミチ	ミモロノヤマニ	天の道	ミモロの山に
	ホラホリテ	アマノサカホコ	洞掘りて	天の逆矛
	サゲナガラ	イリテシツカニ	さげながら	入りて静かに
	トキオマツ	スグナルヌシオ	時お待つ	直ぐなる主お
	ミワケント	スグナシルシノ	み別けんと	直ぐな標の

	スギウユル	ヲコノミタマノ	杉植ゆる	ヲコの御魂の
	カミハモト	ヒノワワケミノ	神は元	日の輪分身の
	コトノリモ	アメニツグトテ	事法も	天に告ぐ」とて
23-51	コモリカミ	ソエモノノベハ	コモリ神	添え物部は
	トマミナリ	コトシロヌシハ	トマミなり	コトシロヌシは
	ツミハナリ	ニニキネミコノ	ツミハなり	ニニキネ御子の
	マモリナリケリ		守りなりけり	

● コエ国(クニ)ハラミ山(ヤマ)の紋(アヤ)

24- 1	ソモソモニ	ミマゴニニキネ	そもそもに	御孫ニニキネ
	ニハリミヤ	ツクバニヲサム	ニハリ宮	筑波に治む
	トシスデニ	ミスズフチキソ	年既に	三スズ二千五十
	ツラツラト	オモセハタミノ	つらつらと	オモセは民の

	フユルホド	タハマサヌユエ	殖ゆるほど	田は増さぬ故
	カテタラズ	ヒラバノオダハ	糧たらず	平場の小田は
24- 2	ミツタエズ	タカダハアメノ	水絶えず	高田は雨の
	フラヌトシ	タネオホロボス	降らぬ年	種お減ぼす
	カワカミノ	ミヅオカケヒニ	川上の	水お掛樋に
	ハコバセド	コレモクツレバ	運ばせど	これも朽つれば
	イセキタテ	ツツミキツキテ	イセキ立て	堤 築きて
	ヤマミヅオ	トリテタカタオ	山水お	とりて高田お
	ヒラカント	イツノカモフネ	拓かんと	稜威のカモ船
	イセニツケ	メグリコエドモ	イセに着け	巡り乞えども
24- 3	ヲランカミ	ユルサズココニ	大御神	許さずここに
	カリスマキ	ヤマタノタカク	仮住ゐ	山田の高く
	ミヤカワノ	カミヨリイセキ	ミヤ川の	上よりイセキ

	ツツミツキ	ツイニタカノオ	堤 築き	遂に高野お
	タトナセバ	キトセノウチニ	田となせば	五年の内に
	ミツホナル	ホカニソヤカノ	瑞穂なる	外に十八箇の
	イセキナル	トキアマテル	イセキなる	時にアマテル
	ミコトノリ	ヤシマメグレト	勅	「八島巡れ」と
24- 4	フレタマフ	トキフソコスズ	告れ給ふ	時二十九スス
	キモノヒユ	ミソヤキサラギ	五百の一枝	三十八二月
	ツイタチト	ムメノハナミノ	一日と	梅の花見の
	ミアエシテ	ヒヨミノミヤノ	御饗して	日数みの宮の
	カトデノリ	ムカシヒヨミノ	門出宣り	昔 日数みの
	オモイカネ	コヨミツクリテ	オモイカネ	暦作りて
	ココニアリ	ノチムラクモニ	ここにあり	後ムラクモに
	ユツリオク	ムラクモアメノ	譲りおく	ムラクモ天の

24- 5	オントモニ	アスカニハベル	御共に	アスカに侍る
	タチカラヲ	ヲヤノアトトテ	タチカラヲ	親の後継とて
	ココニアリ	ミカリノオトモ	ここにあり	み狩りのお伴
	コフユエニ	ムラクモメシテ	請ふ故に	ムラクモ召して
	ミコトノリ	ナンヂムラクモ	勅	「汝ムラクモ
	コヨミナス	カガミクモレバ	暦なす	カガミ曇れば
	タマフナハ	アメフタエナリ	賜ふ名は	アメフタエなり
	フタエケフ	ミアエオナセバ	フタエ今日	御饗おなせば
24- 6	カドイデニ	ミハタノトドメ	門出でに	御幡の留めの
	ヲンフミオ	ミマゴニタマヒ	御文お	皇孫に賜ひ
	ミカガミオ	コヤネニタマヒ	みカガミお	コヤネに賜ひ
	ミツルギオ	コモリニタマヒ	みツルギお	コモリに賜ひ
	ノタマフハ	サキにミクサノ	宣給ふは	「先にミクサの

	タカラモノ	ミコオシヒトニ	タカラモノ	み子オシヒトに
	タマイシハ	アニミマコエテ	賜しは	アニミマコエテ
	フトタマト	カクヤマハネノ	フトタマト	カクヤマ輔翼の
24- 7	ヲミトナル	コヤネモノヌシ	臣となる	コヤネモノヌシ
	キヨヒトガ	ハネノヲミナリ	キヨヒトが	輔翼の臣なり
	キミトヲミ	ココロヒトツニ	君と臣	心 一つに
	カノトリノ	カタチハヤタミ	かの鳥の	形は八民
	クビハキミ	カガミハタハネ	首は君	カガミは左羽根
	ツルギカハ	モノノベハアシ	ツルギ右羽	モノノベは足
	カガミヲミ	スエホロブレバ	カガミ臣	未滅ぶれば
	タミハナレ	ヒツギフマレズ	民離れ	日嗣踐れず
24- 8	ツルギヲミ	スエホロベレバ	劍 臣	未滅ぶれば
	モノベワレ	ヨオウバワルル	モノベ割れ	世お奪わるる

	ヤタトミハ	ソロハフハルノ	ヤタトミは	ソロハフ春の
	タミワザオ	カンガミルメゾ	民業お	鑑みる目ぞ
	カキヲミハ	ヨコマヲカラシ	垣ヲミは	ヨコマお殺し
	モノノベノ	チカラモルテゾ	物部の	力 守る手ぞ」
	コノユエニ	ミクサオワケテ	この故に	三種お分けて
	サズクイハ	ナカクヒトツニ	授く謂は	永く一つに
24- 9	ナルヨシオ	アヤニシルシテ	なる由お	文章に録して
	ヲテヅカラ	フミオミマゴニ	を手づから	フミお皇孫に
	サヅケマス	セオリツヒメハ	授けます	セオリツ姫は
	ミカガミオ	モチテカスガニ	ミカガミお	持ちてカスガに
	サヅケマス	ハヤアキツメハ	授けます	ハヤアキツ姫は
	ミツルギオ	モチテコモリニ	御剣お	持ちてコモリに
	サツケマス	ミタビウヤマヒ	授けます	三度敬ひ

ミナウクルカナ

皆受くるかな

24-10	シカルノチ	ミクサタカラオ	然る後	ミクサタカラお
	ヒツニイレ	シルシハサカキ	櫃に入れ	目印は櫛
	サキカリハ	タチカラヲナリ	先駆りは	タチカラヲなり
	ツギカツテ	オオモノヌシト	次カツテ	オオモノヌシと
	ミクサビツ	ヤフサミクルマ	ミクサ櫃	八房御車
	ツギコヤネ	カゴムマヤソノ	次コヤネ	囲む馬八十の
	モノノベラ	イセヨリタチテ	モノノべら	イセより発ちて
	アスカミヤ	コレヨリミツノ	アスカ宮	これよりミツの
24-11	ニシノミヤ	マズカンサキノ	ニシの宮	まずカンサキノ
	オオキホリ	マナキニイタリ	大井掘り	マナ井に至り
	ヌサオサメ	コエノネノクニ	幣納め	コエのネの国
	アチハセガ	ミネコシササグ	アチハセが	峯輿捧ぐ

	コレニメシ	シラヤマミネオ	これに召し	シラヤマ峯お
	ミメグルニ	ナナメニナラズ	み巡るに	「斜めにならず
	コノコシハ	タガツクレルト	この輿は	誰が造れる」と
	ノタマエバ	ココリメイワク	宣給えば	ココリメ日く
24-12	マゴガナス	イトウケステメ	孫がなす	イトウケステメ
	アカガタニ	クロソノツミテ	アカガタに	クロソノツミテ
	ウムミコオ	コロビツクニノ	生む御子お	コロビツ国の
	キミトナス	クロソノムメル	君となす	クロソノ生める
	キミノハハ	ケワシキミネノ	君の母	険しき峯の
	コस्तキ	ミネコシツクリ	越す時に	峯輿造り
	コオソタツ	イマココニキテ	子お育つ	いまここに来て
	マミエナス	ミマゴヨロコビ	ま見ゑなす	皇孫喜び
24-13	クニハコシ	ヤマハミネトシ	国はコシ	山は峯輿

	ソノカエニ	ミチミノモモオ	その返礼に	三千実の桃お
	タマワレバ	ハナミノモモハ	賜われば	花実の桃は
	マレナリト	クニトツニナス	稀なりと	国苞になす
	ヤヨヒモチ	ミアエノムメニ	三月十五日	御饗の梅に
	キミエミテ	ムメニミクサノ	君笑みて	梅に三種の
	カドイデモ	ムメニコシエテ	門出も	梅に輿得て
	コノミアエ	アメノシルシト	この御饗ゑ	天の現示と
24-14	オリカザシ	イタルタカシマ	折りかざし	至る高島
	ササナミノ	サクラモヨシト	小波の	桜もよしと
	オリカザシ	クマノヨロギノ	折りかざし	クマのヨロギの
	タニセント	オオタミシマガ	田にせんと	オオタ・ミシマガ
	イガワナス	オトタマカワノ	井河なす	オトタマ川の
	シラスナニ	ヒルネシテオル	白砂に	昼寝して居る

	チマタカミ	ミノタケソナタ	道股神	身の丈十七尺
	ツラカガチ	ハナタカサナキ	面酸槩	鼻高さ七尺
24-15	メハカガミ	トモノヤソカミ	目はカガミ	伴の八十神
	オソルレバ	ミマゴウスメニ	恐るれば	皇孫ウスメに
	ミコトノリ	ナンヂメカチニ	勅	「汝 目勝ちに
	トフベシト	ウスメムネアケ	問ふべし」と	ウスメ胸開け
	モヒボサケ	アザワライユク	裳紐さげ	あざ笑いゆく
	チマタカミ	サメテカクスル	道股神	覚めて「かくする
	ナニユエヤ	イワクミマゴノ	何故や」	日く「皇孫の
	ミユキサキ	カクイルハタゾ	御幸先き	かく居るは誰ぞ」
24-16	コタエイウ	カミノミマゴノ	答え云ふ	「神の皇孫の
	ミユキナス	ウカワカリヤニ	み幸なす	ウカワ仮屋に
	ミアエシテ	アヒマツハガタ	御饗して	合ひ待つナガタ

	サルタヒコ	ウスメマタトフ	サルタヒコ」	ウスメ又問ふ
	イズレカラ	ユクヤコタエテ	「いづれから	行くや」 答えて
	ワレユカン	マタトフナンヂ	「われ行かん」	又問ふ「汝
	シスヤキミ	ユキマストコオ	知るや君	行きます処お」
	コタエイウ	キミハツクシノ	答え云う	「君はツクシの
24-17	タカチホゾ	ワレハイセノサ	タカチホゾ	われはイセの南
	ナガタカワ	ナンヂワガナオ	ナガタ川	汝わが名お
	アラワサバ	ワレモイタサン	現わさば	われも至さん」
	カエコトス	ミマゴヨロコビ	復命す	皇孫喜び
	ウノハナモ	マタカザシユク	卵の花も	又かざしゆく
	サルタシテ	ダケノイワクラ	サルタして	ダケの岩座
	オシハナチ	イヅノチワキノ	押し放ち	稜威の道別きの
	ヨロイザキ	ダケヤカガミノ	ヨロイザキ	ダケヤカガミの

24-18	ミヲノツチ	ツムミアミヤマ	ミヲの土	積むミカミ山
	イセキツク	サルタオホメテ	イセキ築く	サルタお賞めて
	ミヲノカミ	コノムウスメオ	ミヲの神	好むウスメお
	タマワリテ	ソノナアラハス	賜りて	その名現はす
	サルベラト	カクラオノコノ	サルベ等と	神楽男の子の
	キミノモトナリ		君の元なり	
	ミコトノリ	ミヲノチワケモ	勅	「ミヲの道別も
	タハココニ	コレカガミナリ	田はここに	これカガミなり」
24-19	カリミヤオ	ミヅホトナヅク	仮宮お	ミヅホと名づく
	タガニユキ	ヌサオササゲテ	タガにゆき	幣お捧げて
	ミノニユキ	アマクニタマノ	ミノにゆき	アマクニタマの
	ヨロコビモ	ムカシカスガニ	喜びも	昔カスガに
	ウルリエテ	ウムタカヒコネ	瓜り得て	生むタカヒコネ

	ササゲモノ	オノオノマクハ	捧げもの	各々設くは
	ヒトカゴト	ヤソヨロコビテ	一籠と	八十神喜びて
	クモヂワケ	シナノスワヨリ	雲路別け	シナノスワより
24-20	ミチビケバ	ハラミヤマカラ	導けば	ハラミ山から
	ヨモオミテ	スソノハヒロシ	四方お見て	「裾野は広し
	ミヅヲウミ	スソノタニセヨ	水を生み	裾野田にせん」
	タチカラヲ	ヤモニホラシム	タチカラヲ	八方に掘らしむ
	ウミノナモ	キハヤマナカト	湖の名も	東はヤマナカと
	キネハアス	ネハカハクチト	東北はアス	北はカハクチと
	ネツモトス	ツハニシノウミ	北西モトス	西はニシノウミ
	ツサキヨミ	サハシビレウミ	西南キヨミ	南はシビレウミ
	キサハスド	ニハリノタミノ	東南はスド	ニハリの民の
	ムレキタリ	ウミホリツチオ	群れ来り	湖掘り土お

ミネニアゲ	ヤフサハカリト	峯にあげ	ヤフサハカリと
アニコタエ	ナカノワモガナ	天に応え	中の地もがな
ウツロヒガ	アワウミサラエ	ウツロヒが	アワ湖渌え
ミオノワト	ヒトニナイキテ	ミオの地と	一担い来て
アサノマニ	ナカミネナセバ	朝の間に	中峯なせば
カミノナモ	キツアサマミネ	神の名も	稜威アサマ峯
ヤマタカク	ミツウミフカク	山高く	湖 深く
ナラビナシ	ミネニフルユキ	並びなし	峯に降る雪
キケミツノ	スエコチサトノ	池水の	末九千里の
タトナリテ	オヨブミヨタニ	田となりて	及ぶ三万田に
ハタトシニ	サラエナセトテ	「二十歳に	渌えなせ」とて
サカオリノ	ミヤニイリマス	サカオリの	宮に入ります
アツカリノ	オオヤマスミガ	預りの	オオヤマスミが

	ミアエナス	ミカシハササグ	御饗なす	み膳 捧ぐ
24-23	アシツヒメ	ヒトヨメサレテ	アシツ姫	一夜召されて
	チギリコム	カエルニハリノ	契りこむ	帰えるニハリの
	ユキスキノ	ミヤニキノリノ	ユキ・スキの	宮に祈りの
	オオナメエ	ミクサオウケテ	大嘗会	三種神宝お受けて
	アニコタエ	ミヤニヲサムル	天に答え	宮に納むる
	ソノカサリ	カグヤハタアリ	その飾り	香ぐ八幡あり
	ソノアスカ	オオンタカラニ	その翌日	大御宝に
	オガマシム	コヤネカシマニ	拝ましむ	コヤネ・カシマに
24-24	トシコユル	モノヌシヒトリ	年越ゆる	モノヌシ一人
	ヒタカミノ	イセキナシナシ	日高見の	イセキなしなし
	ヒスミマデ	ヲヲヂヨロコビ	日隅まで	大祖父喜び
	ソノチチガ	ヤマトノカミト	その父が	ヤマトの長と

	ナリテノチ	マゴニアイタク	成りて後	孫に合いたく
	トシヨルト	テヅカラミアエ	年寄ると	手づからみ饗え
	モノヌシモ	ヨロコビイワク	モノヌシも	喜び日く
	ワガキミノ	ヤマオヤフサノ	「わが君の	山お八房の
24-25	キユキナス	オオジオドロキ	キ雪なす」	大祖父驚き
	ワレタトヒ	アラタナストモ	「われたとひ	新田なすとも
	コレシラズ	キミハマコトノ	これ知らず	君は真の
	テラスカミ	ヨヨノミヲヤゾ	照らす神	世々の御祖ぞ
	マメナセト	クニサカイマデ	まめなせ」と	国境まで
	オクリテゾ	ナゴリアルナリ	送りてぞ	名残りあるなり
	モノヌシハ	ウミベオニシニ	モノヌシは	海辺お西に
	メグリツツ	ッシエニアラタ	巡りつつ	サシエに新田
24-26	イコッシム	サドニワタリテ	拓さしむ	サドに渡りて

	アラタナス	コシニモドリテ	新田なす	コシに戻りて
	イセキナスカナ		イセキなすかな	
	トキニキミ	オボスコトアリ	時に君	思ふことあり
	コヤネシテ	ニハリニトトメ	コヤネして	ニハリに留め
	カツテシテ	ウミベオノボル	カツテして	海辺お上る
	ミユキフレ	オオヤマスミハ	行幸告れ	オオヤマスミは
	キズサキノ	カリヤニムカエ	キズサキノ	行宮に迎え
24-27	ミアエナス	カシハナストキ	御餐なす	膳なす時
	アシツヒメ	イメハラメリト	アシツ姫	妹妊めりと
	モウスユエ	イセニツグント	申す故	イセに告げんと
	ユソヒナス	トキニソノハハ	装ひなす	時にその母
	アネツレテ	カリヤニイタリ	姉連れて	行宮に至り
	マミエコフ	メセバモフサク	ま見ゑ乞ふ	召せば申さく

	イモトサエ	ワガイツクシノ	「妹さえ	わが慈しの
	アネアリト	コトバカザレバ	姉あり」と	言葉飾れば
24-28	フタココロ	アネイハナガオ	二心	姉イハナガお
	メセバツノ	カタチスルドク	召せばその	形 鋭く
	ミメアシク	カレニキモケシ	眉目悪しく	故に肝消し
	ミヤビカエ	ヤハリアシツト	ミヤビ変え	やはりアシツと
	ノタマエバ	チチオドロキテ	宣たまえば	父驚きて
	ツマシカル	カクアラントテ	妻叱る	「かくあらんとて
	イダサヌオ	イソギカエレト	出さぬお	急ぎ帰れ」と
	オヒヤレバ	ハハアネウラミ	追ひやれば	母姉恨み
24-29	シモメシテ	イモトオトサン	従者召して	妹 陥さん
	アタマクラ	ツイニイツワリ	仇枕	遂に偽り
	シロコヤデ	キミニキコユル	シロコ宿で	君に聞ゆる

	ウタガヒニ	タビヤオヤワニ	疑ひに	旅屋お夜半に
	タチイデテ	イセニカエマス	立ち出て	イセに帰ます
	ヒメヒトリ	ネサメテユケバ	姫一人	寝覚めてゆけば
	マツザカニ	セキトメラレテ	マツザカに	塞き止められて
	シロコヤニ	カエリチカツテ	シロコ宿に	帰り誓つて
24-30	ネタマレノ	ワガハヂススゲ	「嫉妬の	わが恥濯げ
	コノサクラ	ムカシヒヲヲヂ	この桜	昔 曾祖父
	サクラウシ	コノハナササグ	サクラウシ	この花捧ぐ
	ヲヲンカミ	オウチニウエテ	大御神	大内宮に植えて
	イセノミチ	ナルハナルルオ	イセの道	成る離るるお
	ハカリマス	サクライアラバ	謀ります	桜イあらば
	ワガハラミ	アダタネナラバ	わが妊娠	他種ならば
	ハナシボメ	マサタネナラバ	花凋め	正種ならば

24-31	ウムトキニ	サケトチカヒテ	生む時に	咲け」と誓いて
	ココニウエ	サトニカエマス	ここに植ゑ	里に帰ます
	ソフミチテ	ミナツキハツヒ	十二月満ちて	六月初日
	ミツコウム	ソノエナノアヤ	三つ子生む	その胞衣の綾
	ムメサクラ	ウハナトカワリ	梅桜	卯花と変り
	アヤシメバ	キミニツグレド	怪しめば	君に告ぐれど
	カエナクテ	ヒメハスソノニ	返答なくて	姫は裾野に
	ウツムロシ	メクリニシバノ	大室し	周りに柴の
24-32	カキナシテ	ハハコチカヒテ	垣なして	母子誓ひて
	ナカニアリ	アダタネナラバ	中にあり	他種ならば
	ホロビント	ヒオツケヤケバ	滅びんと	火おつけ焼けば
	アツガリテ	ハヒイデントス	熱がりて	這ひ出でんとす
	ミネノタツ	ミツハキカケテ	峯のタツ	水吐きかけて

	ヒトリツツ	ミチビキミコオ	一人づつ	導びき御子お
	ハヒイダス	モロトオドロキ	這ひ出だす	諸人驚き
	ヒオケシテ	ヒメヒキイダシ	火お消して	姫引き出し
24-33	ミコシモテ	ミヤニオクリテ	御輿もて	宮に送りて
	イセニツグ	シロコノサクラ	イセに告ぐ	シロコの桜
	ウマレヒニ	サキテタエネバ	生れ日に	咲きて絶えねば
	アメミマゴ	カモフネハヤク	天皇孫	カモ船早く
	トバサセテ	オキツニツケバ	飛ばさせて	オキツに着けば
	キジトビテ	サカオリニツグ	雉飛びて	サカオリに告ぐ
	ヒメウラミ	フスマカフリテ	姫恨み	衾被りて
	コタエナシ	カエコトスレバ	答えなし	返言すれば
24-34	キミシバシ	オモヒテワカノ	君しばし	思ひてワカノ
	ウタミソメ	オキヒコオシテ	ウタミ染め	オキヒコおして

	サオシカド	ヒメイタダキテ	勅使	姫戴きて
	オキツモハ	ヘニハヨレドモ	『沖つ藻は	辺には寄れども
	サネトコモ	アタワヌカモヨ	清寝床も	あたわぬかもよ
	ハマツチトリヨ		浜つ千鳥よ』	
	コノウタニ	ウラミノナンダ	この歌に	恨みの涙
	トケオチテ	キモノコタエノ	解け落ちて	肝に応えの
24-35	カチハダシ	スソノハシリテ	徒歩裸足	裾野走りて
	オキツハマ	キミヨロコビテ	オキツ浜	君喜びて
	コシナラベ	ユクオオミヤハ	輿並べ	行く大宮は
	ヤマスミノ	ミチユカエシテ	ヤマスミの	道迎えして
	ミドコロニ	スワガミアエハ	三所に	スワが御饗は
	スバシリテ	サカオリミヤニ	スバシリテ	サカオリ宮に
	イリマシテ	モロカミキケヨ	入りまして	「諸神聴けよ

	ワレサキニ	ハナオカザシテ	われ先に	花お頭刺して
24-36	カケトホル	コレエナノアヤ	駈け通る	これ胞衣の綾
	イミナナス	ハツニデルナハ	齋名なす	初に出る名は
	ホノアカリ	イミナムメヒト	ホノアカリ	イミ名ムメヒト
	ツギノコハ	ナモホノススミ	次の子は	名もホノススミ
	サクラギゾ	スエハナモヒコ	サクラギゾ	末は名もヒコ
	ホオテミノ	イミナウツギネ	ホオテミの	齋名ウツギネ
	マタヒメハ	コオウムヒヨリ	また姫は	子お生む日より
	ハナタエズ	ユエニコノハナ	花絶えず	故にコノハナ
24-37	サクヤヒメ	ミヤツクリシテ	サクヤ姫	宮造りして
	オワシマス	ナツメノカミガ	居わします	ナツメの神が
	ウブキナス	ハハノチオモテ	生衣なす	母の乳おもて
	ヒタシマス	コヤスノカミゾ	養します	コヤスの神ぞ

	ヒトナリニ	サクラギカニノ	人なりに	サクラギ・カニの
	クサナセバ	スセリクサニテ	瘡なせば	スセリ草にて
	カニハキテ	クサカレイユル	カニ掃きて	瘡枯れ癒ゆる
	ナモスセリ	カレシラヒゲノ	名もスセリ	故シラヒゲの
24-38	スセリモテ	タミヨミガエル	スセリもて	民蘇る
	マモリトテ	ハタキテウクル	守りとて	刷きて阻くる
	ミヤイコレカナ		宮居これかな	
	ソノノチニ	キミコノヤマニ	その後	君この山に
	ノボリミテ	ハナゴヤスメリ	登りみて	ナカゴ安めり
	ヤツミネニ	キユキタエネバ	八峯に	氷雪絶えねば
	ヨヨノナモ	トヨキユキヤマ	世々の名も	豊井雪山
	コノシロノ	タツのタツタノ	コノシロノ	タツのタツタの
24-39	カミノゴト	コノシロイケノ	神の如	コノシロ池の

	ミヤコトリ	ラハナナグレバ	ミヤコ鳥	ラハナ投ぐれば
	タハムレル	トリタスキトテ	戯れる	トリタスキとて
	ハニイマス	コモリエニナス	ハに居ます	コモリ絵になす
	チヨミグサ	ミハモニシミテ	豊見草	御衣裳に染みて
	サマウツス	ママニマツリオ	様写す	ママニ政りお
	キコシメス	コノアキミヅホ	聞しめす	この秋瑞穂
	チカラナス	カレヤマハトノ	充実なす	故ヤマハトの
24-40	ミハトナス	アヤニハオトメ	御衣となす	綾にハオトメ
	オルニシキ	オオナメマツル	織る錦	オオナメ祭る
	ミハハコレ	ハオナオハメバ	御衣はこれ	ハオナお食めば
	チヨオウル	ヤカナモオナジ	千代お徳る	若菜も同じ
	ニガケレド	ハオナハモモノ	苦けれど	ハオナは百々の
	マシニガク	チヨオノブレド	増し苦く	千代お延ぶれど

	タミクワズ	ネハヒトノナリ	民食わず	根は人の様子
	ハハヨメナ	ハナヤエカオヨ	葉はヨメナ	花ヤエカオよ
24-41	ラハハグハ	モグサカブロボ	ラはハグハ	モグサ・カブロボ
	チオマシテ	ライモワカヤグ	血お増して	老いも若やぐ
	ワカムスビ	コノコオクワニ	ワカムスビ	コノコオクワニ
	イトナセバ	ココリヒメエテ	糸なせば	ココリ姫得て
	ミハササグ	コエネノクニゾ	御衣捧ぐ	コエネの国ぞ
	モノヌシハ	キタヨリメグリ	モノヌシは	北より巡り
	コエニキテ	カノエオススム	コエに来て	かの絵お奉む
	ココリヒメ	アヤニオリナス	ココリ姫	綾に織りなす
24-42	トリダスキ	アメニササゲテ	トリダスキ	天に捧げて
	マアニシノ	ハハガミヤゲト	また西の	母が土産と
	ヨニノコル	タガニイタレバ	世に残る	タガに至れば

	ツエガツマ	アサヒメムカフ	ツエが妻	アサ姫迎ふ
	モノヌシハ	クハヨキオミテ	モノヌシは	桑よきお見て
	アサヒメニ	コカヒキヌオル	アサ姫に	蚕飼ひ絹織る
	タチヌイノ	ミチヲシユレバ	裁縫の	道教ゆれば
	ヲコタマノ	カミオマツリテ	ヲコタマの	神お祭りて
24-43	キクラタシ	ミハサシツクリ	五臓養し	御衣刺し作り
	ヤチヌヒノ	ミチヲシユレバ	裁縫の	道教ゆれば
	ヤモトホリ	コエクニノカミ	八方徹り	コエ国の神
	ヲコノサト	コガヒエルナリ	ヲコの里	蚕飼ひ得るなり
	アメミマゴ	マタヤマメグリ	天皇孫	また山巡り
	ネニヒエテ	ハライタムトキ	ネに冷ゑて	腹痛む時
	コモリソノ	ミクサススメテ	コモリその	ミ草奉めて
	コレオタス	ミトハマシワル	これお養す	実と葉交わる

24-44	ヒトミクサ	ネハコネウスギ	ヒトミ草	根はコネウスギ
	クキヒトリ	ヨエキハヒトミ	茎ひとり	四枝五葉ヒトミ
	コシロハナ	アキミハアキツ	コシロハナ	秋実はずき
	アマニガク	ヨコシウルホヒ	甘苦く	脾臓潤ひ
	ムネオタス	モモクサアレド	胸お治す	百草あれど
	ハラミノミ	コトマサルユエ	ハラミの実	事勝る故
	ミクサホメ	ハラミヤマナリ	ミ草褒め	ハラミ山なり
	フタカミノ	クニナカハシラ	二神の	国中柱
24-45	オキノツボ	アマテルカミノ	オキノツボ	天照る神の
	ヒタカミノ	カタタケミヤノ	ヒタカミの	カタタケ宮の
	ナカハシラ	ケタツボノフミ	中柱	ケタツボの文
	キヅカミノ	ハラミハツボハ	稜威神の	ハラミ初歳は
	ヨモヤモノ	ナカハシラナリ	四方八方の	中柱なり

	ヲヲンカミ	ハラミヲキミト	大御神	ハラミ央君と
	ナオタマフ	ニハリノタミガ	名お賜ふ	ニハリの民が
	コトシタフ	フリモワカレテ	事慕ふ	風俗も別れて
24-46	モトタミト	ミツギハワカレ	元民と	貢は別れ
	シハカミノ	ミハシラノママ	シハカミの	御柱のママ
	ナルコトク	マツリホツマニ	なる如く	政りホツマに
	トトノヒテ	フヨロヤチヘテ	整ひて	二万八千経て
	ミソススノ	コヨミナスコロ	三十ススの	暦なす頃
	クニノナモ	シハカミホツマ	国の名も	しはかみ秀真
	アマネクニ	ウツリタノシム	普くに	移り楽しむ
	ヨヨユタカ	ヤヨロトシヘテ	世々豊か	八万年経て
24-47	ヒタカミノ	キミヨリメセバ	ヒタカミの	君より召せば
	モロトモニ	ミヤニノボレバ	諸共に	宮にのぼれば

	チチミカド	ミコフタカタニ	父帝	御子二方に
	ミコトノリ	ワレユハヒオイ	勅	「われ齡 老い
	ヒタルユエ	イマヨリアニモ	日垂る故	今より兄も
	ナハヤマト	アスカヲキミト	名はヤマト	アスカヲ君と
	ハラヲキミ	トモニムツミテ	ハラヲ君	共に睦みて
	エトカミノ	ソノヒソノタミ	兄弟神の	その日その民
24-48	モルゴトク	エトシカトキケ	守るごとく	兄弟確かと聴け
	クニタミオ	ワガモノトナセ	国民お	我がものとせな
	キミハソノ	タミノキミナリ	君はその	民の君なり
	タハハコネ	フタエメグミゾ	タはハコネ	二重恵みぞ
	カニメデル	キミハガモナシ	日に賞でる	君は・もなし
	フタモナシ	カミノカガミノ	フタもなし	神の陰陽見の
	アマテラス	ヒツギノキミト	天照らす	日嗣ぎの君と

マモルハコネゾ

守るハコネぞ」

24-49	ツイニホル	キヅヲバシリノ	遂に掘る	キヅヲバシリの
	ホラアナニ	ミツカライリテ	洞穴に	自ら入りて
	ハコネカミ	マツリテノチニ	ハコネ神	祭りて後に
	ハラヲキミ	ノコシコトヨリ	ハラ央君	遺言より
	フタタミノ	アラソイアレバ	二民の	争いあれば
	トミヤリテ	ヤワシサバキテ	臣やりて	和し裁きて
	ナニコトモ	オタミオタテテ	何事も	オ民お立てて
	ニイタミノ	カケハハラヨリ	新民の	欠けはハラより
24-50	ツクナワス	カレニヨノウチ	償す	故に代の内
	ムツマジキ	エトオナヅケテ	睦じき	兄弟お名づけて
	ハラカラト	イフモトオリゾ	ハラカラと	云ふ本縁ぞ
	ハラヲキミ	キズサキミヤニ	ハラ央君	キズサキ宮に

	ハコネカミ	ミトセマツリテ	ハコネ神	三年祭りて
	オキツボノ	ミネヨリナガメ	オキツボの	峯より眺め
	ミコトノリ	ナンヂヤマクヒ	勅	「汝ヤマクヒ
	ヤマウシロ	ノオホリツチオ	山後	野お堀り土お
24-51	ココニアゲ	オオヒノヤマオ	ここにあげ	オオヒノ山お
	ウツスベシ	ヒトエダニタリ	移すべし	一枝に足り
	ヒエノヤマ	ソノイケミツガ	日枝の山	その池水が
	タ ソロ	ノ ミノ
	田の稲に	稔りて実れば
	イケ	
	ミソロ池	ママアリエケの
		ミ ハ
	ニシイワや	実食むキシナお
	キ ツ フ	ナガ
	稜威別けて	流すキシカワ

			セ イ	アレワ イ
	塞き入れて	荒地お生けて
24-52	ナルカミ	ワ	シツ	
24-52	鳴神お	別けて鎮むる
	カグツチト	ミズハメオウム	カグツチと	ミズハメお生む
	アオイハト	カツラニイセノ	アオイハと	カツラにイセの
	ミコトノリ		アメ フ テ	
	勅	「天は降り照り
	マツタ		イカツチワ	
	全きは	雷 別けて
	カミ ウ			
	神お生む	これトコタチの
	サラ キヅ	ワ	イカツチ	
	新の稜威	「別け雷の
	アマキミ		タマ	
	天君」と	ヲシデ賜わる

24-53	ヒロサハオ	オオタニホラセ	ヒロサハお	オオタに掘らせ
	クニトナス	アマネクトウル	国となす	普く徹る
	ホヅマブリ	タノシミウタフ	ホヅマぶり	楽しみ唱ふ
	ツガルニハ	ヌマホリアゲテ	ツガルには	沼掘り上げて
	タミツウム	アソベノオカノ	田水生む	アソベの岡の
	キユキヤマ	ナヨサトウミテ	キ雪山	七万里生みて
	カツシマヤ	カツミネヤマト	数島や	数峯山と
	シマアイニ	カヅウオナレバ	島合いに	数魚成れば
24-54	コノウオオ	アラタニイレテ	この魚お	新たに入れて
	ワオコヤス	アマノコヤネモ	地お肥やす	アマノコヤネも
	カスガクニ	トブヒノオカニ	カスガ国	トブヒノオカに
	ヤマトカワ	ホリテツクレル	ヤマト川	掘りて作れる
	ミカサヤマ	イヨノイフキハ	ミカサ山	イヨのイフキは

	アメヤマニ	ウツシタオナス	アメヤマに	移し田おなす
	アスカキミ	カクヤマウツシ	アスカ君	カクヤマ移し
	ミヤノナモ	ハセカワホリテ	宮の名も	ハセ川掘りて
24-55	アスカカワ	フチオタトナス	アスカ川	縁お田となす
	スガタヒメ	キミニモフサク	スガタ姫	君に申さく
	コレワロシ	ムカシクシヒコ	「これ悪し	昔クシヒコ
	イサメシオ	アザケルケガレ	諫めしお	嘲る穢れ
	ミソギナス	コレオスツレバ	ミソギなす	これお捨つれば
	マタケガレ	ナニカミアリト	また穢れ	何神あり」と
	イサムレバ	カグヤマヲキミ	諫むれば	カグヤマ央君
	コレキカズ	オウナノマツリ	これ聴かず	「オウナの祭り
24-56	イツコアル	ナンヂハコノタ	何処ある	汝はこのタ
	コハオエズ	ツマニナラヌト	子は生えず」	「妻にならぬ」と

	ケフサリテ	トヨマドガメノ	今日去りて	トヨマドが女の
	ハツセヒメ	ツマトメサルル	ハツセ姫	妻と召さるる
	アスカカハ	オオヤマスミハ	アスカ川	オオヤマスミは
	コレウツシ	サカムノオノニ	これ移し	サカムの小野に
	アラタナシ	カグノキウエテ	新田なし	香ぐの木植えて
	マウラカミ	ヨヨタチハナノ	マウラ神	代々タチハナの
24-57	キミトナル	キミサカオリノ	君となる	君サカオリの
	ツクルナモ	ハラアサマミヤ	作る名も	ハラアサマ宮
	ヨソオイハ	コカネオカサリ	装いは	黄金お飾り
	タマウテナ	ウルシイロトリ	玉台	漆 彩り
	カケハシノ	スベレバユウノ	懸橋の	滑れば木綿の
	タビツケテ	カケハシシタフ	足袋つけて	懸橋シタフ
	タビスガタ	ナホユタカニテ	タビスガタ	なほ豊かにて

	ソヨロトシ	ミツホノボレバ	十万年	瑞穂のぼれば
24-58	タミヤスク	ニワニスムツル	民ヤスク	庭に棲む鶴
	チヨミクサ	ソソギネオハム	千代見草	ソソギ根お食む
	イケノカメ	ハオハムヨロノ	池の亀	葉お食む万の
	ウラカタハ	アフトハナルト	ト形は	合ふと離ると
	カメウラハ	ミツワクワカヌ	亀トは	水湧く湧かぬ
	ミココロオ	ツクスミマゴノ	御心お	尽す皇孫の
	ホツマナルカナ		秀真なるかな	

● ヒコ命(モコト)鉤(チ)お得るの紋(アヤ)

25- 1	ミソフスス	コモエフソミホ	三十二スス	九百枝二十三年
	ウツキハツ	ワケイカツチノ	四月初	ワケイカツチの

	アマキミハ	フカキオモヒノ	天君は	深き思ひの
	アルニヨリ	オオシマオシテ	有るにより	オオシマおして
	アワウミノ	ミツホノミヤオ	アワ海の	ミツホの宮お
	ツクラシム	ナレバヒオミテ	造らしむ	成れば日おみて
25- 2	ウツラント	サキニタラチヲ	移らんと	先にタラチヲ
	ヒタルトキ	ハコネノホラニ	日垂る時	ハコネの洞に
	イリマスオ	ハハチチヒメハ	入りますお	母チチ姫は
	コトアリテ	イセニイタリテ	事ありて	イセに至りて
	ランカミニ	アサユフツカエ	大御神に	朝夕仕え
	マツラシム	ソヨロトシヘテ	まつらしむ	十万年経て
	イマカレニ	ハコネニモフデ	いま故に	ハコネに詣で
	ヌサササゲ	ソレヨリイセニ	幣捧げ	それよりイセに
25- 3	ミユキナル	ヲヲカミオヨビ	行幸なる	大神及び

	チチヒメオ	オガミテアワノ	チチ姫お	拝みてアワの
	ミツホクニ	ミヤウツシナル	ミツホ国	宮移しなる
	ムメヒトハ	ハラニトドマリ	ムメヒトは	ハラに止どまり
	マツリゴト	コヤネアツカリ	政治	コヤネ預り
	モノヌシハ	トモナスユエニ	モノヌシは	伴なす故に
	ミゾクイオ	ソエモノヌシト	ミゾクイお	副えモノヌシと
	ハラノモリ	ニハリニイマス	ハラの守	ニハリに居ます
25- 4	スセリミヤ	ムカシノアトニ	スセリ宮	昔の跡に
	イマツクル	ウカワノミヤニ	いま造る	ウカワの宮に
	ウツリマス	フタアレスソノ	遷ります	フタアレ裾の
	ウツミヤハ	オオツシノミヤ	大宮は	オオツ・シノ宮
	イマツクリ	コレタマワリテ	いま造り	これ賜わりて
	ウツリマス	トキニキミナノ	遷ります	時に実名の

	ヌエアレバ	ウカハオコエド	故あれば	ウカハお乞えど
	ユルサセズ	ツネニカリシテ	許されず	常に狩りして
25- 5	タノシメバ	ヤマノサチヒコ	楽しめば	山の幸ヒコ
	マタスセリ	ツリタノシメバ	またスセリ	釣楽しめば
	サチヒコト	キミハミヅカラ	幸ヒコと	君は親ら
	ミカリナス	ニシナカクニノ	み狩りなす	西ナカ国の
	ヤマオモテ	イセキツツミニ	山陽	井堰堤に
	アラタナス	ニシニイタリテ	新田なす	西に至りて
	ハゲヤマオ	トエバアレオサ	禿山お	問えば村長
	アキトイフ	キノアルナニテ	有木」と云ふ	「木のある名にて
25- 6	ナキイカン	コレオロチアリ	無き如何」	「これ大蛇あり
	クニカミノ	ヒメオノムユエ	国神の	姫お呑む故
	ミナヤケバ	ニゲテヒカワニ	皆焼けば	逃げてヒカワに

	キラレケリ	シカレドヤマハ	斬られけり	然れど山は
	カボロナリ	イマニキコリノ	禿なり	今に木樵の
	イトマアキ	アマキミエミテ	暇 飽き	天君笑みて
	ナゲクナト	アカツチカミニ	「嘆くな」と	アカツチ神に
	コレヲシエ	ヒスギノタネオ	これ教ふ	桧杉の種お
25- 7	ウエサシム	トトセニナリテ	植ゑさしむ	十年になりて
	ミネコモル	タミヅモタエズ	峰簞る	田水も絶えず
	クニユタカ	マタヤマカゲモ	国豊か	又山陰も
	ミメグリテ	トコロトコロニ	み巡りて	処々に
	イセキナシ	タカタヒラキテ	井堰なし	高田拓きて
	カエリマス	ユタカナルトシ	帰ります	豊かなる年
	ミヨロヘル	トキニツクシノ	三万経る	時にツクシの
	ヲサマラデ	ミコミメグリオ	治まらで	御子み巡りお

25- 8	コフユエニ	キミキコシメシ	乞ふ故に	君聞こしめし
	シノミヤオ	ツクシヲキミト	シノ宮お	ツクシ央君と
	ミコトノリ	ウツキネハラノ	勅	ウツキネハラの
	ミヤニユキ	イトマオコエバ	宮にゆき	暇お乞えば
	ムメヒトモ	トモノノボリテ	ムメヒトも	共に上りて
	ミツホナル	アマキミヲガム	ミツホなる	天君拝む
	トキニキミ	ツクシハカテノ	時に君	「ツクシは糧の
	タラザルカ	テレバユキミテ	足らざるか	早れば行きみて
25- 9	タオマサン	カレムメヒトオ	田お増さん	かれムメヒトお
	ヲキミトス	コヤネモノヌシ	央君とす	コヤネ・モノヌシ
	モロトモニ	ココニトトマリ	諸共に	ここに留まり
	マツリキケ	ウツキネスセリ	マツリきけ	ウツキネ・スセリ
	キタノツニ	ユキテヲサメヨ	キタノツに	行きて治めよ

	イササワケ	アレバムツメヨ	イササワケ	あれば睦めよ」
	アマキミハ	ニシノミヤヨリ	天君は	西の宮より
	カメニノリ	ツクシウマシノ	カメに乗り	筑紫ウマシの
25-10	ウドニツキ	ツクシアマネク	ウドに着き	ツクシあまねく
	メグリカリ	イセキツツミニ	巡り行幸	井堰堤に
	アラタナス	ノリサダムレバ	新田なす	法定むれば
	スミヨシノ	マゴホタカミヤ	スミヨシの	孫ホタカミヤ
	シガノカミ	ツクシニコエバ	シガノ神	ツクシに乞えば
	ソヲノハデ	カゴニコエドモ	ソヲのハデ	カゴに乞えども
	ヒメモスニ	ツキスムマデモ	日めもすに	ツキスム迄も
	ミオツクシ	ミトセニサシエ	身お尽し	三年にサシエ
25-11	ホボナリテ	ツクリオコナイ	ほぼなりて	造り行い
	ヲサメシム	ノチニミツホニ	治めしむ	後にミツホに

	カエマセバ	ムメヒトヲキミ	帰ませば	ムメヒト央君
	シハカミノ	ホツマノミヤニ	シハカミの	ホツマの宮に
	カエリマスカナ		帰りますかな	
	エトノミヤ	キタツニアリテ	兄弟の宮	キタツにありて
	ココロミニ	ウミサチヒコガ	試みに	海幸彦が
	サチカエン	ヤマサチヒコモ	「幸換えん」	山幸彦も
25-12	ウナツツキ	エハユミヤトリ	領きて	兄は弓矢とり
	ヤマニカル	トハウミニイリ	山に狩る	弟は海に入り
	ツリオナス	トモニムナシク	釣おなす	共に空しく
	サチアラズ	エハユミヤカヘ	幸あらず	兄は弓矢換へ
	チオモトム	トハチオトラレ	鉤お求む	弟は鉤お取られ
	ヨシナクテ	ニイチモトメバ	由なくて	新鉤求めば
	エハウケズ	モトチハタレバ	兄は受けず	元鉤徴れば

	タチオチニ	ヒトミニモレド	太刀お鉤に	一箕に盛れど
25-13	ナオイカリ	サワナキモトノ	尚怒り	障無き元の
	チオハタル	ハマニウナダレ	鉤お徴る	浜に頂垂れ
	ウレフトキ	カリワナニオツ	憂ふ時	雁・罌に陥つ
	コレオトク	シホツツノヲヂ	これお解く	シホツツの老翁
	ユエオトフ	ママニコトフル	故お問ふ	俣に答ふる
	ヲチイワク	キミナウレヒソ	老翁日く	「君な憂ひそ
	ハカラント	メナシカタアミ	謀らん」と	目なし堅網
	カモニエレ	ウタフダツケテ	氈にいれ	歌札つけて
25-14	キミモノセ	ホアゲトモツナ	君も乗せ	帆あげ艫綱
	トキハナツ	ツクシウマシノ	解き放つ	筑紫ウマシの
	ハマニツク	カモアミステテ	浜に着く	氈網棄てて
	ユキイタル	ソヲハデカミノ	行き至る	ソヲ・ハデ神の

	ミユカキヤ	ウテナカカヤク	瑞垣や	高台輝く
	ヒモクレテ	ハエバユツリハ	日も暮れて	ハエ葉・ユツリ葉
	シキモシテ	イネモセデマツ	敷茂して	い寝もせで待つ
	アマノトモ	アケテムレデル	海女の連中	開けて群れ出る
25-15	ワカヒメガ	マリニワカミツ	若姫が	椀に若水
	クマントス	ツルベハヌレド	汲まんとす	釣瓶撥ぬれば
	カゲウツル	オトロキイリテ	影写る	驚き入りて
	タラニツグ	アマツカミカハ	両親に告ぐ	「天つ神かは
	マレヒトト	チチハミハモオ	稀人」と	父は御衣裳お
	ノソミミテ	ヤエノタタミオ	望み見て	八重の畳お
	シキモウケ	ヒキイレマシテ	敷き設け	導き入れまして
	ユエオトフ	キミアルカタチ	故お問ふ	君ある形
25-16	ノタマヘバ	ハデカミシバシ	のたまへば	ハデ神しばし

	オモフトキ	ウドモリキタリ	思ふ時	鵜戸守来たり
	カシアミノ	タガカモカアル	「堅網の	誰が氈かある」
	トシノアサ	ウタエソムルオ	歳の朝	歌え染むるお
	トリミレバ	ワカノウタアリ	取りみれば	ワカの歌あり
	シホツツガ	メナシカタアミ	シホツツが	目無し堅網
	ハルベラヤ	ミチヒノタマハ	張るべらや	満ち干の玉は
	ハデノカンカゼ		ハデの神風	
25-17	トキニハデ	モロアマメシテ	時にハデ	諸海女召して
	コレオトフ	ヒキメハヒカン	これお問ふ	「引女は引かん
	アラコアミ	クチメガツリモ	荒籠網	クチ女が釣りも
	ヨシナシヤ	アカメヒトリハ	由なしや	アカメ一人は
	メナシアミ	ココニハデカミ	目なし網」	ここにハデ神
	モロアマオ	アカメニソエテ	諸海女お	アカメに添えて

	メナシアミ	ヨモヒレトレバ	目なし網」	四方ヒレとれば
	オオタイガ	クチオカミサキ	大鯛が	クチお噛み裂き
25-18	マエニヨル	アカメハクチニ	前に寄る	アカメはクチに
	モトチエテ	タイオイケスニ	元鉤得て	鯛お「生簀に
	マツベシト	ツグレバハデハ	待つべし」と	告ぐればハデは
	サキニシル	ユメニタイキテ	先に知る	夢に鯛来て
	ワレウオノ	ヨシナキタメニ	「われ魚の	由なき為に
	クチササグ	ワレハミケニト	クチ捧ぐ	我は御饌に」と
	ミコトノリ	タイハオウキミ	勅	「鯛は魚君
	ミケノモノ	シルシハウロコ	御饌のもの	印は鱗
25-19	ミツニヤマ	ウツシテカエス	水に山	写して返す
	ミツヤマノ	タイハコレナリ	ミツ山の	鯛はこれなり
	クチハイム	アカメオホメテ	クチは忌む	アカメお賞めて

	ヨトヒメト	キミハチオエテ	ヨト姫」と	君は鉤お得て
	ヨロコビニ	シガノカミシテ	喜びに	シガの神して
	カエサシム	ワニノリユキ	返さしむ	ワニに乗りゆき
	シノミヤデ	ヤマクヒマネキ	シノ宮で	ヤマクヒ招き
	モロトモニ	ウカワニユケバ	諸共に	ウカハに行けば
25-20	ミヤアイテ	トエバヤマクヒ	宮会いて	問えばヤマクヒ
	コレムカシ	キミガチオカリ	「これ昔	君が鉤お借り
	トラレシオ	イマトリカエシ	取られしお	今取り返し
	トミヤカラ	シガノカミシテ	弟宮から	シガの神して
	カエサシム	シガハチオモチ	返さしむ	シガは鉤お持ち
	タテマツル	ミヤウカカヒテ	奉る」	宮窺ひて
	ワガチゾト	イイツツタツオ	「わが鉤ぞ」と	云いつつ立つお
	ソデヒカエ	マチヂトイエバ	袖控え	「マチヂ」と云えば

25-21	ミヤイカリ	ミチナクワレオ	宮怒り	「道なく我れお
	ナゼノロフ	エニハオトカラ	なぜ咀ふ	兄には弟から
	ノボルハズ	コタエテイナヤ	上る筈」	答えて「否や
	クチイトオ	カエテカスハズ	朽糸お	替えて貸す筈
	シレバサチ	シラネバオトエ	知れば幸	知らねば弟え
	コマバヒニ	ワビコトアレト	駒這ひに	詫び言あれ」と
	イエバナオ	イカリテフネオ	云えば尚	怒りて船お
	コギイダス	タマオナグレバ	漕ぎ出だす	玉お投ぐれば
25-22	ウミカワク	シガオヒユキテ	海涸く	シガ追ひ行きて
	フネニノル	ミヤトビニグル	船に乗る	宮飛び逃ぐる
	ヤマクヒモ	ハセユキミヤノ	ヤマクヒも	馳せゆき宮の
	テオヒケバ	シガマタナグル	手お引けば	シガ又投ぐる
	タマノミツ	アフレテスデニ	玉の水	溢れて既に

	シズムトキ	ナンヂタスケヨ	沈む時	「汝 助けよ
	ワガナガク	オトノコマシテ	我が永く	弟の駒して
	カテウケン	ココニユルシテ	糧受けん」	ここに許して
25-23	ムカヒフネ	ミヤニカエリテ	迎ひ船	宮に帰りて
	ムツミテゾサル		睦みてぞ去る	
	ハテツミハ	キミニモフサク	ハテツミは	君に申さく
	ワガコトテ	トヨツミヒコト	「わが子」とて	トヨツミヒコと
	トヨタマメ	タケツミヒコト	トヨタマ姫	タケツミヒコと
	オトタマメ	ツレイデキミオ	オトタマ姫	連れ出で君お
	オガマシム	キミハツクシノ	拝ましむ	君はツクシの
	カミアツメ	ワレツマイレン	神集め	「我れ妻入れん
25-24	モロイカン	トキニホタカミ	諸いかん」	時にホタカミ
	モフサクハ	サキニコフトキ	申さくは	「さきに請ふ時

	キミノナモ	ツクシノヲキミ	君の名も	ツクシの央君
	コレココノ	アマツカミナリ	これここの	天つ神なり
	オマカセニ	ムカシハハキミ	お任せに	昔 母君
	アマキミニ	ヒトヤチキリテ	天君に	一夜契りて
	ノチニメス	キミマズハカル	後に召す	君まず諮る
	ナオヨシト	カゴシマミヤニ	なおよし」と	カゴシマ宮に
25-25	ウツリマス	トヨタマヒメオ	遷ります	トヨタマ姫お
	ミキサキニ	スケウチシモメ	み後に	スケ・ウチ・下女
	フタリヅツ	ムツボネモナリ	二人づつ	六局もなり
	トトノエバ	ソノアスミカメ	整えば	その翌三日目
	トヨツミガ	タマカサソロエ	トヨツミが	玉傘揃え
	タママリモ	ムタリニモタセ	玉腕も	六人に持たせ
	ミヅソソグ	コエオソロエテ	水捧ぐ	声お揃えて

	モモヒナギ	マグバイノチノ	『モモヒナギ	マグバイ後の
25-26	ミカノヒノ	カハミヅアビテ	三日の日の	川水浴びて
	ウビチニノ	カミカラシモエ	ウビチニの	上から下ゑ
	ハナムコニミヅ		花婿に水	
	マイラセフ	マイラセフ	参らせふ	参らせふ』
	コノトキニ	ミソフアガタノ	この時に	三十二県の
	カミウタイ	ヨロトタノシム	神歌い	万と楽しむ
	シカルノチ	サキノミユキノ	然る後	先きの御幸の
	イセキミナ	ミココロソエテ	井堰みな	み心 添えて
25-27	ニイタナス	ツクシミソフノ	新田なす	ツクシ三十二の
	ミメグリテ	カゴシマニマス	み巡りて	カゴシマに坐す
	トシトシニ	ミノリモフエテ	年々に	実りも増えて
	クニユタカ	コトシウエツケ	国豊か	今年うえつけ

	テレドヨシ	ウサノアガタニ	照れど良し	ウサの県に
	ハヤラセテ	サツキノモチニ	榮らせて	五月の望に
	ハルイワヒ	モチキハエシキ	春祝ひ	餅飯ハエ敷き
	ウケカミニ	イワフホナガト	ウケ神に	祝ふ穂長と
25-28	ユツリハノ	ホツマアソビノ	ユツリ葉の	ホツマ遊びの
	ミヅホウタ	タノシニギハフ	瑞穂歌	楽し賑はふ
	トヨノクニ	ミソフノアガタ	トヨの国	三十二の県
	ミナハヤル	カドマツハエバ	みな榮る	門松・ハエ葉
	ユツリハモ	ハルシキカザル	ユツリ葉も	春敷き飾る
	モトオリヤ	トヨニキハヒテ	本縁や	トヨ賑ひて
	ムユロトシ	ヘテモアソクニ	六万年	経てもアソ国
	マダコエズ	カレミヤツクリ	まだ肥えず	故宮造り
25-29	ウツリマス	ワオカンガエテ	遷ります	地お考えて

	カゾミネノ	カゾウオイレテ	カゾ峰の	カゾ魚入れて
	タオコヤシ	カゲロウノヒノ	田お肥やし	陽炎の火の
	コエクニノ	タケイハタツハ	コエ国の	タケイハタツは
	クツオアゲ	アソヒメユナニ	履お上げ	アソ姫湯女に
	タテマツル	キミメシアゲテ	奉る	君召しあげて
	ウチキサキ	ココニモムヨロ	内后	ここにも六万
	トシオヘテ	シガノカミタハ	年お経て	シガの神田は
25-30	マダミテズ	ツクシノミヤニ	まだ満てず	ツクシの宮に
	ウツリマス	ワオカンガエテ	移ります	地お考えて
	アブラカス	イレテカスヤノ	油 糟	入れてカスヤの
	ワニミツル	ソノホカミソノ	地に満つる	その外三十の
	マネクユエ	メグリカンガエ	招く故	巡り考え
	ツクシミヤ	ユタカニコエテ	ツクシ宮	豊かに肥えて

	タミヤスク	ココニモムユロ	民安く	ここにも六万
	トシオヘテ	ミスズノアイダ	年お経て	三スズの間
25-31	シバラクモ	ヤスマデタミオ	しばらくも	休まで民お
	タスユエニ	キサキツボネモ	養す故に	后 局も
	ミコウマズ	カレコレオボシ	御子生まず	かれこれ思し
	キヤステテ	ウドニイタリバ	宮捨てて	ウドに至りば
	ハデカミノ	マネクカゴシマ	ハデ神の	招くカゴシマ
	ユキマサズ	キサキハチチニ	行きますさず	后は父に
	コレヲツグ	ハデカミウドニ	これお告ぐ	ハデ神ウドに
	モウサクハ	キミタノサズヤ	申さくは	「君タノサズヤ
25-32	シカラズゾ	ツボネハアレド	然らずぞ	局はあれど
	コオウマズ	カレニステオキ	子お生まず	故に捨ておき
	タダヒトリ	ツレテシバラク	ただひとり	連れてしばらく

ココニアリ ツクシノタミオ ここにあり ツクシの民お

オモフバカリゾ 思ふばかりぞ」

● ウガヤ葵(アライ)桂(カツラ)の紋(アヤ)

26- 2 ミソムスス ミソヨエミソヤ 三十六スス 三十四枝三十八穂

ヤヨイモチ ワケイカツチノ 三月望日 ワケイカツチの

アマキミハ モロトミメシテ 天君は 諸臣召して

ミコトノリ ムカシニハリノ 勅 「昔ニハリの

ミヤタテテ タミヅノタメニ 宮建てて 田水のために

ハラミヤマ ナリテミソヨロ ハラミ山 なりて三十万

タミオタス ツイニシハカミ 民お養す 遂にシハカミ

26- 3 ホツマナル アマツヒツギオ ホツマなる 天つ日嗣お

	ウケツギテ	ワケイカツチノ	受け嗣ぎて	ワケイカツチの
	カミトナル	ミソヒヨロトシ	神となる	三十一万歳
	ヲサムレバ	ヨハイモヲイテ	治むれば	齢も老いて
	アノヒツギ	イマウツキネニ	天の日嗣	いまウツキネに
	ユツラント	ヲシカイタレバ	譲らん」と	勅使至れば
	ミソフカミ	シタヒオシメド	三十二神	慕ひ惜しめど
	ミコトノリ	サタマルウエハ	勅	定まる上は
26- 4	ヨロトシオ	イハヒテノチノ	万歳お	祝ひて後の
	ミユキコフ	シガフネトエバ	行幸請ふ	シガ・船問えば
	ワニガイフ	オオカメナラバ	ワニが云ふ	「大カメならば
	ツキコエン	カモハヒトツキ	月越えん	カモは一と月
	オオワニハ	ササトモフセバ	大ワニは	ささ」と申せば
	ノタマハク	チチメストキハ	宣はく	「父召す時は

	サハカナリ	ワレハオオワニ	サハカなり	われは大ワニ
	ヒメハカモ	アトニオクレト	姫はカモ	後に遅れ」と
26- 5	オオワニオ	シガノウラヨリ	大ワニお	シガノウラより
	ツナトキテ	ハヤチニキタノ	綱解きて	疾風にキタノ
	ツニツキテ	イササワケヨリ	ツに着きて	イササワケより
	ミツホマデ	ミカエリアレバ	ミツホまで	御還りあれば
	アマキミモ	トミモヨロコブ	天君も	臣も喜ぶ
	コレノサキ	キサキハラミテ	これの先	后 妊みて
	ツキノゾム	カレニノチヨリ	月臨む	「故に後より
	カモオシテ	キタツニユカン	カモおして	キタツに行かん
26- 6	ワガタメニ	ウブヤオナシテ	わが為に	産屋おなして
	マチタマエ	カレマツハラニ	待ち給え」	故マツハラに
	ウブヤフク	ムネアワヌマニ	産屋暮く	棟合わぬ間に

	カモツキテ	ハヤイリマシテ	カモ着きて	早や入りまして
	ミコオウム	カツテハイスモ	御子お産む	カツテはイスモ
	ミユモアグ	ウガヤノユトハ	ミユモあぐ	ウガヤノユトハ
	コノハナノ	シロキカニサク	コノハナノ	白きカニサク
	コハウノメ	マタアマガツラ	コハウノメ	また天児等
26- 7	イマミコノ	カニツハアレバ	今御子の	カニツハあれば
	ココモアリ	スセリミヤヨリ	ココモあり	スセリ宮より
	ミユススメ	マクリトトモニ	御湯献め	マクリと共に
	カニオタス	カレナカラエテ	カニお治す	故永らえて
	ソヨススノ	ヨハヒウカハノ	十四ススの	齡ウカハの
	ミヤホメテ	シラヒゲカミト	宮賞めて	シラヒゲ神と
	ナオタマフ	カネテカツテガ	名お賜ふ	かねてカツテが
	モウサクハ	ギハウブミヤオ	申さくは	「ギは産宮お

26- 8	ナノゾキノ	ウツキモチヨリ	な覗きそ	四月満月より
	ナソキカハ	ヒゴトウガヤノ	七十五日は	日毎ウガヤの
	ウブユアグ	ノコルノリナリ	産湯捧ぐ	遺る法なり」
	ホタカミは	ホソノヲキルモ	ホタカミは	臍の緒切るも
	ハラノノリ	モノヌシナラス	ハラの法	モノヌシ鳴らす
	クハノユミ	ハハヤヒキメゾ	クハの弓	ハハヤヒキメぞ
	コヤネカミ	イミナカガエテ	コヤネ神	実名考えて
	カモヒトト	ハハヨリナギサ	カモヒトと	母より「ナギサ
26- 9	タケウガヤ	フキアハセズノ	タケウガヤ	フキアハセズ」の
	ナオタマフ	ユエハチクラニ	名お賜ふ	故はチクラに
	カモワレテ	ヒメモタケスミ	カモ破れて	姫もタケスミ
	ホタカミモ	ナギサニオチテ	ホタカミも	渚に落ちて
	オホルルオ	タケキココロニ	溺るるお	毅き心に

	オヨガセバ	タツヤミツチノ	泳がせば	タツやミツチの
	チカラエデ	ツツガモナミノ	力 得で	恙も波の
	イソニツク	ツリフネヨリゾ	磯に着く	釣船よりぞ
26-10	ミホサキノ	ワニエテココニ	ミホサキノ	ワニ得てここに
	ツクコトモ	ミタネオモエバ	着くことも	御種お思えば
	ナギサタケ	ハハノミココロ	ナギサ・タケ	母の御心
	アラハルル	キミマツハラニ	現はるゝ	君マツハラに
	スズミキテ	ウフヤノゾケバ	涼みきて	産屋覗けば
	ハラハヒニ	ヨソヒナケレバ	腹這ひに	装ひなければ
	トボソヒク	オトニメサメテ	扉 引く	音に目覚めて
	ハヅカシヤ	オトタケツミト	辱しや	弟タケツミと
26-11	ミナツキノ	ミソギシテノチ	六月の	ミソギして後
	ウブヤデテ	ヲニフニイタリ	産屋出て	ヲニフに至り

	ミコイダキ	ミメミテナデテ	み子抱き	み眼み手撫でて
	ハハハイマ	ハヂカエルナリ	「母はいま	辱ぢ帰るなり
	マミュオリ	マガナトステテ	ま見ゆ折	もがな」と捨てゝ
	クチキカワ	ノボルヤマコエ	クチキ川	上る山越え
	ヤヤミカニ	ワケツチノネノ	やゝ三日に	ワケツチの根の
	ミヅハメノ	ヤシロニヤスム	ミヅハメの	社に休む
26-12	コノヨシオ	ミヅホニツゲバ	この由お	ミヅホに告げば
	オトロキテ	ホタカミオシテ	驚きて	ホタカミおして
	トドメシム	ヲニフノキヂノ	留めしむ	ヲニフの雉の
	ヒタトベバ	アトオシタヒテ	ひた飛べば	後お慕ひて
	クチキタニ	ニシヨリミナミ	クチキ谷	西より南
	ヤマコエテ	ミヅハノミヤニ	山越えて	ミヅハの宮に
	オヒツキテ	コエドカエナデ	追ひつきて	乞えど帰なで

	タケツミニ	フクメトトメテ	タケツミに	含め留めて
26-13	ハセカエリ	カエコトナセバ	はせ帰り	復命なせば
	キヂトビテ	ツグルツクシノ	雉飛びて	告ぐるツクシの
	ハデツミト	オトタマヒメト	ハデツミと	オトタマ姫と
	ワニノボリ	ニシノミヤヨリ	ワニ上り	ニシノミヤより
	ヤマシロニ	イタリテトエド	ヤマシロに	至りて問えど
	ヒメハイマ	オリテノボラズ	姫は「今	下りて上らず
	オトタマオ	ササゲトアレバ	オトタマお	捧げ」とあれば
	モロトモニ	ノボリモフセバ	諸共に	上り奏せば
26-14	イモトメス	アマツヒツギオ	妹 召す	天つ日嗣お
	ヤカミヤニ	サヅケタマイテ	若宮に	授け給いて
	オオエキミ	シノミヤニマス	上皇	シノ宮に座す
	ミヅホニハ	ニハリノタメシ	ミヅホには	ニハリの例し

	ユキスキノ	ヲヲンマツリノ	ユキスキの	大ん祭の
	オオナメエ	ミクサノウケオ	大ナメエ	三種の受けお
	アニコタヘ	アオヒトクサオ	天に応へ	青人草お
	ヤスラカニ	タモツヤハタノ	安らかに	保つ八幡の
26-15	ハナカザリ	アスヨロタミニ	花飾り	翌日万民に
	オガマシム	シバシバメセド	拝ましむ	しばしば召せど
	トヨタマハ	ミヅヤオイデズ	トヨタマは	ミヅ社お出です
	アクルトシ	オオエスヘラギ	明る年	大上スヘラギ
	ワケツチノ	アオヒカツラオ	ワケツチの	葵・桂お
	ソデニカケ	ミヤニイタレバ	袖に掛け	宮に至れば
	ヒメムカフ	トキニハオモチ	姫迎ふ	時に葉お持ち
	コレイカン	トヨタマコタエ	「これいかん」	トヨタマ答え
26-16	アオイバヅ	マタコレイカン	「葵 葉ぞ」	また「これいかん」

	カツラバヅ	イズレカクルヤ	「桂 葉ぞ」	「いづれ掛るや」
	マダカケズ	ナンヂヨオステ	「まだ掛けず」	「汝 世お捨て
	ミチカクヤ	ヒメハオソレテ	道欠くや」	姫は懼れて
	カカネドモ	ナキサニオヨグ	「欠かねども	渚に泳ぐ
	アサケリニ	ハラハヒノハヂ	嘲けりに	腹這ひの恥
	カサヌミハ	アニノボランヤ	重ぬ身は	あに上らんや」
	コレバヂニ	ニテハヂナラズ	「これ恥に	似て恥ならず
26-17	シカトキケ	コオウムノチハ	然と聴け	子お産む後は
	チナミタツ	ナソキカニタス	因み絶つ	七十五日に足す
	ツツシマズ	サラダチタセズ	慎しまず	サラダチタセズ
	カツテカミ	カネテモフスオ	カツテ神	かねて申すお
	ノゾクハヂ	ナンヂニアラズ	覗く恥	汝にあらず
	タツノコハ	チホウミニスミ	タツの子は	千穂海に住み

	タツタシル	チホヤマニスミ	タツタ知る	千穂山に住み
	タツフルト	チホサトニスミ	タツフルト	千穂里に住み
26-18	ツタハナル	ミイキサトリテ	ツタハなる	三息悟りて
	キミトナル	ナンヂナギサニ	君となる	汝 渚に
	オチントス	ミタネオモエバ	落ちんとす	御種思えば
	タケココロ	ナシテオヨギテ	毅心	なして泳ぎて
	ナガラフル	コレワイキシル	永らふる	これ地息知る
	ミヤニタチ	フリテアザケリ	宮に立ち	経て嘲けり
	マヌカルル	コレアイキシル	免るゝ	これ天息知る
	イマヒトツ	アオヒカツラノ	いま一つ	葵・桂の
26-19	イセオエバ	ヒトイオサトル	イセお得ば	人息お悟る
	ミツシレバ	タツキミコトク	三つ知れば	タツ君如く
	カミトナル	タツキミイカン	神となる	「タツ君いかん」

	タツハヒレ	ミツシルユエニ	「タツはヒレ	三つ知る故に
	ウロコキミ	カンツミオニオ	ウロコ君	カンツミオニお
	ミツシレバ	ヒトハカミナリ	三つ知れば	人は神なり」
	ヒメハハヂ	オヂイリイワズ	姫は恥ぢ	懼ぢ入り云わず
	ミホツヒメ	ミユキオクリテ	ミホツ姫	御幸送りて
26-20	ココニアリ	トエバヨロコビ	ここにあり	訪えば喜び
	コタエトフ	ミホツウナツキ	答え問ふ	ミホツ領き
	オオエキミ	ココロナイタメ	「大上君	心な痛め
	タマヒソヨ	キミトヒメトハ	賜ひそよ	君と姫とは
	ヒトツキト	ムツマジナサン	日と月と	睦まじなさん」
	モフストキ	ヲヲキミエミテ	申す時	大君笑みて
	タケツミニ	トヨタマタセト	タケツミに	トヨタマ養せと
	カハアヒノ	クニタマワリテ	カハアヒの	国賜わりて

26-21	タニオイデ	ムロツニカメノ	谷お出で	ムロツにカメの
	ムカイマツ	カドイデオクリ	迎え待つ	門出で送り
	ミユキナス	キミエヲヲキミ	御幸なす	キミエ大君
	ノコシコト	アニヒツキテル	遺し言	「天に日月照る
	ヒトクサモ	ガニハヒヤスゾ	人草も	ガには冷やすそ
	ワノキミモ	ガニタミカルゾ	地の君も	ガに民枯るぞ
	マツリコト	コヤネモノヌシ	政り事	コヤネ・モノヌシ
	トモニタセ	ミヤウチノタハ	共に治せ	宮内の治は
26-22	ミホヒメト	カメニノリュク	ミホ姫」と	カメに乗りゆく
	カゴシマヤ	ソヲタカチホノ	鹿児島や	ソヲ高千穂の
	ヒニイナヌ	アサハアサマノ	日に辞む	朝はアサマの
	ヒニムカフ	ヒムカフクニト	日に向ふ	日向ふ国と
	ホツマクニ	ヒメハアサマニ	ホツマ国	姫はアサマに

	イナムツキ	タカチネニイリ	辞む月	タカチネに入り
	カミトナル	アサマノカミヤ	神となる	アサマの神や
	コヤスカミ	カネテアフヒノ	コヤス神	かねて逢ふ日の
26-23	イツノカミ	タカチホノネノ	稜威の神	タカチホの根の
	カミトナル	ナルカミワケテ	神となる	鳴神別けて
	ツチイカス	ワケイカツチノ	土活かす	ワケイカツチの
	スヘラカミ	キミニツグレバ	統 神	君に告ぐれば
	モニイリテ	イセニツゲマス	喪に入りて	イセに告げます
	ヲヲンカミ	カミコトノリハ	大御神	神勅は
	アワノカズ	ヘテモオヌギテ	「天地の数	経て喪お脱ぎて
	マツリキク	トシメグルヒハ	政り聴く	年周る日は
26-24	モニヒトヒ	ソノミハシラニ	喪に一日	その御柱に
	マツルベシ	ウケエテノチノ	祭るべし」	うけ得て後の

	ミユキナル	アマテラスカミ	御幸なる	アマテラス神
	ヨロコビテ	ミヲヤニツカフ	喜びて	御祖に仕ふ
	アマキミト	ヲシテタマワル	天君と	ヲシテ賜わる
	トヨタマハ	ワケツチヤマニ	トヨタマは	ワケツチ山に
	モハヨソヤ	トシノマツリモ	喪は四十八	年の祭りも
	ミアエナス	アマキミヒメオ	御饗えなす	天君姫お
26-25	タツヌレバ	コヤネコタエテ	訪ぬれば	コヤネ答えて
	タメシアリ	ミホツニトエバ	「例あり」	ミホツに問えば
	ウタナセト	カレウタヨミテ	「歌なせ」と	故歌詠みて
	ミホツメガ	マゴイソヨリオ	ミホツ姫が	孫イソヨリオ
	ツカワセバ	ヒメムカユルオ	遣わせば	姫迎ゆるお
	イソヨリハ	タチテヨムウタ	イソヨリは	立ちて読む歌
	オキツトリ	カモツクシマニ	『沖つ鳥	鴨船着く島に

	ワガイネシ	イモハワスラジ	わが寝ねし	妹は忘れじ
26-26	ヨノコトゴトモ		世のことごとくも』	
	ミウタウケ	ミホツハイカン	御歌うけ	「ミホツは如何」
	イソヨリガ	ミホツノウタニ	イソヨリが	ミホツの歌に
	イミトイヒ	ケガレオタツル	『忌みといひ	穢れお絶つる
	ヒノモトノ	カミノココロオ	日の本の	神の心お
	シルヒトヅカミ		知る人ぞ神』	
	トキニヒメ	カエシハアオイ	時に姫	返しは葵
	キミカツラ	カミニツツミテ	君桂	紙に包みて
26-27	ミヒキグサ	フバコニオサメ	水引草	文管に納め
	タテマツル	キミミヅカラニ	奉る	君親らに
	ユヒオトル	ソノウタヨメバ	結ひお解き	その歌詠めば
	オキツトリ	カモオヲサムル	『沖つ鳥	カモお治むる

キミナラデ ヨノコトゴトオ 君ならで 世のことごとお

エヤハフセガン ゑやは防がん』

コノウタオ ミタビニナンダ この歌お 三度に涙

オチカカル ヒサノアホヒバ 落ちかかる 膝の葵葉

26-28 モニシミテ ムカヒノコシニ 裳に泌みて 迎ひの輿に

トヨタマノ アキミヤイリト トヨタマの アキミヤイリと

ヨロコビテ アヤニウツサセ 喜びて 綾に写させ

オルニシキ コアオイノミハ 織る錦 小葵の御衣

ココチリト ヤマハトイロノ ココチリと 山鳩色の

ミツノアヤ カミノヨソヒノ 瑞の綾 神の装ひの

ミハモナルカナ 御衣裳なるかな

● 御祖神(ミヲヤカミ)船魂(フナタマ)の紋(アヤ)

27- 1	コノトキニ	ミツホノミヤハ	この時に	ミツホの宮は
	トヨタマノ	フタタビノボル	トヨタマの	再び上る
	ヨロコビゾ	アマノコヤネト	喜びぞ	アマノコヤネと
	モノヌシト	マテニハベリテ	モノヌシと	両手に侍りて
	ミチモノベ	ヤモヨロクサモ	三千モノベ	八百万草も
	ヲサメシム	サキニツミハト	治めしむ	先にツミハと
27- 2	タケフツト	イフキノミヤニ	タケフツと	イフキの宮に
	フヨヨカタ	シテヲサメシム	二十四県	して治めしむ
	ホツマヂハ	カシマオシクモ	ホツマ路は	カシマ・オシクモ
	ヒタカヒコ	ミシマミヅクイ	ヒタカヒコ	ミシマ・ミヅクイ
	ハラミヤニ	モモエアガタノ	ハラ宮に	百枝県の
	モノノベト	ユタカニヲサム	モノノベと	豊かに治む
	ツクシヨリ	シカドコフユエ	ツクシより	勅使請ふ故

	カンダチオ	モノヌシトシテ	カンダチお	モノヌシとして
27- 3	ハデツミト	トモニミソフオ	ハデツミと	共に三十二お
	ヲサメシム	カレニツミハオ	治めしむ	故にツミハお
	コトシロト	アスカノミヤニ	コトシロと	アスカの宮に
	ハベラシム	フツキユミハリ	侍らしむ	七月七日
	イセムスビ	カモタケツミニ	イセ結び	カモタケツミに
	ミコトノリ	キサキオツマニ	勅	「后お妻に
	タマフベシ	コフニマカセン	賜ふべし	請ふに任せん」
	タケツミハ	コフハオソツツ	タケツミは	「請ふは恐るゝ
27- 4	アメノママ	ミホツメモフス	天の俣」	ミホツメ申す
	ソフツボネ	アレドワガマゴ	「十二局	あれどわが孫
	スケモトメ	ウチメイソヨリ	スケ・モトメ	内女イソヨリ
	シイオリノ	ナカニイソヨリ	シイオリノ	中にイソヨリ

	シルヒトゾ	チチニタツネバ	知る人ぞ」	父に訊ねば
	ウナツキテ	コレタケヅミニ	諾きて	これタケヅミに
	タマワレバ	カアヒノタチゾ	賜われば	カアヒの館ぞ
	ウカワミヤ	メトルスセリメ	ウカワ宮	嫁とるスセリメ
27- 5	ミコオウム	イミナウツヒコ	御子お産む	実名ウツヒコ
	コレノサキ	アネタマメヒメ	これの先	姉タマメ姫
	ハラヲキミ	キサキニナシテ	ハラ央君	后になして
	ミヅクイガ	イクタマハスケ	ミヅクイが	イクタマはスケ
	イクヨリハ	ウチメトナレド	イクヨリは	内女となれど
	タマネヒメ	クニテルミヤト	タマネ姫	クニテル宮と
	タケテルト	ウメバナツメガ	タケテルと	産めば馴女が
	ウブギナス	サイワヒビシハ	産衣なす	幸 菱は
27- 6	ムカシコノ	ウツムロカコム	昔この	大室囲む

	タケコゲテ	スツレバオエル	竹焦げて	棄つれば生える
	マタラタケ	アヤニウツシテ	斑 竹	綾に写して
	ミハノナノ	サイアイヘシト	御衣の名も	幸 菱と
	イセノミハ	ウブキニモチユ	イセの御衣	産衣に用ゆ
	モトオリゾ	ホソノヲキレル	本縁ぞ	臍の緒切れる
	タケモコレ	トキニアスカノ	竹もこれ	時にアスカの
	ミヤマカル	ハハチチヒメハ	宮罷る	母チチ姫は
27- 7	ノチノヨオ	イセニハベレバ	後の世お	イセに侍れば
	ヲランカミ	キオオナジクス	大御神	居お同じくす
	ツゲキキテ	ハハノナゲキハ	告げききて	母の嘆きは
	ツギモナヤ	カミノヲシエハ	「継ぎも無や」	神の教ゑは
	ハラミヤノ	クニテルオツギ	「ハラ宮の	クニテルお継ぎ
	アマテラス	ニギハヤヒキミ	アマテラス	ニギハヤヒ君」

	モニイリテ	シラニハムラノ	喪に入りて	シラニハ村の
	ミハカナス	ノチニトクサノ	御墓なす	後に十種の
27- 8	ユヅリウケ	トシメグルヒモ	譲りうけ	歳巡る日も
	モニイリテ	アスカノカミト	喪に入りて	「アスカの神」と
	マツルナリ	サキニミコナク	祭るなり	先に御子なく
	カクヤマガ	アメミチヒメオ	カクヤマガ	アメミチ姫お
	エヽナシテ	アニタクリガコ	エヽなして	兄タクリが子
	タクラマロ	ナオコトナセド	タクラマロ	猶子となせど
	ハセヒメハ	トミトニクミテ	ハセ姫は	頓と憎みて
	ステサシム	キミマタイカリ	棄てさしむ	君また怒り
27- 9	ハセオスツ	カグヤマヲキミ	ハセお棄つ	カグヤマ大君
	ハハトメシ	コハメセドコズ	母と召し	子は召せど来ず
	フトタマノ	マゴミカシヤオ	フトタマの	孫ミカシヤ(姫)お

	ツマオシテ	ウマシマチウム	妻として	ウマシマチ産む
	ナガスネハ	オモノトミナリ	ナガスネは	主の臣なり
	ミヤコニハ	キミムツマジク	都には	君睦まじく
	ヤヲカフリ	ツクシノソヤヨ	ヤヲカフリ	ツクシのソヤヨ
	ヨソキヨロ	トシヘテヲサム	ヨソキヨロ	歳経て治む
27-10	アメヒツギ	ユツランタメニ	天日継	譲らんために
	ミコオメス	スベラヲミコハ	御子お召す	スベラヲ御子は
	ヲニフヨリ	ミツホニミユキ	ヲニフより	ミツホに御幸
	マミエスム	トキニワカミヤ	ま見ゑ済む	時に若宮
	ナカニマス	コヤネハヒタリ	中にます	コヤネは左
	ミホヒコハ	ミギニハベレバ	ミホヒコは	右に侍れば
	アマキミハ	ミハタノフミオ	天君は	ミハタの文お
	ミテヅカラ	ヲミコニユツリ	御手づから	央御子に譲り

27-11	マキサキハ	ヤタノカガミオ	正后は	ヤタの鏡お
	ササゲモチ	カスガニサヅク	捧げ持ち	カスガに授く
	オオスケハ	ヤエガキノタチ	オオスケは	ヤエガキの太刀
	ササゲモチ	コモリニアタフ	捧げ持ち	コモリに与ふ
	キミトトミ	ツツシミウクル	君と臣	謹しみ受くる
	アマキミト	キサキモロトモ	天君と	后 諸共
	シノミヤニ	オリキテココニ	シノ宮に	オリゐてここに
	カミトナル	トキヨソフスズ	神となる	時四十二スズ
	ヤモイソエ	キワトシネウト	八百五十枝	極年ネウト
	ハツキヨカ	キミノモマツリ	八月四日	君の喪祭り
	ヨソヤスミ	ミコトニマカセ	四十八(日)濟み	臣にまかせ
	オモムロオ	イササワケミヤ	遺骸お	イササワケ宮
	ケキノカミ	ユエハオキナニ	筍飯の神	故は翁に

	ケキオエテ	メグリヒラケル	筈飯お得て	運命開ける
	チオエタリ	カドデノケキゾ	道お得たり	門出の筈飯ぞ
	カシハデハ	ヒメハオモムロ	膳葉は	姫は遺骸
27-13	ミズハミヤ	ムカシナギサニ	ミズハ宮	昔 渚に
	チカイシテ	ミソロノタツノ	誓いして	御稲のタツの
	ミタマエテ	ナモアキソロノ	御魂得て	名もアキ稲の
	カミトナル	タミヅオマモリ	神となる	田水お守り
	フネオウム	キフネノカミハ	船お産む	キフネの神は
	フナタマカ	フネハイニシエ	船魂か	船は昔
	シマツヒコ	クチキニノレル	シマツヒコ	朽木に乗れる
	ウノトリノ	アヅミカワユク	鶺鴒の鳥の	アヅミ川ゆく
27-14	イカダノリ	サオサシオボエ	筏 乗り	竿指し覚え
	フネトナス	コノオキツヒコ	船となす	子のオキツヒコ

	カモオミテ	カイオツクレバ	鴨おみて	權お作れば
	マゴノシガ	ホワニナスナヨ	孫のシガ	帆ワニなす七代
	カナサキハ	オカメオツクル	カナサキは	オカメお作る
	ソノマゴノ	ハデカミノコノ	その孫の	ハデカミの子の
	トヨタマト	ミツハメトフネ	トヨタマト	ミツハメと船
	ツクルカミ	ムツフナタマゾ	造る神	六船魂ぞ
27-15	ミコトノリ	タガガフタカミ	勅	「タガは二神
	ハツノミヤ	イマヤブルレバ	初の宮	今破るれば
	ツクリカエ	ミツホノミヤオ	造り替え	ミツホの宮お
	ウツシキテ	ツネオガマント	遷し居て	常拝まんと
	イシベシテ	ヒカセオオヤニ	イシベして	曳かせ大屋に
	ツクラセテ	イトナミナリト	造らせて	営みなりて
	ミヤウツシ	ミクライニツク	宮遷し	御位につく

	ソノヨソイ	アヤニシキキテ	その装い	綾錦 着て
27-16	タマカサリ	カムリハヒクツ	玉飾り	冠・衣ヒ・沓
	ハラノノリ	ハナオツクシテ	ハラの法	壮麗お尽して
	ソノアスハ	オオンタカラニ	その明日は	大御宝に
	オカマシムカナ		拝ましむかな	
	キアトマツ	ミクライナリテ	キアト夏	御位 成りて
	イセニツグ	アマテルカミノ	イセに告ぐ	アマテル神の
	ミコトノリ	トガクシオシテ	勅	「トガクシおして
	ワガミマゴ	タガノフルミヤ	わが御孫	タガの古宮
27-17	ツクリカエ	ミヤコウツセバ	造り変え	都 遷せば
	アニツギテ	ワノフタカミゾ	天に継ぎて	地の二神ぞ
	ワレムカシ	アメノミチウル	われ昔	天の道得る
	カグノフミ	ミヲヤヲカミオ	香ぐの文	御祖央神お

	サツクナモ	ミヲヤアマキミ	授く名も	御祖天君
	コノココロ	ヨロノマツリオ	子の心	万の政りお
	キクトキハ	カミモクダリテ	聴く時は	神も下りて
	ウヤマエバ	カミノミヲヤゾ	敬えば	神の御祖ぞ
27-18	コノミチニ	クミヲサムレバ	この道に	国治むれば
	モモツカサ	ソノミチシトフ	百司	その道慕ふ
	コノゴトク	コレモミヲヤゾ	子の如く	これも御祖ぞ
	コノコスエ	タミオメクミテ	この子孫	民お恵みて
	ワガゴゾト	ナヅレバカエル	わが子ぞと	撫づれば返る
	ヒトクサノ	ミヲヤノココロ	人草の	御祖の心
	スベイレテ	モモノヲシデノ	総べ入れて	百のヲシデの
	ナカニアリ	アヤシゲケレバ	中にあり	綾繁ければ
27-19	アヂミエズ	ミシキノアヤオ	天霊見えず	錦の綾お

	ヲルコトク	ヨコベツウヂニ	織る如く	ヨコベ・ツウヂに
	タテオワケ	ヤミヂノトコハ	タテお別け	闇路の処は
	アカリナス	カスガコモリト	明りなす	カスガ・コモリと
	アチシラバ	アマツヒツギノ	天靈知らば	天つ日嗣の
	サカエンハ	アメツチクレド	榮ゑんは	天地運れど
	キワメナキカナ		窮めなきかな	
	キミウケテ	シカサルトキニ	大君受けて	勅使去る時に
27-20	ミコトノリ	フユイタルヒニ	勅	「冬至る日に
	ヲヲマツリ	アマカミトヨヨ	大祭り	天神と代々
	スヘラカミ	ユキスキノミヤ	スヘラ神	ユキスキの宮
	ヤマウミト	トミコトタマハ	山海と	臣コトタマは
	ワニスキノ	ナメエニツゲテ	地にスキの	ナメエに告げて
	ヒトクサノ	ホキイノルナリ	人草の	祝き祈るなり

	フタカミハ	ツネニタダスノ	二神は	常にタダスの
	トノニキテ	アマネクヲサム	殿に居て	普く治む
27-21	タミユタカ	サクズナレバ	民豊か	裂くスズなれば
	ウエツギテ	ナスゾオヨベド	植え継ぎて	七スズ及べど
	ナオユタカ	ヨソコノスズノ	なお豊か」	四十九のスズの
	コモソヒエ	ハツホキアエノ	九百十一枝	初穂キアエの
	ハツミカニ	コヤネモフサク	初三日に	コヤネ申さく
	キミハイマ	ミヲヤノミチニ	「君は今	御祖の道に
	ヲサムユエ	ヒトクサノヲヤ	治む故	人草の親
	アメツチノ	カミモクダレバ	天地の	神も下れば
27-22	ミヲヤカミ	ヨヨノミヲヤノ	御祖神	代々の御祖の
	ツギコナシ	ソフノキサキモ	嗣子なし	十二の後も
	イカナルヤ	トキニアマキミ	いかなるや」	時に天君

	ワレオモフ	ソミスズライテ	「われ思ふ	十三スズ老いて
	タネアラジ	コモリモウサク	種あらし」	コモリ申さく
	ヨツギフミ	アリトテアマノ	「世継ぎ書	あり」とてアマノ
	オシクモニ	ノリシテヨツギ	オシクモに	告りして世嗣
	ヤシロナス	トキニオシクモ	社 造す	時にオシクモ
27-23	ナアテナシ	コヤネフトマニ	ナアテナシ	コヤネ・フトマニ
	ウラナエバ	ヤセヒメヨケン	占えば	ヤセ姫よけん
	ヤヒノキハ	ナカノヤトナル	八一ノ五ハ	中の八トナル
	シノハラハ	ハハトハラメル	シのハラハ	母と妊メル
	ヤノツボネ	ウチメハナカノ	ヤノ局	ウチメハナカノ
	クラヒナリ	トシモワカバノ	クラヒナリ	歳も若葉の
	ヤセヒメオ	ソヒノキサキモ	ヤセ姫お	十一の後も
	ミナイハフ	オシクモキヨメ	皆祝ふ	オシクモ清め

27-24	ヨツギヤニ	イノレバシルシ	世嗣社に	祈れば験し
	ハラミエテ	ソキツキニウム	妊みゑて	十五月に生む
	キツセキミ	ヤセヒメミヤニ	キツセ君	ヤセ姫宮に
	イルルマニ	ツイカミトナル	入るゝ間に	遂神となる
	オチナクテ	フレタツヌレバ	御乳無くて	布れ尋ぬれば
	コレノサキ	カモタケツミト	これの先	カモタケツミと
	イソヨリト	ソミスズマデモ	イソヨリと	十三スズ迄も
	コナキユエ	ワケツチカミニ	子なき故	ワケツチ神に
27-25	イノルヨノ	ユメニタマワル	祈る夜の	夢に賜わる
	タマノナノ	タマヨリヒメヲ	玉の名の	タマヨリ姫を
	ウミテノチ	ヒタシテヨハヒ	生みて後	養して齡
	ソヨスズニ	タラチネトモニ	十四スズに	タラチネ共に
	カミトナル	アカヒノカミゾ	神となる	アカヒの神ぞ

	タマヨリハ	モマツリナシテ	タマヨリは	喪祭なして
	タダヒトリ	ワケツチカミニ	ただ一人	ワケツチ神に
	マタモフデ	ヨヨササグレバ	また詣で	ユユ捧ぐれば
27-26	ウツロイガ	ウタガヒトワク	ウツロイが	疑ひ問わく
	ヒメヒトリ	ワケツチカミニ	「姫一人	ワケツチ神に
	ツカウカヤ	コタエシカラズ	仕うかや」	答え「然らず」
	マタトワク	ヨニチナムカヤ	又問わく	「世に因むかや」
	ヒメコタエ	ナニモノナレバ	姫答え	「何物なれば
	オトサンヤ	ワレハカミノコ	威さんや	われは神の子
	ナンヂハト	イエバウツロキ	汝は」と	云えばウツロキ
	トビアカリ	ナルカミシテゾ	飛び上り	鳴神してぞ
27-27	サリニケル	アルヒマタイデ	去りにける	ある日また出で
	ミソギナス	シラハノヤキテ	ミソギなす	白羽の矢来て

	ノキニサス	アルジノオケノ	軒に刺す	主の月経の
	トトマリテ	オモハズヲノコ	留まりて	思はず男子
	ウミソダツ	ミツナルトキニ	生み育つ	三歳なる時に
	ヤオサシテ	チチトイウトキ	矢お指して	「父」と云う時
	ヤハノボル	ワケイカツチノ	矢は昇る	ワケイカツチの
	カミナリト	ヨニナリワタル	神なりと	世に鳴り渡る
27-28	ヒメミコオ	モロカミコエド	姫御子お	諸神請えど
	ウナヅカズ	タカノノモリニ	頷かず	タカノの森に
	カクレスム	ワケイカツチノ	隠れ住む	ワケイカツチの
	ホコラナシ	ツネニミカゲオ	洞 成し	常に御陰お
	マツルナリ	ミフレニヨリテ	祀るなり	御布れによりて
	モフサクハ	ヒエノフモトニ	申さくは	「ヒエの麓に
	ヒメアリテ	チチヨキユエニ	姫ありて	乳よき故に

	タミノコノ	ヤスルニチチオ	民の子の	瘦するに乳お
27-29	タマワレド	タチマチコユル	賜われば	忽ち肥ゆる
	コレムカシ	カミノコナレド	これ昔	神の子なれど
	カクレスム	モリニキイロノ	隠れ住む	森に五色の
	クモオキル	イツモヂモリト	雲起る	イツモヂ森と
	ナヅクナリ	モロカミコエド	名づくなり」	諸神請えど
	マイラネバ	サオシカナサレ	参らねば	「勅使なされ
	シカルベシ	トキニイワクラ	然るべし」	時にイワクラ
	ウカガイテ	ツカイオヤレド	伺いて	使お遣れど
27-30	キタナレバ	ミツカラユキテ	来たらねば	親ら行きて
	マネケドモ	ウナヅカヌユエ	招けども	額かぬ由
	カエゴトス	ワカヤマクイガ	返言す	ワカヤマクイが
	モフサクハ	オシカドナラデ	申さくは	「勅使ならで

	コヌユエハ	ワケツチカミオ	来ぬ故は	ワケツチ神お
	ツネマツル	メセバイノリノ	常祀る	召せば祈りの
	カクルユエナリ		欠くる故なり」	
	ミコトノリ	ヤマクイオシテ	勅	ヤマクイおして
27-31	メストキニ	ハハコアガレバ	召す時に	母子上れば
	ミタマヒテ	ウヂナオトエバ	見給ひて	氏名お問えば
	ヒメコタエ	ヲヤノタケツミ	姫答え	「親のタケツミ
	イソヨリガ	ナヅクタマヨリ	イソヨリが	名づくタマヨリ
	ハデガマゴ	コハチチモナク	ハデが孫	子は父もなく
	カミナリゾ	チチガナケレバ	神成りぞ	父が無ければ
	イミナセズ	イツモノミコト	実名せず	イツモの御子と
	ヒトガヨブ	コトバモクワシ	人が呼ぶ」	言葉も詳し
27-32	スキトホル	タマノスガタノ	透き徹る	玉の姿の

	カガヤケバ	ミコトノリシテ	輝けば	勅して
	ウチツボネ	キツセヒタセバ	内局	キツセ育せば
	ミコノナモ	ミケイリミコゾ	御子の名も	ミケイリミコぞ
	ウムミコハ	イナイイキミゾ	生む御子は	イナイイ君ぞ
	ミキサキト	ナリテウムミコ	御后と	なりて生む御子
	カンヤマト	イハワレヒコノ	カンヤマト	イハワレヒコの
	ミコトナリ	トキニタネコガ	命なり	時にタネコガ
27-33	タケヒトト	イミナチリバメ	「タケヒト」と	実名チリばめ
	タテマツル	アマキミミコニ	奉る	天君御子に
	ミコトノリ	ツヅノミウタニ	勅	ツツの御歌に
	コレヲシデ	トヨヘルハタノ	『これ璽	豊経る幡の
	ツツネニゾナセ		十九根にぞなせ』	
	コレノサキ	ハラノオシクモ	これの先	ハラのおシクモ

	メシノボス	オトトヒタチハ	召し上す	弟ヒタチは
	ワカキユエ	アハノコトシロ	若き故	アハのコトシロ
27-34	ハベルキヤ	ハラカラナレバ	侍る宮	ハラからなれば
	ニシヒガシ	カヨヒツトメテ	西・東	通ひ勤めて
	カナメシム	ナモツミハヤエ	要 占む	名もツミハヤエ
	コトシロガ	ミシマニイタリ	コトシロが	ミシマに至り
	ハラニユキ	マタミシマヨリ	ハラに行き	又ミシマより
	イヨニユク	ツイニチナミテ	イヨに行く	遂に因みて
	ミゾクイノ	タマクシヒメモ	ミゾクイの	タマクシ姫も
	ハラムユエ	ワニノリアハエ	妊む故	ワニ乗りアハえ
27-35	カエルウチ	ウムコノイミナ	帰るうち	生む子の実名
	ワニヒコハ	クシミカタマゾ	ワニヒコは	クシミカタマゾ
	ツギノコハ	イミナナカヒコ	次の子は	実名ナカヒコ

	クシナシゾ	アオカキトノニ	クシナシゾ	青垣殿に
	スマシムル	サキニツクシノ	住ましむる	先にツクシの
	カンタチハ	ソヲノフナツノ	カンタチは	ソヲのフナツの
	フトミミオ	ヤスニメトリテ	フトミミお	ヤスに嫁とりて
	フキネウム	ノチモロトモニ	フキネ生む	後諸共に
27-36	カミトナル	オオモノヌシハ	神となる	オオモノヌシは
	フキネナリ	トヨツミヒコト	フキネなり	トヨツミヒコと
	ヲサメシム	ノワザヲシエテ	治めしむ	野業教えて
	タマオウム	ヒトリオサムル	民お生む	ひとり治むる
	オオナムチ	ミツカラホメテ	オオナムチ	自ら賞めて
	アシノネサ	モトヨリアラビ	「葦の根さ	本より荒び
	イワネコモ	ミナフナシナビ	岩根木立も	皆伏し靡け
	ヲサムルハ	ヤヨホニタレカ	治むるは	八万歳に誰か

27-37	マタアラン	ウナバラヒカリ	又あらん」	海原光り
	アラハレテ	ワレアラバコソ	現はれて	「我れあらばこそ
	ナンヂソノ	オオヨソニナス	汝その	大凡になす
	イタワリゾ	オオナムチトフ	功績ぞ」	オオナムチ問ふ
	ナンヂタソ	ワレハナンヂノ	「汝 誰ぞ」	「我れは汝の
	サキミタマ	クシキワザタマ	幸魂	奇居業魂
	サテシリヌ	マツルサキタマ	「さて知りぬ	祀る幸魂
	ゴコニスム	イヤカミスマズ	どこに住む」	「いや神住まず」
27-38	ナンヂオバ	アオカキヤマニ	「汝おば	青垣山に
	スマセント	ミヤツクリシテ	住ません」と	宮造りして
	ソコニオレ	コナキガユエニ	「其処におれ」	「子無が故に
	ミダルルゾ	コトシロヌシガ	乱るゝぞ	コトシロヌシが
	エトノコノ	クシミカタマオ	兄弟の子の	クシミカタマお

	コイウケテ	ツギトナスベシ	請いうけて	嗣となすべし」
	ミヲシエニ	ミモロノソバニ	御教ゑに	ミモロの傍に
	トノナシテ	コエハタマハル	殿なして	請えば賜はる
27-39	モフケノコ	クシミカタマト	庶けの子	クシミカタマト
	ワカツマノ	サシクニワカメ	若妻の	サシクニワカメ
	モロトモニ	スマセテヌシハ	諸共に	住ませて主は
	ツクシタス	ヒタルノトキニ	ツクシ治す	日垂るの時に
	コレオツグ	ハハコイタレバ	此お告ぐ	母子至れば
	ノコシコト	コノムラクモハ	遺し言	「このムラクモは
	アレマセル	ミコノイワヒニ	生れませる	ミコの祝ひに
	ササゲヨト	イイテイモヲセ	捧げよ」と	云いて婦夫
27-40	カミトナル	ヤスニオサメテ	神となる	ヤスに納めて
	マツルノチ	ツクシヲシカノ	祭るのち	ツクシ勅使の

	ミコトノリ	ノチニクシナシ	勅	後にクシナシ
	カミトナル	ハハニコワレテ	神となる	母に請われて
	ヲシカスツ	カレニツクシノ	勅使廃つ	故にツクシの
	ミユキコフ	トキニキツセニ	御幸請ふ	時にキツセに
	ミコトノリ	タガノヲキミト	勅	「タガの央君」と
	オシクモト	クシミカタマト	オシクモと	クシミカタマト
27-41	マテニアリ	タネコハマミコノ	左右にあり	タネコは皇子の
	オオンモリ	ミコタケヒトハ	大ん守り	皇子タケヒトは
	トシキツツ	マタイワクラハ	歳五つ	又イワクラは
	ミヤウチノ	ツボネアツカリ	宮内の	局 預かり
	アマキミハ	ツクシニミユキ	天君は	ツクシに御幸
	ムロツヨリ	オカメニメシテ	ムロツより	オカメに召して
	ウドノハマ	カゴシマミヤニ	ウドの浜	カゴシマ宮に

	ミソフカミ	ミカリオコエバ	三十二神	御巡お請えば
27-42	メグリミテ	スタルオナオシ	巡りみて	廃たるお直し
	タエオタシ	ミナヲサマルモ	絶えお直し	皆治まるも
	イカツチノ	カミノアサオシ	イカツチの	神の功績
	ノコリアリ	トトセニタミモ	遺りあり	十年に民も
	ニギハヒテ	ヨロトシウタフ	賑はひて	万歳歌ふ
	ミヤサキノ	キミノミココロ	ミヤサキノ	君の御心
	ヤスマレバ	ヨハヒモオヒテ	安まれば	齢も老ひて
	ハヤキジノ	タガニツグレバ	早雉の	タガに告ぐれば
27-43	オドロキテ	ミコタケヒトト	驚きて	御子タケヒトと
	モリタネコ	タガヨリイデテ	守タネコ	タガより出でて
	ニシノミヤ	オオワニノリテ	ニシノ宮	大ワニ乗りて
	ウドノハマ	ミヤサキミヤニ	ウドの浜	ミヤサキ宮に

	イタリマス	ミヲヤアマキミ	至ります	御祖天君
	ミコトノリ	タケヒトタネコ	勅	「タケヒトタネコ
	シカトキケ	ワレツラツラト	然かと聴け	我れつらつらと
	オモミレバ	ヒトクサノキケ	思みれば	人草の御食
27-44	シゲルユエ	ウマレサカシク	繁る故	生れ賢しく
	ナガラエモ	チヨハモモヨト	永らえも	千代は百代と
	ナリカレテ	ワガヤソヨロモ	なり枯れて	我が八千万も
	モモトセモ	ヨノタノシミハ	百年も	世の楽しみは
	アイオナジ	アマテルカミモ	相同じ	アマテル神も
	カエラセバ	アノミチマモル	帰らせば	天の道守る
	ヒトモナシ	モロトモホムル	人もなし	諸共褒むる
	カミモナシ	ナンヂフタリモ	神もなし	汝 二人も
27-45	ナガラエズ	イツセハコナシ	永らえず	イツセは子なし

	タケヒトハ	ヨノミヲヤナリ	タケヒトは	世の御親なり
	タネコラモ	エトムソウチニ	タネコらも	エト六十内に
	ツマイレテ	ヨツギオナセヨ	妻入れて	世嗣おなせよ
	タケヒトハ	トシソキナレバ	タケヒトは	歳十五なれば
	ワガカワリ	タネコガタスケ	わが変り	タネコが助け
	ヲサムベシ	シラヤノヲシテ	治むべし	白矢のヲシテ
	タケヒトニ	クニオシラスル	タケヒトに	国おしらする
27-46	モモノフミ	タネコニユツル	百の文	タネコに譲る
	ワガココロ	サキニカガミハ	わが心	先に鏡は
	オシクモニ	マタヤエガキハ	オシクモに	また八重垣は
	ワニヒコニ	サツクオヒメガ	ワニヒコに	授くお姫が
	アヅカリテ	ワケツチミヤノ	預かりて	ワケツチ宮に
	オサメオク	ホツマナルトキ	納め置く	「秀つ真なる時

	オノヅカラ	ミクサノタカラ	おのづから	三種の宝
	アツマリテ	ミヲヤトナスガ	集まりて	御祖となすが
27-47	ホツマヅト	ミヤサキヤマノ	秀つ真ぞ」と	ミヤサキ山の
	ホラニイリ	アカンタヒラト	洞に入り	アカンタヒラと
	アガリマス	ミコモオツトメ	神上ります	皇子喪お勤め
	ヨソヤスム	ミソフアツマリ	四十八日済む	三十二県集り
	アグルナハ	ツクシスメラギ	上ぐる名は	「ツクシ先皇」
	コノヨシオ	タガニツグレバ	この由お	タガに告ぐれば
	モニイリテ	ヒウガノカミト	喪に入りて	「ヒウガの神」と
	マツリナス	ヲニフニマツル	祭なす	ヲニフに祀る
27-48	カモノカミ	アヒラツヤマハ	カモの神	アヒラツ山は
	ミヲヤカミ	ノチニタマヨリ	御祖神	後にタマヨリ
	カミトナル	カアヒニアワセ	神となる	カアヒに合せ

ミヲヤカミ メヲノカミトテ 御祖神 夫婦の神とて

イチジルキカナ 著るきかな

● 君臣(キミトミ)遺(ノコ)し法(ノリ)の紋(アヤ)

28- 1 キソススノ チエノハタトシ 五十ススの 千枝の二十年

アメカワル コヨミマダトテ 天変わる 「暦 未だ」とて

モノヌシガ イセニモフデテ モノヌシが イセに詣でて

コレヲトフ フタエコレヨリ これお問ふ フタエこれより

ウカガハデ コフドノニウク ウカガハデ コフ殿にウク

ヨロコビト トモニイタレル 歎びと 共に至れる

28- 2 オウチミヤ カスガニアイテ 大内宮 カスガに会いて

モトオトウ ヲキナコタエテ 起源お問う 翁 答えて

	コノスズハ	アメツチヒラク	「このスズは	天地開く
	トコタチノ	ミヤノマサカキ	トコタチの	宮のマサカキ
	アエチエニ	サススズトナル	天枝千枝に	拆ススとなる
	ウエツギノ	キモニイタレバ	植ゑ継ぎの	五百に至れば
	ミモハカリ	ヨロトシミチテ	三百はかり	万歳満ちて
	キモツギノ	アマノマサカキ	五百継ぎの	天のマサカキ
28- 3	トシノホノ	トトセニハキキ	歳の穂の	十年には五寸
	ムソトシニ	ミタノブエトノ	六十歳に	三夕伸ぶ兄弟の
	ヒトメグリ	アクルトシナル	一廻り	翌年なる
	ミタノアエ	ナレバフタエト	三夕の天枝	なれば二エトと
	キアエヨリ	エトホトカゾエ	キアエより	枝と穂と数え
	ヒトエムソ	トエハムモトセ	一枝六十	十枝は六百年
	モエハムチ	チエニムヨロオ	百枝は六千	千枝に六万お

	アマモリノ	ヒトメグリツツ	天守りの	一巡りづつ
28- 4	コヨミナル	カレチエノトシ	コヨミなる	かれ千枝の年
	タネウエテ	アクレバハユル	種植ゑて	明くれば生ゆる
	マサカキオ	ハコクニミヤニ	マサカキお	ハコクニ宮に
	トコタチノ	ウエテクニナモ	トコタチの	植ゑて国名も
	ヒタカミノ	タカミムスビノ	ヒタカミの	タカミムスビの
	ウエツギノ	フソヒノスズノ	植ゑ継ぎの	二十一のススの
	モモエノチ	キヨタマキネノ	百枝のち	五世タマキネの
	イサコヒメ	ナナヨノカミノ	イサコ姫	七代の神の
28- 5	タカヒトト	タカヒノツサノ	タカヒトと	タカヒの西南の
	ツクバヤマ	アサカワハナル	ツクバ山	イサカワ端なる
	ミヤニキテ	ウナツキアミテ	宮にゐて	うなつきあみて
	ギミアヒテ	ナモイサナギト	ギ・ミあひて	名もイサナギと

	イサナミノ	アメフタカミノ	イサナミの	天二神の
	ミコナキオ	カレタマガネノ	御子なきお	故タマガネの
	カツラキノ	ヤマニイノレバ	カツラキの	山に祈れば
	アメミヲヤ	ヒノワノミタマ	天御親	日の輪の御魂
28- 6	ワケクタシ	アマテルカミオ	分け下し	天照神お
	ウミタマフ	トキフソヒスズ	生み給ふ	時二十スズ
	モフソキエ	ミソヒキシエノ	百二十五枝	三十一キシエの
	ハツヒノデ	ワカヒトトモニ	初日の出	若日と共に
	アレマセバ	イミナワカヒト	生まれませば	イミ名ワカヒト
	ウブミヤハ	ハラミサカオリ	生宮は	ハラミサカオリ
	ヲノエナオ	ネニオサムレバ	緒の胞衣お	ネに納むれば
	ヨクマモリ	ワサハヒアルモ	よく守り	禍あるも
28- 7	シナカエテ	フセギハラエバ	シナカエテ	防ぎ祓えば

	ヤワラギテ	タマノヲナガク	和らぎて	魂の緒永く
	コレニヨリ	オオヤマツミガ	これにより	オオヤマツミが
	メグリミテ	ヨメヂユクネノ	巡り見て	ヨメヂユクネの
	ヲニオサム	エナガタケナル	峯に納む	エナガ岳なる
	シナノクニ	イタルワカヒト	シナの国	至るワカヒト
	ヒタカミノ	アメノミヤニテ	ヒタカミの	天の宮にて
	ミチマナブ	ミソホニシロシ	道学ぶ	三十穂にしろし
28- 8	ミヤツクリ	オオヒヤマトニ	宮造り	大日ヤマトに
	マツリトル	アメフタカミノ	政りとる	天二神の
	ユヅリウケ	アメヒノミコト	譲りうけ	天日の御子と
	ミウチニハ	ソフノツホネニ	御内には	十二の局に
	オクキサキ	ヨタリノスケニ	置く后	四人のスケに
	ヨウチメト	ヨオシモソエテ	四ウチメと	四オシモ添ゑて

	ツキノミヤ	セオリツヒメオ	月の宮	セオリツ姫お
	ミキサキト	アメニオサメテ	御后と	天に治めて
28- 9	オオヤマト	ヒタカミヤスノ	オオヤマト	ヒタカミヤスの
	マツリコト	キコセバタミモ	政り事	聞こせば民も
	オタヤカニ	フソキヨロトシ	穩やかに	二十五万歳
	アメヒツギ	ミコノオシヒト	天日嗣	御子のオシヒト
	ユツリウケ	モトノタカヒニ	譲りうけ	元のタカヒに
	シロシメル	ニシハヤスガハ	しろしめす	西はヤスガハ
	オモイカネ	ヲシカドワケテ	オモイカネ	勅使別けて
	トツクニハ	ツキヨミヲサム	トツ国は	ツキヨミ治む
28-10	シラヤマハ	ネニツキスミハ	シラヤマは	北にツキスミは
	スミヨロシ	アマテルカミハ	スミヨロシ	天照神は
	コエクニノ	イサワヲウチノ	コエ国の	イサワ・ヲウチの

	ミヤニイテ	ヤツランミミニ	宮に居て	八つ御耳に
	キコシメシ	タミノヲシエハ	聞こしめし	民の教ゑは
	イセノミチ	ソノカンカゼノ	イセの道	その神風の
	イセノクニ	トホリタツトム	イセの国	トホリタツトム
	カンカゼオ	ウラヤミネジケ	神風お	羨みねじけ
28-11	バケモノガ	ミツカラホメテ	化物が	自から賞めて
	ハタレキミ	ナハカリコチオ	ハタレ君	七十万九千お
	ムレアツメ	クニオミタレバ	群れ集め	国お乱れば
	スミヨロシ	カトリカシマヤ	スミヨロシ	カトリ・カシマヤ
	イフキヌシ	カダタチカラヲ	イフキヌシ	カダ・タチカラヲ
	クスヒカミ	ミナウツワエテ	クスヒ神	皆器 得て
	コレオウツ	トキニムハアレ	これお撃つ	時に六ハタレ
	ミナクダル	コレスメカミノ	皆下る	これ続け神の

28-12	ミコトノリ	ミコオシヒトモ	勅	御子オシヒトモ
	ミソヨロハ	ヲサメテミコノ	三十万は	治めて御子の
	ホノアカリ	トクサタカラニ	ホノアカリ	十種宝に
	カケメグリ	ソラミツヤマト	駆け巡り	空みつヤマト
	アスカミヤ	オトキヨヒトハ	アスカ宮	弟キヨヒトは
	ニハリミヤ	アラタヒラキテ	ニハリ宮	新田開きて
	タミヲサム	ソヤヨロトシニ	民治む	十八万歳に
	コトオエテ	ミツキハワカル	事お経て	水際分る
28-13	ニハリブリ	アメヨリミツノ	ニハリぶり	天より三つの
	カンタカラ	キミトミワケテ	神宝	君臣分けて
	タマワレバ	ココロヒトツニ	賜われば	心 一つに
	クニノナモ	シハカミホヅマ	国の名も	シハカミホヅマ
	アラハルル	ミソヨロフレバ	現はるる	三十万経れば

	アメノナモ	ワケイカツチノ	天の名も	ワケイカツチの
	アマキミト	ムソヨロヲサム	天君と	六十万治む
	ヲヲンメグミゾ		大ん恵みぞ	
28-14	サキニミコ	ミタリウムトキ	さきに皇子	三人生む時
	シナノヨリ	ヨシナアガタノ	シナノより	四シナ県の
	ヌシキタリ	アマテルカミノ	主来り	天照る神の
	タメシアリ	エナコフトキニ	例しあり	胞衣請ふ時に
	ミコトノリ	ハニシナヌシハ	勅	「ハニシナ主は
	エナがタケ	ハエシナオヨビ	エナが岳	ハエシナ及び
	サラシナト	ツマシナヌシラ	サラシナと	ツマシナ主ら
	コノミエナ	ソノヲニオサメ	この三エナ	その緒に収め
28-15	マモルベシ	ソノオトミコノ	守るべし」	その弟皇子の
	ウツキネハ	ツクシニイタリ	ウツキネは	ツクシに至り

	タオコヤシ	ヲヤニツカフル	田お肥し	親に仕ふる
	タミオメデ	ソヤヨロヲサメ	民お賞で	十八万治め
	モトクニノ	ヒツキオウケテ	本国の	日嗣お受けて
	アマカミノ	ヲヤニツカフル	天神の	親に仕ふる
	キミノナモ	ムソヨロヲサメ	君の名も	六十万治め
	ケキノカミ	ミコカモヒトハ	ケキの神	皇子カモヒトは
28-16	ヒツギウケ	ミヅホオウツス	日嗣うけ	ミヅホお移す
	タガノミヤ	ヲサムルタミオ	タガの宮	治むる民お
	コノコトシ	アメニコタフル	子の如し	天に応ふる
	カミノナモ	ミヲヤアマキミ	神の名も	御祖天君
	ワカミヤノ	トキニヨソヨロ	若宮の	時に四十万
	ヨノマツリ	マタミソキヨロ	世の祭り	又三十五万
	ユタカナリ	トキニキサワノ	豊かなり	時にキサワの

	アマツカミ	ソフノキサキモ	天ツ神	十二の後も
28-17	カミトナル	セオリツヒメト	神となる	セオリツ姫と
	ヲランカミ	ミヤウツサント	大御神	宮遷さんと
	ミモカワニ	アノボルチエテ	ミモ川に	天昇る霊得て
	サコクシロ	ウヂノミヤキニ	サコクシロ	ウヂの宮居に
	フヨホヘテ	トキニキソヅズ	二万ホ経て	時に五十スス
	ミヤニハエ	ツラツラオボス	宮に生ゑ	つらつらおぼす
	ウエズシテ	ハエルモアメヨ	「植ゑずして	生ゑるも天よ
	ワガイノチ	アメガシラスト	「わが命	天が知らず」と
28-18	ヤモカミオ	メシテワガヨオ	八百神お	召して「我世お
	イナマント	サルタニアナオ	辞まん」と	サルタに穴お
	ホラシムル	マナキニチキル	掘らしむる	「マナキに契る
	アサヒミヤ	オナジトコロト	アサヒ宮	同じ処」と

	ノタマエバ	モロオドロキテ	宣えば	諸驚きて
	トトムレバ	イヤトヨワレハ	留むれば	「否とよ、我は
	タミノタメ	ニガキオハミテ	民のため	苦きお食みて
	モナソミヨ	フチキモトシオ	百七十三万	二千五百年お
28-19	ナガラエテ	アメノタノシミ	永らえて	天の楽しみ
	オボユレバ	ヨニノコスウタ	覚ゆれば	世に遺す歌
	ツネニキク	サヲシカヤタノ	常に聞く	サヲシカ・ヤタの
	ワガカムリ	ハトミモタミニ	わが冠り	衣と御裳民に
	ヲオトドケ	アワオツカネテ	緒お届け	天地お束ねて
	ヒツギナス	モスソオクメト	ヒツギなす	モスソお汲めと
	キミタミノ	ヲシエノコシテ	君民の	教ゑ残して
	アニカエル	トテナイタメソ	天に帰る」	とて「な傷めそ
28-20	ワガミタマ	ヒトハアノモノ	わが御魂	人は天のもの

	ウエニアル	ワレハカンムリ	上にある	われは冠
	ヒトクサハ	ミミチカキヲゾ	人草は	耳近きヲぞ
	ムネキヨク	ミハアカツケド	胸清く	身は垢つけど
	サシガミテ	アメニツグレバ	サシがみて	天に告ぐれば
	サヲシカノ	ヤツノキコエニ	サヲシカの	八つの聞えに
	アラハレテ	イノレモガナト	現はれて	祈れもがもと
	ミモスソノ	タミオナデツツ	ミモスソの	民お撫でつつ
28-21	サヲシカノ	キヨキニカミハ	サヲシカの	清きに神は
	アリトコタエキ		ありと答えき	
	カエシ	ノトウタ	返し	祈詞歌
	ヒトツネニ	カミニムカハバ	「人常に	神に向はば
	ヨノミミノ	アカハアモトノ	世の耳の	垢は天基の
	サヲシカニ	キヨメタマヒテ	サヲシカに	清め給ひて

	サコクシノ	フユノカガミニ	サコクシの	フユの鏡に
	イルトオモエバ		入ると思ふば	
28-22	マタサルタ	ムカシサツクル	「またサルタ	昔授くる
	サカホコギ	ウツクシキスヅ	サカホコギ	美しきスヅ
	ワイキタチ	カカンノンデン	地息立ち	カカンノンデン
	トキマチテ	ミチアラハセヨ	時待ちて	道現はせよ
	マタキサキ	ヒロタニユキテ	また后	ヒロタに行きて
	ワカヒメト	トモニキココロ	ワカ姫と	共にキ心
	マモルベシ	ワレハトヨケト	守るべし	われはトヨケと
	ヲセオモル	キセノミチナリ	ヲセお守る	キセの道なり
28-23	マタコヤネ	ナンヂヨクシル	またコヤネ	汝よく知る
	タケコガコ	クシヒコウマレ	タケコが子	クシヒコ生れ
	スグナレバ	サヅクミホコニ	直ぐなれば	授く御矛に

	カンガミテ	ミモロニイリテ	鑑みて	ミモロに入りて
	トキマツモ	ミチオトロハバ	時待つも	道衰はば
	マタイデテ	ヲコサンタメヤ	また出でて	興さんためや
	ナンヂマタ	カガミノトミハ	汝また	鏡の臣は
	カロカラズ	カミオミヤコニ	軽からず	神お都に
28-24	トトムベシ	ワレモマモラン	留むべし	われも守らん
	コレナリト	ミヨノミハバコ	これなり」と	御代の御機箱
	ミヲシデト	ナンヂカスガヨ	御ヲシデと	「汝カスガよ
	ノコシモノ	タガニモチユキ	遺し物	タガに持ち行き
	ササゲヨト	ミヅカラコレオ	捧げよ」と	親らこれお
	サヅケマス	カスガハキミニ	授けます	カスガは君に
	タテマツル	カミノヲシデト	奉る	神のヲシデと
	サヲシカノ	カムリトモハハ	サヲシカの	冠と衣裳は

28-25	ココチリゾ	ミユキノミコシ	ココチリぞ	み幸の御輿
	マナキニテ	アマテルカミハ	マナキにて	天照神は
	ウチツミヤ	トヨケハトミヤ	ウチツ宮	トヨケは外宮
	カレカスガ	オクリテノチハ	故カスガ	送りて後は
	ツトメイリ	ミカサヤシロノ	勤め居り	ミカサ社の
	タマカエシ	クニヲサマレバ	魂かえし	国治まれば
	カレモマシ	マツリノアヤオ	枯れもなし	政のアヤお
	ミツソメテ	ヒトツモチユキ	三つそめて	一つ持ち行き
28-26	ヒヨミナス	フタエニサヅケ	ヒヨミなす	フタエに授け
	ミモスソノ	サコクシロウヂ	ミモスソの	サコクシロウヂ
	アラタメテ	アマテルカミノ	改めて	天照神の
	ウチツミヤ	ヤモツガフカミ	ウチツ宮	八百ツガフ神
	ハンベリテ	ヒモロゲササゲ	侍べりて	ヒモロゲ捧げ

	アニコトフ	キセニミチウク	天にことふ	キセに道受く
	カントミノ	ツガフカミラガ	神臣の	ツガフ神らが
	ハベルユエ	ウチハヘトコロ	はべる故	内侍所
28-27	カスガカミ	フトノトコトオ	カスガ神	フトノトコトお
	ツカサトルカナ		司とるかな	
	ムヨロトシ	ヘテコゾツキル	六万年	経て去年尽きる
	サクズゾ	ムカシカスガニ	折スズぞ	昔カスガに
	ミコトノリ	フソムノスズオ	勅	「二十六のスズお
	ワレウエテ	ノチノフソキモ	我植ゑて	後の二十五も
	ミコトノリ	ウケメグリウユ	勅	うけ巡り植ゆ
	ミヤノマエ	キミオワサネバ	宮の前	君座さねば
28-28	イカニセン	フタエガキワク	如何にせん」	フタエが日く
	カスガトノ	イナムミカサモ	「カスガ殿	辞むミカサも

	イマキセノ	ツカフルカミノ	今キセの	仕ふる神の
	キマスベシ	コレコトワリト	居ますべし」	これ道理と
	クニメグル	モノヌシフレテ	国巡る	モノヌシ告れて
	モノノヘラ	カスガノカミヲ	モノノへら	カスガの神を
	ミチヒカス	モロカミイハフ	導かす	諸神祝ふ
	カドデシテ	クニクニメグリ	門出して	国々巡り
28-29	マサカキノ	フタエミエトエ	マサカキの	二枝三枝十枝
	カツテナク	イヨニイタレバ	嘗てなく	イヨに至れば
	コトシロガ	ヤカタニイレテ	コトシロが	館に入れて
	アルシトフ	ススナエアリヤ	主 問ふ	「スス苗ありや」
	カツテナシ	テオムナシクス	「絶てなし	手お空しくす」
	モノヌシガ	ヲキナウエンヤ	物主が	「翁 植ゑんや」
	カスガマタ	ワレハトミナリ	カスガ又	「我は臣なり

	キミウユル	アマノマサカキ	君植ゆる	天のマサカキ
28-30	イカニセン	ワレハノトコト	如何にせん	我は祝詞
	ノンスミノ	マタトフナンヂ	告んすのみ	又問ふ「汝
	タオスツヤ	ホロシテイワク	治お棄つや」	ホロして日く
	チハステズ	ウユオオソレテ	「霊は棄てず	植ゆお恐れて」
	マタモトフ	イフキカミカヤ	又も問ふ	「イフキ神かや」
	トキニハハ	タナコヒメアリ	時に母	タナコ姫あり
	コタエイフ	ムカシフタカミ	答えいふ	「昔 二神
	ヒノカミオ	キミツキハツグ	日の神お	君月は次ぐ
28-31	ツグハトミ	コノコトミナリ	次ぐは臣	この子臣なり
	トミオモテ	マダキミトセズ	臣お以て	まだ君とせず
	ヒノカミノ	ツギエテウユル	日の神の	継ぎ得て植ゆる
	キミハイマ	ワカキタケヒト	君は今	若きタケヒト

	オモワネバ	アメノムシバミ	思わねば	天の蝕み
	ハルルトキ	ナエハエナンヤ	晴るる時	苗生ゑなんや」
	アルジトフ	サクズハタチ	主 問ふ	「拆スズ二十
	ノビイカン	カレニウセタリ	伸びいかん」	枯に失せたり
28-32	コレモアメ	トキニフタエガ	これも天命」	時にフタエが
	コヨミナハ	イカガナサンヤ	「暦 名は	如何なさんや」
	トキニヒメ	タラチヲカミニ	時に姫	「タラチヲ神に
	カリイワバ	ススキハヨハイ	懸り云わば	ススキは齡
	ハタトセノ	ノビモコノキノ	二十歳の	伸びもこの樹の
	アノイノチ	カスガモヨワイ	天の命	カスガも齡
	ナガケレバ	コレナヅクベシ	長ければ	これ名づくべし」
	トキカスガ	ヤヤエミイワク	時カスガ	やや笑み日く
28-33	コヨミナオ	アスストセンヤ	「暦 名お	天ススとせんや」

	トキニヒメ	モロカミトモニ	時に姫	諸神共に
	ムベナリト	アスズニキワメ	「宣なり」と	天ススに決め
	フソヒホノ	キナエノハルノ	二十一歳の	キナエの春の
	アメフタエ	アススコヨミト	天フタエ	「天スス暦」と
	ナオカエテ	アヅサニホリテ	名お変えて	梓に彫りて
	タテマツル	アスズコヨミオ	奉る	天スス暦お
	モロウケテ	コノヨノワザオ	諸受けて	この代の業お
28-34	カンガミル	コヨミコレナリ	鑑みる	暦これなり
	タナコヒメ	イフキトミヤニ	タナコ姫	イフキト宮に
	ウムミコノ	エハイヨツヒコ	生む御子の	兄はイヨツヒコ
	トサツヒコ	ウサツヒココレ	トサツヒコ	ウサツヒコこれ
	ヲントモニ	ユキテツクシノ	御伴に	行きてツクシの
	ウサニスム	ハハモウサニテ	ウサに住む	母もウサにて

カミトナル	イツクシマミヤ	神となる	イツクシマ宮
イトウカミ	ヨキオシルナゾ	イトウ神	善きお知る名ぞ

● タケヒト, ヤマト打ちの紋(アヤ)

29- 2	カンヤマト	イワワレヒコノ	カンヤマト	イワワレヒコの
	スヘラギハ	ミオヤアマキミ	スヘラギは	御親天君
	ヨツノミコ	ハハハタマヨリ	四の皇子	母はタマヨリ
	アニミヤノ	キツセハタガノ	兄宮の	五ツ瀬尊は多賀の
	ヲキミナリ	ミヲヤアマキミ	央君なり	御祖天君
	ツクシタス	ソトセヲサメテ	筑紫 治す	十年治めて
29- 2	ヒタルトキ	アマキミノニオ	ひたる時	天君のニお
	タケヒトニ	サツケアビラノ	タケヒトに	授けアビラの
	カミトナル	キミミヤザキニ	神となる	君 宮崎に

	タネコラト	マツリトルユエ	タネコ等と	政り執る故
	シツカナリ	カグヤマノトミ	静かなり	カグヤマの臣
	ナガスネガ	ママニフルエバ	ナガスネが	俣に振舞えば
	サハガシク	ハラノヲキミハ	騒がしく	ハラの央君は
	カテトトム	カレにナガスネ	糧止む	故にナガスネ
29- 3	フネトトム	オオモノヌシガ	船止む	オオモノヌシが
	ウタントス	タガノヲキミハ	討たんとす	多賀の央君は
	オトロキテ	ツクシニクダリ	驚きて	筑紫に降り
	トモニタス	モノヌシヒトリ	共に治す	モノヌシ一人
	タミヲサム	トキニタケヒト	民治む	時にタケヒト
	アビラヒメ	メトリウムミコ	アビラ姫	娶り生む御子
	タギシミミ	キミトシヨソキ	タギシミミ	君歳四十五
	モノガタリ	ムカシノミヲヤ	物語り	「昔の御祖

29- 4	タカムスビ	ヒタカミウミテ	タカムスビ	日高見 生みて
	モマスヨホ	スギテアマヒノ	モマス万年	過ぎて天日の
	ヲヲンカミ	アメナルミチニ	大御神	天成る道に
	タミオタス	ミコノオシヒト	民お治す	御子のオシヒト
	ユヅリウク	ミマゴキヨヒト	譲り受く	御孫キヨヒト
	マタウケテ	ワケイカツチノ	また受けて	ワケイカツチの
	アマキミト	アメノイワクラ	天君と	天の磐座
	オシヒラキ	イツノチワキニ	押し開き	稜威の道別に
29- 5	ヲサマリテ	ミオヤニツカフ	治まりて	御祖に仕ふ
	ミチアキテ	ヒカリカサヌル	道開きて	光 重ぬる
	トシノカス	モモナソコヨロ	年の数	百七十九万
	フチヨモモ	ナソホヘルマデ	二千四百	七十年経るまで
	オチコチモ	ウルハフクニノ	遠ち近ちも	潤ふ国の

	キミアリテ	アレモミダレズ	君ありて	村も乱れず
	アメノミチ	ヨニハヤルウタ	天の道	世に流行る歌
	ノリクダセ	ホツマヂ	『乗り下だせ	秀真路
29- 6	ヒロムアマモイワフネ		ひろむ天も岩船』	
	シホツチノ	オキナススメテ	シホツチの	翁すすめて
	ニギハヤカ	イカンゾユキテ	「ニギハヤカ	いかんぞゆきて
	ムケザラン	モロミコモゲニ	平定ざらん」	諸臣御子もげに
	イヤチコト	サキニヲシテノ	「いやちこ」と	「先にヲシテの
	コタエツラ	キミスミヤカニ	回答つら	君速やかに
	ミユキナセ	アズスキミエノ	行幸なせ」	アズズ・キミエ(甲寅)の
	カンナミカ	アミコミヅカラ	十月三日	天御子親ら
29- 7	モロヒキテ	ミフネノイタル	諸ひきて	御船の至る
	ハヤスヒド	ヨルアマオブネ	ハヤスヒド	寄る漁人小船

	アヒワケガ	トエバクニカミ	アヒワケガ	問えば「国神
	ウツヒコゾ	ワタノツリニテ	ウツヒコゾ	海の釣にて
	キクミフネ	ムカフハミフネ	聞く御船	迎ふは御船」
	ミチビクカ	アヒトコタエテ	「導くか」	「あひ」と答えて
	ミコトノリ	シキザホノスエ	勅	シキザホの末
	モタシメテ	フネニヒキイレ	持たしめて	船に引き入れ
29- 8	ナオタマフ	シキネツヒコノ	名お賜ふ	シキネツヒコの
	ヒクフネノ	ウサニイタレバ	曳く船の	宇佐に至れば
	ウサツヒコ	ヒトアガリヤニ	ウサツヒコ	一柱アガリ宮に
	ミアエナス	カシハデニヨル	御饗なす	膳に寄る
	ウサコヒメ	タネコガツマト	ウサコ姫	タネコが妻と
	チチニトヒ	ツクシノヲシト	父に問ひ	筑紫のヲシと
	アキノクニ	チノミヤニコス	アキの国	チノ宮に越す

	ヤヨヒニハ	キビタカシマニ	三月には	吉備・タカシマに
29- 9	ナカクニノ	マツリヲサメテ	ナカ国の	政 治めて
	ミトセマス	ウチニトトノヒ	三年坐す	内に整ひ
	ミフネユク	アスズキソキホ	御船行く	アスズ五十五年ホ
	キサラギヤ	ハヤナミタツル	二月や	早浪立つる
	ミツミサキ	ナモナミハヤノ	ミツミサキ	名も浪速の
	ミナトヨリ	ヤマアトカワオ	港より	山あと川お
	サカノボリ	カウチクサカノ	遡り	河内・草加の
	アウエモロ	ヤカタニイクサ	アウエモロ	館に戦さ
29-10	トトノヒテ	タツタノミチハ	整ひて	龍田の道は
	ナラビエズ	イコマコユレバ	並び得ず	生駒 越ゆれば
	ナガスネガ	イクサオコシテ	ナガスネが	軍 起して
	ワガクニオ	ウバワンヤワト	「わが国お	奪わんやわ」と

	クサエサカ	タタカヒアワス	クサエ坂	戦ひ合す
	イツセミコ	ヒジオウタレテ	五ッ瀬皇子	肱お射れて
	ススミエズ	スメラギフレル	進み得ず	スメラギ触れる
	ハカリコト	ワレハヒノマゴ	議り事	「われは日の孫
29-11	ヒニムカフ	アメヒサカエバ	日に向ふ	天に逆えば
	シリゾキテ	カミオマツリテ	退きて	神お祭りて
	ヒノママニ	オソハバアダモ	日のままだに	襲はば仇も
	ヤブレント	ミナシカリトテ	破れん」と	みな「しかり」とて
	ヤオエヒク	アダモセマラズ	ヤオえ退く	仇も迫らず
	ミフネユク	チヌノヤマキデ	御船行く	チヌの山城で
	イツセカル	キノカマヤマニ	五ッ瀬尊枯る	キノ竈山に
	オクラシム	ナグサノトベガ	葬らしむ	ナグサのトベガ
29-12	コバムユエ	ツミシテサノエ	拒む故	誅して狭野え

	クマノムラ	イワタテコエテ	クマノ村	磐盾 越えて
	オキオコグ	ツヂカゼフネオ	沖お漕ぐ	旋風船お
	タダヨハス	イナキイザチテ	漂はす	稲飯命 哭ちて
	アメノカミ	ハハワダカミヤ	「天の神	母海神や
	イカガセン	クガニタシナメ	如何せん	陸に厄め
	マタウミト	イルサビモチノ	また海」と	入るサビモチの
	ウミノカミ	ミケイリモマタ	海の神	ミケイリもまた
29-13	サカナミノ	ウミオウラミテ	逆波の	海お恨みて
	カミトナル	スメラギミコモ	神となる	スメラギ御子も
	ツツガナク	ユクアラサカニ	恙なく	行く荒坂に
	イソラナス	ニシキドコバミ	イソラなす	ニシキド拒み
	オエハケバ	ミナツカレフシ	毒気吐けば	みな疲れ伏し
	ネブルトキ	タカクラシタニ	眠る時	タカクラシタに

	ユメノツゲ	タケミカツチニ	夢の告げ	タケミカツチに
	ミコトオリ	クニサヤケレバ	勅	「国喧擾ければ
29-14	ナンヂユケ	カミニコタエハ	汝 行け」	神に答えは
	ユカズトモ	クニムケツルギ	「行かずとも	国平け劍
	クダサント	カミモウエナリ	下さん」と	神も「宣ふなり」
	ミカツチノ	フツノミタマオ	「ミカツチの	フツの御魂お
	クラニオク	コレタテマツレ	倉に置く	これ奉れ」
	アヒアヒト	タカクラシタガ	「あひあひ」と	タカクラシタガ
	ユメサメテ	クラオヒラケバ	夢覚めて	倉お開けば
	ソコイタニ	タチタルツルギ	底板に	立ちたる劍
29-15	ススムレバ	キミノナガネノ	進むれば	君の長寝の
	イエサメテ	モロモサムレバ	毒気覚めて	諸も覚むれば
	イクサダチ	ヤマヂケワシク	軍 立ち	山路嶮しく

	スエタエテ	ノニシジマイテ	未絶えて	野にしちまいて
	スメラギノ	ユメニアマテル	スメラギの	夢にアマテル
	カミノツゲ	ヤタノカラスオ	神の告げ	「ヤタの鳥お
	ミチビキト	サムレバヤタノ	導き」と	覚むればヤタの
	カラスアリ	オオチガウガツ	鳥あり	遠祖が穿つ
29-16	アスカミチ	イクサヒキユク	アスカ道	軍 率き行く
	ミチオミガ	ミネコエウダノ	ミチオミが	峰越えウダの
	ウガチムラ	ウガヌシメセバ	ウガチ村	ウガヌシ召せば
	アニハコズ	オトハモウデテ	兄は来ず	弟は詣でゝ
	ツゲモフス	アニサカラエド	告げ申す	「兄逆らえど
	ミアエシテ	ハカルクルリオ	御饗して	謀るクルリオ
	シロシメセ	カレニミチヲミ	知ろしめせ」	故にミチヲミ
	サガスレバ	アタナスコトオ	捜すれば	仇なすことお

29-17	オタケビテ	ナンヂガツクル	雄叫びて	「汝が造る
	ヤニオレト	ツルギヨユミト	屋に居れ」と	劍よ弓と
	セメラレテ	イナムトコナキ	攻められて	拒むとこなき
	アメノツミ	オノガクルリニ	天の罪	己がクルリに
	マカルナリ	オトハモテナス	罷るなり	弟はもてなす
	キミトミモ	ヨシノヲノエノ	君臣も	ヨシノヲノエの
	キヒカリモ	イワワケカミモ	キヒカリも	イワワケ神も
	イデムカフ	タカクラヤマノ	出で迎ふ	タカクラ山の
29-18	フモトニハ	エシギガイクサ	麓には	エシギが軍
	イハワレノ	カナメニヨリテ	イハワレの	要に拠りて
	ミチフサグ	スメラギイノル	道塞ぐ	スメラギ祈る
	ユメノツゲ	カミオマツレヨ	夢の告げ	「神お祭れよ
	カグヤマノ	ハニノヒラデニ	カグヤマの	埴の葉盤に

	ヒモロゲト	カミノヲシエニ	ヒモロゲ」と	神の教えに
	ナサントス	オトウガシキテ	なさんとす	弟ウガシ来て
	シギタケル	カダキアカシモ	「シギタケル	カダキ・アカシも
29-19	ミナコバム	キミオオモエバ	みな拒む	君お思えば
	カグヤマノ	ハニノヒラデノ	カグ山の	埴の葉盤の
	ヒモロゲニ	アメツチマツリ	ヒモロゲに	天地祭り
	ノチウタン	ウガシガツゲモ	のち討たん」	ウガシが告げも
	ユメアワセ	シイネツヒコハ	夢合せ	「シイネツヒコは
	ミノトカサ	ミオモツウガシ	簀と笠	箕お持つウガシ
	ヲヂウバノ	タミノスガタデ	翁姥の	民の姿で
	カグヤマノ	ミネノハニトリ	カグ山の	峰の埴採り
29-20	カエコトハ	ミヨノウラカタ	返事は	御世の占形
	ユメユメト	ツツシミトレト	夢々と	謹しみ取れ」と

	ミコトノリ	チマタニアダノ	勅	巷に仇の
	ミチオレバ	シイツネヒコガ	満ち居れば	シイツネヒコが
	イノリイウ	ワガキミクニオ	祈りいふ	「わが君国お
	サタムナラ	ミチモヒラケン	定むなら	道も開けん
	カナラズト	タダチニユケバ	必ず」と	直に行けば
	アダモミテ	サマオワラヒテ	仇も見て	様お笑ひて
29-21	ヨケトフス	カレニカグヤマ	避け通す	故にカグ山
	ハニトリテ	カエレバキミモ	埴採りて	帰れば君も
	ヨロコビテ	イツベオツクリ	喜びて	巖瓮お造り
	ニブカワノ	ウダニウツセル	ニブ川の	ウダに遷せる
	アサヒハラ	アマテルトヨケ	アサヒハラ	アマテル・トヨケ
	フマツリハ	ミチオミゾマタ	二神祭りは	ミチオミぞまた
	カンミマゴ	アメマヒガマゴ	カンミ孫	アメマヒが曾孫

	アタネシテ	ワケツチヤマノ	アタネして	ワケツチヤマの
29-22	ミヲヤカミ	ミカマツラセテ	御祖神	みか祭らせて
	アタオウツ	クニミガオカニ	仇お撃つ	国見が丘に
	イクサタテ	ツクルミウタニ	軍 立て	作る御歌に
	カンカゼノ	イセノウミナル	『神風の	伊勢の海なる
	イニシエノ	ヤエハヒモトム	古の	八重這ひ求む
	シタタミノ	アコヨヨアコヨ	細螺の	吾子よよ吾こよ
	シタタミノ	イハヒモトメリ	細螺の	い這ひ求めり
	ウチテシヤマン		討ちてし止まん』	
29-23	コノウタオ	モロガウタエバ	この歌お	諸が歌えば
	アダガツグ	シバシカンガフ	仇が告ぐ	暫し考ふ
	ニギハヤヒ	サスラヲヨスト	ニギハヤヒ	「流浪男よす」と
	オダケビテ	マタヒコトガモ	雄叫びて	また一言がも

	アメカラト	イクサオヒケバ	「天から」と	軍お退けば
	ミカタエム	ネツキユミハリ	味方笑む	十一月弓張
	シギヒコオ	キギスニメセド	シギヒコお	雉子に召せど
	アニハコズ	マタヤルヤタノ	兄は来ず	また遣るヤタの
29-24	カラスナキ	アマカミノミコ	鳥 鳴き	「天神の御子
	ナンヂメス	アサワイサワギ	汝 召す	いさわいさわぞ
	エシギキキ	イトウナスカミ	兄シギ聞き	いとうなす神
	ヲエヌトキ	アダカラストテ	汚穢ぬとき	仇鳥」とて
	ユミヒケバ	オトガヤニユキ	弓引けば	弟が屋に行き
	キミメスゾ	イサワイサワト	「君召すぞ	いさわいさわ」と
	カラスナク	オトシギオヂテ	鳥 鳴く	弟シギ恐ぢて
	カタチカエ	カミノイトウニ	容 変え	「神のいとうに
29-25	ワレオソル	エエナンヂトテ	我恐る	ゑゑ汝」とて

	ハモリアエ	ママニイタリテ	食盛り饗え	俣に至りて
	ワガアニハ	アダストモフス	「わが兄は	仇す」と申す
	トキニキミ	トエバミナイフ	時に君	問えば皆いふ
	トニサトシ	ヲシエテモコヌ	「弟に諭し	教えても来ぬ
	ノチウツモ	ヨシトタカクラ	後討つも	よし」とタカクラ
	オトシギト	ヤリテシメセド	弟シギと	遣りて示せど
	ウケガワズ	ミチヲミガウツ	受けがわず	ミチヲミが討つ
29-26	オシサカト	ウツヒコガウツ	オシサカと	ウツヒコが討つ
	オンナザカ	エシキノニゲル	オンナ坂	エシキの逃げる
	クロサカニ	ハサミテウテバ	クロサカに	挟みて討てば
	タケルドモ	フツクキ _r ドモ	タケルども	悉く斬れども
	ナガスネガ	タタカイツヨク	ナガスネが	戦い強く
	アタラレズ	トキニタチマチ	当られず	時に忽ち

	ヒサメフル	コカネウノトリ	氷雨降る	黄金鶺鴒の鳥
	トビキタリ	ユハズニトマル	飛び来たり	弓弭に止まる
29-27	ソノヒカリ	テリカカヤケバ	その光	照り輝けば
	ナガスネガ	タタカヒヤメテ	ナガスネが	戦ひ止めて
	キミニイフ	ムカシアマテル	君にいふ	「昔アマテル
	カミノミコ	イワフネニノリ	神の御子	イワ船に乗り
	アマクタリ	アスカニテラス	天降り	アスカに照らす
	ニギハヤヒ	イトミカシヤオ	ニギハヤヒ	妹ミカシヤお
	キサキトシ	ウムミコノナモ	后とし	生む御子の名も
	ウマシマチ	ワガキミハコノ	ウマシマチ	わが君はこの
29-28	ニギハヤヒ	アマテルカミノ	ニギハヤヒ	アマテル神の
	カンタカラ	トグサオサヅク	神宝	十種お授く
	アニホカニ	カミノミマゴト	豈ほかに	神の御孫と

	イツハリテ	クニウバハンヤ	偽りて	国奪はんや
	コレイカン	トキニスメラニ	これ如何」	時にスメラに
	コタエイフ	ナンヂガキミモ	答えいふ	「汝が君も
	マコトナラ	シルシアランゾ	真なら	シルシあらんぞ」
	ナガスネガ	キミノユキヨリ	ナガスネが	君の鞆より
29-29	ハハヤテオ	アメニシメセバ	羽々矢手お	天に示せば
	カンオシデ	マタスヘラギモ	神璽	またスヘラギも
	カチユキノ	イダスハハヤノ	歩鞆の	出だす羽々矢の
	カンオシデ	ナガスネヒコニ	神璽	ナガスネヒコに
	シメサシム	ススマヌイクサ	示さしむ	進まぬ軍
	マモリイル	ネンコロオシル	守り居る	懇お知る
	ニギハヤヒ	ワガナガスネガ	ニギハヤヒ	わがナガスネが
	ウマレツキ	アメツチワカヌ	生まれつき	天地分ぬ

29-30	カタクナオ	キリテモロヒキ	頑なお	斬りて諸率き
	マツロエバ	キミハモトヨリ	服えば	君はもとより
	クニテルノ	マメオウツシミ	クニテルの	忠おうつしみ
	イハワレノ	オヤニベオネリ	イハワレの	オヤニベおねり
	トシコエテ	コセノホフリヤ	年越えて	コセの祝や
	ソフトベト	ヰノホフリラモ	ソフトベと	猪の祝らも
	ツチグモノ	アミハルモノオ	ツチグモの	網はる者お
	ミナコロス	タカオハリベガ	皆殺す	タカオハリベガ
29-31	セヒヒクテ	アシナガクモガ	背低くて	足長クモの
	オオチカラ	ヰワキオフリテ	大力	岩木お振りて
	ヨセツケズ	タガノミヤモル	寄せつけず	多賀の宮守る
	ウモノヌシ	クシミカタマニ	ウモノヌシ	クシミカタマに
	ミコトノリ	モノヌシカガエ	勅	モノヌシ考え

	クズアミオ	ユヒカブラセテ	葛網お	結び被らせて
	ヤヤコロス	スベヲサマレバ	やや殺す	全治まれば
	ツクシヨリ	ノボルタネコト	筑紫より	上るタネコと
29-32	モノヌシニ	ミヤコウツサン	モノヌシニ	「都 遷さん
	クニミヨト	ミコトオウケテ	国見よ」と	勅お受けて
	メグリミル	カシハラヨシト	巡り見る	「カシハラよし」と
	モフストキ	キミモヲモヒハ	申す時	君も思ひは
	オナジクト	アメトミオシテ	同じくと	アメトミおして
	ミヤツクリ	キサキタテント	宮造り	后 立てんと
	モロニトフ	ウサツガモフス	諸に問ふ	ウサツが申す
	コトシロガ	タマクシトウム	「コトシロが	タマクシと生む
29-33	ヒメタタラ	イソスズヒメハ	姫タタラ	イソスズ姫は
	クニノイロ	アワミヤニマス	国の色	アワ宮に坐す

	コレヨケン	スメラギエミテ	これよけん」	スメラギ笑みて
	キサキトス	コトシロヌシオ	后とす	コトシロヌシお
	エミスカミ	マゴノクシネオ	エミス神	孫のクシネお
	アガタヌシ	ヤシロツクラセ	県主	社 造らせ
	メノフソカ	マツルオオミハ	メの二十日	祭る大三輪
	カンナミヅ	カンヨリニナモ	カンナミぞ	神よりに名も
29-34	カンヤマト	イワフレヒコノ	カンヤマト	イワフレヒコの
	アマキミト	アマネクフレテ	天君と	あまねく触れて
	トシサナト	カシハラミヤノ	年サナト(辛酉)	カシハラ宮の
	ハツトシト	ミヨカンタケノ	初年と	見よカンタケの
	オオイナルカナ		大いなるかな	

● 天君(アマキミ), 都鳥(ミヤコドリ)の紋(アヤ)

30- 2	アマキミノ	モトハミマゴノ	天君の	もとは御孫の
	イカツチオ	ワケテヲサムル	雷お	別けて治むる
	ヲランカミ	ホメテミマゴハ	大御神	褒めて御孫は
	アマカミノ	アラハルイツト	天神の	顕はる稜威と
	タマフナノ	ワケイカツチノ	賜ふ名は	ワケイカツチの
	アマキミト	ミクサモワケテ	天君と	三種も分けて
	アメミマゴ	ヒタリカスガト	天御孫	左カスガと
30- 3	ミギコモリ	ヨヨウケツギテ	右コモリ	世々受け継ぎて
	ミオヤギミ	ツクシクタルモ	御祖君	筑紫 降るも
	カミオシデ	モチテハナサズ	神璽	持ちて離さず
	ヤタカガミ	トミオシクモニ	八咫鏡	臣オシクモに
	ヤエカキハ	クシミカタマニ	八重垣(劔)は	クシミカタマに

	サヅケオキ	ミオヤツクシニ	授け置き	御祖神 筑紫に
	ヒタルトキ	カミノヲシデハ	ひたるとき	神の璽は
	タケヒトニ	ハハタマヨリモ	タケヒトに	母タマヨリモ
30- 4	カミトナル	カガミハカアイ	神となる	鏡はカアヒ
	ヤエガキハ	ワケツチミヤニ	八重垣は	別雷宮に
	アヅケオク	ナガスネヒコハ	預け置く	ナガスネヒコは
	ヤマザキニ	カワフネコハム	山崎に	川船拒む
	モノヌシガ	ウタントスレバ	モノヌシが	討たんとすれば
	イツセミコ	オソレタガヨリ	五ッ瀬皇子	恐れ多賀より
	ユクツクシ	クシミカタマハ	行く筑紫	クシミカタマは
	オシクモト	ナガスネウテバ	オシクモト	ナガスネ討てば
30- 5	ニゲユクオ	オヒテカハチニ	逃げ行くお	追ひて河内に
	トドマリテ	タケチノコリト	留まりて	タケチノコリと

	アウエモロ	ヤマトノソフニ	アウエモロ	ヤマトのソフに
	フセガシム	モノヌシカエリ	防がしむ	モノヌシ帰り
	オシクモハ	カハチニユキテ	オシクモは	カハチに行きて
	オシホヨリ	カスガオマネキ	オシホより	カスガお招き
	ヒラオカノ	ヤシロマツリテ	ヒラオカの	社 祭りて
	カミトナル	ツクシノタネコ	神となる	筑紫のタネコ
30- 6	モオヲサメ	ヨカミマツリテ	喪お治め	ヨ神祭りて
	アウエモロ	カワチオカネテ	アウエモロ	カワチお兼ねて
	ヲサメシム	オオモノヌシハ	治めしむ	オオモノヌシは
	アワウミノ	オオクニミヤオ	淡海の	オオクニ宮お
	ツクリカエ	コシネノクニモ	造り変え	コシネの国も
	サホコミナ	タミオヲサメテ	サホコみな	民お治めて
	シツカナリ	イマアマキミノ	静かなり	いま天君の

	クラヒナル	ムカシハミウエ	位なる	昔はミウエ	
30- 7	ワケサヅク	イマハナキユエ	分け授く	今はなき故	
	ソノツカイ	ヨリテハカレバ	その使ひ	よりにて議れば	
	ミナイワク	ヒノカミツカヒ	みな日く	日の神使ひ	
	ミチヲミト	ツキノツカヒハ	ミチヲミと	月の使ひは	
	アタネナリ	ホシノツカヒハ	アタネなり	星の使ひは	
	アメトミト	インベタマワリ	アメトミと	忌部賜わり	
	ミソギナス	トキニカシハラ	禊なす	時にカシハラ	(カシハラ=橿原)
	スメラギノ	ミ ヨ アラタマ	スメラギの	御世新玉の	
30- 8	スズサナト	サヤエハツヒノ	スズ・サナト(辛酉)	サヤエ初日の	(サヤエ=庚辰)
	オメデタモ	ツクシノタメシ	おめでたも	ツクシの例し	
	ウマシマチ	トクサササゲテ	ウマシマチ	十種捧げて	
	アメタネコ	カミヨフルコト	アメタネコ	神代古事	

	タテマツル	ナナクサミソモ	奉る	七草ミソも
	トンドホモ	カミアリカユモ	トンド火も	神あり粥も
	オコナワレ	サアエヒツギト	行われ	サアエ日嗣と (サアエ=庚子)
	アメトミハ	ワケツチミヤノ	アメトミは	別雷宮の
30- 9	ツルギモチ	アタネハカガミ	劍 持ち	アタネは鏡
	モチノボル	キミタカミクラ	持ち上る	君高御座
	シトネコエ	アメノタネコハ	褥 九重	アメノタネコは
	シトネミエ	クシミカタマハ	褥 三重	クシミカタマは
	シトネフエ	ヒノヲミウタフ	褥 二重	日の臣歌ふ
	ミヤコトリ	ミエオリテキク	都鳥	三重降りて聞く
	アワオタス	アマスメラギノ	天地お治す	アマスメラギの
	モロハトミ	カスガトコモリ	両羽臣	カスガとコモリ
30-10	キミトミノ	ココロヒトツニ	君臣の	心 一つに

	ミヤコトリ	カタチハヤタミ	都鳥	形は八民
	クビハキミ	カガミトツルギ	首は君	鏡と劍
	マテノハネ	モノノベハアシ	真手の羽根	モノノベは足
	カガミトミ	ツギホロブレバ	鏡 臣	継ぎ滅ぶれば
	タミハナレ	ヒツギフマレズ	民離れ	日嗣踐まれず
	ツルギトミ	ツギホロブレバ	劍 臣	継ぎ滅ぶれば
	モノフワレ	ヨオウバワルル	武士割れ	世お奪わるる
30-11	ヤタヲミハ	ゾロヲウハルノ	八咫大臣は	ゾロ生う春の
	タミワザオ	カンガミルメゾ	民業お	鑑みる目ぞ
	カキヲミハ	ヨコマオカラシ	カキ大臣は	邪魔お枯らし
	モノノフノ	チカラモルテゾ	武士の	力 守る手ぞ
	コノユエニ	ミグサオワケテ	この故に	三種お分けて
	サツクルハ	ナガクヒトツニ	授くるは	長く一つに

	ナルヨシオ	アヤニシルシテ	なる由お	文章に記して
	ミテヅカラ	フミオミマゴニ	御手づから	文お御孫に
30-12	サツケマス	セオリツヒメハ	授けます	セオリツ姫は
	ミカガミオ	チテモカスガニ	御鏡お	持ちてカスガに
	サツケマス	ハヤアキツメハ	授けます	ハヤアキツ姫は
	ミツルギオ	モチテコモリニ	御剣お	持ちてコモリに
	サツケマス	ミタビウヤマヒ	授けます	三度敬ひ
	ミナウクル	ヤマトヒツギノ	みな受くる	ヤマト日嗣の
	ミヤコトリカナ		都 鳥かな	
	ヒノヲミハ	シルシノミハコ	日の大臣は	璽の御箱
30-13	タテマツル	アタネハカガミ	奉る	アタネは鏡
	アメトミハ	ヤエガキモチテ	アメトミは	八重垣劔持ちて
	アメタネコ	クシミカタマニ	アメタネコ	クシミカタマに

	サツクナリ	キミトミモトノ	授くなり	君臣もとの
	シトネシク	トミモモツカサ	褥 敷く	臣百司
	コトホギシ	ヨロトシウタフ	言祝ぎし	万歳歌ふ
	ミカガミハ	キソスズヒメニ	御鏡は	キソスズ姫に
	ヤエガキハ	アビラツヒメニ	八重垣は	アビラツ姫に
30-14	ミシルシハ	キミノミニソエ	御璽は	君の身に添え
	ミクサトモ	ウチツノミヤニ	三種とも	内つの宮に
	ヲサメマス	ハラミノタメシ	納めます	ハラミの例し
	ウチミヤト	タタヨモトナリ	内宮と	讃ゆもとなり
	ミカザリオ	タミニオガマセ	御飾りお	民に拝ませ
	ネノツキニ	アユキワスキノ	ネの月(十一月)に	天ユキ・地スキの
	ミヤツクリ	モトアケアワノ	宮作り	元明け天地の (= 開闢)
	カミマツリ	タネコクシタマ	神祭り	タネコ・クシタマ

30-15	マテニアリ	ミケナヘマツリ	真手にあり	御食嘗祭り
	モフスヲミ	ウマシモノベト	奏す大臣	ウマシモノベト
	トオマモル	ミチヲミクメト	とお守る	ミチヲミクメト
	ミカキモリ	カンノトコトハ	御垣守	神祝詞は
	インベトミ	ツギハルヒソカ	インベ臣	次春十一日
	ミコトノリ	オモエバマメハ	勅	思えば忠は
	ウマシマチ	ヨヨモノベツゲ	ウマシマチ	代々モノベ継げ
	ミチヲミハ	ノゾミノママニ	ミチヲミは	望みのままに
30-16	ツキサカト	クメノトコロオ	ツキサカと	クメの処お
	タマウナリ	ウツヒコガコト	賜うなり	ウツヒコがこと
	フネトハニ	ヤマトクニツコ	船と埴	ヤマト国造
	オトウケシ	タケダアガタシ	弟ウケシ	タケダ県主
	クロハヤハ	シギノアガタシ	クロハヤは	シギの県主

	アメヒワケ	イセノクニツコ	アメヒワケ	イセの国造
	アタネカミ	カモノアガタシ	アタネ神	カモの県主
	カツテマゴ	ツルギネカツキ	カツテ孫	ツルギネ・カツキ
30-17	クニツコゾ	ヤタカラスマゴ	国造ぞ	八咫鳥孫
	カドノヌシ	ミホノサミダレ	カドノ主	三歳の五月雨
	ヨソカフリ	エヤミハヤリテ	四十日降り	疫病流行りて
	キネミモチ	キミニツグレバ	稲みもち	君に告ぐれば
	アメタネコ	クシミカタマト	アメタネコ	クシミカタマト
	ヤスカワノ	カリヤニイノリ	ヤス川の	仮屋に祈り
	トキエヤミ	ナオルトキネノ	とき疫病	治ると稲の
	イタミサル	ナオリノハラヒ	痛み去る	直りの祓ひ
30-18	オコナエバ	エヤミモナオリ	行えば	疫病も治り
	イネナオル	ユエミコトノリ	稲治る	ゆえ勅

	ワニヒコガ	ミオヤクシヒコ	ワニヒコが	御祖クシヒコ
	イサメイル	ナオキニタマフ	諫めいる	直きに賜ふ
	ヤマトカミ	ミヨハノオキナ	ヤマト神	みよはのなおき
	イサオシ	ナオリモノヌシ	功績に	直りモノヌシ
	カミタマフ	タネコモミヲヤ	神賜ふ	タネコモ御祖
	ワカヒコガ	ナオキカカミノ	ワカヒコが	直き鏡の
30-19	コトツゲバ	ナオリナカトミ	事継げば	直り中臣
	カミタマフ	トモニツグベシ	神賜ふ	ともに嗣ぐべし」
	ヨホキサラ	ネウエノキナエ	四歳二月	ネウエ(壬戌)のキナエ(甲申)
	ミコトノリ	ミヲヤノカミノ	勅	「御祖の神の
	ミヤコトリ	ワガミオテラシ	都鳥	わが身お照らし
	アタムケテ	ミナヲサムユエ	仇平けて	皆治む故
	アメトミニ	カモオウツサセ	アメトミに	カモお遷させ

	ミヲヤカミ	マツルハリハラ	御祖神	祭るハリハラ
30-20	トリミヤマ	アタネオカモノ	トリミ山	アタネお加茂の
	タケスミノ	マツリツガセテ	タケスミの	祭り継がせて
	クニヅコゾ	ムツキヒソカハ	国造ぞ」	正月十一日は
	アガタメシ	ミキオタマハル	県主召し	御酒お賜はる
	ハシメナルカナ		初めなるかな	

● ナオリ神(カミ)、ミワ神(カミ)の紋(アヤ)

31- 2	カシハラノ	ヤホヲヤエアキ	檀原の	八年ヲヤエ秋	(ヲヤエ=戊辰)
	スヘシカド	タカクラシタガ	総勅使	タカクラシタガ	
	ヤヤカエリ	ツゲモフサクハ	やや帰り	告げ申さくは	
	トミムカシ	ミコトオウケテ	「臣昔	勅命お受けて	

	トクニヨリ	ツクシミソフモ	ト国より	筑紫 三十二県も
	ヤマカゲモ	メグリヲサメテ	ヤマカゲも	巡り治めて
	コシウシロ	ヤヒコヤマベニ	コシウシロ	ヤヒコ山辺に
31- 3	ツチクモガ	フタワルユエニ	土蜘蛛が	札割るゆゑに
	ホコモチヒ	キタビタタカヒ	矛盾ひ	五度戦ひ
	ナナコロシ	フソヨヲサムト	皆殺し	二十四県治む」と
	クニスベエ	ササゲレバキミ	国総絵	捧ぐれば大君
	タカクラオ	キノクニツコノ	タカクラお	キノ国造の
	オオムラジ	フソトシサミト	大連	二十年サミト (サミト=辛卯)
	コシウシロ	ハツホヲサメズ	コシウシロ	初穂納めず
	マタムカフ	タカクラシタハ	また向ふ	タカクラシタは
31- 4	ヤチヌカズ	ミナマツロエバ	太刀抜かず	みな服えば
	ミコトノリ	タカクラホメテ	みことのり	タカクラ賞めて

	クニモリト	ヲシテタマワル	クニモリと	ヲシテ賜わる
	ヤヒコカミ	ナガクスムユエ	ヤヒコ神	長く住むゆゑ
	イモトムコ	アメノミチネオ	妹と婿	アメノミチネお
	クニツコト	キノタチタマフ	クニツコと	キノ館賜ふ
	フソヨトシ	キミヨツギナシ	二十四年	大君世嗣ぎなし
	クメガコノ	イスキヨリヒメ	クメが娘の	イスキヨリ姫
31- 5	オシモメニ	メセバキサキニ	オシモ女に	召せば皇后に
	トガメラレ	ユリヒメトナリ	咎められ	ユリ姫となり
	トノイセズ	キサキハラミテ	殿居せず	皇后妊みて
	アクルナツ	カンヤキミミノ	翌る夏	カンヤキミミの
	ミコオウム	イミナイホヒト	御子お生む	齋名イホヒト
	フソムトシ	マツリミユキノ	二十六年	祭り御幸の
	ヤスタレニ	カヌカワミミノ	ヤスタレに	カヌカワミミの

	ミコウミテ	イミナヤスキネ	御子生みて	齋名ヤスキネ	
31- 6	サミエナツ	ヤヒコノボリテ	サミエ夏	ヤヒコ上りて	(サミエ=庚寅)
	ヲガムトキ	アメノサカツキ	拝む時	天の酒盃	
	カズイタル	スヘタギトワク	数至る	天皇問わく	
	ムカシエズ	イマノムイカン	「昔 得ず	いま飲む如何」	
	ソノコタエ	ワガクニサムク	その答え	「わが国寒く	
	ツネノメバ	オノヅトスケリ	常飲めば	おのづと好けり」	
	キミエミテ	ナンヂハミキニ	君笑みて	「汝は御酒に	
	ワカヤギテ	サカナニタマフ	若やぎつ」	酒肴に賜ふ	
31- 7	オシモメヅ	ナツナノヲトニ	オシモ女ぞ	七十七の男に	
	ハタチメト	コシニトツギテ	二十女」と	コシに嫁ぎて	
	ヲメオウム	サキニサユリノ	男女お生む	先にサユリの	
	ハナミトテ	キミノミユキハ	花見とて	大君の御幸は	

サユカハニ	ヒトヨイネマス	サユ川に	一夜寝ねます
クメガヤノ	イスキヨリヒメ	クメが家の	イスキヨリ姫
カシハテニ	ミケススムレバ	膳に	御食進むれば
スメラギハ	コレオメサント	スメラギは	これお召さんと

31- 8 ツゲノミウタニ 告げのみ歌に

アシハラノ	シゲコキオヤニ	『葦原の	繁こき小屋に
スガタタミ	イヤサヤシキテ	菅畳	いや清敷きて
ワガフタリネン		わが二人寝ん』	
コレニメシ	ツボネニアルオ	これに召し	局にあるお
タギシミコ	フカクコガレテ	タギシ御子	深くこがれて
チチニコフ	ウナツキウバフ	千千に請ふ	諾き奪ふ
チチガヨブ	アヤシキドメオ	父が呼ぶ	怪しきドメお

31- 9 サトルヒメ ミサホツズウタ 悟る姫 操ツズ歌

アメツツチトリマス 『天つ地 とります

キミトナルサケルドメ 大君となど裂けるドメ』

タギシミコ ススミコエテ タギシ御子 進み答えて

ニヤオトメタダニア 『にや乙女 直に会

ハントワガサケルドメ はんとわが裂けるドメ』

ヤワナキオ オツテイエバ 和なきお 追ってといえは

ミコモサル コトメガツグル 御子も去る 侍女が告ぐる

31-10 クシミカタ キミニモフサク クシミカタ 大君に申さく

シムノハヂ キミウナツキテ シムの恥 大君肯きて

ヒツカニシ コノタビタマフ 密かにし この度賜ふ

ヲシモメハ コノユリヒメゾ ヲシモメは このユリ姫ぞ

トシサミト ウツキハツヒニ 歳サミト 四月初日に (サミト=辛卯)

ワキカミノ ホホマノオカニ ワキカミの ホホマの丘に

	ミユキシテ	メクリノヅメバ	行幸して	巡り望めば
	アナニエヤ	エツハウツユフ	「あなにえや	ゑつはうつゆふ
31-11	マサキクニ	カタチアキツノ	マサキ国	形アキツの
	トナメセル	コレアキツシマ	臀舐めせる	これアキツ島
	アマカミハ	ヤマトウラヤス	天神は	ヤマト浦安
	コエネクニ	ヤマトヒタカミ	コエ根国	ヤマト・ヒタカミ
	ソコチタル	シワガミホツマ	ソコ・チタル	シワガミ・ホツマ
	オオナムチ	タマガキウチツ	オオナムチ	玉垣内宮
	ニギハヤヒ	ソラミツヤマト	ニギハヤヒ	ソラミツ・ヤマト
	ヨソフトシ	ハツミカキミエ	四十二年	初三日キミエ (キミエ=甲寅)
31-12	カヌナガワ	ミミノミコトオ	カヌナガワ	ミミノミコトお
	ヨツギミコ	カガミノトミハ	世継ぎ御子	鏡の臣は
	ウサマロト	アダツクシネハ	ウサマロと	アダツクシネは

	モノヌシト	ミコノモロハヅ	モノヌシと	御子の両羽ぞ	
	クニマツリ	ミケナヘモフス	国祭り	御饌嘗奏す	
	ヲモチキミ	トモニタスケヨ	モチ君	ともに助けよ	
	ナソムトシ	ムツキノモチニ	七十六年	正月の望に	
	ミコトノリ	ワレスデニヲヒ	勅	われすでに老ひ	
31-13	マツリゴト	ナオリナカトミ	政事	直り中臣	
	モノヌシノ	ヲヤコノトミニ	モノヌシの	親子の臣に	
	マカスベシ	モロトミコレト	任すべし	諸臣これと	
	ワカミヤオ	タテヨトイヒテ	若宮お	立てよといひて	
	ウチニイリ	ヤヨイツキヤエ	内に入り	三月十日キヤエ	(キヤエ=甲辰)
	カミトナル	アビラツヒメト	神となる	アビラツ姫と	
	モノヌシト	カシハラミヤニ	モノヌシと	カシハラ宮に	
	ハンベリテ	ナガクモニイリ	侍りて	長く喪に入り	

31-14	イキマスノ	ゴトニツトムル	生き坐すの	如に勤むる
	アメタネコ	クシネウサマロ	アメタネコ	クシネウサマロ
	ワカミヤニ	オフリハカレバ	若宮に	葬儀議れば
	タキシミコ	ヒトリマツリオ	タキシミコ	一人政お
	トラントス	ナオリミタリハ	執らんとす	直り三人は
	ワカミヤニ	トエドコタエズ	若宮に	問えど答えず
	モニイリテ	モロハニマカス	喪に入りて	両羽に任す
	ミオクリモ	コバミテノバス	葬儀も	拒みて延ばす
31-15	タギシミコ	フタオトオタツ	タギシミコ	二弟お絶つ
	ウネビネノ	サユノハナミノ	ウネビネの	サユの花見と
	ミアエシテ	ムロヤニメセバ	御饗して	室屋に召せば
	キスズヒメ	ウタノナオシオ	キスズ姫	歌の直しお
	コハシムル	ワカミヤフタオ	請はしむお	若宮札お

	トリミレバ	イイロヨムウタ	取り見れば	イイロ詠む歌
	サユカワユ	クモタチワタリ	『サユ川ゆ	雲たち渡り
	ウネビヤマ	コノハサヤギヌ	ウネビ山	木の葉さやぎぬ
31-16	カゼフカントス		風吹かんとす	
	ウネビヤマ	ヒルハクモトキ	ウネビ山	昼は雲訪み
	ユフサレバ	カセフカントス	夕去れば	風吹かんとぞ
	コノハサヤギル		木の葉さやぎる』	
	ワカミヤハ	コノフタウタオ	若宮は	この二歌お
	カンガエテ	サユニソコナフ	考えて	サユに害ふ
	コトオシル	カンヤキミコニ	ことお知る	カンヤキ御子に
	モノガタリ	ムカシキサキオ	物語り	「昔 后お
31-17	オカセシモ	ヲヤコノナサケ	犯せしも	親子の情け
	ウチニスム	イマノマツリノ	内に住む	今の政の

	ワガママモ	トミニサツケテ	わがままも	臣に授けて
	ノクベキオ	マタイラフコト	退くべきお	またいらふこと
	イカンゾヤ	アニガコバミテ	如何ぞや	兄が拒みて
	オクリセズ	ワレラマネクモ	送りせず	われら招くも
	イツワリゾ	コレハカラント	偽りぞ	これ謀らん」と
	ワカヒコニ	ユミツクラセテ	ワカヒコに	弓作らせて
31-18	マナウラニ	マカゴノヤジリ	マナウラに	マカゴの矢尻
	キタワセテ	カンヤキミコニ	鍛わせて	カンヤキ御子に
	ユキオハセ	ヌナカワミコト	鞆負はせ	ヌナカワ御子と
	エトイタル	カタオカムロノ	兄弟至る	カタオカ室の
	タギシミコ	オリニヒルネノ	タギシミコ	折に昼寝の
	ユカニフス	スメミコヤキニ	床に伏す	皇御子ヤキに
	ノタマフハ	エトノタカヒニ	日ふは	兄弟の互ひに

	キシラウハ	アヅクヒトナシ	軋らうは	預く人無し
31-19	ワレイラバ	ナンヂキイトテ	われ入らば	汝 射よとて
	ムロノトオ	ツキアケイレバ	室の戸お	突き開け入れば
	アニイカリ	ユキオヒイルト	兄怒り	鞆負ひ入ると
	キラントス	ヤキミコテアシ	斬らんとす	ヤキ御子手足
	ワナナケバ	スメミコユミヤ	慄けば	皇御子弓矢
	ヒキトリテ	ヒトヤオムネニ	引き取りて	一矢お胸に
	フタヤセニ	アテテコロシツ	二矢背に	当てて殺しつ
	オモムロオ	ココニオサメテ	おもむろお	ここに納めて
31-20	ミコノカミ	カンヤキハヂテ	御子のかみ	カンヤキ恥ぢて
	ウエナヒヌ	トイチニスミテ	宣えなひぬ	十市県に住みてむ
	イホノトミ	ミシリツヒコト	イホノの臣	ミシリツヒコト
	ナオカエテ	ツネノオコナヒ	名お変えて	常の行ひ

	カミノミチ	アニガマツリモ	神の道	兄が祭りも	
	ネンゴロニコソ		懇ろにこそ		
	ニイミヤコ	カタキニタテテ	新都	カタキに建てて	
	ミヤウツシ	ココニムカヘル	宮遷し	ここに迎へる	
31-21	トキアスス	モモミソヨトシ	時アスス	百三十四年	
	ツアトハル	ハツヒサナエノ	ツアト(丁丑)春	初日サナエの	(サナエ=庚申)
	コトホギシ	スエヒカサヤエ	寿ぎし	二十一日サヤエ	(サヤエ=庚辰)
	ワカミヤノ	イミナヤスギネ	若宮の	イミ名ヤスギネ	
	トシキソフ	アマツヒツギヲ	歳五十二	天つ日嗣ぎを	
	ウケツギテ	カヌガワミミノ	受継ぎて	カヌガワミミの	(第二代 綏靖天皇)
	アマキミト	タカオカミヤニ	天君と	タカオカ宮に	
	ハツコヨミ	カミヨノタメシ	初暦	神代の先例	
31-22	ミカザリオ	タミニオガマセ	御飾りを	民に拝ませ	

	ハハオアゲ	ミウエキサキト	母おあげ	ミウエ后と
	ナガツキノ	フソカツミエニ	九月の	十二日ツミエに (ツミエ=丙辰)
	オモムロオ	カシヲニオクリ	オモムロお	カシヲに送り
	ヨソホヒハ	アビラツヒメト	装ひは	アビラツ姫と
	ワニヒコト	トハズカタリヲ	ワニヒコと	問はず語りを
	ナシハベル	キミトミトモニ	なし侍る	君臣ともに
	ホラニイリ	カミトナルコト	洞に入り	神となること
31-23	アスキキテ	オヒマカルモノ	翌日聞きて	追ひ罷る者
	ミソミタリ	ヨニウタウウタ	三十三人	世に唱う歌
	アマミコガ	アメニカエレバ	『天皇子が	天に帰れば
	ミソミオフ	マメモミサホモ	三十三人追ふ	マメも節操も
	トホルアメカナ		通る天かな』	
	フトシハル	ミスズヨリヒメ	二年春	ミスズヨリ姫

	ウチツミヤ	シギクロハヤガ	内つ宮	シギクロハヤガ
	カワマタメ	オオシケキサキ	カワマタ姫	大典侍后
31-24	アダガマゴ	アダオリヒメハ	アダが孫	アダオリ姫は
	スケキサキ	カスガアフエノ	典侍后	カスガアフエの
	モロガメノ	イトオリヒメオ	モロが女の	イトオリ姫お
	ココタヘニ	ミコナガハシノ	ココタヘに	ミコナガハシの
	ヲシデモリ	カダキクニヅコ	ヲシデ守り	カダキ国造
	ツルギネガ	メノカツラヒメ	ツルギネが	女のカツラ姫
	ウチキサキ	イトカツラヨリ	内后	イトカツラヨリ
	シモキサキ	アメトミガメノ	下后	アメトミが女の
31-25	キサヒメモ	シモキサキマタ	キサ姫も	下后また
	コトメミソ	ハツキハツヒニ	侍女三十	八月初日に
	ミコトノリ	ワレキクムカシ	勅	「我聞く昔

	オオナムチ	コトナストキニ	オオナムチ	事なす時に
	ミモロカミ	ワレアレバコソ	ミモロ神	我あればこそ
	オオヨソノ	コトナッシムル	大よその	大事成さしむる
	サキミタマ	マタワザタマハ	幸御魂	またワザ魂は
	ワニヒコゾ	ユエオオナムチ	ワニヒコぞ	故オオナムチ
31-26	ツギトナス	ミタビメグリテ	継ぎとなす	三度めぐりて
	コトナセバ	ヒトリワカレテ	大事成せば	独り分れて
	ミタリメノ	ワニヒコマデガ	三人めの	ワニヒコ迄が
	ミワノカミ	ヨヨスメラギノ	ミワの神	世々天皇の
	マモリトテ	ナガツキヒソカ	護りとて	九月十一日
	マツラシム	アダツクシネニ	祭らしむ	アダツクシネに
	オオミワノ	カバネタマワル	オオミワの	姓 賜わる
	ワニヒコハ	モモコソフモゾ	ワニヒコは	百九十二歳ぞ

31-27	ツクシヨリ	ミユキオコエバ	筑紫より	御幸お請えば
	ミカワリト	ナオリナカトミ	御名代と	ナオリナカトミ
	クダラシム	トヨノナオリノ	下らしむ	豊国のナオリの
	アガタナル	ミソフノヌシモ	県なる	三十二の主も
	ノリオウク	サキニサミダレ	宣告お受く	先に五月雨
	ムソカフリ	サナエミモチニ	六十日降り	早苗ミモチに
	イタムユエ	ツグルヲシカド	痛む故	告ぐる勅使
	イナオリノ	ハラヒカゼフノ	稲直りの	祓ひ風吹の
31-28	マツリナス	ヌシラツトメテ	祭りなす	県主等務めて
	ヲシクサノ	マモリニナエモ	教草の	守りに苗も
	ヨミカエリ	ミアツケナレバ	蘇り	実厚くなれば
	ニギハヒテ	カレニホヅミノ	賑はひて	故に穂ヅ実の
	マツリナス	ソレヨリタミノ	祭りなす	それより民の

	ウブスナト	マツルスミヨシ	ウブスナと	祭るスミヨシ	
	モノヌシト	ナカトミアワセ	物主と	ナカトミ合わせ	
	ナホリカミ	ウサニイトウノ	ナホリ神	宇佐にイトウの	
31-29	ミメカミヤ	マタアマギミハ	御女神や	また天君は	
	ヒコユキオ	マツリノヲミノ	ヒコユキお	祭りの臣の	
	スケトナス	ヨサヤエウツキ	輔となす	四年四月	(サヤエ=庚辰)
	イホミサル	ミシリツヒコノ	イホミ去る	ミシリツヒコの	
	カミトナル	サヤトナガモチ	神となる	サヤト九月十五日	(サヤト=辛巳)
	キサキウム	イミナシギヒト	皇后生む	イミ名シギヒト	(第三代 安寧天皇)
	タマデミコ	ムホネシエフユ	タマデ御子	六年ネシエ冬	(キシエ=壬午)
	イトオリメ	ウムイキシミコ	イトオリ姫	生むイキシ御子	
31-30	スケトナル	フソキサアトノ	典侍となる	二十五年サアトの	(サアト=辛丑)
	ムツキミカ	シキヒトタテテ	正月三日	シキヒト立てて	

	ヨツギミコ	イマフソヒトシ	世継ぎ御子	今二十一年	
	シモソヨカ	アメタネコサル	二十四日	天タネコ去る	
	モモヤソナ	オモムロオサム	百八十七歳	オモムロ葬む	
	ミカサヤマ	カスガノトノニ	ミカサ山	カスガの殿に	
	アヒマツル	ミカサノカバネ	相祭る	ミカサの姓	
	ウサマロに	タマヒテタタユ	ウサマロに	賜ひて讃ゆ	
31-31	ミカサヲミ	ミソムホサツキ	ミカサ臣	三十六歳五月	
	ソカネナト	スメラギマカル	十日ネナト	天皇罷る	(ネナト=癸酉)
	ヤソヨトシ	ワカミヤソノヨ	八十四歳	若宮その夜	
	モハニイリ	ヨソヤヨイタリ	喪に入り	四十八夜至り	
	イサカハニ	ミソギノワヌケ	イサカハに	禊の輪抜け	
	ミヤニイツ	ミウエノトミハ	宮に出づ	先皇の臣は	
	カミマツル	ワカレツトムル	神祭る	分れ勤むる	

	ワカミヤノ	マツリコトトル	若宮の	政治とる	
31-32	トミハアラタゾ		臣は更新ぞ		
	トキアスズ	モモナソネアト	時アスズ	百七十ネアト	(ネアト=癸丑)
	アフミミカ	ミコシギヒトノ	七月三日	御子シギヒトの	
	トシミソミ	アマツヒツギオ	歳三十三	天つ日嗣お	
	ウケツギテ	タマテミアメノ	受け継ぎて	タマテミ天の	
	スメラギミ	ムカシココナノ	スメラ君	昔ココナの	
	ハナミトテ	ミススヨリヒメ	花見とて	ミススヨリ姫	
	カワマタメ	シギクロハヤガ	カワマタ姫	シギクロハヤガ	
31-33	タチニユキ	ミコウマントシ	館にゆき	御子産まんとし	
	ミカヤメル	トキメヲトキテ	三日病める	時男女来て	
	コレオコフ	キミニモフシテ	これお請ふ	君に奏して	
	タマテヒコ	カカエトリアゲ	タマテヒコ	抱えとり上げ	

	ヤスクウム	シギガヤアサヒ	易く産む	シギが館朝日	
	カカヤケバ	タマテガミナヲ	輝けば	タマテが御名を	
	ススメイフ	カバネオトエバ	進め云ふ	姓お問えば	
	ヲハコモリ	メハカツテヒコ	男はコモリ	女はカツテヒコ	
31-34	タマフナハ	ワカミヤノウシ	賜ふ名は	若宮の主人	
	モリノトミ	コモリカツテノ	守護の臣	コモリ・カツテの	
	フタカミオ	ヨシノニマツリ	二神お	ヨシノに祭り	
	ハハオアゲ	ミウエキサキト	皇母おあげ	御上后と	
	ナレミナモ	イミナモソレゾ	馴れ御名も	イミ名もそれぞ	
	カンナツカ	オモムロオクル	十月十日	オモムロ送る	
	ツキタオカ	キミエノシハス	ツキタ岡	キミエの十二月	(キミエ=甲寅)
	カタシホノ	ウキアナミヤコ	カタシホの	ウキアナ都	
31-35	キミトハツ	ヌナソヒメタツ	キミト初	ヌナソ姫立つ	(キミト=乙卯)

	ウチツミヤ	コレハクシネガ	内つ宮	これはクシネが	
	オフエモロ	ヌナタケメトリ	オフエモロ	ヌナタケ嫁り	
	イイカツト	ヌナソウムナリ	イイカツと	ヌナソ産むなり	
	シギハエガ	カハツメスケニ	シギハエが	カハツ姫スケに	
	コレノサキ	オホマガイトキ	これの先	オホマガイトキ	
	ナガハシニ	ウムミコイミナ	ナガハシに	産む御子イミ名	
	イロキネノ	トコネツヒコゾ	イロキネの	トコネツヒコぞ	
31-36	カレウチオ	オオスケトナス	かれ内宮お	大スケとなす	
	カワツヒメ	ウムミコキムナ	カワツ姫	産む御子諱	
	ハチギネノ	シギツヒコミコ	ハチギネの	シギツヒコ御子	
	ヨホツヤエ	ウツキノキカニ	四年ツヤエ	四月十五日に	(ツヤエ=丙辰)
	ヌナソヒメ	ウムミコイムナ	ヌナソ姫	産む御子イムナ	
	ヨシヒトノ	オオヤマトヒコ	ヨシヒトの	オオヤマトヒコ	

	スキトモゾ	タケイヒカミト	スキトモゾ	タケイヒカミと	
	イツモシコ	ナルケクニヲミ	イツモシコ	成るケクニ臣	
31-37	オオネトミ	ナルイワイヌシ	大根臣	成る齊 王	
	ムホヲシエ	ムツキソキカニ	六年ヲシエ	一月十五日に	(ヲシエ=戊午)
	ウチノウム	イムナトキヒコ	内宮の産む	諱トキヒコ	
	クシトモセ	ソヒノハツミカ	クシトモセ	十一年の初三日	
	ヨシヒトノ	イマヤトセニテ	ヨシヒトの	今八年にて	
	ヨツギミコ	ミソヤサミエノ	世継御子	三十八年サミエの	(サミエ=庚寅)
	シハスムカ	スメラギマカル	師走六日	スメラギ罷る	
	ワカミヤノ	モハイリヨソヤ	若宮の	モハ入り四十八日	
31-38	ホギモナシ	イサカハミソギ	寿ぎもなし	イサカハ禊ぎ	
	ミヤニイデ	マツリゴトキク	宮に出で	政りごと聴く	
	トミワケテ	ウキアナノカミ	臣分けて	ウキアナの神	

	ミアエナス	アキオモムロヲ	御饗なす	秋オモムロを	
	ウビネヤマ	ミホドニオクル	ウビネ山	ミホドに送る	
	トシナナソナリ		歳七十なり		
	トキアスズ	フモヤホサミト	時アスズ	二百八年サミト	(サミト=辛卯)
	キサラヨカ	ネアエワカミヤ	五月四日	ネアエ若宮	(ネアエ=壬子)
31-39	トシミソム	アマツヒツギオ	歳三十六	天つ日嗣お	
	ウケツギテ	オオヤマトヒコ	受け継ぎて	オオヤマトヒコ	
	スキトモノ	アメスメラギト	スキトモノ	天スメラギと	
	タタエマス	アメノノリモテ	讃えます	天の法もて	
	オガマセテ	マカリオコヨミ	拝ませて	マカリオ暦	
	アラタメテ	ミオヤオクリノ	改めて	御親送りの	
	ホツミヒト	シワスノムカト	八月一日と	師走の六日と	
	モハニイリ	ナガツキシソミカ	モハに入り	九月十三日	

31-40	ハハオアゲ	ミウエキサキト	皇母お上げ	御上后と
	ムツキキカ	カルマガリヲノ	正月五日	カルマガリヲの
	ニキミヤコ	ウツシキサラギ	新都	遷し五月
	ソヒニタツ	アメトヨツヒメ	十一日に立つ	天トヨツ姫
	ウチツミヤ	シギキデガメノ	内つ宮	シギキデが姫の
	キヅミスケ	フトマワカガメ	キヅミスケ	フトマワカガ姫
	イヒヒメオ	ココタヘキトシ	イヒヒ姫お	ココタへ五年
	ヤヨヒユミ	スミエニミユミ	三月弓張	スミエに御幸
31-41	ミルオミテ	ウチノウムミコ	海松お見て	内宮の産む御子
	カエシネノ	イミナミルヒト	カエシネの	イミ名ミルヒト
	ウチノチチ	イキシヲヲキミ	内宮の父	イキシ大公
	イイヒメガ	タケアシニウム	イイヒ姫が	タケアシに産む
	タヂマミコ	イミナタケシキ	タヂマ皇子	イミ名タケシキ

	フソフトシ	キサラツシトハ	二十二年	二月ツシトは	(ツシト=丁未)
	ソフオシエ	カエシネミコオ	十二日オシエ	カエシネ御子お	(オシエ=戊午)
	ユツギナル	コトシソヤナリ	世嗣なる	今年十八歳なり	
31-42	ミソヨトシ	ナカツキヤカニ	三十四年	九月八日に	
	キミマカル	ワカミヤカミニ	君薨る	若宮神に	
	ツカエント	モハヒトホマデ	仕えんと	モハ一歳まで	
	ミアエナス	イキマスゴトク	御饗なす	生きます如く	
	アツルフユ	オクルウネビノ	翌る冬	送るウネビの	
	マナゴタニ	ナソヨニマシテ	マナゴ谷	七十四歳にまして	
	オクルトミ	トハズカタリヤ	送る臣	問はず語りや	
	ワカキミモ	オクリオサメテ	若君も	送りおさめて	
31-43	ミナカエシマス		皆帰します		
	トキアスズ	フホヨソミトシ	時アスズ	二百四十三年	

	ツミエハル	ムツキツウエハ	ツミエ(丙寅)春	正月ツウエは	(ツウエ=丙戌)
	コカキミエ	アマツヒツギオ	九日キミエ	天つ日嗣お	(キミエ=甲寅)
	ウケツギテ	カエシネアメノ	受け継ぎて	カエシネ天の	
	スメラキミ	カサリオガマセ	スメラ君	飾り拝ませ	
	ウツキキカ	ミウヘキサキト	四月五日	ミウへ后と	
	ハハオアゲ	カタギワキカミ	母おあげ	カタギワキカミ	
31-44	キケココロ	ミヤコウツシテ	キケココロ	都遷して	
	ハツトシニ	イツシココロオ	初年に	イツシココロお	
	ケクニトミ	キミトシミソヒ	ケクニトミ	君年三十一	
	サカイオカ	ワカミヤノトキ	サカイ岡	若宮の時	
	ワカハエガ	ヌナギメハスケ	ワカハエが	ヌナギ姫はスケ	
	サダヒコガ	メノオホキメハ	サダヒコが	姫のオホキ姫は	
	ナガハシニ	ホシテアツカフ	ナガハシに	ホシテ扱ふ	

	カリスケヨ	ウチハベムタリ	仮スケよ	内侍六人
31-45	シモヨタリ	アオメミソタリ	下女四人	青女三十人
	フソコトシ	キシエハツミカ	二十九年	キシエ正月三日 (キシエ=甲午)
	キサキタツ	ヨソタリヒメノ	后 立つ	ヨソタリ姫の
	トシソイゾ	ムカシヤヒコニ	歳十五ぞ	昔ヤヒコに
	ユリヒメオ	タマエバウメル	ユリ姫を	賜えば産める
	アメキダキ	コノアメオシヲ	アメキダキ	子のアメオシヲ
	マゴムスメ	ヨソタリハコレ	孫娘	ヨソタリはこれ
	ミソヒトシ	ウチミヤノアニ	三十一年	うち宮の兄
	オキツヨソ	ナルケクニトミ	オキツヨソ	なるケクニ臣
	ヨソキトシ	サツキソキカニ	四十五年	五月十五日に
	キサキウム	イムナオシキネ	后 産む	イム名オシキネ
	アマタラシ	ヒコクニノミコ	アマタラシ	ヒコクニの御子

	ヨソコトシ	キミエハツヒニ	四十九年	キミエ初日に	(キミエ=甲寅)
	キサキウム	イムナオシヒト	后 産む	イム名オシヒト	
	ヤマトタリ	ヒコクニノミコ	ヤマトタリ	ヒコクニの御子	
	ウムトキニ	アサヒカガヤキ	産む時に	朝日輝き	
	ムソヤトシ	ムツキソキカニ	六十八年	正月十四日に	
	オシヒトオ	ワカミヤトナス	オシヒトお	若宮となす	
	トシハタチ	アスオシキネオ	歳二十	あすオシキネお	
	ヲキミトシ	カスガオタマフ	央君とし	カスガお賜ふ	
	ヤソミトシ	アキハツキキカ	八十三年	秋八月五日	
	キミマカル	トシモモソミゾ	君罷る	歳百十三ぞ	
	トミキサキ	ミナトドマリテ	臣后	皆とどまりて	
	モニツカフ	ミコカミマツル	喪に仕ふ	皇太子神まつる	
31-48	トシミソキ	ヲヤニツカエテ	歳三十五	親に仕えて	

	タミヲサム	カレアニヲキミ	民治む	故兄ヲ君
	ウエナヒテ	ソノコオオヤケ	宣なひて	その子大宅
	アワタオノ	カキモトイチシ	栗田・小野	柿本・イチシ
	ソトミマメ	キミトシゴトノ	十臣まめ	大君歳毎の
	ハヅキキカ	ヤヨノモマツリ	八月五日	八夜の喪祭り
	マコトナルカナ		誠なるかな	
	トキアスズ	ミモフソムトシ	時アスズ	三百二十六年
31-49	ハツノナカ	アマツヒツギオ	正月の七日	天つ日嗣お
	ウケツギテ	タリヒコクニノ	受け継ぎて	タリヒコクニの
	アマツキミ	イムナオシヒト	天つ君	諱オシヒト
	クラヒナル	カザリオタミニ	位なる	飾りお民に
	オガマセテ	シギナガハエガ	拝ませて	シギナガハエが
	ナガヒメオ	オオスケキサキ	ナガ姫お	オオスケ后

	トチイサカ	ヒコガキサカメ	トチイサカ	ヒコガキサカ姫
	ウチキサキ	ナガハシニイテ	内后	ナガハシに居て
31-50	ヲシテモリ	スヘテソフナリ	ヲシテ守り	総て十二后なり
	フトシフユ	ムロアキツシマ	二年冬	ムロアキツシマ
	ニヒミヤコ	ソヒホムラクモ	新都	十一年群雲
	ホヲムシオ	ツクレバキミノ	穂汚虫お	告くれば君の
	ミツカラニ	ハラヒカゼフノ	自らに	祓ひ風吹の
	マツリナス	カレヨミカエリ	祭りなす	故蘇り
	ミヅホアツ	ヨリテホツミノ	瑞穂アツ	よりて秀つ実の
	マツリナス	フソムトシハル	祭りなす	二十六年春
31-51	キサラソヨ	カスガヲキミノ	二月十四日	カスガ大君の
	オシヒメオ	イレテウチミヤ	オシ姫お	入れてうち宮
	コトシソミ	ミソミトシノチ	今年十三	三十三年のち

	ハツキソヨ	オクルミウヘノ	八月十四日	送るミウへの
	オモムロオ	ハカタノホラニ	オモムロお	ハカタの洞に
	オサムナリ	トミメノカラモ	葬むなり	臣姫の遺骸も
	ミナオサム	イキルミタリモ	皆葬む	生きる三人も
	オヒマカル	アメミコノリヤ	追ひ罷る	天御子法や
31-52	キソヒトシ	ナガツキハツヒ	五十一年	九月初日
	キサキウム	イムナネコヒコ	后産む	イム名ネコヒコ
	オオヤマト	フトニノミコゾ	オオヤマト	フトニの御子ぞ
	ナソムトシ	ハルムツキキカ	七十六年	春正月五日
	ネコヒコノ	トシフソムタツ	ネコヒコの	歳二十六立つ
	ヨツギミコ	コソフトシハル	世嗣御子	九十二年春
	スルガミヤ	ハフリハラノエ	スルガ宮	ハフリ富士の絵
	タテマツル	ミコモフセドモ	奉る	皇太子申せども

31-53	キミウケズ	ミヨモモフトシ	君うけず	御代百二年
	ムツキコカ	キミマカルトシ	正月九日	君罷る歳
	モモミソナ	ミコモハオサム	百三十七	皇太子喪おさむ
	ヨソヤノチ	ワカミヤニイデ	四十八日後	若宮に出で
	マツリゴト	ナガツキミカニ	政ごと	九月三日に
	オモムロオ	タマテニオクリ	オモムロお	タマテに送り
	キタリオフ	トモノオサメテ	五人追ふ	共におさめて
	アキツカミカナ		アキツ神かな	

● 富士(フジ)と淡海(アワウミ)瑞(ミズ)の紋(アヤ)

32- 1	トキアスス	ヨモフソヤトシ	時アスス	四百二十八年
	ハツソフカ	アマツヒツギオ	正月十二日	天つ日嗣お

	ウケツギテ	ヤマトフトニノ	承け継ぎて	ヤマトフトニの
	アマツキミ	イムナネコヒコ	天君	諱名ネコヒコ (孝霊天皇・第七代)
	モロハカリ	アメノミマゴノ	諸臣議り	天の御孫の
	ノリオモテ	タミノオカマセ	勅おもて	民に拝ませ
32- 2	ハハオアゲ	ミウエキサキト	母おあげ	御上后と
	コゾシハス	ヨカニクロタノ	去年十二月	四日にクロタの
	イホドミヤ	ウツシテコトシ	イホド宮	遷して今年
	ハツコヨミ	フトシキサラギ	初暦	二年二月
	ソヒニタツ	シギノオオメガ	十一日に立つ	シギのオオメが
	ホソヒメオ	キサキゾカスガ	ホソ姫お	后ぞカスガ
	チチハヤガ	ヤマカヒメナル	チチハヤが	ヤマカ姫なる
	スケキサキ	トイチマソヲガ	スケ后	トイチマソヲが
32- 3	マシタヒメ	ココタヘトナル	マシタ姫	ココタへとなる

	ウチヨタリ	オシモモヨタリ	内女四人	オ下女も四人
	ミトシハル	オオミナクチト	三年春	オオミナクチと
	オオヤクチ	トモニスクネト	オオヤクチ	共にスクネと
	ナツウチメ	ヤマトクニカガ	夏内女	ヤマトクニカが
	ミツコウム	ナハミナヤマト	三つ子産む	名は皆ヤマト
	モモソヒメ	キサセリヒコニ	モモソ姫	キサセリヒコに
	ワカヤヒメ	ハハモヤマトノ	ワカヤ姫	母もヤマトの
32- 4	オオミヤメ	ソヒフユイモト	大宮女	十一年冬・妹
	ハヘオウチ	ソミシハスハツ	ハヘお内女	十三年十二月一日
	ハヘヒメモ	マタミツコウム	ハヘ姫も	又三つ子産む
	ナハエワカ	タケヒコノナカ	名はエワカ	タケヒコの中
	ヒコサシマ	トワカタケヒコ	ヒコサシマ	トワカタケヒコ
	ハハモアゲ	ワカオオミヤメ	母もあげ	若大宮女

	ソヤホハル	ハツモチキサキ	十八年春	正月十五日後
	ウムミコハ	ヤマトネコヒコ	産む皇子は	ヤマトネコヒコ
32- 5	クニクルノ	イミナモトギネ	クニクルの	イミ名モトギネ (孝元天皇・第八代)
	フソヨハル	イツモハツソヒ	二十五年春	いつも正月十一日
	アガタメシ	ミナモノタマヒ	アガタ召し	皆物賜ひ
	ミコトノリ	モシヒハラミコ	勅	「もし一腹三子
	ウムモノハ	ミカドニツゲヨ	産む者は	ミカドに告げよ
	シタタミモ	タマモノアルゾ	下民も	賜物あるぞ
	ソノユエハ	アメノミマゴノ	その故は	天の皇孫の
	サクヤヒメ	ミツコウムヨリ	サクヤ姫	三つ子産むより
32- 6	ノチキカズ	ワレイマミツゴ	後聞かず	われ今三つ子
	ウムニツキ	ホノカニキケバ	産むにつき	ほのかに聞けば
	ミツコオバ	マビクトナズケ	三つ子おば	間引となづけ

	コロストヤ	イマヨリアラバ	殺すとや	今よりあらば
	ツミヒトゾ	ワガコモヒトハ	罪人ぞ	わが子も人は
	アメノタネ	シカイヌチヨリ	天の胤	鹿犬千頭より
	ヒトヒトリ	タケミナカタノ	人一人	タケミナカタの
	ノリナリト	ミコトサダマル	宣なりと	勅 定まる
32- 7	クニツカサ	タミニフレント	国司	民に布れんと
	モロカエル	アスソフカアサ	諸臣帰る	翌日十二日朝
	スワハフリ	ハラヤマノエオ	スワハフリ	ハラヤマの絵お
	タテマツル	キミコレオホム	奉る	君これお賞む
	オナジトキ	シラヒゲノマゴ	同じ時	シラヒゲの子孫
	アメミカゲ	アワウミノエオ	アメミカゲ	天地海の絵お
	タテマツル	キミオモシロク	奉る	君面白く
	タマモノヤ	アルヒカスガニ	賜物や	ある日カスガに

32- 8	ノタマフハ	ワレムカシコノ	宣まふは	われ昔この
	エオミレド	タテナデタカク	絵お見れど	たてなでたかく
	コレオスツ	イマヤマサワノ	これお棄つ	今山沢の
	エアワセハ	ワリフダアワス	絵合せは	割札合わす
	ヨキシルシ	ハラミノヤマノ	嘉き兆	ハラミの山の
	ヨキクサモ	キモトセマエニ	よき草も	五百年前に
	ヤケウセシ	タネモフタタビ	焼け失せし	種も再び
	ナルシルシ	ニオウミヤマオ	なる前兆	ニオ海山お
32- 9	ウルホセバ	チヨミルクサモ	潤ほせば	千代見る草も
	ハユルゾト	タノシミタマヒ	生ゆるぞと	楽しみ給ひ
	ミソムトシ	ハツハルソヒニ	三十六年	初春十日に
	モトキネオ	ヨツギトナシテ	モトキネお	世継ぎとなして
	ミテヅカラ	ミハタヲリトメ	御親ら	御機織留

	サツケマス	コレアマカミノ	授けまし	これ天神の	
	オシデナリ	アサユフナカメ	璽なり	朝夕眺め	
	カンガミテ	タミオヲサメヨ	鑑みて	民お治めよ	
32-10	ヨソホヒオ	タミニオカマセ	装ひお	民に拝ませ	
	ヤヨヒナカ	ハラミヤマヘト	三月中日	ハラミ山えと	(ハラミ山=富士山)
	ミユキナル	ソノミチナリテ	御幸なる	その道なりて	
	クロタヨリ	カグヤマカモヤ	クロタより	カグ山カモヤ	
	タガノミヤ	スハサカオリノ	タガの宮	スハ・サカオリの	
	タケヒテル	ミアエシテマツ	タケヒテル	御饗えして待つ	
	ヤマノボリ	クダルスバシリ	山登り	下るスバシリ	
	スソメグリ	ムメオオミヤニ	裾めぐり	ムメ大宮に	
32-11	イリキマス	カスガモフサク	入り居ます	カスガ奏さく	
	ミネニエル	ミハノアヤクサ	峯に得る	ミハの霊草	

	チヨミカヤ	モロクワントテ	千代見草かや	諸食わんとて
	ニテニガシ	タレモエクワズ	煮て苦し	誰も得食わず
	ナカミネノ	アテハアワウミ	中峯の	当ては天地海
	ヤツミネハ	スツノヤツウミ	八峯は	裾の八つ湖
	ミツウマリ	ヤクレドナカハ	三つ埋まり	焼くれど中峯は
	カワラジト	ミツクリノウタ	変らじと	御作りの御製
32-12	ナカハフリ	ナカハワキツツ	『中はふり	中ば湧きつつ
	コノヤマト	トモシヅマリノ	この山と	共鎮まりの
	コノヤマトコレ		この山よこれ』	
	カクヨミテ	ヤマノサラナト	かく詠みて	山の新名と
	オボストキ	タコノウラビト	思す時	タコの浦人
	フヂノハナ	ササグルユカリ	藤の花	捧ぐる縁り
	ハラミエテ	ナホウムミウタ	孕み得て	なほ産む御製

	ハラミヤマ	ヒトフルサケヨ	『ハラミ山	人ふるさけよ
32-13	フジクズノ	ナオモユカリノ	藤蔓の	名おも縁りの
	コノヤマヨコレ		この山よこれ』	
	コレヨリモ	ナモフジノヤマ	これよりぞ	名もフジの山
	ミナミジオ	ミヤコニカエリ	南 路お	都にかえり
	ムメミヤノ	ハフリホツミノ	ムメ宮の	ハフリホツミの
	オシウドニ	イヅアサマミコ	オシウドに	イヅアサマ御子
	ヤマツミノ	ヨカミウツシテ	ヤマツミの	四神遷して
	ヤスガハラ	トキタケヒテル	ヤスガハラ	時タケヒテル
32-14	タマガハノ	カンタカラフミ	タマガハの	神宝 文典
	タテマツル	コレアメミマゴ	奉る	これ天御孫
	ハラヲキミ	ソノコカミヨノ	ハラヲ君	その子神代の
	ミノリエテ	イマニナガラエ	御法得て	今に永らえ

	キミエミテ	コノタケトメオ	君笑みて	子のタケトメお
	トミニコフ	タケツツクサノ	臣に乞ふ	タケツツクサの
	マツリツグ	タケダノヲヤゾ	祭り継ぐ	タケダの祖ぞ
	カンタカラ	イツモニオサム	神宝	イツモに納む (イツモ=出雲)
32-15	キソミトシ	ニシナカオエズ	五十三年	ニシ仲お得ず
	チノクチト	ハリマヒカハニ	道の口と	ハリマ・ヒカハに
	インベヌシ	ヤマトキサセリ	インベ主	ヤマトキサセリ
	コレニソ	エワカタケヒコ	これに副え	エワカタケヒコ
	キビカンヂ	トワカタケヒコ	キビ上道	トワカタケヒコ (キビ=吉備)
	キビシモヂ	ソノワケトキテ	キビ下道	その道理説きて
	マツロワズ	イササワケエハ	帰順わず	イササワケえは
	ヒコサシマ	コシクニオタス	ヒコサシマ	コシ国お治す (コシ=越)
32-16	ナソムトシ	キサラギヤカニ	七十六年	二月八日に

	キミマカル	トシモモソヤゾ	君罷る	歳百十八ぞ
	ミコノモハ	ヨソヤニヌギテ	皇太子の喪衣	四十八夜に脱ぎて
	タミトドム	ムトセタツマデ	臣留む	六年経つまで
	ミアエナス	イマスゴトクニ	御饗なす	居ます如くに
	ウヤマヒテ	トミモヨオサリ	敬ひて	臣も世お去り
	カリトノミ	ヲヤニツカフル	仮臣のみ	親に仕ふる
	マコトナルカナ		誠なるかな	
32-17	トキアスズ	キモヨホムツキ	時アスズ	五百四年一月
	ソヨカキミ	アマツヒツギオ	十四日君	天つ日嗣お
	ウケツギテ	ヤマトクニクル	受け継ぎて	ヤマトクニクル (孝元天皇・第八代)
	アマツキミ	アメノミマゴノ	天つ君	天の皇孫の
	タメシナリ	カサリオタミノ	例しなり	飾りお民に
	オガマセテ	ミウエキサキト	拝ませて	御上后と

	ハハオアゲ	ソフノツボネニ	母おあげ	十二の局に
	キサキタツ	ヨトシノヤヨヒ	后たつ	四年の三月
32-18	ニイミヤコ	カルサカヒバラ	新都	カルサカヒバラ
	キホセミナ	ウチウツシコメ	五年六月	内后ウツシコメ
	ウムミコハ	ヤマトアエクニ	産む御子は	ヤマトアエクニ
	オオヒコゾ	ムホナツキムカ	オオヒコゾ	六年九月六日
	イホドミヤ	オモムロオサム	イホド宮	オモムロ納む
	ムマサカヤ	ナホキサラフカ	ムマサカヤ	七年二月二日
	ウツシコメ	ウチミヤトナル	ウツシコメ	内宮となる
	ウツシコヲ	ナルケクニトミ	ウツシコヲ	成るけくに臣
32-19	シワスハツ	ヒノデニキサキ	十二月一日	日の出に后
	ウムミコハ	キミナフトヒヒ	産む御子は	キミ名フトヒヒ (開化天皇・第九代)
	ワカヤマト	ネコヒコノミコ	ワカヤマト	ネコヒコの御子

	コホノナツ	アメヨソカフリ	九年の夏	雨四十日降り
	ヤマシロダ	アワウミアブレ	ヤマシロダ	天地海あぶれ
	タモミモチ	ナゲキツグレバ	田もミモチ	嘆き告ぐれば
	ミコトノリ	ミケヌシヲシニ	勅	ミケヌシ勅使に
	イノラシム	アワクニミヲニ	祈らしむ	天地国ミヲに
32-20	タナカカミ	ハレオイノリテ	タナカ神	晴れお祈りて
	カゼフナス	コレオオナムチ	風ふなす	これオオナムチ
	タナカノリ	ミナツキソムカ	タナカ祈り	六月十六日
	オコナヒハ	ミモムソウタヒ	おこなひは	三百六十歌ひ
	オシクサニ	イタミモナオル	教草に	痛みも治る
	マモリコテ	タニヌカヅケバ	守りもて	田に額づけば
	ヨミガエリ	ヤハリワカヤギ	蘇みがえり	やはり若やぎ
	ミヅホアツ	タミカテフエテ	瑞穂あつ	民糧殖ゑて

32-21	ニギハエバ	オホミケヌシノ	賑えば	オホミケヌシの
	マツリヲミ	ナヅクソレヨリ	祭り臣	名づくそれより
	ヤマシロモ	ツクシナオリモ	ヤマシロも	ツクシナオリも
	イツモニモ	イセハナヤマモ	イツモにも	イセ・ハナヤマも
	トシゴトニ	マツルカゼフゾ	年毎に	祭る風ふぞ
	ソヒヤヨヒ	モチニマタウム	十一年三月	十五日に又産む
	トトヒメハ	トモニミユキヤ	トト姫は	共に御幸や
	ヘソギネガ	ヤマトイケスニ	ヘソギネが	ヤマトイケスに
32-22	ミアエナス	メノイカシコメ	御饗なす	娘のイカシコメ
	カシハデニ	メスウチキサキ	膳でに	召す内后
	コトシソヨ	ソミホハツミカ	今年十四年	十三年正月三日
	イカシコメ	ウムミコノナハ	イカシコメ	産む御子の名は
	オシマコト	イムナヒコフト	オシマコト	イム名ヒコフト

	ソヨフツキ	ハニヤスメウム	十四年七月	ハニヤスメ産む
	ハニヤスノ	イムナタケハル	ハニヤスの	イム名タケハル
	コレカウチ	アオカキカケガ	これカウチ	アオカキカケガ
32-23	メノオシモ	ナルウチキサキ	娘の御下后	なる内后
	フソフトシ	ツツキソフカニ	二十二年	一月十二日に
	ヨツギナル	フトヒヒノミコ	世嗣なる	フトヒヒの御子
	コトシソム	ノチオシマコト	今年十六	後オシマコト
	オウチガト	タカチエテウム	オウチが妹	タカチ得て産む
	ウマシウチ	コレキウツガト	ウマシウチ	これキ・ウツが妹
	ヤマトカゲ	メトリウムコハ	ヤマトカゲ	娶り産む子は
	タケウチゾ	キソナナガツキ	タケウチぞ	五十七年九月
32-24	フカマカル	スヘラギノトシ	二日まかる	スヘラギの歳
	モモソナゾ	ミコノモハイリ	百十七ぞ	御子の喪入り

	イキマセル	ゴトクミアエシ	生きませる	如く御饗し	
	ヨソヤスギ	マツリゴトキキ	四十八日過ぎ	政ごと聴き	
	ム	トシノチ	オモムロオサム	六年後	オモムロ納む
	ツルギシマ	ナツキスエヨカ	ツルギシマ	九月二十四日	
	メトモヤムナリ		女達辞むなり		
	トキアズ	キモムソヨフユ	時アズ	五百六十年冬	
32-25	メノソフカ	カスガイサカワ	十月の十二日	カスガイサカワ	
	ニイミヤコ	ミコトシキソヒ	新都	御子歳五十一	
	ネノフソカ	アマツヒツギオ	十一月の十二日	天つ日継お	
	ウケツギテ	イムナフトヒヒ	受け継ぎて	イム名フトヒヒ (開化天皇・第九代)	
	ワカヤマト	ネコヒコアメノ	ワカヤマト	ネコヒコ天の	
	スメラギト	タミニオガマセ	スメラギと	民に拝ませ	
	ハハモアゲ	ソフノキサキモ	母もあげ	十二の後も	

	サキニアリ	アクルキナエオ	先にあり	明くるキナエお	(キナエ=
32-26	ハツノトシ	ナトシハツソフ	初の年	七年正月十二日	
	イキシコメ	タテテウチミヤ	イキシコメ	立ててウチ宮	
	コレノサキ	キミメストキニ	これの先	君召す時に	
	オミケヌシ	イサメモフサク	オミケヌシ	諫め申さく	
	キミキクヤ	シラウドコクミ	「君きくや	シラウド・コクミ	(シラウド=白人)
	ハハオカス	ガナイマニアリ	母犯す	ガナ今にあり	
	キミマネテ	ガナオカフルヤ	君まねて	ガナお被るや」	
	ウツシコヲ	コタエメイナリ	ウツシコヲ	答え「姪なり	
32-27	ハハナラズ	イワクイセニハ	母ならず	日くイセには	
	メトツギテ	ウミノヲヤナシ	女嫁ぎて	産みの親なし	
	ムカシオバ	メイイマハツヅ	昔オ母	姪今はツヅ	
	ウムコアリ	ツラナルエダノ	生む子あり	連なる枝の	

	オシマコト	ハハハタガヒゾ	オシマコト	母はたがひぞ」
	マタコタエ	アニツキヒトツ	また答え	「天に月一つ
	ハハハツキ	シモメハホシヨ	母は月	下后は星よ
	コレオメス	ナゲキテイワク	これお召す」	嘆きて日く
32-28	ヲヲンカミ	アメノミチナス	御神	天の道なす
	ヨヨノキミ	ツギウケオサム	代代の君	継ぎ受け治む
	アメヒツギ	ナンヂガマツリ	天日嗣	汝が政り
	イサメズテ	オモネリキミオ	諫めずて	おもねり君お
	アナニスル	ココロキタナシ	あなにする	心 汚なし
	キミイカン	ワガミヲヤカミ	君いかん	わが御祖神
	ハナレンヤ	ケガレハマズト	放れんや	穢れ食まず」と
	イイオハリ	カエレドキミハ	云い終り	帰れど君は
32-29	コレキカズ	ミケヌシヲヤコ	これ聞かず	ミケヌシ親子

	ツグミイル	シハスソミカニ	嚙み居る	十二月十三日に
	ユギリノメ	タケノヒメウム	ユギリの女	タケノ姫産む
	ユムズミノ	イミナコモツミ	ユムズミの	イミ名コモツミ
	ヤホヤヨヒ	カスガオケツメ	八年三月	カスガ・オケツ姫
	スケガウム	イムナアリズミ	典侍が生む	イム名アリズミ
	ヒコキマス	ソホサノソフカ	ヒコキマス	十年五月の十二日
	ウチミヤノ	ウムミコミマキ	内宮の	産む御子ミマキ
32-30	イリヒコノ	キミナキソニエ	イリヒコの	キミ名キソニエ (崇神天皇・第十代)
	ミナツキノ	ソフカヘソキネ	六月の	十二日ヘソキネ
	カルオトド	ネニウツシコヲ	カル大臣	十一月にウツシコヲ
	イハイヌシ	ソミムツキキカ	斎主	十三年正月五日
	キサキマタ	ウムミマツヒメ	后又	産むミマツ姫
	メスウチメ	カツキタルミガ	召す内后	カツキタルミガ

	タカヒメガ	サノモチニウム	タカ姫が	五月の十五日に産む
	ハツラワケ	イミナタケトヨ	ハツラワケ	諱タケトヨ
32-31	フソヤトシ	ムツキノキカニ	二十八年	正月の五日に
	ヨツギタツ	キソニエノミコ	世嗣立つ	キソニエの御子
	コトシソコ	ムソトシノナツ	今年十九	六十年の夏
	ウツキコカ	キミマカルトシ	四月九日	君まかる歳
	モモソヒヅ	ミコノモハイリ	百十一ぞ	御子の喪入り
	ヨソヤノチ	マツリゴトキキ	四十八日後	政ごときき
	トミトドメ	イマスノミアエ	臣とどめ	いますの御饗
	メツキミカ	オモムロオサム	十月三日	オモムロ納む
	イササカゾコレ		イササカぞこれ	

● 神(カミ)崇(アガ)め、疫病(エヤミ)治(タ)す紋(アヤ)

33- 1	トキアスス	ムヲフソヒトシ	時アスス	六百二十一年
	キナエハル	ムツキネシエハ	キナエ春	正月ネシエ朔(キナエ=甲申・ネシエ=壬午)
	ソミキシエ	キソニエノミコ	十三日キシエ	キソニエの御子 (キシエ=甲午)
33- 2	トシキソフ	アマツヒツギオ	歳五十二	天 日嗣お
	ウケツギテ	ミマキイリヒコ	受け継ぎて	ミマキイリヒコ
	アマツキミ	ミグサツカヒモ	天 君	三種使ひも
	アメタメシ	タミニオガマセ	天ためし	民に拜ませ
	ハハオアゲ	ミウエキサキト	母お崇げ	皇 后と
	モモフソヒ	オオハハノトシ	百二十一歳	大御母の歳
	モモムソフ	オオンキサキト	百六十二歳	太皇太后と
	ハツトシノ	キサラギサウト	初年の	二月サウト (サウト=辛亥)
33- 3	ソムツミエ	オオヒコノメノ	十六日ツミエ	オオヒコの女の (ツミエ=丙寅)

	コトシソヒ	メシテキサキノ	今年十一歳	召して後の
	ミマキヒメ	キアラカトベガ	ミマキ姫	キアラカトベガ
	トオツアヒ	メクハシウチメ	トオツアヒ	メクハシ内后
	オオスケニ	アフミガヤサカ	オオスケに	アフミがヤサカ
	フリイロネ	カリスケットナル	フリイロネ	仮スケとなる
	ヲハリガメ	オオアマウチメ	ヲハリが女	オオアマ内后
	ナガハシノ	ヲシデトルモリ	ナガハシの	璽 取る守り
33- 4	コレノサキ	メクハシガウム	これの先	メクハシが産む
	トヨスキメ	オオアマガウム	トヨスキメ	オオアマが産む
	ヌナギヒメ	メクハシガウム	ヌナギ姫	メクハシが産む
	ヤマトヒコ	イムナキソキネ	ヤマトヒコ	イム名キソキネ
	ヤサカウム	ヤサカイリヒコ	ヤサカ産む	ヤサカイリヒコ
	オオギネゾ	カレハハオアゲ	オオギネぞ	故母お上げ

	ミホナヅキ	シギミズガキニ	三ホ九月	シギミズガキに
	ニイミヤコ	ヨホメスエミカ	新都	四ホ・メ二十三日
33- 5	ミコトノリ	ミヲヤノサヅク	勅	「御祖の授く
	ミグサモノ	クニトコタチハ	三種もの	クニトコタチは
	カンヲシデ	アマテルカミハ	神璽	天照神は
	ヤタカガミ	オオクニタマハ	八咫鏡	オオクニタマは
	ヤエガキト	ツネニマツリテ	八重垣剣と	常に祭りて
	ミトカミト	キハトホカラズ	身と神と	際遠からず
	トノユカモ	ウツハモトモニ	殿床も	器もともに
	スミキタル	ヤヤイツオソレ	住み来る	やや稜威恐れ
33- 6	ヤスカラズ	アマレルカミハ	安からず	アマテル神は
	カサヌヒニ	トヨスキヒメニ	カサヌヒに	トヨスキ姫に
	マツラシム	オオクニタマハ	祭らしむ	オオクニタマは

	ヌナギヒメ	ヤマヘノサトニ	ヌナギ姫	山辺の里に
	マツラシム	イシコリドメノ	祭らしむ	イシコリドメの
	マゴカガミ	アメヒトカミノ	孫鏡	アメヒト神の
	マゴツルギ	サラニツクラセ	孫劍	更に造らせ
	アマテラス	カミノヲシデト	天照らす	神の教璽と
33- 7	コノミグサ	アマツヒツギノ	この三種	天つ日嗣の
	カンタカラ	キトシエヤミス	神宝」	五年疫病す
	ナカバカル	ムトシタミチル	半ば枯る	六年民散る
	コトのりに	タシガタシカレ	コトのりに	治し難し故
	ツトニオキ	ツミカミニコウ	ツトに起き	ツミ神に請う
	フタミヤオ	サラニツクラセ	両宮お	新に造らせ
	ムトセアキ	オオクニタマノ	六年秋	オオクニタマの
	カミウツシ	ナツキシソムカヨ	神遷し	九月十六日夜

33- 8	アスノヨハ	アマテルカミノ	明日の夜は	アマテル神の
	ミヤウツシ	トヨノアカリノ	宮遷し	豊の明りの
	イロモヨシ	イザトモカミハ	色もよし	いざとも神は
	クダリマス	イロノツズウタ	降ります	イロのツズ歌
	イザトホシ	ユキノヨロシモ	『いざ遠し	ユキのよろしも
	オホヨスガラモ		大夜すがらも』	
	ナホキサラ	ミカミコトノリ	七ホ二月	三日勅
	ワガミヲヤ	ヒラクモトヒハ	「わが御祖神	開く基は
33- 9	サカンナリ	ワガヨニアタリ	盛んなり	わが世に当り
	ヲエアルハ	マツリトトカヌ	汚穢あるは	祀り届かぬ
	トガメアリ	ケダシキワメテ	咎めあり	蓋し極めて
	ヨルナリト	アサヒノハラニ	抛るなり」と	アサヒノハラに
	ミユキシテ	ヤモヨロマネク	行幸して	八百万神招く

ユノハナノ ココソヒメシテ 湯の花の モモソ姫して

ノリゴチニ サツサツズウタ 宣ごちに サツサツズ歌

ザルタミモツズニマ 『去る民もツズにま

33-10 ツラデヲエニミタルサ つらで汚穢に乱るさ』

キミトフテ カクオシユルハ 君問ふて かく教ゆるは

タレカミゾ コタエテワレハ 誰れ神ぞ」 答えて「われは

クニツカミ オオモノヌシゾ 国つ神 オオモノヌシぞ」

キミマツル コトシルシナシ 君祭る こと兆 無し

ユアビシテ スガニイノリテ 湯浴びして 清に祈りて

ツゲモフス ワレウヤマエド 告げ申す 「われ敬えど

ウケザルヤ コノヨノユメニ 受けざるや」 この夜の夢に

33-11 ワレハコレ オオモノヌシノ 「われはこれ オオモノヌシの

カミナルガ キミナウレヒゾ 神なるが 君な憂ひぞ

	タセザルハ	ワガココロアリ	治せざるは	わが心あり
	ワガハツコ	オオタタネコニ	わが裔	オオタタネコに
	マツサラバ	ヒトシクナレテ	祭らさば	等しく均て
	トツクニモ	マサニマツラフ	外国も	まさに服ふ」
	ハツキナカ	トハヤガチハラ	八月七日	トハヤがチハラ
	メクハシメ	オオミナクチト	メクハシ姫	オオミナクチと
33-12	イセヲウミ	ミタリミカドニ	イセヲウミ	三人帝に
	ツゲモフス	ユメニカミアリ	告げ申す	「夢に神あり
	タタネコオ	オオモノヌシノ	タタネコお	オオモノヌシの
	イハヒヌシ	シナガライチオ	齋主	シナガライチお
	オホヤマト	クニタマカミノ	オホヤマト	国魂神の
	イワヒヌシ	ナサバムケベシ	齋主	なさば平けべし」
	キミコレニ	ユメアワセシテ	君これに	夢合せして

	フレモトム	オオタタネコオ	触れ求む	オオタタネコお
33-13	チヌスエニ	アリトツグレバ	チヌスエに	ありと告ぐれば
	キミヤソト	チヌニミユキシ	君八十臣と	チヌに行幸し
	タタネコニ	タガコゾトトフ	タタネコに	「誰が子ぞ」と問ふ
	コタエニハ	ムカシモノヌシ	答えには	「昔モノヌシ
	スエスミガ	イクタマトウム	スエスミが	イクタマと生む
	モノヌシノ	オオミワカミノ	モノヌシの	オオミワ神の
	ハツコナリ	キミサカエント	裔なり」	君栄えんと
	タノシミテ	イキシコヲシテ	楽しみて	イキシコヲして
33-14	ウラナワス	コレマコトヨシ	占わす	これマコトよし
	ヨソカミオ	トエバフトマニ	よそ神お	問えばフトマニ
	ウラワロシ	メツキハツヒニ	占悪し	メ月初日に
	イキシコヲ	ヤソヒラカナシ	イキシコヲ	八十瓮なし

	コレオモテ	オオタタネコオ	これお以て	オオタタネコお
	イハヒヌシ	オオミワノカミ	齋主	オオミワの神
	ナガヲイチ	オオクニタマノ	ナガヲイチ	オオクニタマの
	イワイヌシ	アマネクフレテ	齋主	あまねく触れて
33-15	カミアガメ	カミナフミナス	神崇め	神名文なす
	カンベシテ	ヤモヨロカミオ	神部して	八百万神お
	マツラシム	エヤミムケイエ	祭らしむ	疫病平け癒え
	ゾロミノリ	タミユタカナリ	ゾロ稔り	民豊かなり
	ヤホサミト	ウヨカタカハシ	八年サミト	四月四日タカハシ (サミト=辛卯)
	ムライクヒ	ウマサケツクリ	ムライクヒ	うま酒造り
	ミヤカミニ	ソノミキウマシ	ミワ神に	その御酒うまし
	シハスヤカ	タタネコマツリ	十二月八日	タタネコ祭り
33-16	ミユキナル	イクヒガサケニ	行幸なる	イクヒが酒に

	ミアエナス	キミノミウタニ	御饗なす	君の御歌に
	コノミキハ	ワガミキナラズ	この御酒は	わが御酒ならず
	ヤマトナル	オホモノヌシノ	ヤマトなる	オホモノヌシの
	カミノミキ	イクヒサツクル	神の御酒	イクヒ授くる
	スキバイクヒサ		杉葉幾久	
	ミアエオエ	トミラウタフテ	御饗終え	臣ら歌ふて
	ウマサケヤ	ミハミワノトノ	「うま酒や	身はミワの殿
33-17	アサトニモ	キデテユカナン	朝戸にも	出でて行かなん
	ミワノトノトオ		三輪の殿戸お	
	トキニキミ	コレカエウタニ	時に君	これ返歌に
	ウマサケニ	ミハミワノトノ	「うま酒に	身はミワの殿
	アサドニモ	オシキラカネヨ	朝戸にも	押しきらかねよ
	ミワノトノトオ		ミワの殿戸お」	

	トノトオシ	ヒラキカヘマス	殿戸押し	開き帰ます
	コホヤヨヒ	モチノヨユメニ	九年三月	望の夜夢に
33-18	カミノツゲ	カシキホコタテ	神の告げ	「赤白黄矛立て
	カミマツレ	ウダスミサカモ	神祭れ」	ウダスミ坂も
	オオサカモ	カワセサガミヲ	オオサカも	カワセサガミヲ
	ノコリナク	コレツミビトノ	残りなく	これ罪人の
	シイトドム	エヤミナスユエ	シイ留む	疫病なすゆえ
	ウスエフカ	ヲトミカシマト	四月二十二日	大臣カシマト
	タタネコト	タマカエシノリ	タタネコト	魂返し法
	マツラシム	カレニアカルキ	祭らしむ	故に明るき
33-19	ソホネヤト	フヅキスエヨカ	十年ネヤト	七月二十四日
	ミコトノリ	タミタスヲシエ	勅	「民治す教え
	カミマツリ	ヤヤオエサレド	神祭り	やや汚穢去れど

	トオツクニ	アラヒトノリオ	遠つ国	荒人法お
	マダムケズ	カレヨモニヲシ	まだ平けず	故四方に教人
	ツカハシテ	ノリヲシエシム	遣はして	法教えしむ」
	ナツキコカ	オオヒコオシテ	九月九日	オオヒコおして
	コシノヲシ	タケヌナガハオ	越の教人	タケヌナガハお
33-20	ホヅマヲシ	キビツヒコシテ	ホヅマ教人	キビツヒコして
	ツサノヲシ	タニハチヌシオ	西南の教人	タニハチヌシお
	タニハヲシ	ヲシエウケズバ	タニハ教人	教え受けずば
	ホコロバセ	ヲシデタマハリ	綻ばせ	璽 賜はり
	イクサタチ	オノオノタテバ	軍 立ち	各々発てば
	モチノヒニ	オオヒコイタル	望の日に	オオヒコ至る
	ナラサカニ	オトメガウタニ	ナラ坂に	乙女が歌に
	ミヨミマキ	イリヒコアワヤ	『見よミマキ	イリヒコあわや

33-21	オノガソエ	ヌスミシセント	己がそゑ	盗みしせんと
	シリットオ	ユユキタガヒヌ	後つ戸お	い行き違ひぬ
	マエツドヨ	イユキタガヒテ	前つ戸よ	い行き違ひて
	ウカガワク	シラジトミマキ	窺わく	知らじとミマキ
	イリヒコアワヤ		イリヒコあわや』	
	オオヒコハ	アヤシクカエリ	オオヒコは	怪しく帰り
	コレニトフ	オトメガイワク	これに問ふ	「少女が日く
	ワレハウタ	ウタフノミトテ	『われは歌	歌ふのみ』とて
33-22	キエウセヌ	ムナサワギシテ	消え失せぬ	胸騒ぎして
	タチカエリケリ		立ち帰りけり」	

● ミマキの御世(ミヨ)任那(ミマナ)の紋(アヤ)

34- 1	ミズガキノ	トホナノソナカ	ミズガキノ	十年九月の十七日	
	コシノヲシ	オオヒコカエリ	コシの教人	オオヒコ帰り	(コシ=越)
	モフサクハ	ユクヤマシロノ	申さくは	「行くヤマシロの	
34- 2	ナラサカニ	オトメガウタニ	ナラ坂に	乙女が歌に	
	ミヨミマキ	イロヒコアワヤ	『見よミマキ	イリヒコあわや	
	オノガソエ	ヌスミシセント	己がそゑ	盗みしせんと	
	シリツトオ	イユキタガヒヌ	後つ戸お	い行き違ひぬ	
	マエツトヨ	イユキタガイテ	前つ戸よ	い行き違いて	
	ウカガワク	シラジトミマキ	窺わく	知らじとミマキ	
	イリヒコアワヤ		イリヒコあわや』		
	シルシカト	キミコレハカル	兆か」と	君これ議る	
34- 3	モモソヒメ	ウマレサトクテ	モモソ姫	生まれ聡くて	
	コレオシル	キミニモフサク	これお知る	君に申さく	

	コレシルシ	タケハニヤスノ	「これ兆	タケハニヤスの
	ソムクナリ	ワレキクツマノ	背くなり	われ聞く妻の
	アタヒメガ	カグヤマハニオ	アタ姫が	カグヤマ埴お
	ヒレニイレ	イノリテクニノ	ヒレに入れ	祈りて国の
	モノザネト	コレニコトアリ	物実と	これに事あり
	ハヤハカレ	モロハカルウチ	早議れ」	諸議る内
34- 4	ハヤスデニ	タケハニヤスト	早すでに	タケハニヤスト
	アタヒメト	イクサオコシテ	アタ姫と	軍 起して
	ヤマシロト	ツマハオオサカ	ヤマシロと	妻はオオサカ
	ミチワケテ	トモノオソフオ	道別けて	ともに襲ふお
	ミコトノリ	イサセリヒコオ	勅	イサセリヒコお
	オオサカエ	ムカヒアダヒメ	オオサカえ	向かひアダ姫
	ウチヤブリ	ツイニコロシツ	討ち破り	ついに殺しつ

	オオヒコト	ヒコクニフクト	オオヒコと	ヒコクニフクと
34- 5	ムカワシム	ヒコクニフクハ	向わしむ	ヒコクニフクは
	ヤマシロノ	ワニタケスキニ	ヤマシロの	ワニタケスキに
	インベスエ	ツハモノヒキテ	忌瓮据え	兵 率きて
	イクサタテ	キカヤフミムケ	軍 立て	キカヤ踏み平け
	テガシワノ	イクサマズカツ	手柏の	戦まづ勝つ
	ナラサカゾ	マタオオヒコハ	ナラ坂ぞ	またオオヒコは
	シモミチニ	ワカラアグラト	下道に	ワカラアグラと
	アヒイドム	ハニヤスヒコハ	相挑む	ハニヤスヒコは
34- 6	カワキタニ	ヒコクニフクオ	川北に	ヒコクニフクお
	ミテイワク	ナンヂナニユエ	見て日く	「汝 何ゆえ
	コバムゾヤ	クニフクイワク	拒むぞや」	クニフク日く
	コレナンヂ	アメニサカフオ	「これ汝	天に逆ふお

	ウタシムト	サキアラソイテ	討たしむ」と	先争いて
	ハニヤスガ	イルヤアタラズ	ハニヤスが	射る矢当らず
	クニフクガ	イルヤハアタル	クニフクが	射る矢は当る
	ハニヤスガ	ムネウチコロス	ハニヤスが	胸撃ち殺す
34- 7	ソノイクサ	ヤブレニグルオ	その戦	破れ逃るお
	オイウテバ	ワキミワキミト	追い討てば	「我君我君」と
	ナガレサル	イクサオサメテ	流れ去る	軍 収めて
	ミナカエル	メツキハツヒニ	みな帰る	十月初日に
	ミコトノリ	ウチハムケレド	勅	「内は平けれど
	トツアルル	ヨミチノイクサ	外つ荒るゝ	四道の軍
	タツベキト	スエフカニタツ	立つべき」と	二十二日に立つ
	ヨモノオシエド		四方の教ふ人	
34- 8	モモソヒメ	オオモノヌシノ	モモソ姫	オオモノヌシの

	ツマトナル	ヨニハキタリテ	妻となる	「夜には来りて
	ヒルミエズ	アケナバキミノ	昼見えず	明けなば君の
	ミスガタオ	ミントトムレバ	御姿お	見ん」と止むれば
	カミノツゲ	コトイトジルシ	神の告げ	「言いとじるし
	ワレアシタ	クシゲニイラン	われ明日	櫛笥に入らん
	ワガスガタ	ナオドロキゾト	わが姿	な驚きぞ」と
	モモソヒメ	ココロアヤシク	モモソ姫	心 怪しく
34- 9	アクルアサ	クシゲオミレバ	明る朝	櫛笥お見れば
	コヘビアリ	ヒメオドロキテ	小蛇あり	姫驚きて
	サケビナク	オホカミハジテ	叫び泣く	大神恥じて
	ヒトトナリ	ナンヂシノビズ	人と成り	汝 忍びず
	ワガハヂト	オホソラフンデ	我が恥と	大空踏んで
	ミモロヤマ	ヒメアホギハジ	ミモロ山	姫仰ぎ恥ぢ

	ツキオルニ	ハシニミホドオ	つきおるに	箸にミホドお
	ツキマカル	オイチニウヅム	突き罷る	オイチに埋む
34-10	ハシヅカヤ	ヒルハヒトデニ	箸塚や	昼は人手に
	ヨハカミノ	オオサカヤマノ	夜は神の	オオサカ山の
	イシハコビ	モロアヒツギテ	石運び	諸相次ぎて
	タゴシガテ	ハカナルノウタ	たごしがて	墓成るの歌
	オホサカモ	ツキノカオソエ	『オホサカも	月の香お添え
	イシムロオ	タゴシニコサバ	石室お	たごしに越さば
	コシガテンカモ		こしがてんかも』	
	ソヒウヅキ	ソムカヨミチノ	十一年四月	十六日四道の
34-11	エビスムケ	キミニツグレバ	エビス平け	君に告ぐれば
	クニヤスク	アキタタネコニ	国安く	秋タタネコに
	オレガレノ	ヲトクマツリオ	おれがれの	をとく祭りお

	ハシヅカニ	ナセバカカヤク	箸塚に	なせば輝く
	ノリノイチ	ソフヤヨイソヒ	法のいち	十二年三月十一日
	ミコトノリ	アマツヒツギオ	勅	天つ日嗣ぎお
	ワレツギテ	アメノオフヒモ	われ嗣ぎて	天の被ひも
	ヤスカラズ	メヲアヤマリテ	安からず	陰陽誤りて
34-12	ツイテセズ	エヤミオコリテ	序せず	疫病起りて
	タミヲエス	ツミハラワント	民汚穢す	罪祓わんと
	アラタメテ	カミオウヤマヒ	改めて	神お敬ひ
	ヲシエタレ	ヤヲノアラビト	教え垂れ	八百の荒人
	イマナレテ	モロタノシメバ	今馴れて	諸楽しめば
	カンカエテ	オサトイトケノ	考えて	長と幼の
	ミチオアケ	タミニオオスル	道お開け	民に負おする
	イトマアケ	ユハズタズエノ	暇 明け	弭 手末の

34-13	ミツギトメ	タミニギハセテ	貢止め	民賑はせて
	ゾロノトキ	ナオリテヤスク	米の時	直りて安く
	コノミヨオ	ハツクニシラス	この御世お	初国知らず
	ミマキノヨ	タミタノシメバ	ミマキの世	民楽しめば
	タミヤスク	キサキモオエテ	君安く	后もおえて
	スケヤサカ	トイチニモフデ	典侍ヤサカ	トイチに詣ふで
	ウムミコハ	トチニイリヒメ	産む御子は	トチニイリ姫
	フソムトシ	ネツキハツヒニ	二十六年	十一月初日に
34-14	ミマキヒメ	シギニウムミコ	ミマキ姫	シギに産む御子
	トヨキヒコ	イミナシキヒト	トヨキヒコ	齊名シキヒト
	フソコトシ	ハツヒヲウトニ	二十九年	初日ヲウトに
	キサキマタ	ウムミコイクメ	后また	産む御子イクメ
	イリヒコノ	イミナキソサチ	イリヒコの	齊名キソサチ

	ミソヤトシ	アキハツキキカ	三十八年	秋八月五日	
	キサキノト	クニカタウチメ	後の妹	クニカタ内后	
	ウムミコハ	チチツクワヒメ	産む御子は	チチツクワ姫	
34-15	ヨソムツキ	スエヤカコウム	四十年一月	二十八日子産む	
	イカツルノ	イムナチヨギネ	イカツルの	齊名チヨギネ	
	ヨソヤトシ	ハツソカラアエ	四十八年	一月十日ヲアエ	(ヲアエ=戊子)
	トヨキミト	イクメキミトニ	トヨ君と	イクメ君とに	
	ミコトノリ	ナンヂラメグミ	勅	汝 等恵み	
	ヒトシクテ	ツギシルコトノ	等しくて	つぎ知る事の	
	ユメスベシ	トモニユアヒシ	夢すべし	共に湯浴し	
	ユメナシテ	トヨギモフサク	夢なして	トヨギ申さく	
34-16	ミモロエニ	キニムキヤタビ	御室山上に	東に向き八度	
	ホコユゲシ	イクメモフサク	弄銚し	イクメ申さく	

	ミモロエニ	ヨモニナワハリ	御室山上に	四方に縄張り
	スズメオフ	キミコノユメオ	雀 追ふ	君この夢お
	カンガエテ	アニガユメタダ	考えて	兄が夢ただ
	ヒガシムキ	ホヅマヲサメヨ	東 向き	ホヅマ治めよ
	オトハヨモ	タミオヲサムル	弟は四方	民お治むる
	ヨツギナリ	ウソコカツミエ	世継なり	四月十九日ツミエ (ツミエ=丙寅)
34-17	ミコトノリ	キソサチタテテ	勅	キソサチ立てて
	ヨツギミコ	トヨギイリヒコ	世継ぎ皇子	トヨギイリ彦
	ホヅマツカサゾ		ホヅマ司ぞ	
	ミマナノアヤ		任那のアヤ	
	ミツカキノ	キソヤホハヅキ	ミツカキノ	五十八年八月
	ミユキシテ	ケヒオオカミニ	御幸して	ケヒ大神に
	モフデマス	モロイワフトキ	詣でます	諸祝ふとき

	ツノヒトツ	アルヒトココニ	角一つ	ある人ここに
34-18	タダヨエリ	コトバキキエズ	漂えり	言葉聞き得ず
	ハラノトミ	ソロリヨシタケ	ハラの臣	ソロリヨシタケ
	ヨクシレバ	コレニトハシム	良く知れば	これに問はしむ
	ソノコタエ	ワレハアラクニ	その答え	「われはカラクニ (カラクニ=韓国)
	キミノミコ	ツノガアラシト	君の御子	ツノガアラシト
	チチガナハ	ウシキアリシト	父が名は	ウシキアリシト
	ツタエキク	ヒジリノキミニ	伝え聞く	聖の君に
	マツラフト	アナトニイタリ	服ふと	アナトに至る (アナト=穴門)
34-19	キツツヒコ	トミニイワクハ	キツツヒコ	臣に日くは
	コノクニノ	キミハワレナリ	「この国の	君はわれなり
	ココニオレ	ヒトナリミレバ	ここに居れ」	人なり見れば
	キミナラズ	サラニカエリテ	君ならず	さらに帰りて

	ミヤコヂト	ウラシマタヅネ	都路と	浦島訪ね	
	イツモヘテ	ヤヤココニツク	イツモ経て	ややここに着く	(イツモ=出雲)
	カミマツリ	キミココニアリ	神祭り	君ここにあり」	
	カレツニガ	メシテツカエバ	故ツノガ	召して仕えば	
34-20	マメアリテ	キトセニタマフ	忠ありて	五年に賜ふ	
	ナハマミナ	カゾミネニシキ	名はミマナ	カゾミネ錦	
	クニツトニ	カエルアラシト	国ツトに	帰るアラシト	
	ミマナクニ	コレタチソメゾ	ミマナ国	これ建ち初ぞ	(ミマナ=任那)
	コレノサキ	アメウシニモノ	これの先	アメ牛にもの	
	オホセヤリ	アラシトユケバ	負ほせやり	アラシト行けば	
	ウシミエズ	ヲキナノイワク	牛見えず	翁の日く	
	コレオスニ	サキニモフケテ	これ推すに	先に設けて	
34-21	コレクワン	ヌシキタリナバ	これ食わん	主来たりなば	

	アタイセン	スデニコロシツ	価せん	既に殺しつ
	モシサキデ	アタイオトハバ	もし先で	価 お問はば
	マツルカミ	エントコタエヨ	祭る神	得んと答えよ
	タツヌレバ	ムラキミウシノ	尋ぬれば	村君牛の
	アタイトフ	コタエテマツル	価 問ふ	答えて祭る
	カミエント	カミノシライシ	神得んと	神の白石
	モチカエリ	メヤニオクイシ	持帰り	寝屋に置く石
34-22	ナルオトメ	アラシトコレト	なる乙女	アラシトこれと
	トツガント	オモヒユクマノ	婚がんと	思ひ行く間に
	ヒメウセヌ	カエリオドロキ	姫失せぬ	帰り驚き
	ツマニトフ	イワクオトメハ	妻に問ふ	日く「乙女は
	キサニサル	アトオタヅネテ	東南に去る」	跡お尋ねて
	オヒイタル	フネオウカメテ	追ひ至り	船お浮めて

	ツイニイル	ヤマトナミハノ	ついに入る	ヤマトナミハの	
	ヒメコソノ	ミヤヨリイデテ	ヒメコソの	宮より出でて	
34-23	トヨクニノ	ヒメゴソミヤニ	トヨ国の	ヒメゴソ宮に	
	カミトナル	トキニアラシト	神となる	時にアラシト	
	モトクニニ	カエサニミヤゲ	本国に	帰さに土産	
	ウバワレテ	シラギノクニト	奪われて	シラギの国と	(シラギ=新羅)
	アダオコリ	マミナノツカヒ	仇起こり	ミマナの使ひ	(ミマナ=任那)
	ツゲイワク	ワガクニキネニ	告げ日く	「我が国東北に	
	ミバヘアリ	カミナカシモノ	三バへあり	上・中・下の	
	クニヒロケ	ヨモミモノリノ	国広く	四方三百里の	
34-24	ツチコエテ	タミュタカナリ	土肥えて	民豊かなり	
	イマスデニ	シラギノアダニ	今既に	シラギの仇に	(シラギ=新羅)
	ヲサメエズ	ホコオタヅネテ	治め得ず	矛お尋ねて	

	タミイキズ	トミメガワクバ	民生きず	臣願わくば
	クニムケノ	ヲシオコフノミ	国向けの	軍使お乞ふのみ」
	キミトミト	ハカレバイワク	君臣と	議れば日く
	クニフクノ	マゴシホノリツ	「クニフクの	孫シホノリツ
	コレヨシゾ	カフベノミコブ	これよしぞ」	頭の三こぶ
34-25	マツノキミ	セイヒタケキタ	松の君	身長一丈五尺
	ヤソチカラ	イサミハゲシク	八十(人)力	勇み激しく
	ミコトノリ	シホノリヒコオ	勅	「シホノリヒコお
	ミマナヲシ	ユキトクニムク	ミマナ軍使	行き疾くに平く (ミマナ=任那)
	ミチツカサ	カエレバヨシト	道司	帰ればよし」と
	カバネタマヒキ		姓 賜ひき	
	ムソフヅキ	ヨソミコトノリ	六十年七月	十四日勅
	タケヒテル	ムカシササゲシ	タケヒテル	昔 捧げし

34-26	カンタカラ	イツモにアルオ	神宝	イツモにあるお	(イツモ=出雲)
	ミマクホシ	タケモロズミオ	見まく欲し	タケモロズミお	
	ツカワセバ	カンヌシフネリ	遣わせば	神主フリネ	
	カンホギニ	ツクシニユキテ	神祝ぎに	ツクシに行きて	(ツクシ=筑紫)
	トキイリネ	ミヤヨリイダシ	弟キイリネ	宮より出だし	
	オトウマシ	カラヒサノコト	弟ウマシ	カラヒサと子の	
	ウカツクヌ	ソエテササグル	ウカツクヌ	添えて捧ぐる	
	ノチフリネ	カエテキイリネ	のちフリネ	帰てキイリネ	
34-27	セメイワク	イクヒモマタデ	責め日く	「幾日も待たで	
	ナドオソル	イツモハカミノ	など恐る	出雲は神の	
	ミチノモト	ヤヲヨロフミオ	道の元	八百万文お	
	カクシオク	ノチノサカエオ	隠し置く	後の栄えお	
	オモワンヤ	タヤスクダスト	思わんや」	たやすく出すと	

	ウラミシガ	シノビコロスノ	恨みしが	忍び殺すの
	ココロアリ	アニノフリネガ	心あり	兄のフリネが
	アザムキテ	ヤミヤノタマモ	欺きて	ヤミヤの玉藻
34-28	ハナカヨミ	ユキミントテゾ	ハナカヨミ	行き見んとてぞ
	サソヒクル	オトウナヅキテ	誘ひ来る	弟領きて
	トモニユク	アニハキダチオ	ともに行く	兄は木太刀お
	ヌキオキテ	ミヅアビヨベバ	抜き置きて	水浴び呼べば
	オトモママ	アニマズアガリ	弟もまま	兄まず上り
	オトガタチ	ハケバオドロキ	弟が太刀	佩けば驚き
	キイリネモ	アガリテアニガ	キイリネも	上りて兄が
	キダチハク	アニタチヌキテ	木太刀佩く	兄太刀抜きて
34-29	キリカクル	ヌカレヌタチニ	斬りかくる	抜かれぬ太刀に
	キイリネハ	ヤミヤミフチニ	キイリネは	暗々淵に

	キエウセヌ	ヨニウタウウタ	消え失せぬ	世に歌う歌
	ヤクモタツ	イツモタケルガ	『八雲立つ	出雲タケルが
	ハケルタチ	ツツラサワマキ	佩ける太刀	葛 沢巻
	アワレサビナシ		哀れさびなし』	
	カラヒサハ	オイウカツクヌ	カラヒサは	甥ウカツクヌ
	ツレノボリ	キミニツグレバ	連れ上ぼり	君に告ぐれば
34-30	キビヒコト	タケヌワケトニ	キビヒコト	タケヌワケとに
	ミコトノリ	フリネウタレテ	勅	フリネ討たれて
	イズモオシ	オソレテカミノ	イズモ軍使	恐れて神の (イズモ=出雲)
	マツリセズ	アルヒヒカトベ	祭りせず	ある日ヒカトベ
	ワカミヤニ	ツグルワガコノ	若宮に	告ぐるわが子の
	コノゴロニウタ		このごろの歌	
	タマモシツ	イツモマツラバ	『たまもしつ	いづもまつらば

マグサマジ カヨミオシフリ まぐさまじ かよみおしふり

ネミカガミ ミソコタカラノ ねみかがみ 三十九宝の

ミカラヌシ タクミククリミ みからぬし たにみくくりみ

タマシツカ ウマシミカミハ たましつか うましみかみは

ミカラヌシヤモ みからぬしやも』

ウタノアヤ カミノツゲカト 歌の綾 神の告げかと

キミニツゲ イヅモマツレト 君に告げ 「出雲祭れ」と

ミコトノリ ムソフキナトノ 勅 六十二年キナトの (キナト=乙酉)

アフミツキ キミトハツヤエ 七月 キミト初ツヤエ (キミト=乙卯・ツヤ
エ=丙辰)

34-32 ミコトノリ タミハサハモト 勅 民業は本

タノムトコ カウチサヤマハ 頼む処 カウチ・サヤマは

ミツタラズ ワザオコタレバ 水足らず 業怠れば

	ナリハヒノ	タメニヨサミト	農の	ためにヨサミと	
	カリサカト	カエオリノキケ	カリサカと	カエオリの池	
	ホラントテ	クワマノミヤニ	掘らんとて	クワマの宮に	
	ミュキナス	ムソキホフヅキ	行幸なす	六十五年七月	
	ミマナクニ	ソナカシチシテ	ミマナ国	ソナカシチして	(ミマナ=任那)
34-33	ミツギナス	ソノミチノリハ	貢なす	その道程は	
	ツクシヨリ	キタエフチノリ	ツクシより	北え二千里	(ツクシ=筑紫)
	ウミヘダテ	シラギノサツゾ	海距て	シラギの西南ぞ	(シラギ=新羅)
	ムソヤトシ	シハスヲナエハ	六十八年	十二月ヲナエエ初	(ヲナエエ=戊申)
	キカネアエ	キミコトキレテ	五日ネアエ	君こときれて	(ネアエ=壬子)
	モノイワズ	イネマスゴトシ	言葉云わず	い寝ます如し	
	アクルトシ	ネヤエハツフカ	明る年	ネヤエ初二日	(ネヤエ=壬辰)
	アメヒツギ	ミヨアラタマノ	天日嗣ぎ	御世新玉の	

34-34	ハヅキソヒ	カミアガリトゾ	正月十一日	神上りぞと
	ヨニフレテ	キミトウチトミ	世に布れて	君と内臣
	モハニイリ	トノトミヤハリ	喪衣に入り	外の臣やはり
	マツリゴト	カンナソヒカニ	政事	十月十一日に
	オモムロオ	ヤマベニオクル	遺骸お	ヤマベに葬る
	コノキミハ	カミオアガメテ	この天皇は	神お崇めて
	エヤミタシ	ミクサタカラオ	疫病治し	三種宝お
	アラタムル	ソノコトノリハ	改むる	その事ノリは
34-35	オホイナルカナ		大いなるかな	

● ヒボコ来る角力(スマイ)の紋(アヤ)

35- 1	トキアスス	ムモヤソコトシ	時アスス	六百八十九年	(ヒボコ=日槍)
	ネヤエハル	ムツキツアトハ	ネヤエ春	正月ツアト初	(ネヤエ=壬辰・ツ)

アト=丁丑)

	ヲミエミコ	イムナキソサチ	ヲミエ御子	イム名キソサチ	(ヲミエ=戊寅)
35- 2	トシヨソフ	アマツヒツギオ	歳四十二	天つ日嗣ぎお	
	ウケツギテ	イクメイリヒコ	受け嗣ぎて	イクメイリヒコ	
	アマキミト	カザリオタミニ	天君と	飾りお民に	
	オガマシム	キミウマレツキ	拝ましむ	君生まれつき	
	タダナオク	ココロホツマニ	正直く	心ホツマに	
	オゴリナク	ユメノシルシニ	驕りなく	夢の兆に	
	ミヨノハツ	アキアニオクレ	御世の初	秋天に遅れ	
	フユオサメ	ハハイマナソコ	冬治め	母今七十九歳	
35- 3	ミウエトシ	オオハハコトシ	御上とし	皇太后今年	
	モモヤソコ	フトシキサラギ	百八十九歳	二年二月	
	サホヒメオ	ウチミヤニタツ	サホ姫お	内宮に立つ	

	ニイミヤコ	ウツスマキムキ	新都	遷すマキムキ	(マキムキ=巻向、纏向)
	タマキミヤ	シハスウムミコ	タマキ宮	十二月生む御子	
	ホンツワケ	アエモノイワズ	ホンツワケ	敢ものいわず	
	ミマナヨリ	ソナカシチシテ	ミマナより	ソナカシチして	
	ミツギアゲ	ハツミヨイワフ	貢あげ	初御代祝ふ	
35- 4	ヲランミキ	タマヒタマモノ	大 御酒	たまひ賜物	
	キツイロノ	カツミネニシキ	五色の	カツミネ錦	
	アヤモモハ	ミマナノキミニ	綾百衣	ミマナの君に	
	タマワリテ	シホノリヒコガ	賜わりて	シホノリヒコガ	
	ノボリタテ	クニニオクレバ	幟 立て	国に送れば	
	ミチヒラク	ミホハモロスケ	道開く	三年初モロスケ	
	トミニメス	ムカシヒボコガ	臣に召す	昔ヒボコガ	
	ミヤゲモノ	ハボソアシタカ	土産もの	ハボソ足高	

35- 5	ウカガタマ	イツシコガタナ	ウカガ玉	イツシ小刀
	イツシホコ	ヒカガミクマノ	梓 槍	日鏡クマの
	ヒモロゲス	イデアサノタチ	神籬簀	出浅の太刀
	コノヤグサ	タジマニオサム	この八種	但馬国に納む
	ミズカキノ	ミソコヒボコハ	ミズカキノ	三十九年ヒボコは
	ハリマヨリ	イタルシシアワ	ハリマより	至るシシアワ
	ソノトキニ	オオトモヌシト	その時に	オオトモヌシと
	ナガライチ	ハリマニヤリテ	ナガライチ	ハリマに遣りて
35- 6	トハシムル	イワクシラギノ	問はしむる	日くシラギの
	キミノアコ	ナハアメヒボコ	君の天子	名はアメヒボコ
	オトヂコニ	クニオユヅリテ	弟ヂコに	国お譲りて
	ヤツカレハ	ヒジリノキミニ	僕は	聖の君に
	マツロイヌ	ツカイカエリテ	服いぬ	使い帰りて

	コレオツグ	ヨリテハリマノ	これお告ぐ	よりにてハリマの
	イテサムラ	アワチシシアワ	イテサ村	アワチ・シシアワ
	ママニオレ	ヒホコモフサク	ままに居れ	ヒホコ申さく
35- 7	スムトコロ	ユルシタマハバ	「住む処	許し給はば
	メグリミン	キミユルサレバ	巡り見ん」	君許されば
	アメヒボコ	ウヂガワノボリ	アメヒボコ	宇治川上り
	アワウミノ	アナムラニスム	アワウミの	アナ村に住む
	マタサラニ	ワカサメグリテ	またさらに	ワカサ巡りて
	スムタジマ	トモスエヒトハ	住むタジマ	トモスエヒトは
	ハザマタニ	ノコシイズシマ	ハザマ谷	残しイズシマ
	フトミミガ	マタオオメトリ	フトミミが	マタオお娶り
35- 8	アメヒボコ	モロスケオウム	アメヒボコ	モロスケお生む
	モロスケハ	ヒナラギオウム	モロスケは	ヒナラギお生む

	ヒナラギハ	キヨヒコオウム	ヒナラギは	キヨヒコお生む
	キヨヒコハ	タジマモリウム	キヨヒコは	タジマモリ生む
	ヨホナツキ	ツウエハヲナエ	四年九月	ツウエ朔ヲナエ
	サホヒコガ	キサキニトフハ	サホヒコが	後に問ふは
	アニトヲト	イズレアツキゾ	「兄と夫	いずれ篤きぞ」
	キサキツヒ	アニトコタフニ	后つひ	「兄」と答ふに
35- 9	アツラウル	ナンヂイロモテ	誂うる	「汝 色もて
	ツカユレド	イロオトロイテ	仕ゆれど	色衰いて
	メグミサル	アニナガカラン	恵み去る	あに永からん
	メガハクハ	ワレトナンヂト	願はくは	われと汝と
	ミヨフマバ	ヤスキマクラヤ	御世踐まば	安き枕や
	タモアンゾ	キミオシイセヨ	保たんぞ	君お殺せよ
	ワガタメト	ヒボガタナモテ	わがため」と	紐刀 以て

	サツクトキ	アニガココロネ	授くとき	兄が心根
35-10	イサメオモ	キカムオシレバ	諫めおも	聞かむお知れば
	サホヒメノ	ナカゴワナナキ	サホ姫の	中心わななき
	ヒモカタナ	センカタナクモ	紐刀	せんかた無くも
	ソデウチニ	カクシイサメノ	袖内に	隠し諫めの
	セミナツキ	ハツヒスメラギ	六月	初日天皇
	ミユキシテ	クメタカミヤニ	行幸して	クメタカ宮に
	ヒザマクラ	キサキオモエバ	膝枕	后 思えば
	コノトキト	ナンダナガルル	この時と	涙 流るゝ
35-11	キミノカホ	キミユメサメテ	君の顔	君夢覚めて
	ノタマフハ	イマワガユメニ	日ふは	「今わが夢に
	イロオロチ	クビニマトエテ	色大蛇	首にまとえて
	サホノアメ	オモテヌラスハ	サホの雨	面 濡らすは

	ナニノサガ	キサキコタエテ	何の祥禍」	后 答えて
	カクシエズ	フシマロビツツ	隠し得ず	伏し転びつゝ
	アカラサマ	キミノメグミモ	あからさま	「君の恵みも
	ソムキエズ	ツグレバアニオ	背き得ず	告ぐれば兄お
35-12	ホロボセリ	ツゲザルトキハ	滅ぼせり	告げざる時は
	カタムケン	オソレカナシミ	傾けん	恐れ悲しみ
	チノナンダ	アニガアツラエ	血の涙	兄が詭え
	ココナリト	キミガヒルネノ	こゝなりと	君が昼寝の
	ヒザマクラ	モシヤクルエル	膝枕	もしや狂える
	モノアラバ	タマサカニエル	者あらば	偶に得る
	イサオシト	オモエバナナンダ	功と	思えば涙
	フクソデニ	アブレテミカオ	拭く袖に	溢れて御顔
35-13	ウルホセリ	ユメハカナラズ	潤せり	夢は必ず

	コノコタエ	オロチハコレト	この答え	大蛇はこれ」と
	ヒモカタナ	ダセバスメラギ	紐刀	出せば天皇
	ミコトノリ	チカガタニアル	勅	近県にある
	ヤツナダオ	メシテサホヒコ	ヤツナダお	召してサホヒコ
	ウタシムル	トキニサホヒコ	討たしむる	時にサホヒコ
	イナギナシ	カタクフセギテ	稲城なし	固く防ぎて
	クダリエズ	キサキカナシミ	降り得ず	后 悲しみ
35-14	ワレタトヒ	ヨニアルトテモ	「われたとひ	世にあるとても
	シムカレテ	ナニオモシロト	血脈枯れて	何面白」と
	ミコイダキ	イナギニイレバ	御子抱き	イナギに入れば
	ミコトノリ	キサキトミコオ	勅	「后と御子お
	ダスベシト	アレドイダサズ	出すべし」と	あれど出さず
	ヤツナダガ	ヒゼメニナセバ	ヤツナダが	火責めになせば

	キサキマヅ	ミコイダカセテ	后まづ	御子抱かせて
	シロオコエ	キミニモフサク	城お越え	君に申さく
35-15	アニガツミ	ノガレンタメニ	「兄が罪	逃れんために
	ワレイレド	トモニツミアル	我入れど	共に罪ある
	コトオシル	タトヘマカレド	事お知る	たとへ罷れど
	ミメグミオ	ワスラデノチノ	御恵みお	忘らで後の
	サダメニハ	タニハチヌシノ	定めには	タニハチヌシの
	メオモナガ	キミガユルシノ	女おもがな」	君が許しの
	アルトキニ	ホノホオコリテ	ある時に	焰 起りて
	シロクズル	モロビトサレバ	城崩る	諸人去れば
35-16	サホヒコト	キサキモマカル	サホヒコと	后も罷る
	ヤツナダガ	イサオシホメテ	ヤツナダが	功績ほめて
	タマウナハ	タケヒムケヒコ	賜う名は	タケヒムケヒコ

	ナホフヅキ	ヒハコモヅミノ	七年七月	一日コモヅミの
	コノツヅキ	タルネガカバキ	子のツヅキ	タルネがカバキ
	ツキヤヒメ	タツキサキトノ	ツキ姫お	立つ后 妹の
	カクヤヒメ	ナルウチメキカ	カクヤ姫	なる内后五日
	コトホギシ	ハツタナバタノ	寿ぎし	初日タナバタの
35-17	カミマツリ	アルトミキミニ	神祭り	ある臣君に
	モフサクハ	タエマクエハヤ	申さくは	タエマクエハヤ
	オオチカラ	チカネオノバシ	大力	地金お伸ばし
	ツノオサク	カナユミツクリ	角お裂く	鉄弓作り
	トコカタリ	コレオフミハル	常語り	これお踏み張る
	ワガチカラ	ヨニクラベント	わが力	世に競べんと
	モトムレド	ナクテマカルヤ	求むれど	無くて罷るや
	ヒタナゲク	キミモロニトフ	ひた嘆く	君諸に問ふ

35-18	クエハヤニ	クラブルチカラ	クエハヤに	競ぶる力
	アランオヤ	モフサクノミノ	あらんおや	申さく野見の
	スクネナリ	ナカヲイチシテ	宿禰なり	ナカヲイチして
	コレオメス	ノミノスクネモ	これお召す	ノミのスクネも
	ヨロコベバ	アスクラベント	喜べば	明日競べんと
	ミコトノリ	チカラクラベル	勅	力 較べる
	カミノノリ	スマイノサトニ	神の法	角力の里に
	ハニワナシ	タエマハキヨリ	埴輪なし	タエマは東より
35-19	ノミハツニ	アヒタチフメバ	ノミは西に	相立ち踏めば
	ノミツヨク	クエハヤガワキ	ノミ強く	クエハヤが脇
	フミテマタ	コシフミコロス	踏みてまた	腰踏み殺す
	トキニキミ	ウチハオアゲテ	時に君	団扇おあげて
	ドヨマセバ	トミモヨロコビ	どよませば	臣も喜び

クエハヤガ	カナユミオヨビ	クエハヤガ	金弓および
タエマクニ	ノミニタマワリ	タエマ国	ノミに賜わり
イエハツマ	ツギナシノミハ	家は妻	継ぎなしノミは

35-20 ユミトリゾコレ 弓取りぞこれ

● ヤマト姫(ヒメ)、神(カミ)鎮(シツ)む紋(アヤ)

36- 1	タマキミヤ	コホナツキソム	タマキ宮	九年九月十六日
	キサキユメ	ヤマトオオクニ	皇后夢	ヤマトオオ国
	カミノシテ	タマヘバハラミ	神の幣	賜へば妊み
	ツキミチテ	ウマズニヤメテ	月満ちて	生まずに病めて
	ミトセノチ	ナヅキソムカニ	三年後	九月十六日に
	ウムミコノ	ナハヤマトヒメ	生む御子の	名はヤマト姫
36- 2	アトヤミテ	ナカツキフカニ	後病みて	十月二日に

	ハハマカル	ツヅキカバキノ	母薨る	ツヅキカバキの
	ツキノカミ	ナゲキマツリテ	ツキノ神	歎きまつりて
	ソキトシノ	キサラギモチニ	十五年の	二月十五日に
	メスタニハ	ミチノウシノメ	召すタニハ	ミチのウシの女
	ヒハスヒメ	ヌハタニイリメ	ヒハス姫	ヌハタニイリメ
	マトノヒメ	アサミニイリメ	マトノ姫	アサミニイリメ
	タケノヒメ	ハヅキハツヒニ	タケノ姫	八月初日に
36- 3	ヒハスヒメ	キサキニタテテ	ヒハス姫	後に立てて
	イトミタリ	スケトウチメニ	妹三人	典侍と内侍に
	タケノヒメ	ヒトリカエセバ	タケノ姫	一人返せば
	ハヅカシク	コシヨリマカル	恥かしく	輿より罷る
	オチクニゾ	ソヤトシサツキ	墮国ぞ	十八年五月
	ソカキサキ	ウムミコニシキ	十日后	生む御子ニシキ

	イリヒコノ	イムナキソキネ	イリヒコの	イム名キソキネ	
	フソマフユ	ウムミコヤマト	二十年真冬	生む御子ヤマト	
36- 4	ヲシロワケ	イムナタリヒコ	ヲシロワケ	イム名タリヒコ	
	ツギニウム	オオナカヒメト	次に生む	オオナカ姫と	
	ワカギニノ	イミナハルヒコ	ワカギニの	イミ名ハルヒコ	
	スケヌハダ	ウムヌデシワケ	スケヌハダ	生むヌデシワケ	
	ツギニウム	イカタラシヒメ	次に生む	イカタラシ姫	
	アサミウム	イケハヤワケト	アサミ生む	イケハヤワケと	
	アサヅヒメ	フソミホナヅキ	アサヅ姫	二十三年九月	
	ツミエハノ	フカミコトノリ	ツミエ初の	二日勅	(ツミエ=丙寅)
36- 5	ホンヅワケ	ヒゲオヒイザチ	ホンヅワケ	髭生ひ泣ち	
	モノイワズ	コレナニユエゾ	もの云わず	これ何故ぞ	
	モロハカリ	ヤマトヒメシテ	諸議り	ヤマト姫して	

	イノラシム	カンナヤカキミ	祈らしむ	十月八日君
	トノニタツ	トキホンヅワケ	殿に立つ	時ホンヅワケ
	トブクグヒ	ミテイワクコレ	飛ぶ鶴	見て日く「これ
	ナニモノヤ	キミヨロコビテ	何ものや」	君喜びて
	タレカコノ	トリトリエンヤ	「誰かこの	鳥捕り得んや」
36- 6	ユカワタナ	トミコレトラン	ユカワタナ	「臣これ捕らん」
	キミイワク	トリエバホメン	君日く	「捕り得ば褒めん」
	ユカワタナ	クグヒトブカタ	ユカワタナ	鶴 飛ぶ方
	オヒタヅネ	タジマヂイツモ	追ひ尋ね	タジマ路イツモ
	ウヤエニテ	ツイニトリエテ	ウヤエにて	ついに捕り得て
	キツネフカ	ホンズノミコニ	十一月二日	ホンズの御子に
	タテマツル	ミコモテアソビ	奉る	御子遊び
	モノイエバ	ユカワオホメテ	ものいえば	ユカワお褒めて

36- 7	トリトリベ	カバネタマワル	鳥取部	姓 賜わる
	フソキホノ	キサラギヤカニ	二十五年の	二月八日に
	ミコトノリ	タケヌガワケト	勅	タケヌガワケと
	クニフクト	ミカサカシマト	クニフクト	ミカサ・カシマト
	トイチネト	タケヒラモロニ	トイチネと	タケヒ等諸に
	ワガミヲヤ	ミマキハサトク	「わが御親	ミマキは聡く
	ホヅマシル	アヤマリタタシ	ホヅマ知る	誤り正し
	ヘリクダリ	カミオアガメテ	謙り	神お崇めて
36- 8	ミオコラス	カレゾロアツク	身おこらす	故ゾロ厚く
	タミユタカ	イマワガヨニモ	民豊か	今わが世にも
	オコタラズ	カミマツラント	怠らず	神祭らん」と
	ヤヨイヤカ	アマテルカミオ	三月八日	天照る神お
	トヨスキハ	ハナチテツケル	トヨスキは	離ちて託ける

	ヤマトヒメ	ムカシトヨスキ	ヤマト姫	昔トヨスキ
	カミノツゲ	ミタマゲカツギ	神の告げ	御霊筈担ぎ
	ヨザニユク	コノハシタテハ	ヨザにゆく	このハシタテは
36- 9	カサヌイノ	エヨリミヤズノ	カサヌイの	上よりミヤズの
	マツニクモ	タナビキワタス	松に雲	棚引き渡す
	ミズカキノ	ミソコヤヨミカ	ミズカキノ	三九年三月三日
	ミコトノリ	ケクニノオトド	勅	ケクニの大臣
	タケミクラ	イワヒヌシトシ	タケミクラ	齋主とし
	イマスノコ	タニハミチウシ	イマスの子	タニハミチウシ
	ミケノモリ	アメノヒオキハ	御饌の守	アメノヒオキは
	カンヌシニ	フリタマハネギ	神主に	フリタマは祢宣
36-10	トヨケカミ	アマテルカミオ	トヨケカミ	アマテルカミお
	マツラシム	ミチウシミケノ	祭らしむ	ミチウシ御饌の

	カンメクミ	ヨキミコエタリ	神恵み	よき御子得たり
	トヨスキハ	ササハタミヤニ	トヨスキは	ササハタ宮に
	カエリマス	マタカミノツゲ	遷ります	また神の告げ
	ヲヲカミノ	カタチミタダキ	大神の	形 見いただき
	アウミヨリ	ミノオメグリテ	アウミより	ミノお巡りて
	イセイイノ	タカヒオガワニ	イセイイノ	タカヒオガワに
36-11	スズトドム	タカミヤツクリ	鈴留む	高宮づくり
	シヅメマス	フソフホシハス	鎮めます	二十二年師走
	スエヤカニ	ヤマトメヨシコ	二十八日に	ヤマト姫ヨシコ
	コトシソヒ	カミニミツギノ	今年十一	神に貢ぎの
	ミツエシロ	ワカゴヲヤコガ	御杖代	ワカゴ親子が
	トモナヒテ	ウツメガミグシ	伴なひて	髻華女が御櫛
	アグルトテ	オトスクシダニ	あぐるとて	落とすクシダに

	トシコエテ	イデタツハツヒ	年越えて	いで立つ初日
36-12	アケコハラ	イセタカミヤニ	アケコハラ	イセ高宮に
	イリマセバ	オバトツカエテ	入りませば	祖母と仕えて
	ナヅキヒメ	カキモテアニノ	九月姫	粥もて兄の
	コトイノル	カレイキノミヤ	事祈る	故イキノ宮
	ミトセノチ	トヨスキヨハヒ	三年のち	トヨスキ齡
	モモミツデ	ミツエナラズト	百三つで	御杖ならずと
	ミナラワセ	カネテネガエバ	見習わせ	かねて願えば
	コノタビハ	ヨシコオウヂノ	この度は	ヨシコおうヂの
36-13	ヲミコトシ	ミタマゲカツギ	ヲ御子とし	御霊筥担ぎ
	イキノヨリ	イソベニウツシ	イキノより	イソベに遷し
	シツメマス	ヨキミヤトコロ	鎮めます	良き宮処
	アニアリト	ワカゴオヤレバ	南に在りと	ワカゴおやれば

	キスズカワ	フヲヤロトシノ	キスズ川	二百八万歳の
	サルタヒコ	ワカゴニイワク	サルタヒコ	ワカゴに日く
	ワレムカシ	カミノタマモノ	「われ昔	神の賜物
	サコクシロ	ウヂミヤニイレ	サコクシロ	ウヂ宮に入れ
36-14	アラミタマ	ヤモロホマチシ	新御魂	八万年待ちし
	カンマカラ	アマツヒツギノ	神宝	天つ日嗣の
	サカホコギ	ウツクシキスス	逆矛木	美しき鈴
	ワイキタチ	カカノンテンノ	地息立ち	かかんのんてん
	トキマチテ	ミチアラワセト	「時待ちて	道現わせ」と
	オホロゲノ	モノナラズカレ	朧 気の	物ならず故
	コニモエズ	ソノヌシオマツ	此にも得ず	その主お待つ
	コレサヅケ	ナガタウマレノ	これ授け	ナガタ生れの
36-15	ツチギミハ	モトニカエラン	ツチギミは	元に帰らん

	モチカエリ	ツゲヨトテサル	持ち帰り	「告げよ」とて去る
	オホワカゴ	カエリモフセバ	オホワカゴ	帰り申せば
	ヤマトヒメ	ウヂニイタリテ	ヤマト姫	ウヂに至りて (ウヂ=宇治)
	ミテイワク	コレカンカゼノ	みて日く	これ神風の
	オセノミヤ	ミクサハマツル	イセの宮	三種神器は祭る (イセ宮=伊勢宮)
	ミナモトト	イヤマヒカエス	源と	敬ひかえす
	アグライシ	オオハタヌシト	あぐら石	オオハタヌシと
36-16	ヤソトモニ	キソスズハラノ	八十伴に	キソスズハラの
	クサカラセ	オチコチヤマノ	草刈らせ	遠近山の
	キオキラセ	モトスエモドシ	木お伐らせ	本末もどし
	マナカモテ	オオミヤハシラ	真中もて	大宮柱
	シキタテテ	チギタカシリテ	敷き立てて	千木高しりて
	ミヤナレバ	ミカドニモフシ	宮なれば	帝に申し

	ミコトノリ	ミカサノヲトド	勅	ミカサの大匠
	イワヒヌシ	ワタラヒトミハ	斎主	ワタラヒ臣は
36-17	カンヌシニ	アヘタケヌガオ	神主に	アヘタケヌガお
	ミカワリト	ワニクニフクオ	御代りと	ワニクニフクお
	ウチカワリ	モノベトチネオ	皇后代り	モノベトチネお
	ミウエカラ	タケヒアサドオ	皇太后から	タケヒアサドお
	ミコカワリ	オノオノモフデ	皇太子代り	各々詣で
	フソムホノ	ナヅキシソムノカ	二十六年の	九月十六の日
	ヲランカミ	キソスズガワノ	大御神	五十鈴川の
	サコクシロ	ウヂニワタマシ	サコクシロ	ウヂに渡まし
36-18	ソナカノヨ	ミタケバシラオ	十七日の夜	心御柱お
	ヲサメシム	コレスメラギノ	納めしむ	これスメラギの
	ミズカラノ	タケノミヤコニ	みずからの	タケの都に

	ゾロイノリ	アメカゼノフシ	ゾロ祈り	雨風の節
	ホドヨクテ	ユタカニナレド	程よくて	豊かになれと
	フシヤスミ	キヤマヒモフス	伏し弥澄み	敬ひ申す
	ミメグミヤ	カミモヨロコビ	御恵みや	神も喜び
	ツゲイワク	ムカシワガスム	告げ日く	「昔 我が住む
36-19	サコクシロ	シキナミヨスル	サコクシロ	重浪寄する
	イセノミヤ	ナガクシズマリ	イセの宮	永く鎮り
	マモルベシ	トヨケノカミト	守るべし	トヨケの神と
	モロトモゾ	ヤマトヒメヨリ	諸共ぞ」	ヤマト姫より
	コレオツグ	キミヨロコビテ	これお告ぐ	君喜びて
	ニギテナシ	トヨケノカミエ	和幣なし	トヨケの神え
	サオシカハ	ミワノミケモチ	勅使は	ミワのミケモチ
	イワヒドハ	タニハミチウシ	齊人は	タニハミチウシ

36-20	クニヌシノ	カミノオシエハ	大国主の	神の教えは
	ヲランカミ	ツギオオホシテ	大御神	嗣ぎお思して
	イセノミチ	ヤヲヒトグサオ	イセの道	八百人草お
	イケメグム	カレカツヲヤギ	生け恵む	故カツヲ八木
	チギノウチ	ソグハウチミヤ	チギの内	削ぐは内宮
	ウチカロク	ヤタミユタカニ	内軽く	八民豊かに
	マタトヨケ	サカホコノノリ	またトヨケ	逆矛の法
	アメノホシ	コクラアラワシ	天の星	九座あらわし
36-21	カツヲコギ	チギハトオソグ	カツヲ九木	チギは外お削ぐ
	カレトミヤ	ウチアツクイツ	故外宮	内厚く稜威
	タミノチチ	オソレミチエヨ	民の父	恐れ道得よ
	ウチミヤハ	キミハハノコオ	内宮は	大君母の子お
	メグムノリカナ		恵む法かな	

● 鶏合(トリアワ)せ、タチバナの紋(アヤ)

37- 1	タマキミヤ	フツナホハツキ	タマキ宮	二十七年八月	
	ナカヲミト	イクサウツワオ	七日ヲミト	兵器お	(ヲミト=己卯)
	ミテグラニ	ウラトエバヨシ	ミテグラに	占問えば吉し	
	ユミヤタチ	モロノヤシロニ	弓・矢・太刀	諸の社に	
	ヲサメシム	カンベサダメテ	納めしむ	カンベ定めて	
	ヨリヨリニ	ウツワニマツル	寄り寄りに	ウツワに祭る	
37- 2	ハジメナリ	フツヤホカンナ	初めなり	二十八年十月	
	ヰカマカル	アニヤマトヒコ	五日罷る	兄ヤマトヒコ	
	ネツキフカ	オモムロオクル	十一月二日	おもむろ送る	
	ツキサカニ	ハベルヒトラオ	ツキサカに	侍る人等お	

	イキナガラ	ウヅメバサケビ	生きながら	埋めば叫び
	ツヒニカル	イヌトリハムオ	つひに枯る	犬鳥食むお
	キコシメシ	アワレニオボス	聞こし召し	哀れに思す
	ミコトノリ	イキオメグマデ	勅	「生きお恵まで
37- 3	カラスルハ	イタマシヒカナ	枯らするは	痛ましひかな
	フルノリモ	ヨカラヌミチハ	古法も	良からぬ道は
	ヤムバシヅ	ミソホハツムカ	止むべしぞ」	三十年正月六日
	ミコトノリ	ミコキソキネト	勅	「御子キソキネと
	タリヒコト	ノソムトコロオ	タリヒコト	望む所お
	モフスベシ	キソギネイワク	申すべし」	キソギネ日く
	ユミヤエン	タリヒコイワク	「弓矢得ん」	タリヒコ日く
	クライエン	キミフタミコノ	「位得ん」	君二御子の
37- 4	ノソムママ	ユミヤタマワル	望むまま	「弓矢賜わる

	アミノミヤ	オトハクライオ	兄の宮	弟は位お
	ツグベシト	ミソフホフヅキ	嗣ぐべし」と	三十二年七月
	ムカマカル	キサキヒハズノ	六日罷る	后ヒハズの
	ミオクリハ	モロトミメシテ	御送りは	諸臣召して
	ミコトノリ	サキノオヒカレ	勅	「先の殉死
	ヨカラネバ	コノオコナヒハ	良からねば	この行ひは
	イカニセン	ノミノスクネガ	如何にせん」	ノミのスクネが
37- 5	モフサクハ	イケルオイツム	申さくは	「生けるお埋む
	タメシトテ	アニヨカランヤ	例しとは	あに良からんや
	ハカラント	イツモノハシベ	議らん」と	イツモの土部
	モモメシテ	ハニデコオヨビ	百人召して	埴偶および
	クサグサノ	カタチツクリテ	種々の	形 造りて
	タテマツル	イマヨリノチハ	奉る	「今より後は

	ハジモノオ	イケルニカエテ	土物お	生けるに代えて
	ミササキニ	ウエテタメシト	御陵に	植えて例しと
37- 6	ナスベシヤ	キミヨロコビテ	成すべしや」	君喜びて
	ミコトノリ	ナンヂガハカリ	勅	「汝が計り
	ワガココロ	ヨシトハニワノ	わが心	良し」と埴輪の
	タテモノオ	ノチノタメシト	立物お	後の例しと
	サタマリテ	ノミノスクネオ	定まりて	ノミのスクネお
	アツクホメ	カタシトコロオ	篤く褒め	かたし所お
	タマワリテ	ハジノツカサゾ	賜わりて	土部の司ぞ
	ミソミトシ	ミワノタタネコ	三十三年	三輪のタタネコ
37- 7	ヤマシロガ	タチニイタレバ	ヤマシロが	館に到れば
	サラズトフ	ムスメヒトリヲ	サラズ問ふ	「娘 一人を
	ミヤニコフ	タレニヤリテモ	宮に乞ふ	誰にやりても

	フハウラム	コレサシタマヘ	ふはうらむ	これ指し給へ」
	コタエイフ	アスカモカミノ	答え云ふ	「明日カモ神の
	ミマエニテ	コレサダメント	御前にて	これ定めん」と
	トモニユク	ミヲヤノカミニ	共に行く	御祖の神に
	ニギテナシ	タテマツルワカ	和幣なし	奉るワカ
37- 8	アマツチノ	ミヨノサカエヲ	天地の	御世の栄えを
	イワハルル	メヲノミヲヤノ	祝はるる	陰陽の御祖の
	カミゾタフトキ		神ぞ貴き	
	トキニカミ	ツゲノミウタニ	時に神	告げの御歌に
	ヨノナカニモノオモウヒトノ		世の中に	もの思う人の
	アリトイウハワレオタノマヌ		ありというは	我お頼まぬ
	ヒトニゾアリケル		人にぞありける	
	カミウタオ	キキテタタネコ	神歌お	聞きてタタネコ

37- 9	イワクコレ	マヨフユエナリ	日く「これ	迷ふ故なり
	イマヨリゾ	モモカモフデテ	今よりぞ	百日詣でて
	キタリマセ	ワレハカラント	来たりませ	我謀らん」と
	ユクキブネ	タタネコガウタ	ゆくキブネ	タタネコが歌
	アワウミノ	アヅミノカミト	「アワ湖の	アヅミの神と
	スミノエモ	トモニキブネノ	スミノエも	共にキブネの
	マモリカミカナ		護り神かな」	
	カモニユキ	ワケイカツチノ	カモにゆき	ワケイカツチの
37-10	カミモマタ	ニギテトワカト	神もまた	和幣とワカと
	ヒトクサオ	ワケイカツチノ	人種お	ワケイカツチの
	マモルユエ	ミヨハオサマル	守る故	御世は治まる
	カモノカンカゼ		カモの神風	
	タタネコハ	シルシササゲテ	タタネコは	幣帛捧げて

	カモノミヤ	アルルオフシテ	カモの宮	荒るるお伏して
	オモミレバ	カモトイセトハ	思みれば	カモとイセとは
	ミヲヤナリ	スデニヤブレテ	御祖なり	既に破れて
37-11	イツホソシ	マモリホソキハ	稜威細し	護り細きは
	オトロヒカ	キミキコシメシ	衰ひか	君きこしめし
	タタネコガ	マゴクラマロオ	タタネコが	孫クラマロお
	イワイヌシ	ナモオオカモト	齋主	名もオオカモと
	カモヤシロ	サラニツクラセ	カモ社	更に造らせ
	キツネモチ	ミヲヤワタマシ	十一月十五日	御祖渡まし
	アスソムカ	ワケイカツチノ	翌十六日	ワケイカツチの
	ミヤウツシ	オオタタネコオ	宮遷し	オオタタネコお
37-12	サオシカノ	ニギテオサムル	勅使の	和幣納むる
	ツギノトシ	カモニミュキノ	次の年	カモに御幸の

	ミチツクリ	サラニウチハシ	道作り	更にウチ橋
	ツクリキノ	キツハカリハシ	造りキノ	キツは仮橋
	ヤヨヒハヒ	ヤソトモソロエ	三月一日	八十伴揃え
	ミヤコデテ	タマミヅヤドリ	都 出て	タマミヅ宿り
	フカカアヒ	ミテグラオサム	二日カアヒ	御幣帛納む
	ミヲヤカミ	ヤマシロフチガ	御祖神	ヤマシロフチガ
37-13	ミアエナス	ミカギブネヨリ	御饗なす	三日ギブネより
	カモニユキ	ワケイカツチノ	カモにゆき	ワケイカツチの
	オホカミニ	ミテグラオサメ	大神に	御幣帛納め
	カモスミガ	ニヒトノマエニ	カモスミガ	新殿前に
	トリケアフ	キミタノシメバ	鶏蹴合ふ	君たのしめば
	ワランベガ	イロヨキトリオ	童んべが	色よき鶏お
	ホメイワク	イヨカマハダヨ	賞め日く	「いよカマハダよ」

	キミトケズ	マテニトフイマ	君釈けず	左右に問ふ「今
37-14	ワランベガ	カマハダハナニ	童んべが	カマハダは何」
	イワクコレ	ハヤリウタナリ	日く「これ	はやり歌なり
	オホクニガ	ムスメカマハダ	オホクニが	娘カマハダ
	ウツクシク	アメニカカヤク	美しく	天に輝く
	コレナズク	ヨカウヂニユク	故名づく」	四日ウヂに行く
	ミチスガラ	ヨキヒトエンハ	道すがら	「良き人得んは
	シルシアレ	ホコトリイノリ	兆あれ」	矛取り祈り
	オホカメオ	ツケバナルイシ	大亀お	突けば成る石
37-15	コレシルシ	ウヂノカメイシ	これ兆	ウヂの亀石
	カエルノチ	サラズガムスメ	帰る後	サラズが娘
	ヨビノボセ	カマハダトベオ	呼び上せ	カマハダトベお
	キサキトシ	イワツクワケノ	后とし	イワツクワケの

	ミコオウム	イムナトリヒコ	御子お生む	イム名トリヒコ	
	フチガメノ	カリハタトベモ	フチが女の	カリハタトベも	
	ミヲヤワケ	キイソタリヒコ	ミヲヤワケ	キイソタリヒコ	
	キタケワケ	ミタリウムナリ	キタケワケ	三人生むなり	
37-16	ミソキホノ	ナヅキイソギネ	三十五年の	九月イソギネ	
	タカイシト	チヌノイケホル	タカイシと	茅渟の池掘る	
	メツキホル	サキトアトミト	十月掘る	サキとアトミと	
	モロクニニ	ヤモノイケミゾ	諸国に	八百の池溝	
	ツクラシム	ナリワヒフエテ	造らしむ	農ふえて	
	トミトメル	ミソナホハツノ	民富める	三十七年初日の	
	ヲミエタツ	タリヒコハソヤ	ヲミエ立つ	タリヒコは十八歳	(ヲミエ=戊寅)
	ヨツギミコ	ミソコホメツキ	世嗣御子	三十九年十月	
37-17	キソキネハ	ウチミデツクル	キソキネは	内宮で作る	

	チツルギオ	アカハダカトモ	千劍お	赤裸 伴
	ナオツケテ	オシサカニオク	名お付けて	オシサカに置く
	コノトキニ	シトリベタテベ	この時に	倭文部楯部
	オホアナシ	ユミヤハツカシ	オホアナシ	弓矢泊櫃部
	タマベカミ	アマノオサカベ	玉部神	天の刑部
	チノヘキベ	タチハカセベノ	チのヘキベ	太刀佩 部の
	トシナベオ	アハセタマワル	十品部お	合せ賜わる
37-18	ニシキミコ	チツルギウツス	ニシキ御子	千劍 遷す
	イソノカミ	カミガカスガノ	イソノ上	神がカスガの
	イチカワニ	ツゲオサメシム	イチカワに	告げ納めしむ
	ニシキミコ	ツカサトナセル	ニシキ御子	司となせる
	ムソヨトシ	サミダレヨソカ	六十四年	五月雨四十日
	フリツヅキ	イナダミモチニ	降り続き	稲田みもちに

	イタミカル	キミニモフセバ	傷み枯る	君に申せば
	ミヅカラニ	カゼフノマツリ	親らに	風吹の祭り
7-19	ナシマセバ	ヤハリワカヤギ	なしませば	やはり若やぎ
	ミヅホナル	カエリモフデノ	瑞穂なる	帰り詣での
	ホヅミオモ	ミヅカラマツリ	穂積祭おも	親ら祭り
	タマフユエ	クニユタカナリ	給ふゆえ	国豊かなり
	ヤソナホノ	キサラギキカニ	八十七年の	二月五日に
	ニシキミコ	キモトニイワク	ニシキ御子	妹に日く
	ワレヲヒヌ	ミタカラモレヨ	「われ老ひぬ	御宝 守れよ」
	ヲナカヒメ	イナミテイワク	ヲナカ姫	辞みて日く
37-20	タオヤメノ	ホコラタカクテ	「手弱女の	祠 高くて」
	マタイワク	タカケレバコソ	また日く	「高ければこそ
	ワガツクル	カミノホコラモ	わが造る	神の祠も

	カケハシノ	ママトウタエバ	懸橋の	「まま」と歌えば
	ヲナカヒメ	モノベトチネニ	ヲナカ姫	モノベトチネに
	マタサヅク	タニハミカソガ	また授く	タニハミカソガ
	イエノイヌ	ナハアシユキガ	家の犬	名はアシユキが
	クヒコロス	ムジナノハラニ	食ひ殺す	猪の腹に
37-21	ヤサカニノ	タマアリオサム	ヤサカニの	玉あり納む
	イソノカミ	ヤソヤフミソカ	石上神	八十八年七月十日
	ミコトノリ	ワレキムカシ	勅	「われ聞く昔
	シラギミコ	ヒボコガツトノ	シラギ御子	ヒボコが苞の
	タカラモノ	タジマニアルオ	宝物	タジマにあるお
	イマミント	ヒボコガヒマゴ	今見ん」と	ヒボコが曾孫
	キヨヒコニ	サオシカヤレバ	キヨヒコに	勅使遣れば
	タテマツル	ハボソアシタカ	奉る	ハボソアシタカ

37-22	ウカガタマ	イツシコガタナ	ウカガ玉	イツシ小刀
	イツシホコ	ヒカガミクマノ	イツシ矛	ヒカガミクマの
	ヒモロゲズ	イデアサノタチ	ヒモロゲズ	イデアサの太刀
	ヤツノウチ	イツシコガタナ	八つの内	イツシ小刀
	ノコシオキ	ソデニカクシテ	残し置き	袖に隠して
	ハキイヅル	スメラギコレオ	佩き出づる	天皇これお
	シロサズテ	ミキタマハレバ	知ろさずて	神酒賜はれば
	ノムトキニ	ハダヨリオチテ	飲む時に	肌より落ちて
37-23	アラワルル	キミミテイワク	顕わるる	君見て日く
	ソレナンゾ	ココニキヨヒコ	「それ何ぞ	ここにキヨヒコ
	カクシエズ	ササグタカラノ	隠し得ず	捧ぐ宝の
	タグイナリ	キミマタイワク	類なり」	君また日く
	ソノタカラ	アニハナレザル	「その宝	あに離れざる

	タグヒカト	ヨツテササゲテ	類か」と	依つて捧げて
	オサメオク	ノチニヒラケバ	納め置く	のちに開けば
	コレウセヌ	キヨヒコメシテ	これ失せぬ	キヨヒコ召して
37-24	モシユクヤ	コタエモフサク	「もし行くや」	答え申さく
	サキノクレ	コタチミツカラ	「先の暮	小刀自ら
	キタレドモ	ソノアスノヒニ	来れども	その明日の日に
	マタウセヌ	キミカシコミテ	また失せぬ」	君畏みて
	マタトワズ	オノヅトイタル	また問わず	自づと至る
	アハヂシマ	カミトマツリテ	アハヂシマ	神と祭りて
	ヤシロタツ	コソホキサラギ	社 建つ	九十年二月
	ミコトノリ	カグオモトメテ	勅	「香久お求めに
37-25	タジマモリ	トコヨニユケヨ	タジマモリ	トコヨに行けよ
	ワガオモフ	クニトコタチノ	わが思ふ	クニトコタチの

	ミヨノハナ	クソクホサシエ	御世の花」	九十九年サシエ	(サシエ=庚午)
	アフミハヒ	キミマカルトシ	七月初日	君罷る歳	
	モモミソナ	ミコノモハイリ	百三十七	御子の喪衣入り	
	ヨソヤヨル	ハニタテモノシ	四十八夜	埴立物し	
	シハスソカ	スガラフシミニ	十二月十日	スガラ・フシミに	
	ミオクリノ	タビモカカヤク	御送りの	松明も輝く	
37-26	カミノミユキゾ		神の行幸ぞ		
	アクルハル	ヤヨヒニカエル	明くる春	三月に帰る	
	タシマモリ	トキジクカグツ	タシマモリ	時じく香ぐつ	
	フソヨカゴ	カグノキヨサバ	二十四籠	香ぐの木四竿	
	カブヨサホ	モチキタルマニ	株四竿	持ち来たる間に	
	キミマカル	ミヤゲナカバヲ	君罷る	土産半ばを	
	ワカミヤエ	ナカバオキミノ	若宮え	中ばお君の	

	ミササキニ	ササゲモフサク	御稜に	捧げ申さく
37-27	コレエムト	ハルカニユキシ	「これ得むと	遙かに行きし
	トコヨトハ	カミノカクレノ	トコヨとは	神の隠れの
	オヨビナキ	フリオナジムノ	及びなき	振りお馴染むの
	トトセブリ	アニオモヒキヤ	十年ぶり	豈思ひきや
	シノギエテ	サラカエルトハ	凌ぎ得て	更帰るとは
	スメラギノ	クシヒニヨリテ	天皇の	奇し靈によりて
	カエルイマ	スデニサリマス	帰る今	既に去ります
	トミイキテ	ナニカセントテ	臣生きて	何かせん」とて
37-28	オヒマカル	モロモナンダデ	追ひまかる	諸も涙で
	カグヨモト	トノマエニウエ	香ぐ四本	殿前に植ゑ
	カブヨモト	スガハラニウユ	株四本	スガハラに殖ゆ
	ノコシフミ	ミコミタマヒテ	遺し文	皇太子見給ひて

	カグキミガ	ハナタチバナハ	香ぐ君が	ハナタチバナは
	カレガツマ	オシヤマヤリテ	彼が妻	オシヤマ遣りて
	ヨバシムル	チチモトヒコト	呼ばしむる	父モトヒコと
	ノボリクル	ミコヨロコビテ	上りくる	皇太子喜びて
37-29	モトヒコニ	ユルシハタマヒ	モトヒコに	許し衣賜ひ
	モオツトム	ハナタチバナガ	喪お勤む	ハナタチバナが
	サツキマツ	ヨハニウムコニ	五月末	夜半に生む子に
	ミコトノリ	ムカシノヒトノ	勅	昔の人の
	ヲオトトム	ヲトタチバナト	緒お留む	ヲトタチバナと
	ナオタマヒ	ニタルスガタノ	名お賜ひ	似たる姿の
	オシヤマニ	トツグハハコモ	オシヤマに	嫁ぐ母子も
	ワンメグミ	フカキユカリノ	御ん恵み	深き縁りの
37-30	タメシナルカナ		例しなる哉	

● ヒシロの世(ヨ)、クマソ撃(ウ)つ紋(アヤ)

38- 1	トキアスス	ナヲヤソヤホノ	時アスス	七百八十八年の
	フツキノヒ	アマツヒツギオ	七月十一日	天つ日嗣お
	ウケツギテ	イムナタリヒコ	受け継ぎて	イム名タリヒコ
38- 2	ヲシロワケ	アメスメラギノ	ヲシロワケ	天スメラギの
	トシヤソヒ	ミグサタカラノ	歳八十一	三種神宝の
	アマヲシカ	ヤトヨノミハタ	天勅使	ヤトヨのミハタ
	タカミクラ	イトオゴソカニ	高御座	いと巖かに
	アマツカミ	ムベクダリマス	天つ神	むべ下ります
	ミカザリオ	タミニオガマセ	御飾お	民に拝ませ
	ワカミヤノ	ハツコヨミナル	若宮の	初暦なる
38- 3	フホヤヨヒ	キビツヒコガメ	二年三月	キビツヒコが女

	タツキサキ	ハリマのキナヒ	立つ后	ハリマのキナヒ
	ライラツメ	ウチメノトキニ	ライラツメ	内後の時に
	コゾウヅキ	ハラミテウマズ	去年四月	孕みて生まず
	フソヒツキ	ヘテシハスモチ	二十一月	経て十二月望
	ウスハタニ	モチハナナシテ	白端に	餅花なして
	フタゴウム	エノナモチヒト	双子生む	兄の名モチヒト
	ヲウスミコ	トノナハナヒコ	ヲウス御子	弟の名ハナヒコ
38- 4	オウスミコ	トモニイサミテ	オウス御子	共に勇みて
	ヒトナリハ	ミノタケヒトセ	人なりは	身の丈一丈
	エハヨワク	トハフソチカラ	兄は弱く	弟は二十人力
	ミホノハル	キサラギハツヒ	三年の春	二月初日
	キノクニニ	カミマツラント	キノ国に	神祭らんと

	ウラナエバ	ユクハヨカラズ	占えば	行くは良からず
	ミユキヤメ	オシマコトノコ	行幸止め	オシマコトの子
	ウマシタケ	キゴコロヤリテ	ウマシタケ	キゴコロ遣りて
	マツラシム	アビカシハラニ	祭らしむ	アビ・カシハラに
38- 5	コトセスム	キノウヂマロガ	九年住む	キノウヂマロガ
	ヤマトカゲ	メドリテウムコ	ヤマトカゲ	娶りて生む子
	タケウチゾ	ヨホキサラモチ	タケウチゾ	四年二月望
	ミノニユク	トミラモフサク	ミノに行く	臣ら申さく
	ヨキメアリ	ヤサカタカヨリ	「良き女あり	ヤサカタカヨリ
	ココナキリ	ウエテタノシム	菊桐	植えて楽しむ
	ココリミヤ	カレコレエント	ココリ宮	故これ得ん」と
	ミユキシテ	ミノタカギタノ	行幸して	ミノ・タカギタの
38- 6	タカヨリノ	ココリノミヤニ	タカヨリの	ココリの宮に

	カリイマス	イケスノヅメバ	仮り居ます	生簀臨めば
	サシノヅク	オトヒメトメテ	差し覗く	オト姫留めて
	キミメシツ	ヒメオモエラク	君召しつ	姫思えらく
	イセノミチ	カヨエルノリモ	伊勢の道	通える法も
	ツヤナラズ	キミニモフサク	艶ならず	君に申さく
	ヤツカレハ	トツギノゾマズ	「妾は	嫁ぎ望まず
	ミアラカニ	メスモヨカラズ	御殿に	召すも良からず
38- 7	アネガナオ	ヤサカイリヒメ	姉が名お	ヤサカイリ姫
	スガタヨク	キサヒノミヤニ	姿 良く	キサヒの宮に
	メサルトモ	ミサホナランカ	召さるとも	操ならんか」
	キミユルシ	アネヒメオメス	君許し	姉姫お召す
	ネシモハヒ	マキムキヒシロ	十一月初日	マキムキ・ヒシロ
	ネヒミヤニ	カエリイリマス	新宮に	帰り入ります

	ヤサカヒメ	ナルミノウチメ	ヤサカ姫	成るミノウチメ
	キホネシモ	ソキカヒノデニ	五年十一月	十五日日の出に
38- 8	ウムコノナ	ワカタリヒコゾ	生む子の名	ワカタリヒコゾ
	タカヨリハ	ヒノマエモフデ	タカヨリは	日の前詣で
	ウジマロガ	タチデマコウム	ウジマロが	館で真子生む
	キココロガ	イムナオコエバ	キココロが	諱お請えば
	タカヨリガ	イムナタカヨシ	タカヨリが	諱タカヨシ
	ナハウチト	タケウチマロゾ	名はウチト	タケウチマロゾ
	キヂトベバ	タカヨリノホル	雉飛べば	タカヨリ上る
	ウヂマロモ	ウチミヤニユキ	ウヂマロも	内宮にゆき
38- 9	コトホギス	キミヨロコビテ	寿ぎす	君よろこびて
	イムナコフ	ウヂマロササグ	忌名乞ふ	ウヂマロ捧ぐ
	ウヂヒトハ	ヨツキミコナリ	ウヂヒトは	世嗣御子なり

	ミノウチメ	ナルスケウムコ	ミノ内侍	なる典侍生む子
	キモキヒコ	イムナスズキネ	キモキヒコ	イム名スズキネ
	ヲシワケト	ワカヤマトネト	ヲシワケと	ワカヤマトネと
	オオズワケ	ツギヌノシヒメ	オオズワケ	次ヌノシ姫
	ヌナキヒメ	カノコヨリヒメ	ヌナキ姫	カノコヨリ姫
38-10	キモキヒメ	キソサチヒコニ	キモキ姫	キソサチヒコに
	キビエヒコ	ツギタカギヒメ	キビエヒコ	次タカギ姫
	オトヒメゾ	マタイワツクノ	オト姫ぞ	またイワツクの
	コノミツハ	イラツメミヲノ	子のミツハ	イラツメミヲの
	スケウムコ	キモノメクスコ	典侍生む子	キモノ姫クスコ
	ウチヲキミ	マタイソノカミ	内治君	また石上社
	キソキネノ	キカワスケウム	キソキネの	キカワ典侍生む
	カンクシト	キナセヒコマタ	カンクシと	キナセヒコまた

38-11	アベコゴト	タカタウチウム	アベコゴト	タカタ内侍生む
	タケコワケ	マタソヲタケガ	タケコワケ	またソヲタケが
	タケヒメハ	ソムツキハラミ	タケ姫は	十六月孕み
	フタゴウム	クニコリワケト	二子生む	クニコリワケと
	クニヂワケ	ツギミヤヂワケ	クニヂワケ	次ミヤヂワケ
	トヨトワケ	ヒウガミユキニ	トヨトワケ	日向行幸に
	カミナガガ	ヲタネオシモメ	カミナガガ	ヲタネ御下后
	ウムコノナ	ヒウガソツヒコ	生む子の名	ヒウガソツヒコ
38-12	マタソヲノ	ミハカセウムコ	またソヲの	ミハカセ生む子
	トヨクニノ	イムナソヲヒト	トヨクニの	イム名ソヲヒト
	ヒウガキミ	スメラギノミコ	日向君	天皇の御子
	ヲハキソキ	メハフソムスベ	男は五十五	女は二十六すべ
	ヤソヒナリ	ヲヲウスオヨビ	八十一人なり	ヲヲウスおよび

	ヤマトタケ	キモギイリヒコ	ヤマトタケ	キモギイリヒコ
	キモノヒメ	ワカタラシヒコ	キモノ姫	ワカタラシヒコ
	トヨクワケ	ムタリヲミコノ	トヨクワケ	六人治御子の
38-13	ナオオブル	アマリナソキコ	名お帯ぶる	余り七十五子
	クニアガタ	ワケオサムソノ	国県	分け治むその
	スエオオシ	ソフホハツハル	子末多し	十二年初春
	ミノノクニ	カンホネガメノ	ミノの国	カンホネが女の
	エトトオコ	クニノイロアリ	姉妹トオコ	国の色あり
	ヲヲウスオ	ヤリテヨバシム	ヲヲウスお	遣りて呼ばしむ
	ヲウスミコ	ミノニイタリテ	ヲウス御子	ミノに至りて
	スガタミテ	ヒソカニメシツ	姿見て	密かに召しつ
38-14	トトマリテ	カエゴトナサズ	留まりて	返事なさず
	コトシソヒ	タケハヤタナリ	今年十一歳	丈は八咫なり

	キミトガメ	ミヤコニイレズ	君咎め	都に入れず
	アフミヅキ	クマソソムキテ	七月	クマソ背きて
	ミツギセズ	オシテササゲテ	朝貢ぎせず	璽 捧げて
	ミカリコフ	ハツキモチヨリ	巡行請ふ	八月十五日より
	ミユキナル	ナノキカイトル	行幸なる	九月の五日至る
	スホウサバ	トキニスメラギ	スホウ・サバ	時に天皇
38-15	サオノゾミ	サガイキタツハ	南お臨み	「邪息き起つは
	ツツガカヤ	オホノタケモロ	包邪かや」	オホノタケモロ
	キノウナデ	モノベナツハナ	キノウナデ	モノベナツハナ
	コノミタリ	ヤリテカタチオ	この三人	遣りて形成お
	ミセシムル	カンカシヒメハ	偵せしむる	カンカシ姫は
	ヒトノカミ	ミツカヒキキテ	人の頭	御使者聞きて
	シヅヤマノ	サカキオヌキテ	シヅ山の	賢木お抜きて

	カンツエニ	ヤツカノツルギ	上つ枝に	八握の劍
38-16	ヤタカガミ	シモマガタマヤ	八咫鏡	下枝勾玉や
	シラハタオ	トモヘニカケテ	白幡お	艦舳に掛けて
	ワガタグヒ	タガハズアメノ	「わが属類	違はず天の
	メグミエン	タダソコナフハ	恵み得ん	ただ害ふは
	ハナダレガ	ミダリマタガリ	ハナダレが	乱りまたがり
	ナオカリテ	ウサニタムロシ	名お借りて	ウサに屯し
	ナリヒビク	マタミミタレモ	鳴り響く	またミミタレも
	ムサボリテ	タミオカスムル	貧て	民お略奪むる
38-17	ミケガワエ	マタアサハギモ	ミケ川エ	またアサハギも
	トモアツム	タカハガワマタ	トモ集む	タカハ川また
	ツチオリト	キオリモカクレ	ツチオリと	キオリも隠れ
	ミドリノノ	カワサカタノミ	ミドリノの	川坂持み

	カスメトル	ミナカナメヂニ	略め奪る	みな要路に
	アツマリテ	オサトナノルオ	集まりて	長と名乗るお
	ウチタマエ	トキニタケモロ	討ち給え」	ときにタケモロ
	ハカラヒテ	アカキヌハカマ	謀らひて	赤衣袴
38-18	ヒキデモノ	ヒキテアサハギ	引出物	引きてアサハギ
	メシヨセテ	コレニヒカセテ	召し寄せて	これに引かせて
	モロクレバ	フツクコロシツ	諸来れば	悉く殺しつ
	ミユキシテ	トヨノナガラニ	行幸して	トヨのナガラに
	カリミヤコ	メツキニイタル	仮 都	十月に至る
	ハヤミムラ	ヲサハヤツミメ	ハヤミ村	長ハヤミツ姫
	ミユキキキ	ミヅカラムカエ	行幸聞き	自ら迎え
	モフサクハ	ネズガイワヤニ	申さくは	「ネズが石窟に
38-19	フツチグモ	ナハアオクモト	二ツチグモ	名はアオクモと

	シラクモト	ナオリネギノニ	シラクモと	ナオリネギノに
	ミツチクモ	ウチサルとヤタ	三ツチクモ	ウチサルとヤタ
	クニマロト	コノキツチグモ	クニマロと	この五ツチグモ
	トモガラノ	チカラツヨキオ	衆類の	力 強きお
	アツメオク	アナガチメサバ	集め置く	強ち召さば
	イクサセン	ココニスメラギ	戦せん」	ここに天皇
	ススミエズ	クタミノユラノ	進み得ず	クタミの村の
38-20	カリミヤニ	ハカリテイワク	仮宮に	議りて日く
	モロウタバ	クモラオソレテ	「衆徒討たば	クモ等恐れて
	カクレント	ツハキオトリテ	隠れん」と	ツハキお採りて
	ツチトナシ	タケキオエラミ	椎となし	猛きお選み
	ツチモチテ	ヤマオウガチテ	椎もちて	山お穿ちて
	クサオワケ	イワヤノクモオ	草お分け	石窟のクモお

	ウチコロス	イナバカワベハ	打ち殺す	イナバ川辺は
	チタトナル	マタウチサルオ	血田となる	またウチサルお
38-21	ウタントテ	ツバキイチヨリ	討たんとて	ツバキイチより
	ネギヤマオ	コストキアダガ	ネギヤマお	越すとき仇が
	ヨコヤイル	アメヨリシゲク	横矢射る	雨より繁く
	ススミエズ	キワラニカエリ	進み得ず	キワラに帰り
	フトマニミ	ヤタオネギノニ	フトマニ見	ヤタおネギノに
	ウチヤブリ	ココニウチザル	討ち破り	ここにウチザル
	クダリコフ	ユルサズユエニ	降り請ふ	許さずゆえに
	クニマロモ	タキエミオナゲ	クニマロも	滝え身お投げ
38-22	コトゴトク	ホロビヲサマル	ことごとく	滅び治まる
	ソノハジメ	カシハヲノイシ	その始め	カシハヲの石
	ナガサムタ	ハバミタアツサ	長さ六尺	幅三尺厚さ

	ヒトタキキ	スメラギイノリ	一尺五寸	天皇祈り
	トビアガル	カレスミヨロシ	飛び上る	故スミヨロシ
	ナオ리카ミ	モロハノヤシロ	直り神	両翼の社
	サラニタテ	コレマツラシム	新に建て	これ祭らしむ
	カエモフデ	ネツキニイタル	名代詣で	十一月に至る
38-23	カリミヤハ	ヒウガタカヤゾ	仮宮は	ヒウガタカヤゾ
	シハスキカ	クマソオハカリ	十二月五日	クマソお議り
	ミコトノリ	ワレキククマソ	勅	『われ聞くクマソ
	エアツカヤ	オトセカヤトテ	兄アツカヤ	弟セカヤとて
	ヒトノカミ	モロオアツメテ	人の上	諸お集めて
	タケルトス	ホコサキアタル	タケルとす	鋒先当たる
	モノアラズ	ササヒトトカズ	者あらず	ささひととかず
	サワナレバ	タミノイタミゾ	多なれば	民の傷みぞ

38-24	ホコカラズ	ムケントアレバ	銚からず	平けん」とあれば
	トミヒトリ	ススミテイワク	臣一人	進みて日く
	クマソニハ	フカヤトヘカヤ	「クマソには	フカヤとヘカヤ
	フタムスメ	キラキラシクモ	二娘	きらきらしくも
	イサメルオ	オモキヒキデニ	勇めるお	重き引出物に
	メシイレテ	ヒマオウカガヒ	召し入れて	隙お窺ひ
	トリコニス	トキニスメラギ	捕虜にす」	時に天皇
	ヨカラント	キヌニアザムク	「よからん」と	衣に欺く
38-25	フタムスメ	メシテミモトニ	二娘	召して御許に
	メグミナス	アネノフカヤガ	恵みなす	姉のフカヤが
	モフサクハ	キミナウレヒソ	申さくは	「大君な愁ひそ
	ハカラント	ツワモノツレテ	謀らん」と	兵 連れて
	ヤニカエル	サケオアタタニ	館に帰り	酒おあたゝに

	ノマシムル	チチノミエヒテ	飲ましむる	父飲み酔ひて
	フストキニ	チチガユンヅル	伏す時に	父が弓弦
	キリオキテ	チチアツカヤオ	切り置きて	父アツカヤお
38-26	コロサシム	スメラギアネガ	殺さしむ	天皇姉が
	シムタツオ	ニクミコロシテ	親断つお	憎み誅して
	オトヘカヤ	ソノクニツコト	妹ヘカヤ	ソの国造と
	オヂノコノ	トリイシカヤト	叔父の子の	トリイシカヤと
	チナマセテ	ツクシムケント	姻ませて	「ツクシ平けん」と
	ムトセマデ	タカヤノミヤニ	六年まで	タカヤの宮に
	オワシマス	ミハカセヒメオ	御座します	ミハカセ姫お
	ウチサマニ	トヨクニワケノ	うちさまに	トヨクニワケの
38-27	ヲミコウム	ハハコトドマリ	中御子生む	母子止まり
	クニヅコヤ	ソナヤヨヒソフ	国造や	十七年三月十二日

	コユガタノ	ニモノニミユキ	コユガタの	ニモノに行幸
	キオノゾミ	ユカシオホシテ	東お望み	昔 偲して
	ノタマフハ	ミヲヤアマキミ	詔給ふは	「御祖天君
	タカチホノ	ミネニノボリテ	タカチホの	峯に登りて
	ヒノヤマノ	アサヒニイナミ	日の山の	朝日に辞み
	ツマムカヒ	カミシモメグム	妻向ひ	上下めぐむ
38-28	カミトナル	クニノナモコレ	神となる	国の名もこれ
	カハカミノ	アマネクテラス	カは上の	あまねく照らす
	モハシモノ	アオヒトクサオ	モは下の	青人草お
	メグマント	ナルカミノアメ	恵まんと	鳴雷の雨
	ヨキホドニ	ワケテミソロノ	良き程に	別けて御稲の
	ウルホイニ	タミニギハセル	潤いに	民賑はせる
	イサオシハ	カモワケツチノ	功績は	カモワケツチの

	カンココロ	カクゾオボシテ	神心』	かくぞ思して
38-29	カミマツリ	ミヤコノソラオ	神祭り	都の空お
	ナガムミウタニ		眺む御歌に	
	ハシキヨシ	ワキベノカタユ	『愛しきよし	吾家の方ゆ
	クモイタチ	クモハヤマトノ	雲居立ち	雲はヤマトの
	クニノマホ	マタタナビクハ	国の秀真	また棚引くは
	アオガキノ	ヤマモコモレル	青垣の	山も籠れる
	ヤマシロハ	イノチノマソヨ	ヤマシロは	生命の全よ
	ケムヒセバ	タダミコオモエ	煙引せば	ただ御子思え
38-30	クノヤマノ	シラカシガエオ	奇の山の	白檀が枝お
	ウズニサセコノコ		頭髮に挿せ愛の子』	
	ソヤヤヨヒ	ミヤコカエリノ	十八年三月	都 遷りの
	ミュキガリ	イタルヒナモリ	巡行	至る夷守

	イワセガワ	ハルカニノゾミ	イワセ河	遥かに臨み
	ヒトムレオ	オトヒナモリニ	人群お	弟夷守に
	ミセシムル	カエリモフサク	偵せしむる」	帰り申さく
	モロアガタ	ヌシラオホミケ	「諸県	主ら大御食
38-31	ササгент	イツミメガヤニ	捧げん」と	イツミ姫が屋に
	ソノツドエ	ユクウヅキミカ	その集え	行く四月三日
	クマノガタ	オサクマツヒコ	クマノガタ	長クマツヒコ
	エトオメス	エヒコハクレド	兄弟お召す	兄ヒコは来れど
	オトハコズ	トミトアニトニ	弟は来ず	臣と兄とに
	サトサシム	シカレドコバム	諭さしむ	しかれど拒む
	カレコロス	フソカアシキタ	故誅す	二十日アシキタ
	コジマニテ	ヒデリニアツク	コジマにて	日照りに暑く
38-32	ミヅオメス	ヤマベコヒダリ	水お召す	ヤマベコヒダリ

	ミヅナキオ	アメニイノレバ	水無きお	天に祈れば
	イワカドニ	シミヅワキデル	岩角に	清水湧き出る
	コレササグ	カレニナヅクル	これ捧ぐ	故に名付くる
	ミヅシマゾ	サツキハツヒニ	ミヅシマゾ	五月初日に
	フネハセテ	ユクヤツシロエ	船走せて	行くヤツシロエ
	ヒノクレテ	ツクキシシレズ	日の暮れて	着く岸知れず
	ヒノヒカル	トコエサセトノ	「火の光る	所え指せ」との
38-33	ミコトノリ	キシニアガリテ	勅	岸に上りて
	ナニムラト	トエバヤツシロ	「何村」と	問えばヤツシロ
	トヨムラノ	タクヒオトエバ	トヨムラの	焚く火お問えば
	ヌシオエズ	ヒトノヒナラズ	主お得ず	人の火ならず
	シラヌヒノ	クニトナヅクル	シラヌヒの	国と名付くる
	セミナミカ	タカクアガタノ	六月三日	タカク県の

	フナワタシ	タマキナムラノ	船渡し	タマキナ村の
	ツチグモノ	ツヅラオコロシ	ツチグモの	ツヅラお殺し
38-34	ムソカニハ	イタルアソクニ	十六日には	至るアソ国
	ヨモヒロク	イエキミエネド	四方広く	家居見えねば
	ヒトアリヤ	キミノタマエバ	「人ありや」	君詔給えば
	タチマチニ	フタガミナリテ	たちまちに	二神なりて
	アソツヒコ	アソツヒメアリ	アソツヒコ	アソツ姫あり
	キミナンゾ	ヒトナキヤトハ	「大君何ぞ	人無きやとは」
	キミイワク	タレゾコタエテ	大君日く	「誰ぞ」答えて
	クニツカミ	ヤシロヤブレリ	「国つ神	社 破れり」
38-35	トキニキミ	ミコトノリシテ	時に大君	勅して
	ヤシロタツ	カミヨロコビテ	社建つ	神喜びて
	マモルユエ	キエキシゲレリ	護る故	家居繁れり

	アフミヨカ	ツクシヂノチノ	七月四日	ツクシ路の霊の
	タカタミヤ	オホミケタオレ	タカタ宮	大御木倒れ
	キノナガサ	コモナソタケゾ	木の長さ	九百七十丈ぞ
	モモフミテ	ユキキニウタフ	百踏みて	行来に歌ふ
	アサシモノ	ミケノサオシハ	朝霜の	御木の清小橋
38-36	マエツキミ	イヤワタラズモ	群臣	いや渡らずも
	ミケノサオハシ		御木の清小橋	
	キミトエバ	ヲキナノイワク	大君問えば	翁の日く
	クヌギナリ	タオレヌサキハ	「クヌギなり	倒れぬ先は
	アサヒカゲ	キシマネニアリ	朝日影	キシマ嶺にあり
	ユウヒカゲ	アソヤマオオフ	夕日影	アソ山覆ふ
	カミノミケ	クニモミケトゾ	神の御木	国も御木とぞ
	ナツケマス	ヤツメオコエテ	名付けます	ヤツメお越えて

38-37	マエヤマノ	アワミサキミテ	マエヤマの	アワ岬見て
	キミイワク	タタミウルワシ	大君日く	「重畳うるわし
	カミアリヤ	ミヌサルヲウミ	神ありや」	ミヌサルヲウミ
	モフサクハ	ヤツメヒメカミ	申さくは	「ヤツメ姫神
	ミネニアリ	ホヅミニイタル	峰にあり」	八月一日に至る
	イクバムラ	ミケススムヒニ	イクバ村	御饌進む日に
	カシワデベ	ミサラワスレル	膳部	御皿忘れる
	オサイワク	ムカシアメミコ	長日く	「昔 天御子
38-38	ミカリノヒ	ココニミケナシ	御巡行の日	ここに御食なし
	カシハベガ	ウクハワスレリ	膳部が	受葉忘れり
	クニコトバ	ミサラオウクハ	国言葉	御皿お受葉
	キハモコレ	カカルメデタサ	ゐはもこれ	かゝるめでたき
	タメシナリ	ソコホナカヤカ	例なり」	十九年九月八日

	マキムキノ	ミヤニカエマス	マキムキの	宮に帰ます	
	フソサミエ	キサラギヨカニ	二十年サミエ	二月四日に	(サミエ=庚寅)
	キモノヒメ	クスコウチヒコ	キモノ姫	クスコ内巫子	
38-39	イセノカミ	マツルイワヒハ	イセの神	祭る祝ひは	
	ツクシムケ	ヒメコトシソヨ	ツクシ平け	姫今年十四	
	ヤマトヒメ	コトシモモヤツ	ヤマト姫	今年百八つ	
	ヨロコビテ	ヨハヒイタレバ	喜びて	齢 至れば	
	ワレタリヌ	ワガヤソモノベ	我足りぬ	わが八十物部	
	ソフツカサ	キモノニウツシ	十二司	キモノに移し	
	ツカエシム	クスコオカミノ	仕えしむ	クスコお神の	
	ミツエシロ	タケノミヤキニ	御杖代	タケの宮居に	
38-40	ツツシミテ	ツカエハンベル	慎みて	仕え侍べる	
	ヤマトヒメ	ウヂハタドノノ	ヤマト姫	ウヂ幡殿の	

	イツミヤニ	ヒラキシヅカニ	イツ宮に	開き静かに
	ヒノカミヲ	マツレバナガク	日の神を	祀れば永く
	ウマナクゾ	フソキホフミハ	倦まなくぞ	二十五年七月初
	タケウチニ	ホツマシルベノ	タケウチに	ホツマしるべの
	ミコトノリ	キタヨリツガル	勅	北よりツガル
	ヒタカミヤ	カグノヤカタニ	ヒタカミヤ	かぐの館に
38-41	ミチオキク	モトヒコイワク	道お聞く	モトヒコ日く
	クニシルノ	ミチハイニシエ	「国知るの	道は昔」
	カミノリガキノアヤ		神祈り粥のアヤ	
	ネノクニノ	オホギノマツル	ネの国の	オホギの祭る
	カミノミケ	ネサモノスエノ	神の御食	十一月の末の
	ユミハリニ	カミノリカユハ	弓張に	神祈り粥は
	クロマメト	ウムギトスメト	黒豆と	大麦と小豆と

	ナナノヨネ	カキニカシギテ	七種の米	粥に炊ぎて
38-42	ウケミタマ	キハシラマツリ	大食御魂	五柱 祭り
	トシゴシハ	ウムギトスメト	年越しは	大麦と小豆と
	ヨネムマス	トシノリヤマサ	米蒸ます	歳のり八マサ
	オニヤラヒ	ムツキナアサハ	鬼やらひ	一月七日朝は
	ナナクサノ	ミソニキクラヤ	七種の	御ソに五クラヤ
	モチノアサ	ムワタマツリハ	十五日の朝	六ワタ祭りは
	ヨネトスメ	カミアリカユゾ	米と小豆	神あり粥ぞ
	ツチギミノ	シムノマツリハ	ツチ君の	シムの祭りは
38-43	マメスメニ	サカメトナナノ	大豆小豆に	サカメと七種の
	ヨネカシギ	アマコノカミノ	米炊ぎ	天子の神の
	ミシルガキ	ミオシルワザノ	御汁粥	ミお知る術の
	イクサワニ	トシナカラエテ	いく多に	年永らえて

	ヨロヒトノ	チチノシルベト	万人の	千千のしるべと
	アルフミオ	ヨヨニツタフル	ある文お	世世に伝ふる
	タケウチハ	ツイニナガラフ	タケウチは	遂にながらふ
	ミチトナルカナ		道となるかな」	
38-44	ネココロオ	アカシカエリテ	根心お	明かし帰りて
	フソナキノ	ミソカモフサク	二十七年二月の	十三日申さく
	ヒタカミハ	メヲノコカミオ	「日高見は	女男の子髪お
	アゲマキニ	ミオアヤドリテ	アゲマキに	身お文どりて
	イサミタツ	スベテエミシノ	勇み立つ	すべてエミシの
	クニコエテ	マツロハザレバ	土地沃ゑて	服はざれば
	トルモヨシ	クマソソムキテ	取るも良し	クマソ背きて
	マタオカス	カナツキシソミカ	また侵す」	十月十三日
38-45	ミコトノリ	オウスミコシテ	勅	オウス御子して

	ウタシムル	オウスモウサク	討たしむる	オウス申さく
	ヨキイテオ	アラバツレント	「良き射手お	あらば連れん」と
	ミナモフス	ミノノオトヒコ	みな申す	「ミノのオトヒコ
	ヒイデタリ	カツラギミヤド	秀でたり」	カツラギミヤド
	ツカワシテ	メセバオトヒコ	遣わして	召せばオトヒコ
	イシウラノ	ヨコタテオヨビ	イシウラの	ヨコタテおよび
	タゴキナギ	チチカイナギオ	タゴキナギ	チチカイナギお
38-46	ヒキツレテ	シタガヒユケバ	率き連れて	従ひ行けば
	コウスミコ	シハスニユキテ	コウスミコ	十二月に行きて
	クマソラガ	クニノサカシラ	クマソ等が	国の賢ら
	ウカガエバ	トリイシカヤガ	覗えば	トリイシカヤが
	カワカミニ	タケルノヤカラ	カワカミに	タケルの族
	ムレヨリテ	ヤスクラナセバ	群れ寄りて	安座なせば

	コウスキミ	オトメスガタノ	コウスキミ	乙女姿の
	ミハノウチ	ツルギカクシテ	御衣の内	劍 隠して
38-47	ヤスミセシ	オトメノミメニ	やすみせし	乙女の眉目に
	マジワレバ	タヅサエイルル	交われば	携え入るゝ
	ハナムシロ	ミオアゲミキノ	花筵	身おあげ神酒の
	タワムレヤ	ヨフケヨエレバ	戯れや	夜更け酔ゑれば
	コウスキミ	ハダノツルギオ	コウスキミ	肌の劍お
	ヌキモチテ	タケルガムネオ	抜き持ちて	タケルが胸お
	サシトホス	タケルガイワク	刺し通す	タケルが日く
	イマシナシ	ツルギトドメヨ	「今しばし	劍 止めよ
38-48	コトアリト	マテバナンヂハ	言あり」と	待てば「汝は
	タレヒトゾ	スメラギノコノ	誰れ人ぞ」	「天皇の子の
	コウスナリ	タケルマタイフ	コウスなり」	タケルまた云ふ

	ワレハコレ	クニノツワモノ	「われはこれ	国の強者
	モロヒトモ	ワレニハスギズ	諸人も	われには過ぎず
	シタガエリ	キミノコトクニ	従えり	君の如くの
	モノアラズ	ヤツコガササグ	者あらず	奴が捧ぐ
	ナオメスヤ	キミキキマセバ	名お召すや」	君聞きませば
38-49	イマヨリハ	ヤマトタケトゾ	「今よりは	ヤマトタケとぞ
	ナノラセト	イイツオワレバ	名乗らせ」と	言いつ終れば
	ヤマトダケ	オトヒコヤリテ	ヤマトダケ	オトヒコ遣りて
	トモガラオ	ミナウチヲサメ	衆類お	みな討ち治め
	ツクシヨリ	フナヂオカエル	ツクシより	船路お帰る
	アナトキビ	ワタリアラブル	アナト吉備	渡り荒ぶる
	モノコロシ	ナミハカシハノ	者殺し	ナミハ・カシハの
	モノヤカラ	ミナコロシエテ	者族	みな殺し得て

38-50	フソヤホノ	キサラギハツヒ	二十八年の	二月初日
	マキムキノ	ミヤコニカエル	マキムキノ	都に帰える
	ヤマトタケ	モフスカタチハ	ヤマトタケ	申す情勢は
	スハラギノ	ミタマニヨリテ	スハラギの	御霊によりて
	クマソラヲ	ヒタニコロシテ	クマソ等を	ひたに誅して
	フツクムケ	ニシハコトナク	悉 平け	西は事なく
	タダキビノ	アナトナミハノ	ただ吉備の	アナトナミハの
	カシハタリ	アシキイキフキ	カシハタリ	悪しき息吹き
38-51	ミチユクモ	ワザハヒモトム	道行くも	災ひ求む
	アブレモノ	リクトクガトノ	荒れ者	海と陸との
	ミチヒラク	トキニスメラギ	道開く」	時に天皇
	クニムケノ	イサオシホメテ	国平けの	功 賞めて
	タマモノナシキ		賜物なしき	

● ホツマ撃(ウ)ち、つず歌の紋(アヤ)

39- 1	マキムキノ	ヒシロノヨソホ	マキムキノ	ヒシロの四十年
	セミナツキ	ホツマサワゲバ	六月	ホツマ騒げば
	サカオリノ	タケヒノボリテ	サカオリの	タケヒ上りて
	ミカリコフ	キミモロアツメ	ミカリ請ふ	君諸集め
	ノタマワク	ホツマノエミシ	詔給わく	「ホツマのエミシ
	カスメルト	タレヒトヤリテ	棕めると	誰人やりて
39- 2	ムケナンヤ	モロヒトイワズ	平けなんや」	諸人いわず
	ヤマトタケ	サキニハトミラ	ヤマトタケ	「先には臣ら
	ニシオウツ	ヒガシオウツハ	西お討つ	東お討つは
	モチヒトゾ	トキニオホウス	モチヒトぞ」	時にオホウス
	ワナナキテ	ノニカクルルロ	わななきて	野に隠るゝお

	ヨビメシテ	キミセメイワク	呼び召して	君責め日く
	イマシアニ	シイテヤランヤ	「汝 豈	強いて遣らんや」
	オソルルノ	アマリトミノオ	「恐るゝの	余り」とミノお
39- 3	マモラシム	トキヤマトタケ	守らしむ	時ヤマトタケ
	オタケビテ	ニシムケマナク	雄叫びて	「西平け間なく
	マタヒガシ	イツカオヨバン	また東	何時およばん
	タトエトミ	イタワルトテモ	たとえ臣	労るとても
	ムケザラン	トキニスメラギ	平けざらん」	時に天皇
	ホコオモチ	ワレキクエミシ	矛お持ち	「我きくエミシ
	ムネシノギ	アレオサモナク	宗凌ぎ	村長もなく
	ムラキミラ	アヒオカシウル	邑君ら	相侵し得る
39- 4	ヤマアラシ	カタマキモノヤ	山荒し	姦まき者や
	チマタカミ	ナカニエミシラ	チマタ神	中にエミシら

	メヲマゼテ	シムミチカケテ	女男混ぜて	血脈道欠けて
	アナニスミ	ケシシオハミテ	穴に住み	毛肉お食みて
	ケコロモキ	メグミワスレテ	毛衣着	恵み忘れて
	アダオナシ	ユミモヨクイル	仇おなし	弓も良く射る
	タチマイモ	タグイアツメテ	立舞も	類 集めて
	カクレンボ	ノヤマオハシル	かくれんぼ	野山お走る
39- 5	ワザオエテ	アマナルミチニ	技お得て	天成る道に
	マツロハズ	イマワレオモフ	服はず	今われ思ふ
	イマシコソ	スガタキラシク	汝こそ	姿端正しく
	モモチカラ	ユクニサワラズ	百力	行くに障らず
	セメバカツ	スナハチシレリ	攻めば勝つ	すなはち知れり
	ミハワガコ	マコトハカミノ	身はわが子	真は神の
	ワレクラク	ムケザルミヨオ	われ味く	平けざる御世お

	ツガシメテ	タエザラシムル	継がしめて	絶えざらしむる
39- 6	ナンヂコソ	アメガシタシル	汝こそ	天が下治る
	クラヒナリ	フカクハカリテ	位なり	深く計りて
	イズニフセ	メグミニナツケ	稜威に伏せ	恵みになづけ
	ホツマナシ	カタマシモノオ	ホツマなし	姦し者お
	カンヅヨニ	マツロハセヨト	神づ世に	服はせよ』と
	サツケマス	ミホコオウクル	授けます	御矛お受くる
	ヤマトタケ	ムカシミタマノ	ヤマトタケ	「昔 御霊の
	フユニヨリ	クマソオムケヌ	恩頼により	クマソお平けぬ
39- 7	イマモマタ	ミタマニヨリテ	今もまた	御霊によりて
	フユオカリ	アダノサカイニ	恩頼お借り	虜の境に
	ユキノゾミ	マツロハザラバ	行き臨み	服はざらば
	ウツベシト	オガミテキビノ	討つべし」と	拝みてキビの

	タケヒコト	オオトモタケヒ	タケヒコト	オオトモタケヒ
	シタガエリ	ナナツカハギオ	従えり	ナナツカハギお
	カシハデト	カナツキフカニ	膳部と	十月二日に
	カドデシテ	ミチオヨコギリ	門出して	道お横切り
39- 8	ナカイセノ	カミニイノリテ	七日イセの	神に祈りて
	イツノミヤ	ヤマトヒメニモ	イツの宮	ヤマト姫にも
	イトマゴヒ	キミノオオセニ	暇乞ひ	君の仰せに
	アダウチニ	マカルトアレバ	虜討ちに	まかるとあれば
	ヤマトヒメ	ニシキフクロト	ヤマト姫	錦 袋と
	ツルギモチ	ヲミコニイワク	劍 持ち	男御子に日く
	アメミマゴ	ソメシヒミツノ	「天御孫	染めし火水の
	ヲンハラヒ	ヒミヅノサワリ	御祓ひ	火水の障り
39- 9	ハラフベシ	ムカシイツモノ	祓ふべし	昔イツモの

	クニヒラク	ムラクモツルギ	国開く	ムラクモツルギ
	コレナルゾ	ツツシミウケテ	これなるぞ	慎しみ受けて
	アダムケヨ	ナオコタリソト	虜平けよ	な怠りそ」と
	サヅケマス	サキニタジマガ	授けます	先にタジマガ
	ノコシフミ	クニソマザレバ	遺し文	「国染まざれば
	カグノキオ	エントオモエバ	香ぐの木お	得んと思えば
	タチバナノ	モトヒコガヤニ	タチバナの	モトヒコが家に
39-10	トシフリテ	ナジミテメグル	年経りて	なじみて巡る
	ヒタカミト	シマツノキミニ	ヒタカミと	シマツの君に
	アヒシリテ	ヤヤエテカグオ	合ひ知りて	やや得て香ぐお
	ヒカヌマニ	キミカミトナル	引かぬ間に	君神となる
	チ チ クヤ	イマワカミヤニ	千々悔み	今若宮に
	タテマツル	キミヤツカレガ	奉る	君やつかれが

	モトヒコニ	ムスブシヅクノ	モトヒコに	結ぶ雫の
	ミナモトオ	オボシテホツマ	源お	思してホツマ
39-11	シロシメス	ココニスメラギ	治ろしめせ	ここにスメラギ
	タケウチト	カタリアワセテ	タケウチと	語り合わせて
	ホヅマクニ	カグモトヒコオ	ホヅマ国	カグモトヒコお
	ミニナシテ	タチハナヒメト	身になして	タチハナ姫と
	ホツミテシ	サクラネマシオ	ホツミテシ	サクラネマシお
	サキニヤリ	イウサクダレバ	先にやり	軍くだれば
	ヒタカミガ	マネクモトヒコ	ヒタカミが	招くモトヒコ
	ウナヅカズ	サガムノオノニ	額かず	サガムのオノに
39-12	シロカマエ	テシトマシラト	城構え	テシとマシ等と
	モリカタム	エミシノヤカラ	守り固む	エミシの輩
	セメノボル	スソノニデアフ	攻め上る	裾野に出合ふ

	ヤマトダケ	エゾラアザムキ	ヤマトダケ	エゾ等欺き
	ノノシカガ	イキキリタチテ	「野の鹿が	息きり立ちて
	フミシダク	シモトユヒシテ	踏みしだく	茂結ひして
	ミチオシル	ノゾミメグリテ	道お知る	臨み巡りて
	カリタマエ	キミハゲニトヤ	狩り給え」	君は実にとや
39-13	ユキモトム	アダノオヤキテ	行き求む	賊野お焼きて
	アザムケバ	シリテキリヒノ	欺けば	知りて鑽火の
	ムカヒビニ	ヒミヅノハラヒ	向ひ火に	火水の祓
	ミタビノル	コチフキカワリ	三度祈る	東風吹き変り
	ニシケムリ	アダニオフエバ	西煙	賊に覆えば
	クサオナグ	モエクサトビテ	草お薙ぐ	燃え草とびて
	アダイクサ	ヤキホロボセバ	賊軍	焼き滅ぼせば
	ヤケヅノヤ	ツルギノナオモ	焼づ野や	劔の名おも

39-14	クサナギト	アシガラヤマニ	クサナギと	アシガラ山に
	セメイタル	サガムノオノノ	攻め至る	サガムのオノの
	シロセメオ	カタクマモレバ	城攻めお	固く守れば
	アダヤカラ	ヨモニタキギオ	賊輩	四方に焚木お
	ツミアゲテ	ナソカヒデリニ	積み上げて	七十日日照りに
	ヒセメナス	カワキモユレバ	火攻めなす	乾き燃ゆれば
	ヤマトタケ	ヤグラノダケニ	ヤマトタケ	ヤグラの岳に
	ノボリミテ	キビタケヒコオ	登りみて	キビタケヒコお
39-15	オオイソエ	オオトモタケヒ	オオイソえ	オオトモタケヒ
	オオヤマノ	キタニメグリテ	オオヤマの	北に廻りて
	シロニイレ	サネニワカチテ	城に入れ	南北に分ちて
	ヤマトダケ	カミススキヨメ	ヤマトダケ	髪すき清め
	シロカシノ	タチオハラニノ	白櫃の	太刀おハラミの

	ミハシラト	イノルヒミツノ	御柱と	祈る火水の
	キヨハラヒ	タツタノカミノ	清祓ひ	タツタの神の
	アラワレテ	コノシロキケノ	現われて	この城池の
39-16	タツノアメ	フリヒオケセバ	タツの雨	降り火お消せば
	ミヤイクサ	イサミテアダオ	皇軍	勇みて賊お
	ナカバウツ	ミナニゲチレバ	半ば討つ	皆逃げ散れば
	トキオアゲ	ムカヒイルトキ	関おあげ	迎ひ入る時
	オトヒメハ	キミノテオトリ	オト姫は	君の手おとり
	ヤスンゼテ	ヤツカレハヂメ	安んぜて	「妾 始め
	オノオノガ	マサニヤケント	各々が	当に焼けんお
	イノリマシ	イマサイワイニ	祈りまし	今幸いに
39-17	オガムトテ	ヨロコビナンダ	拝む」とて	喜び涙
	ソデヒタス	ココニモトヒコ	袖ひたす	ここにモトヒコ

	モロニフレ	マツロハザレバ	万にふれ	「まつろはざれば
	コロスユエ	オオンタカラガ	殺す故	人 民が
	ミカリコフ	コトハジメトテ	巡行乞ふ	事はじめ」とて
	シワスヤカ	カグカゴタテテ	十二月八日	香ぐ籠立てて
	シルシトス	トキヤマトダケ	表識とす	時ヤマトダケ
	オホイソオ	カヅサエワタス	オホイソお	カヅサえ渡す
39-18	イクサブネ	タタヨフカゼオ	軍 船	漂ふ風お
	シヅメント	ヲトタチバナハ	鎮めんと	ヲトタチバナは
	ヘニノボリ	アメツチイノリ	舳に上り	天地祈り
	ワガキミノ	イツオヤマトニ	「わが君の	稜威おヤマトに
	タテントス	ワレキミノタメ	立てんとす	我れ君のため
	タツトナリ	フネマモラント	竜となり	船まもらん」と
	ウミニイル	モロオドロキテ	海に入る	諸 驚きて

	モトムレド	ツイニエザレバ	求むれど	遂に得ざれば
39-19	ナミナギテ	ミフネツキケリ	波なぎて	御船着きけり
	ヤマトタケ	カヅサニイレバ	ヤマトタケ	カヅサに入れば
	サカキエニ	カガミオカケテ	榊枝に	鏡おかけて
	ムカヒマス	カトリトキヒコ	迎ひます	カトリトキヒコ
	ヒデヒコト	イクスオトヒコ	ヒデヒコと	イクスオトヒコ
	カネテマツ	オオカシマヨリ	かねて待つ	オオカシマより
	ミアエナス	アシウラコエテ	御饗なす	アシウラ越えて
	ナコソバマ	カリミヤニマス	ナコソ浜	行宮にます
39-20	ヒタカミノ	ミチノクシマヅ	ヒタカミの	ミチノクシマヅ
	ミチヒコト	クニツコキタリ	ミチヒコと	国造 五人
	アガタヌシ	モモナソヨタリ	県主	百七十四人
	ヨロヤカラ	タケノミナトニ	万族	タケの港に

	コバムトキ	タケヒオヤリテ	拒む時	タケヒお遣りて
	コレヲメス	シマツノカミハ	これお召す	シマツの頭は
	アラカジメ	イサワニオソレ	あらかじめ	いさわに恐れ
	ユミヤステ	ミマエニフシテ	弓矢捨て	御前に伏して
39-21	マツロヒヌ	タケヒマタユク	服ひぬ	タケヒまた行く
	ヒタカミノ	ミチノクニツグ	ヒタカミの	ミチノクに告ぐ
	サオシカド	ミチノクカドニ	勅使人	ミチノク門に
	イデムカエ	ミチノクイワク	出で迎え	ミチノク日く
	イママンヂ	ヒトノスメラギ	「今汝	人の天皇
	キミトシテ	ツカエルナンジ	君として	仕える汝
	オトロエリ	イマキテクニオ	衰えり	今来て国お
	ウバワンヤ	タケヒノイワク	奪わんや」	タケヒの日く
39-22	カミノミコ	ナンジオメセド	「神の御子	汝お召せど」

	マツロハズ	カレニウツナリ	服はず	故に討つなり」
	コタエイフ	コレナニノコト	答えいふ	「これ何の事
	ナンノイキ	ソレワガクニハ	何の謂み	それわが国は
	オオミヲヤ	タカミムスビノ	大御祖	タカミムスビの
	コノクニオ	ヒラキテナナヨ	この国お	開きて七代
	コレオツグ	ヒノカミココニ	これお嗣ぐ	日の神ここに
	ミチマナブ	カレヒタカミゾ	道学ぶ	故日高見ぞ
39-23	アメノミコ	チチヒメトウム	天の御子	チチ姫と生む
	ミコフタリ	エハアスカミヤ	御子二人	兄はアスカ宮
	トハハラミ	ソノトキクニオ	弟はハラミ	そのとき国お
	タマワリテ	ソヨノハツコノ	賜わりて	十四の裔の
	ワレマデハ	ヨソノタウケズ	われまでは	他所の助受けず
	ソレノキミ	アスカオウチテ	そのの君	アスカお討ちて

	クニオトル	カミニタガエリ	国お奪る	神に違えり
	カレナレズ	イママタキタリ	故馴れず	今また来り
39-24	トラントス	コレモカミカヤ	取らんとす	これも神かや
	スベギミヨ	タケヒホホエミ	皇君よ」	タケヒ微笑み
	コレナンジ	キナカニスンデ	「これ汝	井中に住んで
	サワオミズ	コトヨキニニテ	沢お見ず	事良きに似て
	アタラズゾ	シカトキクベシ	当らずぞ	しかと聞くべし
	コレトカン	ムカシアスカノ	これ説かん	昔アスカの
	ナガスネガ	フミノスメドモ	ナガスネが	文盗めども
	アスカキミ	タダサヌユエニ	アスカ君	糾さぬゆえに
39-25	ノリクダセホツマヂ		『乗り下せホツマ路	
	ヒロムアマモイワフネ		弘む天もイワ船』	
	ヨニウタフ	シホツヲキナガ	世に歌ふ	シホツ翁が

	コレユキテ	ムケサランヤト	「これ行きて	平けさらんや」と
	ススムユエ	ヤマトタダセバ	勸むゆえ	ヤマト糾せば
	ヲヲンカミ	カシマノカミニ	大御神	鹿島の神に
	ミコトノリ	ユキテウツベシ	勅	「行きて討つべし」
	ソノコタエ	ワレユカズトモ	その答え	「われ行かずとも
39-26	クニムケノ	ツルギクダシテ	国平けの	劍 降して
	タカクラニ	コレササゲシム	タカクラに	これ捧げしむ」
	タケヒトハ	キミタルイトノ	タケヒトは	君たる系の
	アルユエニ	アメヨリツヅク	あるゆえに	天より続く
	カミノミコ	ヨヨニアマテル	神の御子	世々に天照
	ナンジヨヨ	キミナクコヨミ	汝 世々	君無く暦
	イヅレゾヤ	コタエテイセト	何れぞや」	答えて「イセ」と
	マタイワク	アマテラスカミ	また日く	「天照らす神

39-27	コヨミナシ	ゾロウエサセテ	暦なし	ゾロ植えさせて
	カテフヤシ	ミオタモタシム	糧殖やし	身お保たしむ
	モモナソコ	ヨロミチツヅク	百七十九	万三千続く
	コノヨミテ	イマヒノハチニ	この世見て	今日のはちに
	オワシマス	ミマゴノヨヨノ	御座します	御孫の世々の
	タミヲサム	ヒニナヅラエテ	民治む	日に擬えて
	アマギミゾ	ナンジハヨヨニ	天君ぞ	汝は世々に
	ミノリウケ	イノチツナギテ	稔り受け	命つなぎて
39-28	イマダソノ	キミニカエコト	いまだその	君に返事
	モフサヌハ	ソノツミツモリ	申さぬは	その罪積もり
	イクラゾヤ	ヌケミチアリヤ	幾らぞや	抜け道ありや
	ワガキミハ	カミナラズヤト	わが君は	神ならずや」と
	コノトキニ	ミチノクオヨビ	この時に	ミチノクおよび

	ミナフシテ	マツロヒクレバ	みな伏して	服ひ来れば
	ヤマトダケ	ミチノクユルシ	ヤマトダケ	ミチノク許し
	ナコソヨリ	キタハミチノク	勿来より	北は道奥
39-29	クニノカミ	モガタノヒツホ	国の守	百県の初穂
	ササゲシム	ツガルエミシハ	捧げしむ	ツガルエミシは
	ミチヒコニ	ナソガタハツホ	ミチヒコに	七十県初穂
	ササゲシム	ミナミハヒタチ	捧げしむ	南はヒタチ
	カヅサアワ	ミカサカシマニ	カヅサ・アワ	ミカサカシマに
	タマワリテ	カシマヒデヒコ	賜りて	カシマ・ヒデヒコ
	トキヒコモ	オトヒコミタリ	トキヒコモ	オトヒコ・三人
	ミハタマフ	クニツコキタリ	御衣賜ふ	国造五人
39-30	カミノミチ	シイテモフセバ	神の道	強いて申せば
	メシツレテ	イタルニハリエ	召し連れて	至るニハリエ

	エミシカラ	カゾニシキトハ	エミシから	カゾ錦 十衣
	ワシノハノ	トガリヤモモテ	鷲の羽の	尖矢百手
	タテマツル	ミチノクヨリハ	奉る	ミチノクよりは
	キガネトオ	クマソヤモモテ	黄金十お	クマソ矢百手
	タテマツル	コノユキオモク	奉る	この鞆重く
	フモオアリ	オイテモトムル	二百おあり	負い手求むる
39-31	オオトモノ	サブライヨタリ	オオトモの	侍 四人
	オイカハリ	ツクバニノボリ	負い代り	ツクバに登り
	キミトミモ	サツヘテイタル	君臣も	西南経至る
	サカオリノ	ミヤニヒクレテ	サカオリの	宮に日暮れて
	タビオソク	シカレバコタエ	松明遅く	叱かれれば答え
	ユキオモク	ツカレネムリテ	「鞆重く	疲れ眠りて
	クレシラズ	マタイフヨタリ	暮れ知らず	また云ふ四人

アヒマチゾ ナンヂバカリガ 「相待ちぞ 汝ばかりが

39-32 ナドツカル チカライトハバ など疲る 力厭はば

ウタオヨメ コタエテカミノ 歌お詠め」 答えて「神の

ミヨハウタ イマハチカラヨ 御代は歌 今は力よ」

トキニキミ コレキコシメシ 時に君 これ聞こし召し

ツズハツネ ウタミニソメテ ツズ初音 うたみに染めて

カエセヨト ナカエタマハル 返せよと 中え賜はる

ニキハリつつクバオ 『ニキハリつつクバオ

スギテイクヨカネツル 過ぎて幾夜か寝つる』

39-33 モロナサズ ヒトボシユスナ 諸なさず 火灯しヨスナ

キミノウタ カエシモフサク 君の歌 返し申さく

カガナエテヨニハココ 『日夜なえて夜には九

ノヨヒニハトオカオ の夜日には十日お』

	ヤマトダケ	ヒトボシホメテ	ヤマトダケ	火灯し褒めて
	タケタムラ	ホカハハナフリ	タケタ村	他はハナフリ
	タケヒコハ	ユキベオカネテ	タケヒコは	靱部お兼ねて
	カヒスルガ	フタクニカミト	カヒ・スルガ	二国守と
39-34	コトオホム	キミヤマノヒハ	業績お褒む	君山の日は
	ユキヤスミ	ワガキミニイフ	靱休み	わが君に云ふ
	スメラキミ	ヤツラハナフリ	「皇君	僕らはなふり
	ソロリニハ	タケダタマハル	ソロリには	タケダ賜はる
	ナニノコト	タケヒノイワク	何の事」	タケヒの日く
	ウタノコト	マタトフカレハ	「歌の事」	また問ふ「彼は
	アワナラズ	ナニノウタゾヤ	アワならず	何の歌ぞや」
	マタイワク	ツヅウタムカシ	また日く	「ツヅ歌昔
39-35	サユリヒメ	トシソコノトキ	サユリ姫	歳十九の時

タギシミコ シタヒコフユエ タギシミコ 慕ひ恋ふゆえ

ソノチチガ ヨビダストキニ その父が 呼び出す時に

ヒメサトリ ノゾクツヅウタ 姫悟り のぞくツヅ歌

アメツツチトリマス 『天つ地取ります

キミトナドサケルドメ 君となど裂ける鋭目』

ソノツヅス カゾエテナカオ そのツズ数 数ゑて中お

ツボカナメ コノウタツヅキ ツボ要 この歌続き

39-36 カゾエモノ オリアワセメニ 数え物 折り合わせ目に

ケリモアリ キミトワレトハ 「けり」もあり 君とわれとは

ツヅキケリ ヨコガメドルオ 続きけり 邪禍娶るお

サカシマニ ルドメニトメテ 逆しまに 「るどめ」に止めて

タチキレバ マメモミサホモ 断ち切れれば 忠も操も

アラワセリ カレソコモツズ 表わせり 故十九もツズ

	モノモツズ	ツヅキウタナリ	物もツズ	続き歌なり
	ナツカハギ	ココニキテトフ	ナツカハギ	ここに居て問ふ
39-37	ツキアリヤ	タケヒコタエテ	「つきありや」	タケヒ答えて
	ヤツアリテ	ハツハオコリト	「八十ありて	初は起りと
	ツギハウケ	ミツハウタタニ	次は受け	三つは転に
	ヨツアワセ	キツハタダコト	四つ合せ	五つはただ言
	ムツハツレ	ナナハツキヅメ	六つは連れ	七は突詰め
	ヤツハツギ	オモテヨツラネ	八つは継ぎ	表 四連ね
	マメミサホ	マテニカヨハズ	忠 操	真手に通はず
	ウラヨツレ	ハツハカシラノ	裏四連れ	初は頭の
39-38	キヲシテエ	メクラシツラヌ	五璽え	巡らし連ぬ
	ソノツギハ	ウチコシココロ	その次は	打ち越し心
	ウタタサリ	モトニムラガル	転去り	元に群がる

	ヒトツラネ	ソムオヒトオリ	一連ね	十六句お一折
	スベキオリ	ヤソオモモトシ	すべ五折	八十句お百とし
	オリハフソ	カレオリトメノ	折は二十句	故折り止めの
	ツズハタチ	オリハツのツズ	ツズ二十句	折初のツズ
	アヒカナメ	オリツメノツズ	相要	折詰のツズ
39-39	ミソコハナ	ミノツメキソコ	三十九花	三の詰五十九
	ツズサツメ	ヨノツメナソコ	ツズサ詰	四の詰七十九
	ツズフツメ	キノツメコソコ	ツズ二詰	五の詰九十九
	ツズツクモ	キフシニホヒノ	ツズ九十九	五節句ひの
	ハナハユリ	モトウタハキミ	花は百合	元歌は君
	ソノアマリ	エダヤハツコオ	その余り	枝や裔お
	ヤソツヅキ	ナオフカキムネ	八十連き	なお深き宗
	ナライウクベシ		習い受くべし	

39-40	マタトフハ	ヤソオモモトス	また問ふは	「八十お百とす
	カズイカン	コタエハカナメ	数如何」	答えは「要
	マタクバル	モトウタオフソ	また配る	元歌お二十句」
	カエシトフ	ヨリガハジメカ	返し問ふ	「ユリが初めか」
	コタエイフ	カミヨニモアリ	答え云ふ	「神代にもあり
	ミヲヤカミ	ツツノヲシテヤ	御祖神	ツツの壘や
	アメミコノ	ヒウガニイマス	天御子の	日向に居ます
	ヤマトヂノ	ハヤリウタニモ	ヤマト路の	流行歌にも
39-41	ノリクタセホツマヂ		『乗り下せホツマ路	
	ヒロムアマモイワフネ		弘む天もイワ船』	
	シホツツヲ	ススメテヤマト	シホツツ翁	勧めてヤマト
	ウタシムル	コレオリカエニ	討たしむる	これ折り返に
	アヒツアリ	カレウチトルオ	「あひつ」あり	故撃ち捕るお

	ヨシトナス	ユリヒメモツヅ	吉となす	ユリ姫も十九
	ウタモツヅ	マメトミサホト	歌もツヅ	忠と操と
	アラワセバ	ツヅニウタヨム	表わせば	ツヅに歌詠む
39-42	ノリトナル	ツイニホツマノ	法となる	ついにホツマの
	マツリコト	アメニトホレバ	政事	天に通ほれば
	コトゴトク	マツラフトキニ	悉く	服ふときぞ
	ウタハクニ	チカラハアタヒ	歌は国	力は値
	タマハシリ	キミハカミカト	賜はりし	君は神かと
	ミナメツム	コゾヨリツツキ	みなめつむ	去年より続き
	アメハレテ	ムツキスエヤカ	雨晴れて	正月二十八日
	ミユキフリ	キミソリニメシ	御雪降り	君ソりに召し
39-43	ユキイタル	サガムノタチニ	行き至る	サガムの館に
	イリマセバ	ノニカタアブミ	入りませば	野にカタアブミ

	トラガシハ	ヒロヒカンガエ	トラガシハ	拾ひ考え
	アブミサシ	イマタテマツル	アブミさし	今奉る
	タマカザリ	ホメテタマワル	玉飾り	賞めて賜わる
	ムラノナモ	タマガワアブミ	村の名も	タマ川アブミ
	ムサシクニ	サガムノクニト	ミサシ国	サガムの国と
	モトヒコニ	ナツケタマワル	モトヒコに	名つけ賜わる
39-44	クニツカミ	マチカテチカノ	国つ神	マチカ・テチカの
	トミフタリ	ヲトタチハナノ	臣二人	ヲトタチハナの
	クシトオビ	ウレバナゲキテ	櫛と帯	得れば嘆きて
	ヒメノタメ	ツカリアビキノ	姫のため	ツカリアビキノ
	マツリナス	コレソサノヲノ	祭りなす	これソサノヲの
	オロチオバ	ツカリヤスカタ	オロチおば	ツカリヤスカタ
	カミトナシ	ハヤスヒヒメモ	神となし	ハヤスヒ姫も

	アシナヅチ	ナナヒメマツル	アシナヅチ	七姫祭る
39-45	タメシモテ	カタミオココニ	例しもて	形身おここに
	ツカトナシ	ナモアツマモリ	塚となし	名もアツマ森
	オホイソニ	ヤシロオタテテ	オホイソに	社お建てゝ
	カミマツリ	ココニトマル	神まつり	ここに留まる
	ハナヒコハ	ワガサキミタマ	ハナヒコは	わが幸み魂
	シリシメシ	カワアヒノノニ	しろしめし	カワアヒの野に
	オホミヤオ	タテテマツラス	大宮お	建てゝまつらす
	ヒカワカミ	イクサウツワハ	ヒカワ神	軍器は
39-46	チチブヤマ	キサラギヤカニ	秩父山	二月八日に
	クニメグリ	マツラフシルシ	国巡り	服ふ印
	カグカゴオ	ヤムネニササゲ	カグ籠お	屋棟に捧げ
	コトヲサメ	ホツマノヨヨノ	事治め	ホツマの世々の

	ナラハセヤ	ウスキノサカニ	習せや	ウスキの坂に
	ヤマトダケ	ワカレシヒメオ	ヤマトダケ	別れし姫お
	オモヒツツ	キサオノゾミテ	思ひつつ	東南お望みて
	オモヒヤリ	カタミノウタミ	思ひやり	形見のうたみ
39-47	トリーダシミテ		取り出だし見て	
	サネザネシ	サガムノオノニ	『さねざねし	サガムのオノに
	モユルヒノ	ホナカニタチテ	燃ゆる火の	火中に立ちて
	トヒシキミハモ		問ひし君はも』	
	コレミタビ	アヅマアワヤト	これ三度	アヅマあわやと
	ナゲキマス	アヅマノモトヤ	嘆きます	アヅマの因や
	オヒワケニ	キビタケヒコハ	追分けに	キビタケヒコは
	コシヂユク	クニサカシラオ	越路行く	国賢らお
39-48	ミセシムル	タケヒハサキニ	見せしむる	タケヒは先に

	サガムヨリ	エミシノミヤゲ	サガムより	エミシの土産
	モチノボリ	ミカドニササゲ	持ち上り	帝に捧げ
	コトゴトク	マツラフカタチ	ことごとく	服ふ状
	モフサシム	ヒトリミユキノ	申さしむ	一人行幸の
	ヤマトダケ	シナノキソヂハ	ヤマトダケ	信濃・木曾路は
	ヤマタカク	タニカスカニテ	山高く	谷かすかにて
	ツヅラオリ	カケハシツタヒ	葛折	懸橋伝ひ
39-49	ムマユカズ	クモワケアユミ	馬行かず	雲別け歩み
	ウエツカレ	ミネノミアエニ	飢え疲れ	峰の御饗に
	ナルシラカ	マエニイキフキ	化る白鹿	前に息吐き
	クルシムル	キミハシロシテ	苦しむる	君は知ろして
	ヒルヒトツ	ハヂケバマナコ	蒜一つ	弾けば眼
	ウチコロス	ナオクモオオヒ	打ち殺す	なお雲覆ひ

	ミチタツオ	ヒミヅノハラヒ	道断つお	火水の祓ひ
	ミタビノル	シナドノカゼニ	三度宣る	シナドの風に
39-50	フキハラフ	カミノシライヌ	吹き払ふ	神の白狗
	ミチビキテ	ミノニイツレバ	導きて	ミノに出づれば
	タケヒコモ	コシヨリカエリ	タケヒコモ	コシより帰り
	ココニアフ	サキニキソヂノ	ここに会ふ	先にキソ路の
	オエフスモ	ハライマヌカル	瘴え伏すも	祓い免る
	シカノチハ	ヒルオカミヌリ	しかのちは	蒜お嘯み塗り
	ザガイキニ	アタラジモノト	瘴氣息に	当らじものと
	カタリタマヒキ		語り給ひき	

● アツタ神、世おいなむ紋(アヤ)

40- 1	マキムキノ	ヒシロノコヨミ	マキムキノ	ヒシロの暦
	ヨソヒハル	ヤマトタケキミ	四十一年春	ヤマトタケキミ
	キノヂヨリ	イタルオハリノ	キノ路より	至るオハリの
40- 2	タケドメガ	マゴノムラジノ	タケドメガ	孫の連の
	イエニイル	ツマミヤズヒメ	家に入る	妻ミヤズ姫
	ミヤコヨリ	オクリテチチガ	都より	送りて父が
	イエニマツ	イマキミココニ	家に待つ	今君ここに
	ツキオコス	キミノタマハク	月お越す	君のたまはく
	「サカオリノ	ミヤハムカシノ	「サカオリの	宮は昔の
	ハラノミヤ	ナホナガラエリ	ハラの宮	なお永らえり
	ワガネガヒ	ウツシテヒメト	わが願ひ	遷して姫と
40- 3	タノミマン	ムラジモウサク	楽しまん」	連申さく
	トミュキテ	エガキウツサン	「臣行きて	絵描き移さん」

	キミエエス	ムラジクダリテ	君笑ゑす	ムラジ下りて
	サカオリノ	ミヤオクワシク	サカオリの	宮お詳しく
	エニウツシ	カエコトスレバ	絵に写し	返事すれば
	ヤマトタケ	アラブルカミノ	ヤマトタケ	荒ぶる神の
	アルオキキ	ツルギトキオキ	あるお聞き	劍 解き置き
	カロンジテ	イタルカミヂニ	軽んじて	至る神路に
40- 4	ニギテナク	ユキスグミチニ	和幣なく	行き過ぐ道に
	イフキカミ	ヲオロチナシテ	イフキ神	大蛇なして
	ヨコタワル	カミトハシラズ	横たわる	神とは知らず
	ヤマトタケ	オロチニイワク	ヤマトタケ	大蛇に日く
	コレナンヂ	アレカタカミノ	「これ汝	あれかた神の
	ツカヒナリ	アニモトムルニ	使ひなり	豈求むるに
	タランヤト	フミコエユケバ	足らんや」と	踏み越え行けば

	イフキカミ	ツララフラシテ	イフキ神	ツララ降らして
40- 5	カオウバフ	シイテシノギテ	光お奪ふ	強いて凌ぎて
	オシアユミ	ワズカイデユク	押し歩み	わずか出で行く
	ココロエヒ	モユルゴトクニ	心酔ひ	燃ゆるごとくに
	アツケレバ	イツミニサマス	熱ければ	泉に冷ます
	サメガキヤ	ミアシイタムオ	醒泉や	御足痛むお
	ヤヤサトリ	オハリニカエリ	やや悟り	オハりに帰り
	ミヤヅメノ	キエニイラズテ	ミヤヅ姫の	家に入らずて
	アセノミチ	オヅノヒトマツ	イセの道	オヅの一松
40- 6	コレムカシ	ホツマクダリノ	これ昔	ホツマ下りの
	ミアエトキ	トキオクツルギ	御饗時	解き置く劍
	マツノネニ	オキワスレシガ	松の根に	置き忘れしが
	ナガラエリ	カレニアゲウタ	永らえり	故に挙げ歌

	オワスレド	タダニムカエル	『置忘れど	直に迎える
	ヒトツマツ	アハレイトマツ	一つ松	あはれ一松
	ヒトニセバ	キヌキセマシオ	人にせば	衣着せましお
	タチハケマジオ		太刀佩けまじお』	
40- 7	イササカニ	ナグサミユケド	いささかに	慰み行けど
	アシイタミ	ミエニマガレバ	足痛み	三重に曲がれば
	ミエムラゾ	ツエツキサカモ	三重村ぞ	杖突き坂も
	ヤヤコエテ	ノボノニイタミ	やや越えて	ノボノに痛み
	オモケレバ	トリコキタリオ	重ければ	虜五人お
	ウヂニヤリ	カシマミコトノ	ウヂに遣り	カシマミコトの
	ソエヒトゾ	キビタケヒコハ	添え人ぞ	キビタケヒコは
	ミヤコヂエ	ノボセモフサク	都 路え	上せ申さく
40- 8	ソノフミニ	ハナヒコモフス	「その文に	『ハナヒコ申す

	トミムカシ	ミコトオウケテ	臣 昔	勅お受けて
	ホツマウチ	アメノメグミト	ホツマ討ち	天の恵みと
	イヅニヨリ	アラブルカミモ	稜威により	荒ぶる神も
	マツロエバ	フツクヲサメテ	服えば	悉く治めて
	イマココニ	カエレバイノチ	今ここに	帰れば命
	ユフヅクヒ	コヒネガワクハ	夕尽く日	請い願わくは
	イツノヒカ	ミコトカエサン	いつの日か	勅 返さん
40- 9	ノニフシテ	タレットカタラン	野に伏して	誰と語らん
	オシムラク	マミエヌコトヨ	惜むらく	見ゑぬことよ
	アメノノリカナ		天の則かな』	
	フミトメテ	キミイワクワレ	文とめて	君日く「我
	キツオムケ	コトナレバミオ	東西お平け	事なれば身お
	ホロボセル	カレラヤスマス	滅ぼせる	彼等休ます

	ヒモナキト	ナツカハギシテ	日もなき」と	ナツカハギして
	ハナフリオ	ミナワケタマヒ	ハナフリお	皆分け賜ひ
40-10	ウタヨメバ	アツタノカミト	歌詠めば	アツタの神と
	ハヤナルト	ユアミハオカエ	早成ると	湯浴み衣お更え
	サニムカヒ	ヒトミイナムノ	南に向ひ	人身辞むの
	ウタハコレゾト		歌はこれぞと	
	アツタノリ		アツタ告り	
	イナムトキ	キツノシカヂト	辞む時	東西の鹿路と
	タラチネニ	ツカエミテネド	両親に	仕え満てねど
	サコクシロ	カミノヤテヨリ	サコクシロ	神の弥手より
40-11	ミチウケテ	ウマレタノシム	道うけて	生れ楽しむ
	カエサニモ	イザナヒチドル	帰さにも	誘なひ路取る
	カケハシオ	ノボリカスミノ	懸橋お	昇り霞の

	タノシミノ	クモキニマツト	楽しみの	雲居に待つと
	ヒトニコタエン		人に答えん	
	モモウタヒ	ナガラメオトヂ	百唱ひ	ながら眼お閉ぢ
	カミトナル	ナスコトナクテ	神となる	為すことなくて
	イトナミス	ウタハオハリエ	営みす	歌はオハリエ
40-12	キビノボリ	フミササグレバ	キビ上り	文捧ぐれば
	スベラギハ	キモヤスカラズ	天皇は	居も安からず
	アヂアラズ	ヒメモスナゲキ	味あらず	終日嘆き
	ノタマワク	ムカシクマソガ	日く	「昔クマソガ
	ソムキシモ	マタアゲマキニ	背きしも	また総角に
	ムケエタリ	マテニハベリテ	平け得たり	真手に侍りて
	タスケシニ	ホツマオウタス	助けしに	ホツマお討たす
	ヒトナキオ	シノビテアダニ	人無きお	忍びて仇に

40-13	イラシメバ	アケクレカエル	入らしめば	明け暮れ帰る
	ヒオマツニ	コハソモナンノ	日お待つに	こはそも何の
	ワザハヒゾ	ツグリモナクテ	災ひぞ	縁も無くて
	アカラメス	タレトミヤザオ	あから召す	誰と御業お
	ヲサメンヤ	モロニノリシテ	治めんや	諸に宣して
	カミオクリ	トキニオモムロ	神送り	時に亡骸
	ナルイトリ	イヅレバモロト	なる鳳	出づれば諸と
	ミササギボ	ミヒツオミレバ	御陵の	御棺お見れば
40-14	カンムリト	サクトミハモト	冠と	笏と御衣裳と
	トトマリテ	ムナシキカラノ	留まりて	空しき抜殻の
	シライトリ	オヒタヅヌレバ	白鳳	追ひ尋ぬれば
	ヤマトクニ	コトヒキハラニ	ヤマト国	コトヒキハラに
	オハヨエダ	オキテカワチノ	尾羽四枝	置いてカワチの

	フルイチニ	マタヨハオツル	フルイチに	また四羽落つる
	ソコココニ	ナスミサザキノ	そここゝに	なす御陵の
	シラトリモ	ツヒニクモキニ	白鳳も	つひに雲居に
40-15	トビアガル	オバハアタカモ	飛び上る	尾羽はあたかも
	カミノヨノ	ヨハキシゾコレ	神の世の	世筭花ぞこれ
	キツモミナ	タセバマカレル	東西もみな	治せば罷れる
	アメノリゾ	コノキミヒロシ	天法ぞ	この君ヒシロ
	スメラギノ	フノミコハハハ	天皇の	二の御子母は
	イナメヒメ	シハスノモチニ	イナヒ姫	十二月の望に
	モチツキテ	モチハナナシテ	餅つきて	餅花なして
	フタゴウム	ヲウスモチヒト	二子生む	ヲウスモチヒト
40-16	トハオウス	ハナヒコモコレ	弟はオウス	ハナヒコモこれ
	アメノナヅ	ヒトナルノチニ	天の名ぞ	人なる後に

	クマソマタ	ソムケバオウス	クマソまた	背けばオウス
	ヒトリユキ	オトメスガタト	一人行き	乙女 姿と
	ナリイリテ	ハダノツルギデ	なり入りて	肌の剣で
	ムネオサス	タケルシバシト	胸お刺す	タケルしばしと
	トドメイフ	ナンヂハタレゾ	止めいふ	「汝は誰ぞ」
	ワレハコレ	アザスメラギノ	「われはこれ	いざ天皇の
40-17	コノコウス	タケルガイワク	子のコウス」	タケルが日く
	ヤマトニハ	ワレニタケタハ	「ヤマトには	われに勝けたは
	ミコバカリ	カレミナツケン	御子ばかり	故御名付けん
	キキマスヤ	ユルセバササグ	聞きますや」	許せば捧ぐ
	ヤマトダケ	ミコナオカエテ	ヤマトダケ	御子名お変えて
	ウチヲサム	アメノホマレヤ	討ち治む	天の誉れや
	ヤマトダケ	イマスノマゴノ	ヤマトタケ	イマスの孫の

	タンヤガメ	フタヂイリヒメ	タンヤが女	フタヂイリヒメ
40-18	ウムミコハ	イナヨリワケノ	生む御子は	イナヨリワケの
	タケヒコト	タリナカヒコノ	タケヒコと	タリナカヒコの
	カシギネト	ヌノオシヒメト	カシギネと	ヌノオシ姫と
	ワカタケゾ	キビタケヒコガ	ワカタケぞ	キビタケヒコが
	アナトタケ	ウチツマニウム	アナトタケ	内妻に生む
	タケミコト	トキワケトナリ	タケミコと	トキワケとなり
	オシヤマガ	オトタチバナオ	オシヤマが	オトタチバナお
	スケツマニ	ワカタケヒコト	典侍妻に	ワカタケヒコと
40-19	イナリワケ	アシカミカマミ	イナリワケ	アシカミカマミ
	タケコカヒ	イキナガタワケ	タケコカヒ	イキナガタワケ
	キソメヒコ	イガヒコラウム	キソメヒコ	イガヒコ等生む
	オハリガメ	ミヤヅヒメマタ	オハリが女	ミヤヅ姫また

	ノチノツマ	タケダトサエキ	後の妻	タケダとサエキ
	フタリウム	ソヨヲヒメアリ	二人生む	十四男一女あり
	サキノツマ	ミナカレイマハ	先の妻	みな亡れ今は
	ミヤヅヒメ	ヒトリアワント	ミヤヅ姫	一人会わんと
40-20	ハラミヨリ	ココロホソクモ	ハラミより	心細くも
	カケハシオ	シノギノボレバ	懸橋お	凌ぎ上れば
	ミヤヅヒメ	ネマキニママニ	ミヤヅ姫	寝巻のままに
	イデムカフ	ヒメノモスソニ	出で迎ふ	姫の裳裾に
	ツキオケノ	ソミタルオミテ	月汚血の	染みたるお見て
	ヤマトタケ	ミジカウタシテ	ヤマトタケ	短歌して
	ヒサカタノ	アマノカグヤマ	『久方の	天のカグヤマ
	トガモヨリ	サワタリクルヒ	とがもより	さ渡り来る日
40-21	ホソタハヤ	カヒナオマカン	細手弱	腕お巻かん

	タハスレド サネントアレバ	とはすれど	さ寝んとあれば
	オモヘドモ ナガキケルソノ	思へども	汝が着ける裾の
	ツキタチニケリ	月立ちにけり』	
	ヒメカエシウタ	姫返し歌	
	タカヒカル アマノヒノミコ	『高光る	天の日の御子
	ヤスミセシ ワガオホキミノ	休みせし	わが大君の
	アラタマノ トシガキフレバ	新玉の	年が来経れば
40-22	ウベナウベナキミマチガタニ	諾な諾な君待ちがたに	
	ワガキケル オスヒノスソニ	わが着ける	オスヒの裾に
	ツキタタナンヨ	月立たなんよ』	
	ヤマトタケ オバヨリタマフ	ヤマトタケ	叔母より賜ふ
	ムラクモオ ヒメガヤニオキ	叢雲劍お	姫が館に置き
	イブキヤマ カエリイセヂニ	イブキヤマ	帰りイセ路に

	イタムトキ ヤカタオウタヒ	痛むとき	館お歌ひ
	ハシヤシキ ワキベノ	愛しきやし	我来辺の
40-23	カタユクモイタチキモ	方ゆ雲居立ち来も	
	ノコシウタ ミコヤウカラニ	遺し歌	御子や親族に
	オリアイノ ツズハヤカタデ	折合の	十九歌は館で
	イデタツハ タビヤニアエル	出立つは	旅屋に逢える
	マロビトト マヨイノコサヌ	客人と	迷い残さぬ
	サトシウタ フカキココロノ	諭し歌	深き心の
	ミチビキゾコレ	導きぞこれ	
	ノボノニテ カミナルトキニ	ノボノにて	神なる時に
40-24	ノコシウタ ミヤズヒメエト	遺し歌	ミヤズ姫えと
	アイチダノ オトメガトコニ	『アイチダの	乙女が床に
	ワガオキシ イセノツルギノ	わが置きし	イセの劔の

タチワカルヤワ

立ち別るやわ』

	コノワカハ	イモセノミチハ	この和歌は	妹背の道は
	ツラナリテ	タチワカルレド	連なりて	たち別るれど
	ツリノヲハ	キレハセヌゾト	つりの緒は	切れはせぬぞと
	ミチビキオ	タツルアメノリ	導きお	立つる天法
40-25	ミヤズヒメ	モダエタエイリ	ミヤズ姫	悶え絶え入り
	ヤヤイケリ	チチハハラミノ	やや生けり	父はハラミの
	エオウツシ	ミヤコニノボリ	絵お写し	都にのぼり
	ワカミヤノ	ネガヒノママヲ	若宮の	願ひのままを
	モウシアゲ	アイチタニタツ	申しあげ	アイチタに建つ
	ミヤナリテ	ワタマシコエバ	宮なりて	渡まし乞えば
	ミコトノリ	タタネコイワウ	勅	タタネコ齋ふ
	サヲシカド	ムラジカフトノ	勅使	ムラジ首人の

40-26	ミコタチオ	ミュキノソナエ	御子達お	行幸の備え
	オゴソカニ	コトヒキハラノ	巖かに	コトヒキハラの
	ミササギニ	オチシオハヨツ	御陵に	落ちし尾羽四つ
	フルイチノ	オハヨツトモニ	フルイチの	尾羽四つ共に
	モチキタリ	ノボノノカフリ	持ち来たり	ノボノの冠
	サクミハモ	ミタマゲニイレ	サク御衣裳	御魂筥に入れ
	シラミコシ	ヒシロヨソヨホ	白御輿	日シロ四十四年
	ヤヨヒソホ	タソガレヨリゾ	三月十一日	たそがれよりぞ
40-27	ミコシユキ	ノボノオヒガシ	御輿ゆき	ノボノお東
	モロツカサ	カタムタヒマツ	諸司	固む手火松
	サキガリハ	サカキニフソリ	先駆りは	榊に二十人
	ソエカフド	サルタヒコカミ	添え神主	サルタヒコ神
	ミカホアテ	カフドヤタリハ	御顔あて	神主八人は

	ヤモトハタ	オオカフトノハ	八本幡	大首殿は
	カムリミハ	ミハシラモチテ	冠り御衣	御柱もちて
	トミヤタリ	オシヤマスクネ	臣八人	オシヤマ宿弥
40-28	カフリミハ	ヨハキシモチテ	冠り御衣	ヨハキシもちて
	トミムタリ	キビタケヒコモ	臣六人	キビタケヒコモ
	オナジマエ	オオタンヤワケ	同じ前	オオタンヤワケ
	カムリミハ	ツルギササゲテ	冠り御衣	劔 捧げて
	トミソタリ	ミコシアオホヒ	臣十人	御輿天覆ひ
	ヲサノトミ	イエバトミソリ	長の臣	家ばと三十人
	ミヲスエハ	キヌフタナカレ	御緒末は	絹二流れ
	ヨタケヤタ	ミコミヲスエニ	四丈八尺	御子御緒末に
	スガロユク	アマテルカミノ	縫りゆく	天照る神の
	ノコルノリ	イワヒサヲシカ	遺る法	斉ひ勅使

	トミソフリ	ツギミユキモリ	臣十二人	次ぎ御幸護り
	モロヅカヒ	ミナオクリユク	諸使ひ	皆送りゆく
	ヨナカマデ	カクムヤイタリ	夜中まで	かく六夜至り
	ハラミヤノ	オホマノトノニ	ハラ宮の	オホマの殿に
	ミコシマス	ヨナマスゴトク	御輿ます	世にます如く
	ミヤズヒメ	キリヒノガキオ	ミヤズ姫	鑽火の粥お
40-30	モルヒラベ	イタタキサキニ	盛る平瓮	頂き先に
	イリマチテ	ミマエニソナエ	入り待ちて	御前に供え
	モウさくハ	コノミケムカシ	申さくは	「この御饌昔
	イブキヨリ	カエサニササグ	イブキより	帰さに捧ぐ
	ヒルメシオ	ミヅカラカシギ	霊飯お	親ら炊ぎ
	マチオレド	ヨラデユキマス	待ちおれど	寄らでゆきます
	チチウラミ	イママタキマス	千々悔み	今又来ます

	キミノカミ	ムベウケタマエ	君の神	むべ受け給え
40-31	アリツヨノ	アイダチニマツ	在りつ世の	アイチダに待つ
	キミガヒルメシ		君が靈飯』	
	ミタビノリ	イザヨフツキノ	三度告り	十六夜月の
	ホカラカニ	シライトリキテ	朗らかに	白い鳥来て
	コレオハミ	ナルシラクモニ	これお食み	なる白雲に
	カミノコエ	コタフツツウタ	神の声	答ふツツ歌
	アリツヨノ	ハラミツホシキ	『在りつ世の	ハラミツ欲しき
	チリオヒルメシ		ちりお靈飯』	
40-32	キシヒルオ	マコトニオソレ	奇し靈お	誠に怖れ
	オカミサル	オホマトノヨリ	拝み去る	オホマ殿より
	ミヤウツシ	サオシカニギテ	宮遷し	勅使 和幣
	ミコトアゲ	コノトキラシカ	みこと挙げ	この時勅使

	タタネコト	オハリムラジト	タタネコト	オハリムラジと
	ニヒハラノ	オホマノカミト	ニヒハラノ	オホマの神と
	ナヅクナリ	カミオクルトキ	名づくなり	神送る時
	ヨオイナム	チリヒルメシト	世お辞む	ちり霊飯と
40-33	ノコルナリ	イセニソエイル	遺るなり	イセに添え入る
	エゾキタリ	イヤマイアラズ	エゾ五人	敬いあらず
	ヤマトヒメ	トガメミカドエ	ヤマト姫	咎めミカドえ
	ススメヤル	ミモロニオケバ	進めやる	三諸山に置けば
	ホドモナク	キオキリタミオ	ほどもなく	木お伐り民お
	サマタゲル	キミノタマワク	妨げる	君詔賜く
	エミシラハ	ヒトココロナク	「エミシ等は	人心 無く
	オキガタシ	ママニワケオク	置き難し	まゝに分け置く」
40-34	ハリマアキ	アワイヨサヌキ	ハリマ・アキ	アワ・イヨ・サヌキ

	サエキベヅ	ヨソムホノハル	佐伯部ぞ	四十六年の春
	ナナクサノ	ミアエニウタノ	七草の	御饗に歌の
	ヒカズヘル	ワカタリヒコト	日数経る	ワカタリヒコと
	タケウチト	ウチニマイラズ	タケウチと	内に参らず
	カレメシテ	トエバモウサク	故召して	問えば申さく
	エラクヒハ	アソビタワムレ	「えらく日は	遊び戯れ
	コトワスル	クルエドアラバ	事忘る	狂人あらば
40-35	ウカガハン	カレニミカキオ	窺はん	故に御垣お
	マモリイル	キミキコシメシ	守り居る」	君聞こし召し
	イヤコチト	アツクメグミテ	「いやちこ」と	篤く恵みて
	ハツキヨカ	ワカタリヒコオ	八月四日	ワカタリヒコお
	ヨツギミコ	タケウチスクネ	世嗣御子	タケウチスクネ
	ムネノトミ	ミコトタケウチ	棟の臣	御子とタケウチ

	オナヒトシ	キソフホサツキ	同ひ歳	五十二年五月
	スエヤカニ	キサキイラツメ	二十八日に	后イラツメ
40-36	カミトナル	ミオクリノリハ	神となる	見送り法は
	アツタノリ	オホタンヤワケ	アツタ法	オホタンヤワケ
	ミケカシギ	チリヒルメシト	御食炊ぎ	チリ靈飯と
	モルヒラデ	ヌノオシヒメニ	盛るヒラデ	ヌノオシ姫に
	イタダケセ	ソフタンヤワケ	頂かせ	添ふタンヤワケ
	サキガケニ	ツギハヒメミコ	先駆けに	次は姫御子
	スケウチメ	オシモアオメラ	典侍内侍	御下女青女ら
	ミソリソフ	ツギモトモトノ	三十人添ふ	次元々の
40-37	ヤイロハタ	カミノトヨソヤ	八色幡	神祝詞四十八
	ワケソメテ	キビノイエトミ	分け染めて	キビの家臣
	モチナラブ	タテモノクモニ	持ち並ぶ	立物雲に

	カケハシト	カスミニチドリ	懸橋と	霞に千鳥
	キビハリマ	エトノタケヒト	キビ・ハリマ	兄弟のタケヒコ
	ヨハキシオ	マテニナラベテ	ヨハキシお	真手に並べて
	ミハシラハ	ウチミヤノトミ	御柱は	内宮の臣
	ミコシマエ	ミコハマヲスエ	御輿前	御子は御緒末
40-38	ヲシカドハ	ウツシヒノオミ	勅使人は	遷し日の大臣
	コシニノル	モロオクリケリ	輿に乗る	諸送りけり
	アフミナカ	ヤサカイリヒメ	七月七日	ヤサカイリ姫
	ウチツミヤ	キソミホホヅミ	ウチツ宮	五十三年八月一日
	ミコトノリ	カエリオモエバ	勅	「かえり思えば
	ヤムヒナシ	コウスガムケシ	止む日なし	コウスが平けし
	クニメグリ	ナサントイセニ	国巡り	なさん」とイセに
	ミユキナリ	オハリツシマニ	御幸なり	オハリ・ツシマに

40-39	イタルトキ	ムラジムカエバ	至る時	連 迎えば
	コノゴトク	トモニオホマノ	子の如く	共にオホマの
	ミヤニイル	ミツカラツクル	宮に入る	自ら作る
	ニギテタテ	イワクヲヤコノ	和幣立て	曰く「親子の
	ユグリナウ	ワカレアワネバ	ゆぐりなふ	別れ会わねば
	ワスラレズ	ミツカラキタリ	忘れられず	自ら来たり
	ニギテスト	ヤヤヒサシクゾ	和幣す」と	やや久しくぞ
	イタマシム	ソノヨノユメニ	悼ましむ	その夜の夢に
40-40	ツシマモリ	シライトリナル	ツシマ森	白い鳥なる
	ヤマトダケ	イワクランガミ	ヤマトダケ	曰く「大神
	ソサノヲニ	イワクイカンゾ	ソサノヲに	曰く「如何ぞ
	クニノゾム	アマノリナセバ	国望む」	天詔りなせば
	クニノカミ	ヲシエノウタニ	国の神	教えの歌に

	アメガシタ ヤワシテメグル	『天が下	和して廻る
	ヒツキコソ ハレテアカルキ	日月こそ	晴れて明るき
	タミノタラチネ	民の両親』	
40-41	コレトケズ ツミノオツルオ	これ解けず	罪に落つるお
	イフキカミ ヒキテカミトシ	イフキ神	引きて神とす
	ニニギネハ コノココロモテ	ニニギネは	この心もて
	ホツマエテ アマキミトナル	ホツマ得て	天君となる
	ウラヤミテ カリノオヤコゾ	羨みて	仮の親子ぞ
	ミコトウケ キツムケカエル	勅 受け	東西平け帰る
	カミシヅカ マミエテホゾチ	神静か	真見えて熟瓜
	アツサタス タラチノメグミ	熱さ治す	父母の恵み
40-42	ウマザルヤ オリカゾエウタ	倦まざるや	折り数え歌
	ワガヒカル ハラミツニシキ	『わが光る	ハラミツ錦

	アツタカミ	モトツシマハニ	天伝神	元つ縞衣に
	オレルカヒカワ		織れるか氷川』	
	ミタビノベ	シヅノスガタニ	三度述べ	賤の姿に
	クモガクレ	キミサメイワク	雲隠れ	天君覚め日く
	カミノツゲ	ワレハイヤシキ	神の告げ	「われは賤しき
	ヒカワカミ	モトニカエルト	ヒカワ神	元に帰る」と
40-43	メグミコル	マヨヒオサトス	恵み凝る	迷ひお諭す
	シメシナリ	ムカシイワクハ	示しなり	昔 日くは
	ヒトハカミ	カミハヒトナリ	『人は神	神は人なり
	ナモホマレ	ミチタツノリノ	名も誉れ	道立つ法の
	カミハヒト	ヒトスナオニテ	神は人	人素直にて
	ホズマユク	マコトカミナリ	秀真ゆく	まことかみなり』
	ツゲニヨリ	ナモアツタガミ	告げにより	名も天伝神

	ミヤズヒメ	イツキニクラベ	ミヤズ姫	齊宮にくらべ
40-44	カンヌシモ	ミヤヅカサナミ	神主も	宮司なみ
	アヅマヂエ	ユケバサガムニ	東路え	行けばサガムに
	ミアエナス	マシテシオガミ	御饗なす	マシ・テシ拝み
	ナキイワク	ヒメホロボシテ	泣き日く	「姫亡して
	マミエエズ	キミモナンドニ	真見え得ず」	大君も涙に
	トラガシハ	サカキミスガタ	トラガシハ	榊み像
	タテマツル	キミ ミタマエバ	奉る	大君見給えば
	ヤマトタケ	イケルスガタニ	ヤマトタケ	生ける姿に
40-45	アフゴトク	ヒトタビアイテ	会ふ如く	一度会いて
	ヨクニタル	カレハメグロト	よく似たる	彼はメグロと
	ソノサトオ	ナヅケタマワル	その里お	名ヅケ賜わる
	カミスガタ	オホヤマミネニ	神像	オホヤマ峰に

	ヤシロナス	ミフネカヅサエ	社なす	み船カヅサエ
	アホノハマ	ミサゴエハムオ	アホの浜	鵜 餌食むお
	タミニトフ	アレハウムギト	民に問ふ	「あれは白蛤と
	シツガハム	ナマスモヨシト	賤が食む	膾もよし」と
40-46	ムツカリガ	ガマタスキシテ	ムツカリガ	ガマタスキして
	トルウムギ	ナマスニナシテ	とる白蛤	膾になして
	ススムレバ	カシハトモベト	すすむれば	膳伴部と
	ナオタマフ	オホヒコノマゴ	名お賜ふ	オホヒコの孫
	イワカナリ	カシマカグラノ	イワカなり	カシマ神樂の
	シシマイオ	トエバトキヒコ	獅子舞お	問えばトキヒコ
	コレムカシ	イヨニワタリテ	これ昔	イヨに渡りて
	シシハムト	ツチギミトリテ	獅子食むお	ツチギミ捕りて
40-47	タテマツル	キミタノシミテ	奉る	君タノシミの

	カグラシシ	ヤヨロカシマニ	神楽獅子	八万カシマに
	アルカタチ	サワリナカレト	ある形	障り無かれと
	モテアソブ	サルタノカミノ	遊ぶ	サルタの神の
	ナニシアフ	シハスニノボリ	名にし合ふ	十二月に上り
	アセノクニ	イロトノミヤニ	イセの国	いろとの宮に
	オワシマス	キソヨホナヅキ	御座しまし	五十四年九月
	ミソカニハ	ヒシロノミヤニ	三十日には	ヒシロの宮に
40-48	カエリマスカナ		帰りますかな	
	コノトキニ	ミワノタタネコ	この時に	三輪のタタネコ
	ミヨノフミ	アミテカミヨノ	御代の文	編みて神代の
	ホツマヂト	ヨソアヤナシテ	秀真道と	四十アヤなして
	クニナヅニ	シメセバタガニ	クニナヅに	示せば互ひ
	ミカサフミ	ミハエシメシテ	ミカサフミ	ミハエ示して

	アイカタリ	アラタニソメテ	相語り	新たにそめて
	フタヤヨリ	アゲタテマツル	二家より	あげ奉る
40-49	コノフミハ	ムカシモノヌシ	この文は	昔モノヌシ
	ミコトノリ	ウケテツクリテ	勅	受けて作りて
	アワミヤニ	イレオクノチノ	アワ宮に	納れおく後の
	ヨヨノフミ	マチマチナレバ	世々の文	まちまちなれば
	ミンヒトモ	アラカジメニテ	見ん人も	予めにて
	ナソシリソ	モモチココロミ	な譏りそ	百千試み
	ハルカナル	オクノカミジエ	遙かなる	奥の神路え
	マサニイルベシ		まさに入るべし	
40-50	トキアスス	ヤモヨソミホノ	時アスス	八百四十三年の
	アキアメカ	コレタテマツル	秋天日	これ奉る
	ミワノトミ	スエトシオソレ	三輪の臣	季聡おそれ

ツツシミテソム

謹みて染む

**この「ほつまつたゑ 全文」資料は、さいたま市在住 木元三郎 作成です。

読み下し文作成者 木元三郎